ANNUAL REPORT 2025

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

東京文化財研究所年報



ANNUAL REPORT 2025

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

東京文化財研究所2025年度年報

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

文化財情報資料部



日本人が柄を制作した儀式用うちわの調査（バンコク国立博物館）



文化財情報資料部研究会（作家資料はどう生き続けるか）（2026（令和8）年2月17日）

文化財情報資料部



郷家忠臣旧蔵資料

無形文化遺産部



久米島紬保持団体における養蚕技術の調査

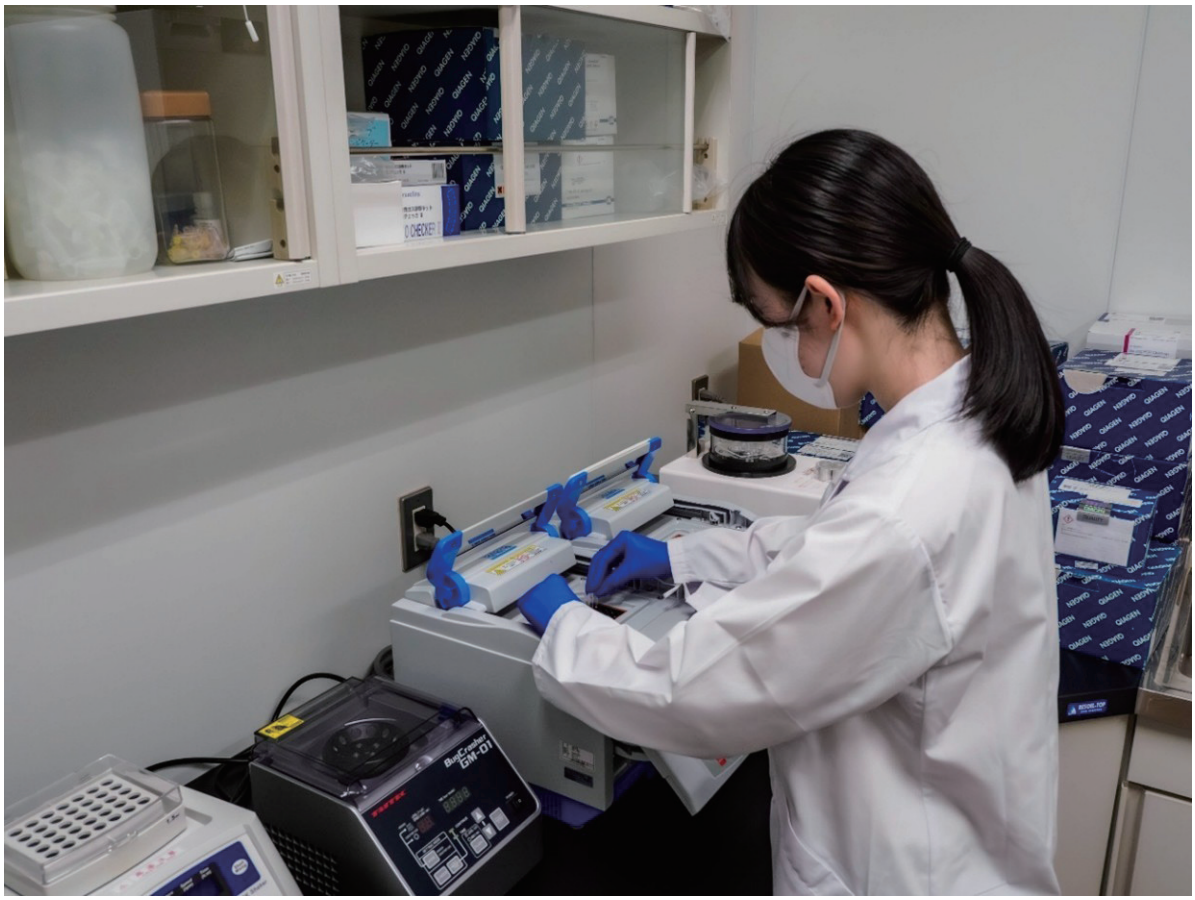


第19回公開学術講座の座談会



与那国島シッティ行事における獅子舞調査

保存科学研究センター



ニュウハクシミの単為生殖が起こるメカニズム解明に向けた基礎研究の様子



岩屋寺石仏における計測風景



サウジアラビアで実施した考古資料の３次元計測に関するワークショップ



聖ミカエル教会（トルコ共和国）での壁画保存修復共同研究

文化遺産国際協力センター



国際研修「紙の保存と修復」における本美濃紙工房見学



奈良文化財研究所によるイタリアの考古遺跡における発掘調査計画等に関する現地調査に対する協力



リートベルク美術館所蔵作品修復のための材料調査



募金箱コーナーのリニューアル



東京文化財研究所 エントランススペース 「研究所沿革」「所長あいさつ」パネルを新設

研究支援推進部



施設見学（昭和女子大学）

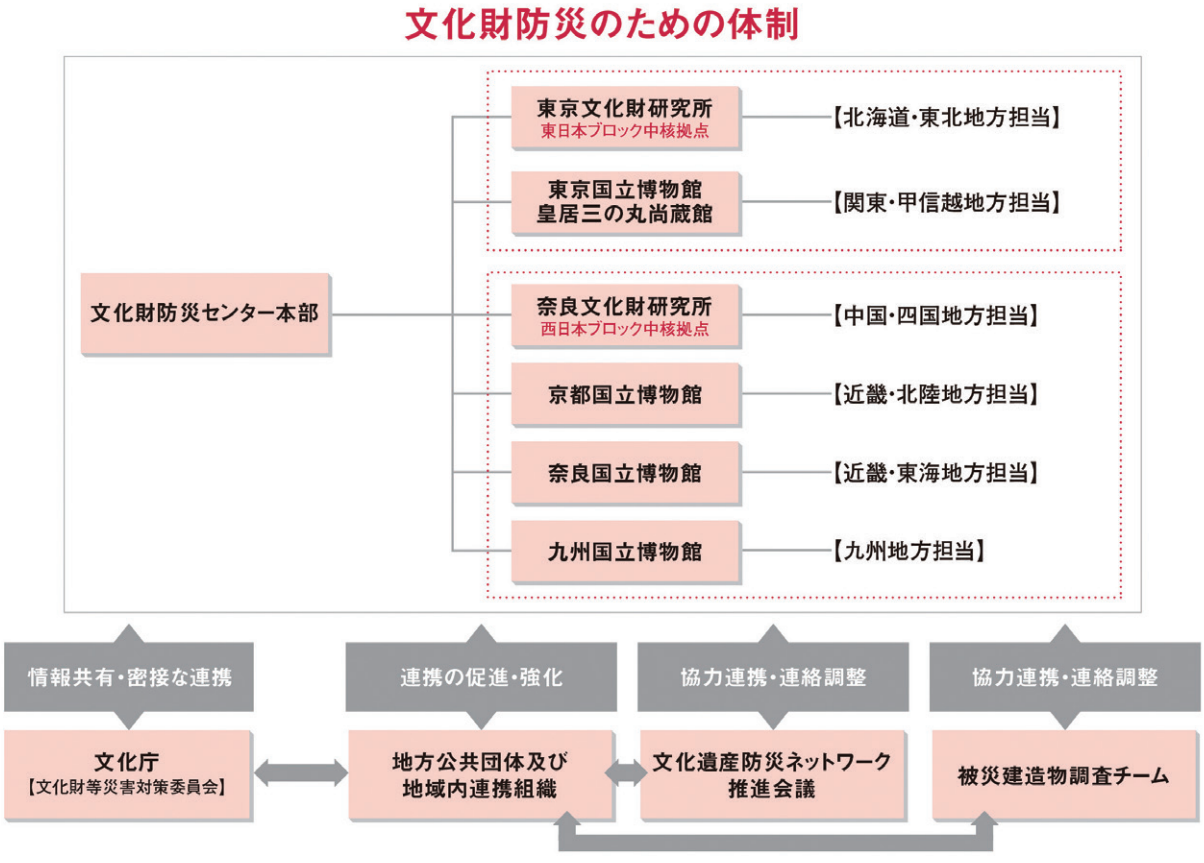


施設見学（文化財建造物保存技術協会）

文化財防災センター

独立行政法人国立文化財機構の本部施設である文化財防災センターは、全体を統括するセンター本部を奈良におき、国立文化財機構内の６施設にもセンター職員を配置し、事業を展開している。大規模災害発生時には、東京文化財研究所が東日本ブロックの、奈良文化財研究所が西日本ブロックの、それぞれ中核拠点となる。

文化財防災のための体制



年報の発刊にあたって

令和7年度は、独立行政法人国立文化財機構第5期5ヶ年中期計画（2021~2025）の最終年度です。今期中期計画において、当研究所の果たすべき社会的使命と役割について

「我が国の文化財の研究を、有形・無形文化財等を対象に、基礎的なものから先端的、実践的なものまで総合的に行い、我が国の文化財研究の拠点としての役割を果たすとともに、この成果をもとに文化財の保護に貢献する。また、文化財担当者の研修、地方公共団体への専門的な助言を行う。さらに、保存科学・修復技術に関する我が国の中核としての役割を果たす。また、世界の文化遺産保護に関する国際的な研究交流、保護協力、人材育成、情報の収集と活用等を実践するとともに、これらに係る国内外での連携の推進を通じ、文化遺産保護における国際協力の拠点としての役割を担う。」

と定めています。

この使命を全うするため、文化財情報資料部では美術工芸品等に関する基礎的な研究業務に加え、有形・無形の文化財に関する様々な情報の収集と発信に関する調査研究に力点をおいて業務を推進し、その成果をデータベース等により公開しています。また海外の文化財関係機関と協力し、積極的に英語による情報発信にも取り組んでおります。

無形文化遺産部では、従来の伝統的な音楽や演劇、芸能、工芸技術といった無形文化財や民俗芸能、風俗・慣習、民俗技術等の無形民俗文化財の調査研究を進めるとともに、音声・映像による記録を作成し、それを利用する専用ブースも設置し、文化財の保存に必要な用具や資材の生産技術等に関する保存技術についても調査研究を進めています。

また、保存科学研究センターでは、文化財の保存に関する科学的な調査研究、修復のための材料・技術に関する実践的な基礎研究を行うとともに、国立文化財機構における保存修復業務に関する一体的な研究環境の構築を推進しています。併せて、近代文化遺産に用いられている新たな材料の修復技術や災害等で被災した文化財の修復技術等の研究を進めています。加えて伝統的技術の継承のため、文化庁と連携しながら地方公共団体の協力も得て、継承が困難になってきている用具・原材料製作の調査を積極的に実施しています。

さらに、文化遺産国際協力センターでは、アジア諸国をはじめとした各国からの要請に基づいて、文化財専門家養成や保存修復に関する技術移転等、相手国の実情に応じた共同研究や研修事業を積極的に行うなど文化の力による国際貢献に力を注いでいます。

当研究所は国立文化財機構本部に設置された文化財防災センターと連携して、東日本ブロックの中核拠点として位置づけられ、近年多発する自然災害等の教訓を活かし、無形文化遺産も含めて予防や減災の観点も取り入れた調査・研究に引き続き研究所全体で取り組んでいます。そのため、部・センターを横断したプロジェクトチームを結成するとともに、冷凍庫や真空凍結乾燥機などの調査研究に必要な機器を整備しております。

世界各国から要請も強い国際的な文化遺産保護支援に関する調査研究活動を行うにあたっては、国内の関係機関や関連分野の専門家との協力体制を充実・発展させることが肝要です。その意味で、「文化遺産国際協力コンソーシアム」（2006（平成18）年創設）の存在は大きく、事務局運営を文化庁より任されている当研究所としても、引き続きその活動に積極的に関わっていきたいと考えています。

今後とも、より効率的かつ効果的な組織運営を心がけながら、当研究所が文化財保護に関する総合的な調査研究の拠点施設としてさらに発展するよう努力してまいりますので、皆様の御支援、御協力をお願い致します。

2026（令和8）年6月

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
所長　齊 藤 孝 正

目 次

1. 機 構 3

1．組織図 …… 4
2．組織の概要と職員　所長・副所長／研究支援推進部 …… 5
文化財情報資料部 …… 6
無形文化遺産部 …… 7
保存科学研究センター …… 7
文化遺産国際協力センター／上席研究員／特任研究員 …… 9

2. 年度計画及びプロジェクト報告 10

1．年度計画（令和7年度）とプロジェクトとの対応 …… 11
2．プロジェクト報告 …… 24
① 有形・無形の文化財に関する調査研究事業 …… 26
② 保存修復に関する調査研究事業 …… 33
③ 国際協力・交流等に関する事業 …… 41
④ 情報収集・成果公開に関する事業 …… 46
⑤ 刊行物に関する事業 …… 59
⑥ 指導助言・研修等に関する事業 …… 65
⑦ その他の事業 …… 70

3. 外部資金等による研究活動 72

1．科学研究費助成事業 …… 75
2．受託調査研究・補助事業・外部機関との共同研究及び外部資金による研究 …… 108

4. 個人の研究業績 132

5. 研究交流 154

1．職員の海外渡航 …… 155
2．招聘研究員等 …… 159
3．海外研究者等の来訪 …… 160
4．主要来訪者、施設見学 …… 160

6. 資 料 161

1．主な収蔵資料　1．図書資料 …… 162
2．その他の資料 …… 162
2．研究所関係資料　1．設立の経緯 …… 163
2．年代別重要事項 …… 163
3．歴代所長（昭和5年～令和7年度） …… 166
4．名誉研究員 …… 167
5．2025（令和7）年度予算等 …… 168
3．東京文化財研究所関係事業索引 …… 172

１．組織図 …… 4

２．組織の概要と職員 …… 5

所長・副所長／研究支援推進部 …… 5

文化財情報資料部 …… 6

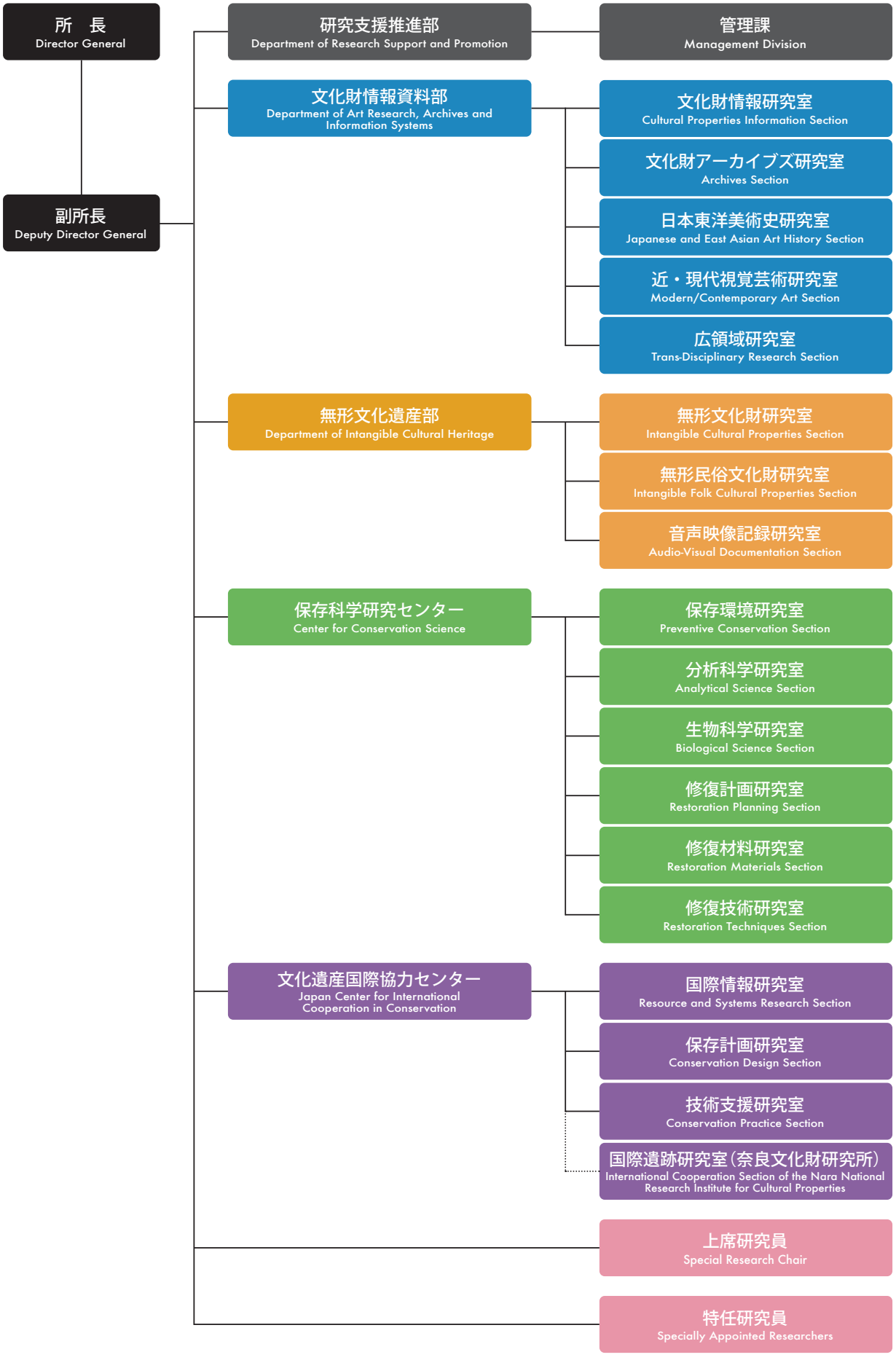
無形文化遺産部 …… 7

保存科学研究センター …… 7

文化遺産国際協力センター／上席研究員／特任研究員 9

1. 機構

1．組織図


所　長
Director General
副所長
Deputy Director General
研究支援推進部
Department of Research Support and Promotion
管理課
Management Division
文化財情報資料部
Department of Art Research, Archives and Information Systems
文化財情報研究室
Cultural Properties Information Section
文化財アーカイブズ研究室
Archives Section
日本東洋美術史研究室
Japanese and East Asian Art History Section
近・現代視覚芸術研究室
Modern/Contemporary Art Section
広領域研究室
Trans-Disciplinary Research Section
無形文化遺産部
Department of Intangible Cultural Heritage
無形文化財研究室
Intangible Cultural Properties Section
無形民俗文化財研究室
Intangible Folk Cultural Properties Section
音声映像記録研究室
Audio-Visual Documentation Section
保存科学研究センター
Center for Conservation Science
保存環境研究室
Preventive Conservation Section
分析科学研究室
Analytical Science Section
生物科学研究室
Biological Science Section
修復計画研究室
Restoration Planning Section
修復材料研究室
Restoration Materials Section
修復技術研究室
Restoration Techniques Section
文化遺産国際協力センター
Japan Center for International Cooperation in Conservation
国際情報研究室
Resource and Systems Research Section
保存計画研究室
Conservation Design Section
技術支援研究室
Conservation Practice Section
国際遺跡研究室（奈良文化財研究所）
International Cooperation Section of the Nara National Research Institute for Cultural Properties
上席研究員
Special Research Chair
特任研究員
Specially Appointed Researchers

2．組織の概要と職員

所長・副所長

所長　　齊藤 孝正（日本陶磁史）
副所長　友田 正彦（建築学）

研究支援推進部

組織概要　研究支援推進部は、東京文化財研究所の事務部門として、管理課に総務係、企画渉外係、財務係、契約係を置き、総務、人事、他機関との渉外、国際交流、財務管理、会計、施設管理等の業務を通じ研究支援を行っている。

総務係

東京文化財研究所における業務方法書の変更、中期計画及び年度計画の取りまとめ、事業年度の業務実績についての評価委員会の評価に関する事務を行っている。また、情報公開に関する事務、秘書業務に関する事務、文書の授受・発送に関する事務、文化庁等の他機関、法人本部及び各施設並びに所内の連絡調整に関する事務、人事管理に関する事務（アソシエイトフェロー、有期雇用職員、客員研究員、調査・研究アシスタントの任免に関する事務を含む）、共済組合に関する事務、栄典及び叙勲に関する事務等を行っている。

企画渉外係

海外渡航に関する事務、研修及び国際研究集会等の実施に関する事務、国際交流等に係る政府機関及び関係団体との連絡調整に関する事務等を行っている。また、外部資金に関する事務、在外日本古美術品保存修復協力事業に関する事務、寄付金の受入、研究所視察及び見学の受入と対応、所蔵の写真、出版物等の使用許可に関する事務、規定の制定・改廃に関する事務等を行っている。

財務係

財務諸表の作成に関する事務、決算報告書の作成に関する事務、監事及び会計監査人の監査に関する事務、予算・決算に関する事務、資金管理及び出納に関する事務等を行っている。

契約係

物品及び役務の調達、契約の執行に関する事務、給与計算及び給与の支払いに関する事務、諸謝金及び旅費の執行に関する事務、物品、建物及び設備等の管理に関する事務等を行っている。

研究支援推進部長	森下 元文[*1]
管理課長	山崎 学[*2]
総務係長	岡﨑 卓巳[*3]
総務係員	平野 裕大
事務補佐員	桜井 春香[*4]
事務補佐員	内山 海優[*5]
事務補佐員	青木 紗[*6]
事務補佐員	藍原 有理子
事務補佐員	鳥谷 真理[*7]
企画渉外係長	岡﨑 卓巳[*8]
事務補佐員	上野山 礼[*9]
事務補佐員	宇賀神 悦子[*10]
事務補佐員	越田 祥子[*7]
財務係長	木戸 理恵
事務補佐員	森本 和義
事務補佐員	石崎 香織
事務補佐員	溝口 径子[*11]
事務補佐員	飯塚 由里[*10]
契約係長	安孫子 卓史[*12]
事務補佐員	竹田 悠人
事務補佐員	青木 幹子
事務補佐員	石幡 明子
事務補佐員	寺井 笑子
事務補佐員	五十峯 美佐子
事務補佐員	森田 美紀[*13]
事務補佐員	片山 美穂子[*10]
事務補佐員	中村 静香[*14]

＊1　令和７年４月１日付文化庁から転入
＊2　令和７年４月１日付放送大学学園から転入
＊3　令和７年４月１日付奈良国立博物館から異動
＊4　令和７年９月30日付退職
＊5　令和８年２月28日付退職
＊6　令和８年３月31日付退職
＊7　令和７年12月１日付採用
＊8　令和７年４月１日付兼務
＊9　令和７年10月24日付退職
＊10　令和７年４月１日付採用
＊11　令和７年６月30日付退職
＊12　令和８年３月31日付休職
＊13　令和７年11月30日付退職
＊14　令和８年１月１日付採用

文化財情報資料部

組織概要　文化財情報資料部は、文化財に関する調査研究を実施するとともに、調査研究の成果・情報についてのアーカイブ化を進め、適した情報インフラストラクチャを整備し、研究の成果・情報の適宜公開を行う。また国内外の研究機関との研究交流を実施する。調査研究においては、1）黒田清輝（1866-1924）の遺言により造られた黒田記念館に設置された美術研究所以来の黒田周辺の作家等との交流を中心とした近現代作品の研究を進めるとともに、2）日本及び東アジアの美術に関する調査研究を行い、美術史研究に資する高質な資料や情報を作成・提供する。また、3）時代や地域などにとらわれない横断的な広領域にわたるテーマを設定し、人文学のほか、自然科学的研究手法の応用を進め、多角的な視点から研究を進める。あわせて、黒田記念館における作品と研究成果の展示について当部が担当する。4）研究情報のアーカイブ化においては、文献資料、過去の調査記録等のデジタル化を推進し、研究のための閲覧促進を目的とする画像データベースを作成・運用する。画像資料にとどまらず文献資料及び研究情報を付加した文化財の専門的アーカイブを構築する。5）研究成果の公開の一環として、『美術研究』（年３冊）、『日本美術年鑑』（年１冊）ほかの公刊、オープンレクチャーを開催する。所内各部門の研究情報の共有化のために総合研究会を企画・開催し、各年度の研究や事業を総括した年報編集の事務を取り扱う。6）研究情報発信のため、所内広報委員会の情報システム部会ならびにアーカイブ委員会下にあるアーカイブズ・ワーキンググループ協議会を運用・管理し、ウェブサイト及び外部公開データベースの充実を図る。さらに、資料閲覧室で架蔵図書等の諸資料の公開閲覧を担う。

文化財情報研究室

情報システムセキュリティの確保に留意しつつ、調査研究及びウェブを活用した成果公開のための情報基盤の整備を行うとともに、文化財情報データベースを拡充する。また、ウェブサイトの構築・運用を通じて研究成果公開を行う。さらに、文化財情報及び情報技術の文化財保護への活用について研究を行う。

画像情報室：光学理論やデジタル技術を応用した最先端の画像形成技術を開発・駆使し、視覚的な研究情報を提示する。

文化財アーカイブズ研究室

文化財に関する画像や図書等の情報・資料を収集・整理し、文化財情報統合アーカイブを作成し、全所的にとりまとめて公開する。

資料閲覧室：受け入れた文化財関連の図書や定期刊行物、展覧会カタログ、写真資料などを整理し、月・水・金曜日に一般の利用者に公開するほか、各種の書誌や研究情報のデータベースを作成する。また、所蔵資料のデジタル化と目録作成を進め、提供する。

日本東洋美術史研究室

江戸時代までの日本と東アジアの美術を研究する。また、美術の価値形成の多様性を解明するため、美術史研究のための資料学的な基盤を整備する。

近・現代視覚芸術研究室

明治以降の日本美術を研究する。近現代美術に関わる研究資料を収集・整理し、研究手法を開発するとともに、現代美術の動向を調査・研究する。

広領域研究室

美術のジャンルや時代、地域を横断する課題に取り組み、文化財に関わる諸分野と連携して、広い視野から文化財を研究し、その材料・技法・制作過程等を明らかにする。

文化財情報資料部長	江村 知子[*1]	（日本絵画史）
文化財情報研究室長	二神 葉子	（考古科学）
文化財アーカイブズ研究室長	米沢 玲[*1]	（仏教美術史）
日本東洋美術史研究室長	小野 真由美	（日本中近世絵画史）
近・現代視覚芸術研究室長	橘川 英規	（美術資料）
広領域研究室長	江村 知子[*1]	（日本絵画史）
主任研究員	小山田 智寛	（美学・情報学）
研究員	吉田 暁子	（日本近代絵画史）
研究員	田代 裕一朗	（韓国朝鮮美術史）
研究員	月村 紀乃	（日本工芸史）
主任専門職	石灰 秀行	（情報システム）
専門職員	城野 誠治[*2]	（画像情報・文化財写真）
アソシエイトフェロー	谷口 毎子[*3]	（画像形成）
アソシエイトフェロー	黒﨑 夏央	（仏教彫刻史）
アソシエイトフェロー	武藤 明子[*4]	（情報システム）
アソシエイトフェロー	山永 尚美	（記録史料）
研究補佐員	安岡 みのり	（ウェブ作成）
研究補佐員	寺﨑 直子	（日本絵画史）
研究補佐員	中村 茉貴	（近現代美術）
研究補佐員	小林 真美	（中国美術史）
研究補佐員	髙階 郁美	（データベース）
研究補佐員	飯田 智子[*5]	（日本近世絵画史）
研究補佐員	荒川 理佐	（文書保存・管理）
研究補佐員	淺野 真知	（アーカイブズ学）
研究補佐員	山下 麻依	（資料管理）
研究補佐員	廣井 彩乃[*6]	（データベース）
客員研究員	三上 豊	（近現代美術）
客員研究員	丸川 雄三	（情報学）
客員研究員	田中 潤	（近代史料）
客員研究員	田中 淳[*1]	（日本近代絵画史）
客員研究員	永崎 研宣	（人文情報学・仏教学）
客員研究員	津田 徹英	（日本彫刻史）
客員研究員	川瀬 由照	（日本彫刻史）
客員研究員	山梨 絵美子	（日本近代絵画史）
客員研究員	後藤 亮子	（東洋絵画史）
客員研究員	薬師寺 君子	（日本近世絵画史）
客員研究員	田良島 哲	（日本史・博物館情報学）
客員研究員	片倉 峻平	（上古中国語・人文情報学）
客員研究員	安永 拓世	（日本近世絵画史）

＊1　令和８年３月31日付退職
＊2　令和７年12月31日付退職
＊3　令和７年10月31日付退職
＊4　令和７年11月30日付退職
＊5　令和７年９月30日付退職
＊6　令和７年10月１日付採用

無形文化遺産部

組織概要　無形文化遺産部は、無形文化財（伝統的工芸技術、古典芸能）、無形民俗文化財（風俗慣習、民俗芸能、民俗技術）及び文化財保存技術という、日本における無形文化遺産の全体を対象として、その保存継承に資する基礎的な調査研究を実施している。内容は多岐にわたっており、保護対象の確定や適切な保護手法の確立のためには、無形文化遺産を構成する諸要素の専門的な調査・研究が重要である。また、人によって伝承されるために、年代や社会情勢の変化に伴って変容する要素も大きい。このため、文献的研究の蓄積に加えて、伝承の実態に即した調査研究を実施している。
重要な保護手法である音声・映像による記録については、その作成の実施とともに新たな手法開発についての研究を行っている。無形文化遺産保護にとって、音声・映像記録は、記録保存的役割はもちろんのこと、その伝承ツールとしても重要な意味を持つ。このため、無形文化遺産部では、他機関では行うことのできない希少演目等の記録保存事業を実施すると同時に、既存の記録活用のために、デジタルアーカイブ構築に向けての研究を行っている。
このほかに、無形文化遺産分野についてアジアを中心に海外との研究交流も実施している。

無形文化財研究室

古典芸能、伝統的工芸技術などの無形文化財、及び文化財保存技術について、伝承実態の調査や技法技術の変遷の研究など、その保護に資するための基礎的調査研究を行っている。

無形民俗文化財研究室

風俗慣習、民俗芸能、及び民俗技術などの無形民俗文化財について、その保護に資するための基礎的調査研究を、現在における伝承の実態、伝承組織、公開のあり方等の実地調査に基づいて行っている。また、映像記録作成、公開事業等、現実的な問題について全国の関係者との協議を実施し、その対策の検討も行っている。

音声映像記録研究室

無形文化遺産に関する記録のアーカイブ化、記録作成手法について研究を行っている。また、無形文化財、無形民俗文化財の現状を把握し、後世へ継承するために、それらの音声・映像記録を作成している。

無形文化遺産部長	石村 智	（文化遺産学）
無形文化財研究室長	前原 恵美	（古典芸能）
無形民俗文化財研究室長	久保田 裕道	（民俗芸能）
音声映像記録研究室長	石村 智	（文化遺産学）
主任研究員	今石 みぎわ	（民俗学）
主任研究員	菊池 理予	（工芸技術）
研究員	鎌田 紗弓	（古典芸能）
研究員（文化財防災センター）	後藤 知美	（民俗学）
アソシエイトフェロー	小田原 直也	（映像撮影・編集）
研究補佐員	中川 優子	（古典芸能）
研究補佐員	狩野 萌	（民俗学）
研究補佐員	舘野 太朗	（演劇学）
研究補佐員	石原 真理	（工芸技術）
研究補佐員	杉山 紗南＊1	（民俗学）
客員研究員	山崎 剛	（工芸技術）
客員研究員	谷垣内 和子	（古典芸能）
客員研究員	伊藤 純	（民俗学）
客員研究員	俵木 悟	（民俗芸能）
客員研究員	大西 秀紀＊2	（古典芸能）
客員研究員	森下 愛子	（工芸技術）
客員研究員	宮田 繁幸	（民俗芸能）
客員研究員	神野 知恵	（民俗芸能）
客員研究員	佐野 真規	（映像アーカイブ）
客員研究員	飯島 満	（古典芸能）
客員研究員	金子 健	（古典芸能）
客員研究員	榎 美香＊1	（民俗学）
日本学術振興会特別研究員（PD）	青木 慧＊1	（古典芸能）

＊1　令和７年４月１日付採用
＊2　令和８年３月31日付退職

保存科学研究センター

組織概要　保存科学研究センターは、文化財の保存科学・修復技術に関する調査・研究を行うナショナルセンターとしての役割を担っている。科学的な方法を用いて、文化財を取り巻く環境の調査や文化財の材料及び構造に関する調査を行い、文化財の保存や理解に役立つ知見の集積・発信を行っている。また、文化財の置かれた環境履歴を調査し、適切な修復材料・技術の改良・開発、評価及びメンテナンス手法に関する研究を行っている。得られた研究成果は紀要『保存科学』を通じて、速やかに公開している（ウェブにてフリーアクセスコンテンツ）。これらの知見をもとに、「文化財の虫菌害に関する調査・助言」「文化財の材質・構造に関する調査・助言」「美術館・博物館等の環境調査と援助・助言」「文化財の修復及び整備に関する調査・研究」の４項目について、地方公共団体に対して協力を行い、地域の文化財保護の質的向上に寄与している。また、国立文化財機構内の研究所・博物館に加え、文化財活用センター・文化財防災センターの保存修復担当の研究員を保存科学研究センターの併任とし、文化財の構造・材質調査や文化財の保存管理上の課題解決等について、相互に連携して、随時取り組む体制を構築している。さらに、2020（令和2）年10月に設立された文化財防災センターの東日本ブロック中核拠点として、地域防災体制の構築や多様な文化財の防災・減災のための技術開発等に取り組んでいる。

保存環境研究室

博物館・美術館など展示・収蔵施設における文化財の安全な保存環境の確立のため、温度湿度、光、空気汚染物質などが文化財に与える影響を調べ、劣化を抑制する研究を行っている。劣化因子の測定方法の基準化を図るとともに、各施設の担当者と連携し、現場での環境モニタリングや、改善のための実証研究も行っている。災害等における一時保管場所の保存環境の整備に関する研究に重点を置いている。

分析科学研究室

様々な科学的分析手法によって文化財の構造・材質を調査し、劣化状態を含む文化財の物理的・化学的な特徴を明らかにする研究を行っている。X線や光を使った非破壊的な手法を中心に、各種可搬型機器を用いた調査方法の開発とその応用によって、文化財の構造・制作技法のみならず美術史・工芸史・考古学等との連携により制作年代・生産地研究などへ視野を拡げ、文化財の総合研究を実現、牽引している。

生物科学研究室

昆虫やカビなど、生物による文化財の劣化機構の解明とその防除方法に関する調査研究を行っている。博物館や美術館などの展示・収蔵環境にある文化財、歴史的建造物や古墳などの屋外にある文化財の生物が原因となる劣化現象の発生原因と解決方法について調査研究を行うとともに、生物が発生・繁殖することによる観覧者や作業者などの人体への影響も視野に入れた対策の開発に力を入れている。

修復計画研究室

文化財の持つ本質的な価値をできるだけ改変することなく次の世代へと伝えていくために、その文化財を構成する材料の特性を確認し、それが置かれている環境を調査し、適切な修復と保存の方針を策定していくための研究を行っている。併せて、通常の環境においてだけではなく、自然災害等による文化財の被害を最小限に止めるための計画策定に関して、防災・災害後の保全処置の両面において研究を進めている。

修復材料研究室

膠や漆などの伝統的材料、近代になり開発され使用されてきたものなど、従来文化財修復に使用されてきた修復材料の評価と改良を行うとともに、新しい修復材料の開発評価、及び修復への適用方法の検討を行っている。併せて、安全な文化財修復を実現するために、文化財の伝統的制作技法や材料製作に関する調査研究を行っている。

修復技術研究室

水害や地震、火災等の災害によって被災した文化財、また、近代に製作された大型構造物や機械器具、工業製品など多様な材料から成る文化財について、保存修復処置技術に関する新しい材料や技法に関する情報収集、技術・材料の調査及び開発を行っている。これらの文化財を、その特性や来歴を含め、次世代に適切に伝えていくための保存手法・保存活用、防災計画のあり方等を研究している。

保存科学研究センター長	犬塚 将英	(物理計測)
保存科学研究副センター長	早川 典子	(高分子化学)
保存環境研究室長	秋山 純子	(保存科学)
分析科学研究室長	西田 典由[*1]	(分析科学)
生物科学研究室長	佐藤 嘉則	(微生物生態学)
修復計画研究室長	早川 典子[*2]	(高分子化学)
修復材料研究室長	早川 典子	(高分子化学)
修復技術研究室長	犬塚 将英	(物理計測)
研究員(シニアフェロー)	朽津 信明[*1]	(地質学)
研究員	倉島 玲央	(有機化学)
研究員	水谷 悦子	(環境工学)
研究員	芳賀 文絵	(保存科学)
研究員	石塚 麻奈[*6]	(古脊椎動物学)
研究員(文化財防災センター)	千葉 毅	(文化財防災・考古学)
アソシエイトフェロー	國方 沙希	(絵画保存修復)
アソシエイトフェロー	島田 潤	(昆虫学)
アソシエイトフェロー	轟 丈瑠[*4]	(土壌微生物学)
アソシエイトフェロー	紀 芝蓮[*5]	(保存科学)
アソシエイトフェロー	一宮 八重[*3]	(高分子・色材分析)
アソシエイトフェロー	片渕 奈美香[*6]	(染織品保存科学)
アソシエイトフェロー	仁木 真奈美[*7]	(保存科学)
アソシエイトフェロー	由井 和子	(無機化学･化学工学)
研究補佐員	小野寺 裕子[*5]	(保存修復)
研究補佐員	山田 祐子[*4]	(絵画保存修復)
研究補佐員	山田 紀代美	(分子微生物学)
研究補佐員	趙 依寧	(陶磁器保存修復)
研究補佐員	寺島 海[*4]	(保存科学)
研究補佐員	鈴木 琴那	(文化財科学)
研究補佐員	秋山 花子[*3]	(保存修復)
研究補佐員	関根 遥[*3]	(文化財科学)
研究補佐員	仁木 真奈美[*8]	(保存科学)
研究補佐員	玉川 みほの[*3]	(漆工芸)
研究補佐員	羽生 彩香[*3]	(用具･原材料)
研究補佐員	佐野 恵子[*3]	(保存科学)
研究補佐員	手島 菜摘[*9]	(保存科学)
事務補佐員	柘櫃 奈穂	
客員研究員	藤井 義久	(木材科学)
客員研究員	北原 博幸	(建築環境学)
客員研究員	本多 貴之	(高分子分析)
客員研究員	山本 記子	(装潢修理技術)
客員研究員	貴田 啓子	(保存科学)
客員研究員	岡田 健	(文化財学)
客員研究員	片山 葉子	(環境微生物学)
客員研究員	宇髙 健太郎	(東洋絵画材料)
客員研究員	苅田 重賀	(航空史)
客員研究員	古田嶋 智子	(保存科学)
客員研究員	伊庭 千恵美	(建築環境工学)
客員研究員	川野邊 渉[*10]	(高分子化学)
客員研究員	鳥海 秀実[*6]	(絵画保存修復)
客員研究員	紀 芝蓮[*11]	(保存科学)
客員研究員	轟 丈瑠[*12]	(土壌微生物学)
連携併任	和田 浩	(東京国立博物館)
連携併任	児島 大輔	(東京国立博物館)
連携併任	野中 昭美	(東京国立博物館)
連携併任	大橋 美織	(東京国立博物館)
連携併任	佐藤 萌	(東京国立博物館)
連携併任	宮田 将寛	(東京国立博物館)
連携併任	降幡 順子	(京都国立博物館)
連携併任	福士 雄也	(京都国立博物館)
連携併任	上杉 智英	(京都国立博物館)
連携併任	荒木 臣紀	(奈良国立博物館)
連携併任	鳥越 俊行	(奈良国立博物館)
連携併任	木川 りか	(九州国立博物館)
連携併任	志賀 智史	(九州国立博物館)
連携併任	渡辺 祐基	(九州国立博物館)
連携併任	建石 徹	(皇居三の丸尚蔵館)
連携併任	加藤 広樹	(皇居三の丸尚蔵館)
連携併任	矢澤 南歩	(皇居三の丸尚蔵館)
連携併任	脇谷 草一郎	(奈良文化財研究所)
連携併任	田村 朋美	(奈良文化財研究所)

連携併任	松田 和貴	（奈良文化財研究所）
連携併任	柳田 明進	（奈良文化財研究所）
連携併任	吉田 直人	（文化財活用センター）
連携併任	間渕 創	（文化財活用センター）
連携併任	高妻 洋成	（文化財防災センター）
連携併任	小谷 竜介	（文化財防災センター）
連携併任	中島 志保	（文化財防災センター）
連携併任	和泉田 絢子	（文化財防災センター）

＊1 令和７年４月１日付配置換
＊2 令和７年４月１日付兼務
＊3 令和７年４月１日付採用
＊4 令和７年９月30日付退職
＊5 令和７年８月31日付退職
＊6 令和７年７月１日付採用
＊7 令和８年３月１日付採用
＊8 令和７年４月１日付採用、令和８年２月28日付退職
＊9 令和７年９月１日付採用
＊10 令和８年３月31日付退職
＊11 令和７年９月２日付採用
＊12 令和７年10月１日付採用

文化遺産国際協力センター

組織概要 **文化遺産国際協力センターは、文化遺産の保存修復及び調査研究の分野において我が国が国際協力を推進するためのナショナルセンターとしての役割を担っており、国内外の教育研究機関や民間団体等とも連携しながら、世界各地で積極的な協力活動を実施している。その活動内容は、文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信、文化遺産保護国際協力事業の実施、文化遺産の保存修復に関する技術移転・人材育成協力等、多岐にわたっている。**

国際情報研究室

国際社会における文化遺産に関する理念や法制度等、文化遺産の保護制度や施策に関して、国際動向や国際協力等の情報を収集・分析している。また、国際研修等を通じて情報発信している。

保存計画研究室

アジア諸国等の文化遺産の保存・管理・整備・活用に関し、現地政府機関等と協力しながら、調査研究及び計画立案、さらには事業実施にあたっての技術的助言等を行っている。また、紛争や自然災害時における被災文化遺産の救済や復興活動にも協力している。

技術支援研究室

文化遺産の修復手法や材料及び技術に関する調査研究や人材育成への協力など、国際共同事業及び技術移転を通じての諸外国への支援を行っている。

文化遺産国際協力センター長	友田 正彦	（建築学）
国際情報研究室長	金井 健	（建築学）
保存計画研究室長	安倍 雅史	（考古学）
技術支援研究室長	加藤 雅人	（製紙科学）
主任研究員	前川 佳文	（壁画保存修復）
研究員	淺田 なつみ	（建築学）
アソシエイトフェロー	黒岩 千尋	（建築学）
アソシエイトフェロー	山田 綾乃	（考古学）
アソシエイトフェロー	五嶋 千雪	（現代美術）
アソシエイトフェロー	金子 雄太郎＊1	（文化遺産マネジメント）
アソシエイトフェロー	武 瀟瀟	（日本絵画史）
アソシエイトフェロー	石渡 美鈴＊2	（3Dオブジェクト修復）
アソシエイトフェロー	米山 大三郎	（建築学・観光学）
アソシエイトフェロー	松浦 一之介	（考古学・景観保護）
アソシエイトフェロー	副島 まどか＊3	（文化遺産マネジメント）
研究補佐員	柴田 みな	（建築意匠）
研究補佐員	長尾 琢磨	（考古学）
事務補佐員	石田 智香子	
事務補佐員	五十畑 亜貴子＊1	
事務補佐員	柄澤 真子	
事務補佐員	平田 薫	
客員研究員	大河原 典子	（日本画）
客員研究員	杉山 恵助	（東洋絵画修復）
客員研究員	境野 飛鳥＊1	（保護制度）
客員研究員	大川 柚佳＊3	（西洋絵画保存修復）

＊1 令和８年３月31日付退職
＊2 令和７年10月31日付退職
＊3 令和７年４月１日付採用

上席研究員

塩谷 純 （日本近代絵画史）

特任研究員

小林 公治 （物質文化史）
早川 泰弘 （分析化学）

2. 年度計画及びプロジェクト報告

１．年度計画（令和７年度）とプロジェクトとの対応 …… 11

２．プロジェクト報告 …… 24

①有形・無形の文化財に関する調査研究事業 …… 26

②保存修復に関する調査研究事業 …… 33

③国際協力・交流等に関する事業 …… 41

④情報収集・成果公開に関する事業 …… 46

⑤刊行物に関する事業 …… 59

⑥指導助言・研修等に関する事業 …… 65

⑦その他の事業 …… 70

1．年度計画（令和７年度）とプロジェクトとの対応

令和７年度独立行政法人国立文化財機構に係る年度計画

独立行政法人通則法（平成十一年法律第百三号）第三十一条の規定により、令和３年３月25日付け２受文庁第4932号で認可を受けた独立行政法人国立文化財機構中期計画に基づき、令和７年度の業務運営に関する計画を次のとおり定める。

Ⅰ　国民に対して提供するサービスその他業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置

１．　有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信

（略）

２．文化財及び海外の文化遺産の保護に貢献する調査研究、協力事業等の実施

（1）新たな知見の開拓につながる基礎的・探求的な調査研究

①有形文化財、伝統的建造物群に関する調査研究

1）我が国の美術を中心とする有形文化財等に関する調査研究

ア　国内外の文化財に関する様々な情報について分析し、それらの情報を文化財保護に対して活用するための調査研究を実施する。また、イギリス・セインズベリー日本藝術研究所と共同研究を行う。その他機関との連携も図りつつ、文化財情報の公開・活用のための、より望ましい手法等の研究を行う。 シ01 シ05

イ　日本をはじめとする東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査及び研究を進める。また美術関連の編年紀等基盤となる資料情報の充実を図る。併せて、これに係る国内外との研究交流を推進する。 シ02

ウ　日本の近・現代美術を対象として、東京文化財研究所蔵の資料をはじめ他機関や個人が所蔵する作品及び資料の調査研究を行い、これに基づき研究交流を推進する。併せて、これまで蓄積してきた美術関係者情報の整備・発信に努め、また、主に現代美術に関する資料の効率的な収集と公開体制の構築を目指す。 シ03

エ　美術作品を中心とする有形文化財についての歴史的位置付け及びそれに基づくより深い理解を得ることを目的として、種々の美術工芸品を主な対象として、その表現・技術・材料・年紀等について、自然科学や人文学における様々な隣接諸分野とも連携した多角的調査研究を実施し、その成果公開を行う。さらに、新たな独創的研究視点や手法の検討・開発にも取り組む。 シ04

2）建造物及び伝統的建造物群に関する調査研究

近畿を中心とする古社寺等の建造物の調査研究、近世・近代を中心とした文化財建造物の基礎データの収集、未指定建造物・歴史的建造物の今後の保存と活用に資するための調査・研究を行い、まとまったものより順次公表を行う。また、伝統的建造物群及びその保存・活用に関する調査研究を推進し、保存活用を行っている各自治体等への協力を行う。

3）歴史資料・書跡資料に関する調査研究

近畿を中心とする古寺社や旧家等が所蔵してきた歴史資料・書跡資料等に関して、原本調査、記録作成を悉皆的に実施するとともに、唐招提寺関係資料等について公表に向けて調査研究を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】
- 評価軸による具体的な研究成果
- （関連指標）論文等数
- （関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】
- 我が国の美術工芸品や建造物の価値形成の多様性及び歴史・文化の源流の究明等に寄与しているか。
- 有形文化財の保存修復等に寄与しているか。

②無形文化財、無形民俗文化財等に関する調査研究

1）重要無形文化財の保存・活用に資する調査研究等

無形文化財等の伝承実態、それらに関わる文化財保存技術に関する基礎的な調査研究及び資料の収集を行うとともに、伝承が困難なため現状記録を要する対象を精査し、記録作成を実施する。

調査研究等に際しては関連する他分野の研究者、伝承者・保存団体、技術保持者・保持団体等との連携を図り、

当該調査研究等に基づく成果の一部については、一般向けの公開講座等を通して公表する。
また、これまでに研究所で収集・保管してきた記録・資料の整理を行い、必要に応じて媒体転換等の措置を講ずる。 ム01 ム02

2) 重要無形民俗文化財の保存・活用に資する調査研究等
我が国の風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形の民俗文化財及び文化財の保存技術のうち、近年の変容の著しいものを中心に、現在における伝承の実態、伝承組織、公開の在り方等を明らかにするとともに、各地の保存団体や保護行政担当者等とこれら研究成果及び問題意識の共有化を図る。特に災害下における伝承の復興や、後継者不足等により継承の危機にある伝承を重点的に調査研究の対象とする。
さらに、無形文化遺産の記録やその所在情報を継続的に収集し、その情報の整理・公開に努めるとともにネットワーク構築を図る。 ム02

3) 無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集等
日本と関連の深いアジア諸国等との間において研究員の交流や無形文化遺産関連調査を行うなど、無形文化遺産分野における研究交流事業を実施する。ユネスコ無形文化遺産保護条約に関する調査研究を進める。 ム05

【中期目標・計画上の評価指標】• 評価軸による具体的な研究成果
• (関連指標) 論文等数
• (関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】• 無形文化財、無形民俗文化財等の伝承・公開に係る基盤の形成に寄与しているか。

③記念物、文化的景観、埋蔵文化財に関する調査研究

1) 史跡・名勝の保存・活用に資する調査研究
我が国の史跡・名勝に関し、以下の調査研究を行う。
ア　遺跡・名勝地のマネジメント・インタープリテーションの今日的課題に関する事例調査や情報の収集を行い、国際的な動向も踏まえながら研究を進め、公表を行う。また平城宮跡等で遺跡の活用に関する実践的研究を行う。
イ　庭園調査を行うとともに、庭園に関する所蔵資料の整理を進め、活用に供する。
ウ　平城宮跡・藤原宮跡の管理にかかる諸課題の解決を目的として、宮跡内の遺構の保存・活用のために設置された施設及び植栽等の管理に関する調査研究を行う。

2) 古代日本の都城遺跡に関する調査研究
国家の形成過程や当時の生活実態の解明に向けて、遺跡の発掘調査、出土品・遺構等に関する調査研究を行う。
ア　古代都城の解明のため、平城宮・京跡、東大寺旧境内等、藤原宮大極殿院地区、飛鳥地域の宮殿等の発掘調査を行う。
イ　出土品及び遺構に関する調査、分析、復原的研究を総合的・多角的に行い、調査研究がまとまったものより順次公表する。奈良文化財研究所が収蔵する出土文化財の管理をより強化する。また、都城遺跡の廃都後や顕彰・保存・整備、社会的役割まで多角的に研究する。
ウ　飛鳥時代の壁画古墳について東アジアを主とする古墳、壁画、絵画資料等の事例との比較研究を行う。また、東アジアにおける工芸美術史・考古学研究の一環として、日中韓の古代の宮殿・寺院・古墳の出土品を中心とした資料の調査を行う。
エ　アジアにおける古代都城遺跡、生産遺跡及び陶磁器に関する調査研究並びに研究協力について、日本の古代都城及び中国都城等に関する中国社会科学院考古研究所との共同研究と学術交流の推進、木簡・簡牘に関する中国社会科学院古代史研究所、河北師範大学歴史学院及び韓国・慶北大学校人文研究院との共同研究と学術交流の推進、中国の生産遺跡（鞏義窯跡及び生産品）に関する河南省文物考古研究院との共同研究、三燕文化出土の金属器・陶器等の調査・分析を中心とする遼寧省文物考古研究院との共同研究、日韓古代文化の形成と発展過程に関する韓国国立文化遺産研究院との研究者の発掘現場交流を含む共同研究等を、協定等に基づいて行う。また、調査研究がまとまったものより順次公表する。

3) 重要文化的景観等の保存・活用に資する調査研究
文化的景観の保存・活用、及び文化的景観における生活・生業に関する情報収集、調査研究を行う。また、得られた成果を公表し、文化庁、全国文化的景観地区連絡協議会、関係地方公共団体と連携して、全国の文化財保護行政担当者、研究者と共有する。

4) 全国の埋蔵文化財に関する基盤的な調査研究
我が国の埋蔵文化財及びその保存・活用に関し、以下の調査研究を行う。
ア　全国の遺跡のうち災害痕跡の見られる遺跡や、官衙・古代寺院を中心とした資料収集及び分析に有効な指標や手法についての研究を進め、その成果をデータベース化して順次公開する。
イ　古代官衙・集落遺跡に関する研究集会を開催し報告書を刊行する。古代瓦に関する研究集会を開催する。出土文字資料研究の拠点的研究を行う。

5) 水中文化遺産に関する調査研究
我が国の水中文化遺産の保存と活用の体制を構築するため、水中文化遺産（水中遺跡）の保存・活用に関する調査研究を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】• 評価軸による具体的な研究成果
• (関連指標) 論文等数
• (関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】• 記念物の保存・活用に寄与しているか。
• 古代国家の形成過程や社会生活等の解明に寄与しているか。
• 文化的景観に関する保存・活用並びに研究の進展に寄与しているか。
• 埋蔵文化財に関する研究の深化に寄与しているか。

(2) 科学技術を応用した研究開発の進展等に向けた基盤的な研究

①文化財の調査手法に関する研究開発の推進

1) デジタル画像の形成方法等の研究開発
様々な光源を用いた高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化するための調査・研究を行い、その成果を公開する。その一環として、ガラス乾板等の過去に撮影された写真原版からの画像の取得手法及び色彩復元に関する調査研究を行う。 シ05

2) 埋蔵文化財の調査・研究方法の研究開発
埋蔵文化財の調査における新たな手法の開発・導入と応用に関する研究を行う。
ア　地震痕跡や地層の堆積環境等についての地質学的な検証法、遺構・出土品の計測及びその測定値から必要な諸情報を抽出する手法等について研究を進める。
イ　発掘調査の遺構図・地形図等の遺跡情報をデジタルデータとして構造的に把握するための調査研究を進める。

3) 年輪年代学を応用した文化財の科学的分析方法の研究開発
出土遺物、建造物、美術工芸品等の木造文化財の年輪年代調査を実施し、考古学、建築史学、美術史学、歴史学等の研究に資するとともに、各地の年輪データの蓄積を進める。また、デジタル技術等を活用した年輪年代調査や、年輪年代学的手法による同一材推定の応用等、分析方法の研究開発を進め、これらの研究成果を公表する。

4) 動植物遺存体の分析方法の研究開発
平城宮跡・藤原宮跡をはじめ、各地の遺跡から出土する動植物遺体の調査を実施して古環境や動植物資源利用の歴史を明らかにするとともに、多様な調査手法について基礎的な研究を行う。また、環境考古学研究の基礎となる現生標本を継続的に収集して、公開する。

5) 文化財の調査・研究成果を社会・教育実装するためのICTを用いた普及・啓発手法の開発
文化財の調査・研究成果のより効果的・広範囲な公開を目的とした、AR・VR、ゲーム等を利用した調査・研究成果の活用方法について研究を行う。

6) 物質文化・地質情報等を基とした防災・減災・復興・復旧の歴史的研究
都城発掘調査部や地方公共団体等が実施する発掘調査によって得られる地層データについて、その取得、分析、公開等の手法を研究し、災害史の基礎資料として活用する。また、これらの記録手法とする三次元計測法や画像解析法の研究を進める。

【中期目標・計画上の評価指標】• 評価軸による具体的な研究成果
• (関連指標) 論文等数
• (関連指標) 報告書等の刊行数

【評価軸】• 科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の調査手法の正確性、効率性等の向上に寄与しているか。

②文化財の保存修復及び保存技術等に関する調査研究

1) 文化財の生物劣化の機構解明と環境調和型対策に関する研究
文化財建造物、古墳内環境等生物制御が困難な空間にある文化財を対象として、分子生物学的手法を用いた加害生物種特定の技術開発を行うとともに、被災文化財を含めた虫菌害被害に対する環境低負荷型の処置方法について社会実装を見据えた応用研究を行う。 ホ01

2) 文化財の保存環境と維持管理に関する調査研究
博物館美術館等の文化財保管施設における保存環境変動要因に関する調査を実施し、最適な環境条件を設定するための検討を行う。また、被災文化財の一時保管場所を念頭に置いて、文化財防災センターと協力して様々な施設における環境調査を実施し、安定した保存環境を設定するための方策について検討する。 ホ02

3) 文化財の材質・構造・保存状態に関する研究

蛍光X線分析や反射分光分析等のための各種分析装置を併用して文化財の材質・構造・劣化状態に関する調査研究を行う。日本絵画における顔料の変遷等の研究を進めるとともに、美術工芸品等に用いられている鉛や鉄等の腐食に関する調査研究及びその対策に関する検討を行う。ホ03

4) 屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究
屋外に存在する人文資料や自然史資料を対象に、その劣化状況を適切に評価し、価値を回復して人々に有効に伝えるための適切な保存修復方法を検討する。ホ04

5) 文化財の修復のための技法と材料に関する調査研究
美術工芸品及び建造物等の修復に貢献するため、修復材料・修復方法に関する科学的調査を実施し、その評価を行う。また、旧来の材料・技法では施工が困難とされてきたものについて、新規の材料・技法の開発に関する調査研究を行う。修理技術者に必要な科学的知識に関して、今までの成果を元にアウトリーチ活動を行う。ホ05

6) 伝統材料・製作技法について科学的調査と情報集積を行う
文化財の構成材料や修復に関連し、伝統的材料・用具とそれらを使用する技法についての調査研究、用具・原材料と生産技術の保護・育成等に関する調査研究を行い、科学的評価を踏まえた記録を作成することで、文化資産の客観的な情報集積と可能な範囲での公開を目的とする。ホ05

7) 文化財の修復技術に関する調査研究
災害によって被災した文化財資料の応急処置または保存修復処置に係る技術や方法に関する調査研究を行う。近代以降に使われるようになった新しい保存修復技術や方法に関する調査研究を行う。様々な技術や方法を、保存修復処置を行う現場に効果的に適用するための研究を行う。ホ06

8) 出土遺物の保存処理法に関する調査研究
鉄製遺物の発掘後の劣化挙動の予測技術及び効果的な新規の脱塩法を確立するための基礎研究を行う。また、木製遺物の保存処理を効率化する新たな手法の確立と実用化に向け、基礎データの蓄積を進める。

9) 遺構の安定した保存のための維持管理方法に関する調査研究
遺構の劣化要因として塩害及び乾湿繰り返しに着目し、これらの劣化因子が遺構を破壊するメカニズムに関する基礎研究を実施する。また、遺構の劣化の進行を抑制する環境制御法及び修理方法についての研究を進める。

10) 出土遺物を中心とした文化財の材質調査に関する調査研究
イメージング技術を活用した出土遺物等の非破壊調査を進め、古代の材料・技法に関する調査研究を行う。光学的手法を用いて各種色料（顔料、染料、ガラス着色剤等）の基礎データを収集する。また、文化財を対象とした蛍光X線分析等の機器分析のガイドライン作成にむけての実験及び基礎データの収集を進める。

11) 高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究
ア　文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画等の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。ホ p. 40
イ　壁画の安定した保存と公開活用を行うための適切な保存環境について調査研究を行う。
ウ　遺跡現地における壁画の安定した保存と公開活用を行うため、類例の装飾古墳において保存。
環境調査及び石材等の劣化状態調査を行い、これらを適切に保存する石室内の温熱環境について研究を進める。

【中期目標・計画上の評価指標】
- 評価軸による具体的な研究成果
- （関連指標）論文等数
- （関連指標）報告書等の刊行数

【評価軸】
- 科学技術を的確に応用し、文化財の保存・修復の質的向上に寄与しているか。

(3) 文化遺産保護に関する国際協働

①文化遺産保護に関する国際協働の総合的な推進

1) 文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信
海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策・スキーム等に関する調査研究を行う。
ア　文化遺産の調査や保護に関わる国際的議論の場への参加等を通じて情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的課題等に関する調査研究を行い、その成果を研究会の開催や出版物の刊行等により国内外に情報発信する。コ01
イ　英国等の研究機関との間で文化遺産に関する研究交流を行う。

2) 文化遺産保護に関する研究及び協力事業の推進
国際共同研究等を通じて諸外国の多様な文化遺産の保存や活用等に関する理念と技術の両面における研究を進め、国際協力を推進するための基盤を強化するとともに、その成果をもとにアジア地域を主とする諸外国において文化遺産保護協力事業を実施する。
ア　文化遺産保護に関する研究及び協力事業を以下のように実施し、成果を広く公表する。
（ア）アジア地域等の文化遺産に関する調査研究及び保護協力事業を実施する。特にカンボジア・アンコール遺跡群（西トップ遺跡及びタ・ネイ遺跡）やブータン、カザフスタン、ウズベキスタン等の文化遺産について研究

及び協力事業を実施する。 コ02 コ03

（イ）上記事業と連携しつつ、文化遺産保護に関する研究会やワークショップの開催等を通じて国内外の専門家との情報の共有化を図る。 コ02 コ03

3）文化遺産保護に関する人材育成等

諸外国の文化遺産担当者等を対象とした研修や技術的支援等を通じて文化遺産の保存や活用に関する人材育成を進める。

ア　政府間機関文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）ほか国内外の諸機関等と連携し、紙文化遺産等に関する国際研修や国際ワークショップを通じて技術及び知識を海外の文化遺産担当者と共有するとともに、協力ネットワークを構築する。 コ05

イ　ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）等が実施する研修への協力を行う。

4）海外に所在する日本古美術品等の保存に関する協力

在外日本古美術品の保存修復に協力し、さらに成果を報告書等で公開することにより、日本が持つ伝統的保存修復に関わる知識と経験の共有を行う。 コ04

【中期目標・計画上の評価指標】• 文化遺産保護の国際協働に関する取組状況（諸外国の研究機関等との共同研究等の実施件数）

【評価軸】• 文化遺産国際協力を推進するとともに、国際協力推進体制について中核的な役割を担っているか。

②アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する調査研究

アジア太平洋無形文化遺産研究センターは、アジア太平洋地域における無形文化遺産の保護のための調査研究の推進拠点として、域内の研究機関、研究者等と協力し、以下の事業を行う。

- 研究情報の持続的収集と共有、及び国際会議・シンポジウム・セミナー等の開催を通じたアジア太平洋地域における無形文化遺産保護のための研究の促進
- 持続的でレジリエントな社会構築につなげることを視野に入れた無形文化遺産研究の推進
- 国際会合等への出席やユネスコ及び関連機関との連携を通じた無形文化遺産保護関連の国際的動向の情報収集

【中期目標・計画上の評価指標】• アジア太平洋地域の無形文化遺産保護に関する取組状況（国際協力事業の実施件数）

【評価軸】• アジア太平洋地域の無形文化遺産の保護に向けた調査研究等の国際協力を推進しているか。

（4）文化財に関する情報資料の収集・整備及び調査研究成果の公開・活用

①文化財情報基盤の整備・充実

文化財関係の情報を収集して国内外に発信するため、その計画的収集、整理、保管、公開及び電子化の推進による専門的アーカイブの拡充を行うとともに、調査研究に基づく成果としてのデータベースを構築・運用する。

1）国内外の文化財情報の文化財保護への活用、研究成果の効果的な発信及び研究の実施に資するデータベースを構築・運用する。特に、産業技術総合研究所との共同研究に基づき文化財3Dアーカイブを中心とした文化財デジタルツイン事業を推進する。また、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。 シ05

2）文化財情報のデジタルアーカイブに関する実践研究を行う。データの長期保管及び公開活用に関して、技術面・法律面含めたガイドラインを作成する。また、文化財報告書に関する総目録を作成する。 シ06

3）調査研究及び文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。あわせて、過去に収集した有形・無形の文化財の記録（写真原板、映像フィルムなどのアナログ資料）のデジタル化を推進し、長期的な保管と活用のための総合的な文化財デジタルアーカイブを構築する。 シ06

4）文化財に関係する図書、雑誌等の収集、整理、公開、提供を充実させる。

【中期目標・計画上の評価指標】• 文化財に関するデータベースのアクセス件数（前中期目標の期間の実績以上）
• （関連指標）データベースのデータ件数

②調査研究成果の発信

文化財に関する調査研究の成果について、定期的に刊行するとともに、公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等により、多元的に発信する。また、研究所の研究・業務等を広報するためウェブサイトを充実させるとともに、日本語はもとより多言語でのページを充実させる。

1）定期刊行物の刊行 シ07 ム04 ホ07 広

- 『東京文化財研究所年報』
- 『東京文化財研究所概要』
- 『東文研ニュース』
- 『美術研究』（年3冊）
- 『日本美術年鑑』

- 『無形文化遺産研究報告』
- 『無形民俗文化財研究協議会報告書』
- 『保存科学』
- 『奈良文化財研究所紀要』
- 『奈良文化財研究所概要』
- 『奈文研ニュース』
- 『埋蔵文化財ニュース』

2) 公開講演会、現地説明会、シンポジウムの開催等
- 公開講座（オープンレクチャー） シ08
- 公開講演会
- 現地説明会

3) ウェブサイトの充実
- 東文研総合検索 シ05
- 学術情報リポジトリ
- なぶんけんブログ等（コラム作寶樓等）

【中期目標・計画上の評価指標】• （関連指標）学術情報リポジトリ等によるウェブサイトにおける論文等の公開件数

③展示公開施設の充実

平城宮跡資料館、藤原宮跡資料室、飛鳥資料館の展示等を充実させ、来館者の理解を促進する。

1) 藤原宮跡資料室については、展示室のリニューアル作業を実施する。

2) 特別展・企画展

（平城宮跡資料館）
- 夏期企画展「寒風須恵器展（仮）」（7月12日～8月31日）（平城宮管理センター共催　於：平城宮いざない館）
- 秋期企画展「平城京以前（仮）」（10月18日～11月30日）予定
- 春期企画展「西隆寺木簡展（仮）」（12月11日～12月21日）予定

（飛鳥資料館）
- ミニ展示「飛鳥資料館50年のあゆみ（仮）」（4月15日～6月15日）
- 企画展「第16回写真コンテスト作品展「飛鳥のたてもの」」（7月18日～9月23日）
- 特別展「古代技術の精華ー飛鳥池工房ー（仮）」（11月5日～12月4日）

3) 定期的に実地研修や動画配信を活用した研修を開催し、平城宮跡解説ボランティアを育成するとともに、解説ボランティアとの連絡会議等を通じて、より効果的かつ効率的な制度運用を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】• 公開施設来館者に対する満足度アンケート（特別展・企画展）（満足度が前中期目標の期間と同程度の水準を維持）
• （関連指標）公開施設における特別展・企画展の開催件数（年2～3回程度）
• （関連指標）公開施設の来館者数

(5) 地方公共団体等を対象とする文化財に関する研修及び協力等

①文化財に関する研修の実施

1) 文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修及び修復技術者への科学知識に関する研修を行う。 ホ08

2) 研修受講生や派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を行い、その結果を踏まえ、より充実した研修計画を策定する。 ホ08

【中期目標・計画上の評価指標】• 研修成果の活用状況（アンケートによる研修成果の活用実績が80%以上）

②文化財に関する協力・助言等

国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。 シ ム ホ

1) 地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・調査支援・情報提供等を行う。

2) 蓄積されている調査研究の成果を活かし、他機関等との共同研究及び受託研究を行う。

3) 地震等で被災した地域の要請に応じた緊急的対応等、文化庁等との緊密な連携を図りつつ、地方公共団体等が行う文化財防災・保護事業への支援・協力を行う。

【中期目標・計画上の評価指標】• 専門的・技術的な援助・助言の取組状況（行政、公私立博物館等の各種委員等への就任件数、依頼事項への対応件数等）

③平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力

文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業に協力する。また、ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動に協力する。

1) 文化庁、国土交通省が行う平城宮跡、飛鳥・藤原宮跡等の公開・活用事業への協力
- 文化庁が行う平城宮跡、藤原宮跡の整備、管理事業への技術的な助言
- 文化庁が行うキトラ古墳壁画保存管理施設の管理・運営と古墳壁画の公開事業への協力
- 国土交通省が行う平城宮跡第一次大極殿院を中心とする復原、整備・活用等への協力
- 国土交通省の平城宮いざない館展示室４（詳覧ゾーン）に関する学芸業務・連絡調整への協力

2) ＮＰＯ法人平城宮跡サポートネットワーク及び周辺自治会等が行う各種ボランティア活動への協力

④連携大学院との連携教育等の推進

連携大学院との連携教育や大学への教育協力を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。

1) 東京藝術大学、京都大学、奈良女子大学との間での連携大学院教育等の推進及び奈良大学への教育協力の実施
- 東京藝術大学大学院：システム保存学（保存環境学、修復材料学）ホ p. 69
- 京都大学大学院：人間・環境学専攻　文化・地域環境講座
- 奈良女子大学大学院：人文科学専攻　比較文化学講座
- 奈良大学：「文化財修景学」

(6) 文化財防災に関する取組 防 p. 70

（文化財防災センター）

①地域防災体制の構築

地方公共団体、博物館、美術館、大学等研究機関、地域史料ネット等の文化財等関係団体の連携及び協力を深め、地域の文化財の防災体制を構築する。

1) 地方公共団体、博物館、美術館、大学等研究機関、地域史料ネット等の文化財等関係団体との協議、情報交換会を開催する。

2) 都道府県が策定する文化財保存活用大綱、市町村が策定する文化財保存活用地域計画並びに都道府県及び市町村が策定する地域防災計画を収集し、地域文化財の防災体制に関する調査研究を行い、地域防災体制構築に資する情報をまとめる。

3) 文化庁及び被災各県と協力して、令和６年能登半島地震に対する被災文化財等の救援・復旧支援事業を進める。

4) 災害発生時における文化財等の救援活動を支援する。

②災害時ガイドライン等の整備

災害発生時において多様な文化財の迅速な救援活動を実現するために必要となる各種のガイドライン等の策定を行う。

1) 各分野の文化財の防災に関する課題を整理し、ガイドライン等策定計画を作成する。

2) 各分野の文化財防災に必要となるガイドライン等について以上の計画に基づき策定作業を進める。

3) 令和６年能登半島地震の復興に資する事業を行い、ガイドライン等の策定に資する取組を進める。

③レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

平常時における文化財の収蔵及び展示における技術開発並びに災害時における文化財のレスキューに関する技術開発を行う。

1) 文化財の災害に対するリスクの所在及び対処に関する研究会を開催する。

2) 保存科学等に基づく被災文化財等の劣化診断、安定化処置及び修理、保存環境、被災現場の作業環境や、平時の防災手法等に関する調査研究を行う。

3) 令和６年能登半島地震の復興に資するための技術開発を行う。

④文化財防災を促進するための普及啓発

文化財防災に関する指導、助言、研修等の啓発及び普及活動を行うとともに、文化財防災センターでの取組等を広く国内外へ情報発信する。

1) シンポジウム、講演会、研究集会、地方公共団体担当者等への研修会、地域の防災体制構築のための人材育成等を実施する。

2) 文化財防災に関する取組についてウェブサイトでの公開とパンフレット等の作成や会議等への参加を通して、情報

発信に努める。
3) 諸外国・国際機関との間で交流を推進し、我が国の文化財防災の経験を発信するとともに、交流を通して、互いの文化財・文化遺産防災の向上に資する取組を行う。
4) 令和６年能登半島地震の復興に資するための普及啓発に取り組む。

⑤文化財防災に関係する情報の収集と活用
文化財防災に関する情報の収集を進め、我が国の文化財防災システムを機能的に運用するための情報の活用方法を検討する。
1) 文化財が被災した災害事例及び文化財防災の先進事例に関する情報を収集し、整理して共有化を図る。
2) 多様な文化財の防災に資するデータベース構築のためのデータ収集を進めるとともに、文化財防災への活用方法の調査研究を行う。
3) 文化遺産防災ネットワーク推進会議及び文化遺産の防災に関する有識者会議を開催し、文化財防災に係る課題等の把握に努める。
4) 令和６年能登半島地震の被災文化財等への対応経験を踏まえた災害時支援システムを構築する。

【中期目標・計画上の評価指標】
- 防災・救援のための連携・協力体制構築への取組状況（都道府県内各種会合等への会議等参加数）
- 文化財防災に関する技術開発への取組状況（論文等数、報告書等の刊行数）
- 文化財防災に関する普及啓発への取組状況（シンポジウム等の開催件数）

Ⅱ　業務運営の効率化に関する目標を達成するためにとるべき措置

１．業務改善の取組

(1) 組織体制の見直し
独立行政法人の業務運営の柔軟性を生かし、文化財の活用や防災等の機能の強化及び充実に向け、組織体制整備に努める。

(2) 人件費管理の適正化
国家公務員の給与水準とともに業務の特殊性を十分考慮し、対国家公務員指数は国家公務員の水準を超えないよう取り組み、その結果について検証を行うとともに、検証結果や取組状況を公表する。

(3) 契約・調達方法の適正化
①契約監視委員会を実施する。
②施設内店舗の貸付・業務委託について企画競争を実施する。

(4) 共同調達等の取組の推進
周辺機関との共同調達について、有用性が確認された以下の案件について実施する。
上野地区　再生PPC用紙、トイレットペーパー、廃棄物処理、古紙等売買、複写機賃貸借及び保守、トイレ洗浄機器等賃貸借
京都地区　再生PPC用紙、トイレットペーパー
九州地区　再生PPC用紙、トイレットペーパー、ガソリン

(5) 一般管理費等の削減
①機構内の共通的な事務の一元化による業務の効率化
情報システムについて、機構共通事務システム・ネットワークを運用し、業務の効率化及び情報の共有化を図る。

②計画的なアウトソーシング
以下の業務の外部委託を継続して実施する。
（東京国立博物館）
- 建物設備の運転・管理業務
- 警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
- 資料館業務の一部
- 施設内店舗業務

• 施設貸出業務
• 代表電話対応及び受付業務
（京都国立博物館）• 警備業務及び設備保全業務の一部並びに清掃業務
• 会場運営業務
• 代表電話対応及び受付業務
（奈良国立博物館）• 建物設備の運転・管理業務
• 警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
• 代表電話対応
（九州国立博物館）• 建物設備の運転・管理業務等
• 警備業務、看視案内業務及び清掃業務
（皇居三の丸尚蔵館）• 建物設備の運転・管理業務等
• 警備及び看視案内の一部並びに売札及び清掃業務
（東京文化財研究所・奈良文化財研究所）• 警備業務、清掃業務及び建物設備の運転・管理業務等

③使用資源の減少
• 省エネルギー
光熱水量の使用状況を把握し、省エネルギー化に努める。
• 廃棄物減量化
使用資源の節減に努め、廃棄物の減量化に努める。
• リサイクルの推進
廃棄物の分別収集を徹底し、リサイクルを推進する。

2．業務の電子化

機構ウェブサイトにおいて、機構に関する情報の提供を行う。機構共通メールシステム、ウェブ会議システム等を運用する。統合認証システムの展開を進める。

3．予算執行の効率化

収益化単位の業務及び管理部門の活動と運営費交付金の対応関係を明確にし、効率的な予算執行に努める。

Ⅲ　財務内容の改善に関する目標を達成するためにとるべき措置

1．自己収入拡大への取組

（1）機構全体において、展示事業等収入額が年度計画予算額を上回ることを目指す。

（2）機構全体において、寄附金等の外部資金獲得により財源の多様化を図る。

（機構共通）
• 個人・民間企業からの寄附、寄附会員制度、展示公開施設における募金箱等を通じて、施設全体の活動を支援する資金を民間から募る。また、文化財修理や研究支援等の特定の事業に係るプロジェクト型の寄附募集についても実施を検討する。
• 文化財活用センターが中心になって運用する国立文化財機構寄附ポータルサイト等を通じた情報提供や寄附事業の実施等により、一層の寄附を促す取組を行う。
• 外部資金獲得に向けた取り組みを機構全体で活性化させるため、施設を横断してファンドレイジング事業実施に関する情報共有等を行うための勉強会等を実施する。
• 遺贈寄附の受入促進に向けた施策を実施する。
（文化財活用センター、文化財防災センター）
• 被災地の文化財を救援するための初動資金を募るキャンペーンを継続する。

（3）保有資産の有効利用の推進

（機構共通）

①講座・講演会等を開催する。
②建物・講堂・セミナー室等の外部への貸出しを積極的に行う。
③4館において、国際交流及び日本文化の紹介や来館者の拡大を目的としたコンサート等を実施し、施設の有効利用を図る。
④展示公開施設におけるミュージアムショップの運営委託等、施設の有効利用の推進を図る。
【中期目標・計画上の評価指標】•（指標）その他寄附金等収入額（前中期目標期間の累積実績額以上）
•（関連指標）展示事業等収入額

2．固定的経費の節減

固定的経費の節減のため、Ⅱ1.（5）一般管理費等の削減に関する事項に取り組む。

3．決算情報・セグメント情報の充実等

独立行政法人会計基準に従い、適切な決算情報・セグメント情報の開示を実施する。

Ⅳ　予算（人件費の見積もりを含む）、収支計画及び資金計画

1．予算

別紙のとおり

2．収支計画

別紙のとおり

3．資金計画

別紙のとおり

Ⅴ　その他業務運営に関する目標を達成するためにとるべき措置

1．内部統制

内部統制委員会、リスク管理委員会を開催する。また、内部監査及び監事監査等のモニタリングを実施し、必要に応じて見直しを行うとともに、各種研修を実施し、職員の意識及び資質の向上を図る。

2．その他

(1) 自己評価

運営委員会、外部評価委員会の開催等、外部有識者の意見を踏まえた客観的な自己評価を実施し、その結果を組織、事務、事業等の改善に反映させる。

(2) 情報セキュリティ対策

多様化するサイバー攻撃やセキュリティの脅威に対する組織的対応強化を図るため、政府機関等のサイバーセキュリティ対策のための統一基準群を踏まえた規定の整備及び適時適切な見直し、役職員の研修及び教育を実施する。
計画的な情報セキュリティ対策の点検及び情報セキュリティ監査の実施により、情報セキュリティ対策の実施状況を把握するとともに、その強化を図る。

３．施設設備に関する計画

(1) 施設整備について以下の事業を実施する。

- 東京国立博物館平成館エレベーター設備等改修
- 京都国立博物館なら仏像館整備
- 東京文化財研究所中央監視装置他交換工事（Ⅱ期）

(2) 各施設の防火対策について、策定した防火対策５か年計画に基づき整備を進める。

４．人事に関する計画

(1) 中長期的な人事計画の策定を検討し、新たな業務にも対応した人材の確保・育成を図る。また、効率的かつ効果的な業務運営に向け、能力や適性に応じた人事を実施する。

(2) 職員のキャリアパス形成に寄与するため、研修、人事交流等を実施する。

(3) 就業環境の整備や働き方改革関連法の施行に対応した取組を実施する。

令和７年度　予算

（単位：百万円）

区　　分	国立博物館等	文化財研究所等	合　　計
収　　入			
運営費交付金	6,873	2,707	9,580
施設整備費補助金	0	0	0
展示事業等収入	2,126	75	2,201
受託収入	360	453	813
その他寄附金等	674	211	885
計	10,033	3,446	13,479
支　　出			
管理経費	1,672	410	2,082
うち人件費	826	268	1,094
うち一般管理費	846	142	988
業務経費	7,327	2,372	9,699
うち人件費	2,012	1,087	3,099
うち収集保管事業費	1,240	0	1,240
うち展覧事業費	2,899	0	2,899
うち教育普及事業費	242	0	242
うち博物館研究事業費	576	0	576
うち博物館支援事業費	34	0	34
うち文化財活用事業費	324	0	324
うち基礎研究事業費	0	393	393
うち応用研究事業費	0	278	278
うち国際遺産保護事業費	0	105	105
うち情報公開事業費	0	360	360
うち研修協力事業費	0	14	14
うち文化財防災事業費	0	135	135
施設整備費	0	0	0
受託事業費	360	453	813
その他寄附金等	674	211	885
計	10,033	3,446	13,479

令和 7 年度　収支計画

（単位：百万円）

区　　分	国立博物館等	文化財研究所等	合　　計
費用の部	9,629	3,493	13,122
経常経費	9,629	3,493	13,122
管理経費	1,679	411	2,090
人件費	831	269	1,100
一般管理費	848	142	990
事業経費	7,524	2,905	10,429
人件費	2,131	1,125	3,256
収集保管業務費	877	0	877
展覧業務費	2,976	0	2,976
教育普及業務費	240	0	240
博物館研究業務費	588	0	588
博物館支援業務費	34	0	34
文化財活用業務費	318	0	318
基礎研究業務費	0	399	399
応用研究業務費	0	280	280
国際遺産保護業務費	0	112	112
情報公開業務費	0	389	389
研修協力業務費	0	18	18
文化財防災業務費	0	129	129
受託業務費	360	453	813
減価償却費	426	176	602
財務費用	0	1	1
臨時損失	0	0	0
収益の部	9,629	3,493	13,122
運営費交付金収益	6,265	2,648	8,913
展示事業等の収入	2,126	75	2,201
受託収入	360	453	813
その他寄附金等	452	141	593
資産見返負債戻入	426	176	602
財務収益	0	0	0
臨時利益	0	0	0
純利益	0	0	0
目的積立金取崩	0	0	0
総利益	0	0	0

令和 7 年度　資金計画

（単位：百万円）

区　　分	国立博物館等	文化財研究所等	合　　計
資金支出	10,033	3,446	13,479
業務活動による支出	9,203	3,316	12,519
投資活動による支出	829	117	946
財務活動による支出	1	13	14
資金収入	10,033	3,446	13,479
業務活動による収入	10,033	3,446	13,479
運営費交付金による収入	6,873	2,707	9,580
展示事業等による収入	2,126	75	2,201
受託収入	360	453	813
その他寄附金等	674	211	885
投資活動による収入	0	0	0
施設整備費補助金による収入	0	0	0
財務活動による収入	0	0	0

2．プロジェクト報告

凡　例

(1) プロジェクトは、年度計画との対応（11〜23頁）に従って、以下の①〜⑦の分類項目ごとに各部・センターごとに配列し、プロジェクトの略番と頁を記した。
略番で用いられている担当部門の略号は、シ：文化財情報資料部、ム：無形文化遺産部、ホ：保存科学研究センター、コ：文化遺産国際協力センター、広：広報委員会、防：文化財防災センター　である。
(2) 各プロジェクト報告の掲載頁では、表題の右側に上記略番を記すとともに、頁左上にプロジェクトの担当部門を示した。
なお、ウェブ公開版では、担当部門をシンボルカラー（文化財情報資料部：青、無形文化遺産部：黄、保存科学研究センター：緑、文化遺産国際協力センター：紫）で色分けしている。
(3) 年度計画との対応一覧への逆引きのため、右上に年度計画の記号を記した。
(4) また、各プロジェクト報告の掲載頁では、プロジェクトの目的、成果とその公表（論文、報告、発表、刊行物）及び研究組織の各項目を立てて内容をまとめた。なお、研究組織で下線がついている職員はプロジェクトリーダーである。

① 有形・無形の文化財に関する調査研究事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 01	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	2－(1)－①－1)－ア	26
シ 02	日本東洋美術史の資料学的研究	2－(1)－①－1)－イ	27
シ 03	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	2－(1)－①－1)－ウ	28
シ 04	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	2－(1)－①－1)－エ	29
ム 01	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	2－(1)－②－1)	30
ム 02	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	2－(1)－②－2)	31
ム 05	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	2－(1)－②－3)	32

② 保存修復に関する調査研究事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
ホ 01	文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策	2－(2)－②－1)	33
ホ 02	文化財の保存環境にかかる調査研究	2－(2)－②－2)	34
ホ 03	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	2－(2)－②－3)	35
ホ 04	屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究	2－(2)－②－4)	36
ホ 05	(1) 伝統材料・技法に関する複合的調査研究	2－(2)－②－5)	37
ホ 05	(2) 文化財修復のための技術と材料に関する調査研究	2－(2)－②－5)	38
ホ 06	多様な文化財の修復技術に関する調査研究	2－(2)－②－9)	39
ホ ―	高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究	2－(2)－②－11)	40

③ 国際協力・交流等に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
コ 01	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	2－(3)－①－1)－ア	41
コ 02	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	2－(3)－①－2)－アー(ア)(イ)	42
コ 03	保存修復技術の国際的応用に関する研究	2－(3)－①－2)－アー(ア)(イ)	43
コ 04	在外日本古美術品保存修復協力事業	2－(3)－①－4)	44
コ 05	国際研修	2－(3)－①－3)－ア	45

④ 情報収集・成果公開に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 05	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	2－(1)－①－1)－ア、2－(2)－①－1)、2－(4)－②－3)	46
シ 06	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	2－(4)－①－2)3)	48
シ 08	令和7年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）	2－(4)－②－2)	49
ム 03	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	2－(1)－②－1)	50
― ―	プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等		51

⑤ 刊行物に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
シ 07	令和5年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』	2－(4)－②－1）	59
ム 04	無形文化遺産部出版関係事業	2－(4)－②－1）	59
ホ 07	『保存科学』第65号の出版	2－(4)－②－1）	60
広 ―	『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKEN NEWS』		60
― ―	プロジェクトの一環として刊行された刊行物		61

⑥ 指導助言・研修等に関する事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
ホ 08	博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）	2－(5)－①－1）2）	65
シ ―	文化財の収集・保管に関する指導助言	2－(5)－②－1）	65
ム ―	無形文化遺産に関する助言	2－(5)－②－1）	66
ホ ―	文化財の虫菌害に関する調査・助言	2－(5)－②－1）	67
ホ ―	文化財の修復及び整備に関する調査・助言	2－(5)－②－1）	67
ホ ―	文化財の材質・構造に関する調査・助言	2－(5)－②－1）	68
ホ ―	美術館・博物館等の環境調査と援助・助言	2－(5)－②－1）	68
ホ ―	東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進	2－(5)－④－1）	69

⑦ その他の事業

略番	プロジェクト名	（年度計画の記号）	頁
防 ―	文化財防災センター事業	2－(6)	70

文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究〔シ01〕

研究組織　米沢玲、橘川英規、江村知子、田代裕一朗、小山田智寛、小林真美、髙階郁美、中村茉貴、荒川理沙、淺野真知（以上、文化財情報資料部）

目　　的　内外の諸機関との連携を見据え、当研究所の文化財に関する調査研究の成果・データをより国際的標準に見合うかたちに整え、効果的に共有してゆくための研究を行う。あわせて地方公共団体と文化財に関する情報の提供と共有を行うことを視野に入れる。

成　　果

1．調査研究の成果の公開と、研究情報の国際発信

- 当研究所刊行論文を機関リポジトリに公開した（追加：22件、累積：16タイトル4,141件）。
- 日本国内刊行展覧会カタログ掲載論文（2022（令和4）年発表分）の書誌情報「東京文化財研究所美術文献目録」（854件）を、OCLC WorldCatに提供した（8年3月）。

2．国内外の関連機関との連携・成果公開

- アメリカのゲッティ研究所との共同研究において、当研究所所蔵の貴重書399件をウェブサイトに公開、Getty Research Portal（GRP）へ802件の書誌情報を提供した（6月）。
- イギリスのセインズベリー日本藝術研究所（SISJAC）からユージニア・ヴォグダノワ氏とサイモン・ケイナー所長が来訪し研究協議を行った（8月5日）ほか、DB事業担当のジェームズ・マシュー氏とオンライン協議を実施（7月28日）。研究協定に基づき、国外で発表された英文の日本芸術関係のデータ（117件）を追加公開した（11月）。また田代と吉田が訪英し、関連機関を視察しSISJACとロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）で講演会を行った（12月1日～7日）。
- 韓国における美術アーカイブ事業の現況調査として、リウム美術館美術アーカイブ、韓国国立現代美術館アーカイブなどの関連機関を訪問し意見交換を行った（6月23～26日）ほか、オンライン・来訪による研究協議を実施した（10月1日・15日）。
- 京都府との共同研究：研究協議を実施（7月9日、10月1日、8年3月23日）。文化財調書の目録とデジタル画像21,871件をデータベースとして公開し（11月）、写真資料の目録化3,339件及びガラス乾板のデジタルデータ全3,314点の画像処理と整理作業を完了した（8年3月）。
- 奈良大学・原口志津子氏より提供を受けたデジタルデータにより本法寺蔵法華経曼荼羅図の高精細デジタルコンテンツを作成して公開した（8年3月）。



SOASでの講演会(12月5日)

論　　文

- 田代裕一朗：「韓国近現代における陶磁器の蒐集とコレクションの形成」『美術研究』446号 東京文化財研究所 pp.37-55 25.8

発　　表

- 田代裕一朗：「日本民藝館所蔵柳宗悦朝鮮関連資料の調査について」シンポジウム「今も続く韓国工芸－国外所在文化遺産財団助成による調査成果発表」25.5.28
- 田代裕一朗：「新安沈船の高麗青磁」第45回日本貿易陶磁研究会研究集会 25.9.13
- 田代裕一朗：「韓国のやきもの、その美を探る」東京国立博物館月例講演会 25.11.25
- 田代裕一朗：Japanese Residents of Colonial Korea and Their Relationship with Ceramics, CJS Workshop & Roundtable Discussion – Japan and Colonialism: A Transregional Approach　25.12.4
- 田代裕一朗：Japanese “Kottō(骨董)” Culture and Korean Ceramics, School of Oriental and African Studies　25.12.5
- 田代裕一朗：「韓国社会と文化財返還問題に対する認識の変化について」東京文化財研究所 令和7年度第3回総合研究会 26.1.6

日本東洋美術史の資料学的研究 〔シ02〕

研究組織　小野真由美、江村知子、二神葉子、橘川英規、小山田智寛、米沢玲、吉田暁子、田代裕一朗、月村紀乃、黒﨑夏央（以上、文化財情報資料部）、塩谷純（上席研究員）、小林公治（特任研究員）、津田徹英、後藤亮子（以上、客員研究員）

目　　的　近世以前の日本を含む東アジア地域における美術作品を対象として、基礎的な調査及び研究を進め、研究の基盤となる資料情報の充実を図る。これにかかる国内外の研究交流を推進する。

成　　果

1．研究基盤となる資料整備

- 吉良文男旧蔵図書（韓国陶磁を中心とする文献）の寄贈を受け、その基礎調査を実施した。あわせて、既存蔵書を含む韓国語文献について、日本語書誌情報の整備を目的とした翻訳作業を進め、計636件の書誌データを作成した。
- 國華社より寄贈を受けた写真資料のうち、ガラス乾板由来の紙焼き写真について、スキャニングとメタデータの付与を979件行った。また成果として「國華社寄贈資料写真データベース」を構築し、1,021件を公開した。

2．研究交流の推進

- 日本東洋の美術工芸に関する研究会・報告会を計3回開催した。なかでも令和7年5月21日には、米国よりティム・T・ザム氏（メトロポリタン美術館）を招聘し、第2回文化財情報資料部研究会「没倫紹等（墨斎）筆《葡萄図》について」を実施した。本研究会では、中世絵画を主題としつつ、作品の国際的評価及び資料活用のあり方について議論を深め、国際的視野に立脚した研究交流を行うことができた。あわせて、海外研究機関との継続的な情報共有の基盤を構築し、今後の共同研究及び人的交流の可能性を広げる契機となった。また、所内研究者及び若手研究者にとっても、国際的研究動向に直接触れる機会となり、研究環境の活性化に寄与した。

3．在外美術資料及び海外美術館の調査

- イタリアにおいて、文明博物館での作品調査を行うとともに、下院附属歴史公文書館及びアリナーリ写真財団にて資料の所在調査及び情報収集を行った。とくに下院附属歴史公文書館においては、日伊間の文化外交に関する一次資料の所在を確認することができ、今後の研究に資する貴重な知見を得た。さらに、関連資料群の概要を確認し、今後の継続的調査及び分析に向けた基礎情報を得た。本調査は、日伊文化交流史研究の深化に向けた重要な足がかりとなった。

発　　表

- 小野真由美：「狩野常信の詠歌活動に関する一考察」第5回文化財情報資料部研究会、25.9.16
- 小野真由美：「欧州美術資料調査報告（イタリア）」東京文化財研究所会議室、25.11.25



第2回文化財情報資料部研究会



イタリア下院附属歴史公文書館での調査

近・現代美術に関する調査研究と資料集成 (シ03)

研究組織　橘川英規、江村知子、吉田暁子、城野誠治、黒﨑夏央（以上、文化財情報資料部）、塩谷純（上席研究員）、三上豊（以上、客員研究員）

目　　的　日本の近・現代美術を対象として、東京文化財研究所蔵の資料をはじめ他機関や個人が所蔵する作品及び資料の調査研究を行い、これに基づき研究交流を推進する。併せて、これまで蓄積してきた美術関係者情報の整備・発信に努め、また主に現代美術に関する資料の効率的な収集と公開体制の構築を目指す。

成　　果

1．黒田清輝作品及び関連資料の調査研究・公開

- 6年度開催したシンポジウム「黒田清輝、その研究と評価の現在」の報告書として、各発表に基づく論考やディスカッションの書き起こしを掲載した『美術研究』第447号を編集、刊行した。
- 吉田暁子「研究資料 黒田清輝 舞妓」(『國華』1561号、2025年11月)を掲載し、作品研究の深化に寄与した。

2．日本の近現代美術作家及び美術関係者に関する調査研究

- 研究会の開催と知見の共有： 文化財情報資料部研究会を継続的に実施し、所内外の専門家を交えた議論を通じて調査研究を推進した。
  第3回（6月5日）：黒﨑夏央「『日本美術年鑑』の現状と課題」／第4回（7月17日）：呉景欣氏、森川もなみ氏を招聘し近代日本画家の台湾での活動及び南方従軍スケッチに関する研究会／第8回（2月17日）：槌賀基範氏、谷口英理氏を招聘し「作家アーカイブズの保存と活用」に関する研究会／第9回（3月4日）：堀宜雄氏、迫内祐司氏を招聘し添田達嶺に関する研究会／第11回（3月19日）：新井由美氏、田中淳氏を招聘し木村荘八資料に関する研究会を行った。
- 学会等における成果発表： 2025年度明治美術学会総会（12月、早稲田大学）において、研究発表「田添幸枝《力の体現》 ―東京勧業博覧会に落選した裸体画」を行った。

3．現代美術資料の整理作業及びデータベース化

- 継続事業である我が国美術界の動向をめぐる基本情報の蓄積・発信について、2022（令和4）年に逐次刊行物・展覧会図録で公表された研究成果をデータベース化し、『日本美術年鑑』令和5年版を発表した（8年1月25日）。またこれまで冊子に掲載していた情報をウェブサイト公開に移行し、新たに「『日本美術年鑑』採録文献データベース」を公開した（11月21日）。



第8回文化財情報資料部研究会

4．当研究所所蔵近現代美術資料データベース公開に向けての調査

- アーカイブズ情報の公開（ウェブサイト）：機関アーカイブズ「明治大正美術史編纂事業資料」(5月1日)、収集アーカイブズ「清宮質文資料」(9月11日)、「森岡柳蔵旧蔵資料」(11月5日)、「笹木繁男主宰現代美術資料センター寄贈資料（画廊）」（3月12日）。また矢代幸雄寄贈等西洋美術写真資料、吉田耕三、笹木繁男の旧蔵資料の目録作成を行った。

論　　文

- 塩谷純：「黒田清輝の画業について―神津港人の視点から」『美術研究』447　pp.1-12　25.12
- 吉田暁子:「研究資料　黒田清輝　舞妓」『國華』1561　pp.25-29　25.11

発　　表

- 黒﨑夏央:「『日本美術年鑑』の現状と課題」第3回文化財情報資料部研究会　25.6.5
- 吉田暁子:「田添幸枝《力の体現》―東京勧業博覧会に落選した裸体画」2025年度明治美術学会総会・研究発表　25.12.13　早稲田大学文学学術院
- 橘川英規:「松澤宥旧蔵資料の継承と活用のダイナミズム」第8回文化財情報資料部研究会　25.2.17

美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開 (シ04)

研究組織　江村知子、月村紀乃、二神葉子、橘川英規、小野真由美、米沢玲、小山田智寛、吉田暁子、田代裕一朗、黒﨑夏央（以上、文化財情報資料部）、菊池理予（無形文化遺産部）、早川典子、山田祐子（以上、保存科学研究センター）、塩谷純（上席研究員）、早川泰弘、小林公治（以上、特任研究員）、安永拓世（客員研究員）

目　　的　**絵画や彫刻、工芸といった美術作品は、その表現のあり方、制作に用いられた技術、そして利用された素材などが複合し一体となって成立したものである。本プロジェクトでは、こうしたそれぞれの構成要素がどのような実態を持ち、またどのように関わりあっているのか、関連する諸分野を広く渉猟しつつ多角的に分析し、その関係の解明を目指すものであり、美術作品に対するより深い理解の醸成が期待される。**

成　　果

1．隣接諸分野と連携した多角的調査・研究

- 和泉市久保惣記念美術館との共同研究を進め、「山崎架橋図」についての研究会を開催し、その成果をふまえて「山崎架橋図」についてのデジタルコンテンツを日本語・英語で作成し、公開した（8年3月）。
- 東京国立博物館との「美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究」として、当研究所保存科学センター、無形文化遺産部と協力し、絹本絵画についてデジタルマイクロスコープを用いた調査を実施した。この研究は、画絹の糸の太さや本数、断面形状などを計測し、地域や時代による傾向を抽出するもので、7年度は、「春日鹿曼荼羅図」など18点の作品の調査を実施した（4月9・10日）。またこれまでの成果を踏まえた公開研究会を開催し（参加者94名）、その内容をまとめた報告書を刊行した（8年3月）。この共同研究調査の成果の一部は画絹データベースとして、東京国立博物館博物館博物館情報課により同館のウェブサイトで2024（令和6）年から公開を開始しており、7年度は4件のデータを追加し（7月）全体で44件となった。

2．研究成果の公開と蓄積データの機能拡張・相互連携

- 昭和30～40年代に撮影された刀剣ガラス乾板写真のデジタルアーカイブ化に向けて、330枚のガラス乾板の保存修復処置を行い、データ整理を行った。
- 売立目録デジタルアーカイブの情報を更新し、また新たに戦前・戦後の売立目録565冊の寄贈を受け、情報の拡充に努めた（8年2月）。
- 美術史研究のためのコンテンツ（日本美術史年紀資料集成）作成として、展覧会図録等から年紀のある作品の資料を順次収集して入力し、7年度の入力件数は2,983件となった。

論　　文

- 安永拓世：「呉春の表現の源流を求めて―与謝蕪村からの学習・継承と「白梅図屏風」への道程―」『大和文華』148 pp.1-18　25.12
- 安永拓世：「江戸時代の画絹と特殊な基底材」『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』東京国立博物館・東京文化財研究所　pp.36-47　26.3

発　　表

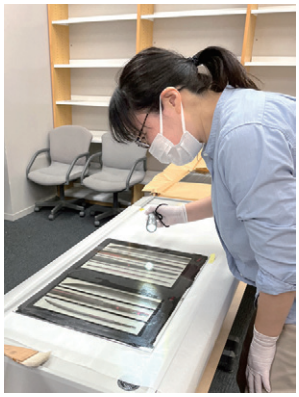
- 月村紀乃：「名刀「江雪左文字」がつなぐ縁」令和7年度長津田地区センター自主事業 歴史講演会　25.9.6
- 江村知子：「山崎架橋図の光学調査について」令和7年第6回文化財情報資料部研究会　25.9.25
- 月村紀乃：「はじめての日本刀鑑賞」東京芸術大学 日本工芸史概説Ⅱ　25.12.23
- 安永拓世：「江戸時代の画絹と特殊な基底材」美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究報告会　東京文化財研究所　25.7.29

刊行物

- 『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』　68p　26.3



山崎架橋図デジタルコンテンツ



刀剣ガラス乾板の保存修復処置方法の検討

無形文化財の保存・継承に関する調査研究〔ム01〕

研究組織 前原恵美、久保田裕道、石村智、菊池理予、鎌田紗弓、小田原直也（以上、無形文化遺産部）、早川典子（保存科学研究センター）、飯島満（客員研究員）

目　　的 **我が国の無形文化財、並びに文化財保存技術の伝承形態を把握し、その保護に資するため、伝承の基礎となる技法・技術の実態や変遷の調査研究、及び資料の収集を行い、現状記録の必要な対象を精査して記録作成を行う。**

成　　果

1．無形文化財に関する調査研究
- 芸能分野：古典芸能、関連文化財保存技術（調べ緒、大鼓の革、三味線ほか製作技術等）、原材料生産技術（ヨシ、竹等）の調査研究
- 工芸分野：工芸技術、文化財保存技術に関する調査研究（久米島紬等）、工芸技術の防災（久留米絣等）に関する調査研究

2．現状記録を要する無形文化遺産の記録作成
- 平家：菊央雄司氏ほかによる伝承曲２曲（《紅葉》前半、《横笛》全曲）の映像記録作成、東京文化財研究所、２月19日

3．研究調査に基づく成果の公表
- 公開研究会「東京文化財研究所における実演記録事業（落語）―林家正雀師の正本芝居噺―」の開催（東京文化財研究所、５月23日）
- 第19回公開学術講座「普及から考える伝統芸能の継承」開催（東京文化財研究所、11月７日）

4．無形文化遺産に関わるアナログ資料のデジタル化
- 音声資料：オープンリールテープに関して、民謡音源等（約60時間）のデジタル化、芸能調査写真フィルムのデジタル化（5,755コマ）、及川尊雄旧蔵紙媒体資料のデジタル化（2,854コマ）とウェブサイト公開を実施

論　　文
- 前原恵美：「楽器を中心とした文化財保存技術調査報告9」『無形文化遺産研究報告』20　pp.33-46　26.3
- 菊池理予・石原真理：「〈資料紹介〉産業工藝懇話會報について」『無形文化遺産研究報告』20　pp.73-90　26.3
- Martin Clayton, Sayumi Kamata : Analysis of Unmetered Coordination in the Tōgaku Ensemble of Japanese Court Music (Gagaku). Analytical approaches to world music 13(2) pp. 1-47. 25. 12

報　　告
- 前原恵美：「能管の原材料と製作技術に関する調査研究報告書」　pp.1-56　26.3
- 前原恵美・中川優子：「篳篥蘆舌の原材料・ヨシに関する報告書―淀川河川敷 上牧・鵜殿を中心に―」pp.1-29　26.3

発　　表
- 前原恵美：「能管の原材料と製作技術に関する調査報告」（共同発表代表者）（一社）東洋音楽学会第76回大会『音楽』　25.11.30
- 前原恵美：シンポジウム「コロナ期の音楽活動を振り返る」日本音楽学会東日本支部第102回定例研究会　26.3.28
- 菊池理予：「日本の染織品の技術保存と繊維」染織文化財の保存にたずさわる人のためのサイエンスリテラシー研修2025、佐賀大学　25.7.19
- Sayumi Kamata : Interpersonal coordination in Japanese traditional music ensembles. International Symposium on Embodied Interaction in Musical Performance. 25.6.29
- 村上瞳・鎌田紗弓・野中哲士：「雅楽の稽古における唱歌使用の観察的検討」日本認知科学会第42回大会　25.9.12

刊行物
- 『第18回東京文化財研究所無形文化遺産部公開学術講座『文化財修理と在来絹製作―絹織製作研究所の技術をつなぐ―』報告書　26.3
- 日本の芸能を支える技IX「九州系地唄駒・撥」　26.3
- 日本の芸能を支える技X「能管」　26.3



実演記録「平家」第8回（田中奈央一氏）

無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究 (ム02)

研究組織　久保田裕道、石村智、今石みぎわ、菊池理予、後藤知美（以上、無形文化遺産部）

目　　的　**風俗慣習、民俗芸能、民俗技術等無形民俗文化財のうち、近年の変容の著しいものを中心に、その実態を把握するために資料収集と現地調査を行う。また、無形民俗文化財研究協議会を実施し、その成果を報告書にまとめる。さらに、これまで収集・保管してきた無形民俗文化財についての記録・資料の整理を行う。また選定保存技術についても情報を収集し、その中で重要なものについては現地調査・記録作成を行う。**

成　　果

1．無形民俗文化財に関する継続的な調査研究として、祭礼行事の調査研究（長野県木祖村、沖縄県与那国町等）、民俗芸能に関わる調査研究（北海道根室市、静岡県浜松市等）、民俗技術に関わる技術等の調査研究（岡山県真庭市、長野県山ノ内町）を行った。加えて海外事例調査として、ブータン王国での祭礼芸能調査研究（メラ地域）も行った。

　また無形文化遺産と災害に関わる調査研究の一環として、能登半島を中心に石川・富山県での調査、宮城県女川町等での調査も継続している。あわせて指導・助言として関わっている無形民俗文化財についても調査研究もしくは情報収集を行った。

2．無形文化遺産アーカイブスの開発と公開として、約10,000件のデータを有する「無形文化遺産総合データベース」の継続的な維持と追加を行い、公開している。またアーカイブ構築のための映像・画像等の収集等を継続的に行っている。

　さらに記録保存・活用に関わる研究として民俗研究者である斎藤たまの民俗調査カード集成の情報整理、民俗芸能研究者である永田衡吉所有資料の整理を継続している。

3．研究集会の開催として第20回無形民俗文化財研究協議会を、「民俗文化財をネットワークで守り、活かす」をテーマに開催した。ネットワークの意義や課題・展望について、各関係者・研究者等による発表と協議を行った。

4．選定保存技術については、継続的な情報収集を行っている。

5．全国的に課題となっている有形民俗文化財の保存・活用について、現状に関する情報収集を行うとともに、活用に関する情報発信をウェブページにて行った。また、有形民俗文化財の再評価のための手引きの作成を進めた。

論　文

- 久保田裕道：「文化財と宗教民俗―2020年代の今を問うための発題として」『宗教民俗研究』35　pp.32-51　25.10
- 久保田裕道：「無形文化遺産情報ネットワークの取り組み」『必携文化財防災の手引き』pp. 56-62　26.1
- 後藤知美：「新聞報道にみる能登半島地震による祭り・行事や民俗芸能への影響」『無形文化遺産研究報告』20　pp. 57-71　26.3

報　告

- 久保田裕道:『ブータンにおける祭礼芸能の変容実態とその保護に関する研究』(第１～４章)　pp.1-175　26.3

発　表

- 今石みぎわ「箕を語る―日本列島の「箕」の文化」「論田・熊無の藤箕製作技術」保存継承活動15周年記念講演会　25.10.4
- 今石みぎわ「有形の民俗資料（民具）の保存・継承―自治体によるコレクション管理の現状と今後の展望―」法政大学資格課程主催シンポジウム　26.1.24
- 久保田裕道「獅子舞のカタチとココロ～神奈川の獅子舞を考える～」相模民俗学会　25.5.18
- 久保田裕道「Creative Utilization of Folk Performing Arts in Japan」2025 East Asia Intangible Cultural Heritage International Forum　25.11.7

ほか６件

刊行物

- 『民俗文化財をネットワークで守り、活かす』(第20回無形民俗文化財研究協議会報告書)　26.3



琉瑤瑠獅子神楽（北海道根室市）

無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集 (ム05)

研究組織　石村智、前原恵美、久保田裕道（以上、無形文化遺産部）、二神葉子（文化財情報資料部）、宮田繁幸、神野知恵（以上、客員研究員）

目　　的　無形文化遺産保護に関わる国際的動向の情報収集を図り、アジアを中心とする海外の研究機関等との研究交流を実施し、国内外の無形文化遺産保護に貢献する。

成　　果

1．大韓民国国家遺産庁無形遺産局との研究交流

7年度の大韓民国国家遺産庁無形遺産局との研究交流としては、7月14日～8月2日にかけて来訪研究員の曹善映氏を受け入れ、日本の伝統的酒造りに関する共同研究を実施した。また10月11日～25日にかけて前原を韓国に派遣し、韓国の伝統芸能の普及に関する共同研究を実施した。

2．無形文化遺産の国際的な動向に関する調査研究

ユネスコ無形文化遺産条約第20回政府間委員会（12月8日～13日、インド）に2人のスタッフ（石村・二神）が現地参加し、ユネスコ無形文化遺産条約に関する情報収集を行った。なお、本調査の成果は『無形文化遺産研究報告』第20号において報告した。

3．アジア太平洋無形文化遺産研究センター（IRCI）への協力

IRCIへの協力として、国際シンポジウム「Research on Safeguarding Intangible Cultural Heritage in Small Island Developing Countries」（8年2月5日～6日、東京国立博物館）に石村が出席した。

4．その他

9月17日～18日にソウル（大韓民国）で開催された国際会議「2025 World Forum for Intangible Cultural Heritage: Exploring Economic Activities of Intangible Cultural Heritage」（主催：大韓民国国家遺産庁・アジア太平洋無形文化遺産国際情報ネットワークセンター（ICHCAP））にて石村が研究発表を行った。また8年3月7日～9日に京都で開催された国際会議「Asia-Pacific Regional Conference and Capacity-Building Workshop on World Heritage Cities and Climate Action」（主催：ユネスコ・立命館大学・東京文化財研究所）にて石村が研究発表を行った。

論　　文

- 二神葉子：「無形文化遺産の保護に関する第20回政府間委員会会合における議論の概要と今後の課題」『無形文化遺産研究報告』20　pp.1-31　26.3

発　　表

- Tomo Ishimura：「Protecting while promoting: Two designation systems for traditional crafts in Japan」国際会議「2025 World Forum for Intangible Cultural Heritage」口頭発表（ソウル）　25.9.17
- Tomo Ishimura：「Climate change Impact on Intangible Cultural Heritage」国際会議「Asia-Pacific Regional Conference and Capacity-Building Workshop on World Heritage Cities and Climate Action」口頭発表（京都）　26.3.7



大韓民国国家遺産庁無形遺産局との研究交流における酒蔵での聞き取り調査（奈良県御所市）

文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策〔ホ01〕

研究組織　佐藤嘉則、島田潤、轟丈瑠、仁木真奈美、小野寺裕子、山田紀代美、犬塚将英、早川典子、朽津信明（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、藤井義久、北原博幸（以上、客員研究員）、間渕創（保存科学研究センター併任、文化財活用センター）

目　　的　文化財の生物劣化現象は、自然災害あるいは日常の管理において保存環境が悪化すると起こるが、それを早期に発見して、機序を解明し対策を講じることは極めて重要である。本研究では文化財建造物、古墳内環境など生物制御が困難な空間にある文化財を対象として、分子生物学的手法を用いた生物劣化機構の解明を行うとともに早期発見のための診断技術を確立し、環境低負荷型の処置方法について研究を行うことを目的とする。

成　　果

1．日本初記録の文化財害虫ニュウハクシミについて、令和6年度に引き続き国内における分布域の調査を実施した。また、本種を簡易迅速に同定するため、分子生物学的解析手法の確立を進めた。
2．ニュウハクシミの幼虫が食糞によって生存率が上がることを実験的に確認し、成果を国内学会で発表した。また、ニュウハクシミの単為生殖が起こるメカニズム解明に向けた基礎研究を茨城大学と共同で実施した。
3．国内で使用されていた主要なガス燻蒸剤の販売停止を受けて、水損紙資料を対象とした湿熱殺菌処理法の開発を目指し、模擬水損紙資料を用いて湿熱殺菌処理を試行し基礎情報を得た。
4．書籍等の紙資料を殺菌できる湿度制御温風殺菌処理法の基礎試験として、関係機関と連携を取りながら殺菌効果の評価試験を実施した。
5．日光の歴史的木造建造物において、過去に湿度制御温風殺虫処理が行われた建造物の経年変化や害虫再発の現状調査を行い、その成果を論文にまとめた。
6．三内丸山遺跡の土遺構の表面に出現するキノコの発生機序について、微生物生態学的な解析を進め、樹木と外生菌根菌によるキノコ発生機序のモデルを提唱した。

論　　文

- 佐藤嘉則ほか：「陸前高田市立博物館で津波被災した植物材料の民俗資料の菌類叢解析」『文化財保存修復学会誌』69　pp.39-50　26.3
- 轟丈瑠ほか：「三内丸山遺跡「子どもの墓」土遺構で発生したキノコの同定と真菌叢解析」『保存科学』65　pp.1-12　26.3

報　　告

- 島田潤ほか：「湿度制御温風処理後の建造物におけるシバンムシ類の経時的な生息調査」『保存科学』65　pp.139-146　26.3

ほか4件

発　　表

- 小野寺裕子ほか：「水浸させた紙試料の湿熱殺菌処理における物性変化」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 島田潤ほか：「新たな文化財害虫と考えられるヒメハキリバチによる建造物被害」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 轟丈瑠ほか：「ATP測定法を用いた収蔵環境の清浄度評価と維持管理基準の提案」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 江原愛菜ほか：「ニュウハクシミの若齢期における生存率と食糞の関係」日本文化財科学会第42回大会　25.7.5
- 渡辺祐基ほか：「ニュウハクシミの接触走性の評価」日本文化財科学会第42回大会　25.7.5

ほか2件

刊行物

- 『第5期中期計画 令和3年度～令和7年度 文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策』研究成果報告書　26.3
- 『フォーラム　ポスト・エキヒュームSの資料保存を考える』報告書　26.3



日光の歴史的木造建造物における害虫生息調査の様子

文化財の保存環境にかかる調査研究 (ホ02)

研究組織　秋山純子、水谷悦子、関根遥、佐野恵子（以上、保存科学研究センター）、伊庭千恵美（客員研究員）、由井和子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）、吉田直人、間渕創（以上、保存科学研究センター併任、文化財活用センター）

目　　的　**博物館・美術館などの展示・収蔵施設における文化財の劣化抑制を目的として、収蔵および展示空間に対し、文化財に影響を与える汚染物質の軽減と温湿度変化の影響を検討するためのデータを収集する。また、被災文化財等の一時保管場所を想定した保存環境について、環境整備に必要な温湿度・空気質等の状況を把握し、環境改善のための調査研究を行うことを目的とする。**

成　　果

1．令和６年度に実施した建物及び空調設備、運用についての「博物館・美術館施設の温湿度管理に関するアンケート」の基本集計結果を報告書にまとめた。展示室・収蔵庫の空調運用と保存環境管理の状況に関する分析を行い、一部をまとめ『保存科学』65号に掲載した。

2．「美術館・博物館のための空気清浄化の手引き」の内容の更新に向け、収蔵庫メーカーや展示ケースメーカー数社にヒアリングを実施した。また、空気質の測定方法の内容変更のため、簡易実験を行い、適切な測定方法を検証した。

3．一般の倉庫を博物館の仮収蔵庫として改修した施設において、空調機にかかる消費電力と温湿度データの測定を継続して行い、エアコンの設定温度を季節変動に合わせ適切に設定変更することにより、消費電力削減につながることを確認した。

4．空調を間欠運転している美術館について、夏季と冬季の設定温度を変動させることで収蔵庫の温湿度の安定にどのような影響を与えるか検証した。１年間の空調運転において、設定温度を上下させるタイミングを見極めることで、間欠運転をしてもより安定した環境を作れることが分かった。

5．岩窟内に建てられた木造建造物を対象に、湿害リスク抑制を目的としたパッシブ型環境制御の効果検証を行い、周囲地盤の湿潤環境に大きく影響を受ける文化財の保存環境管理の検討に資する知見を得た。

6．組積造建造物の損傷リスクの診断に基づく適切な保存方法の提案に向けて、片側開放型H-NMRの現場試行を初めて実施し、壁面の水分状態を非破壊で診断する技術としての有効性評価に資する基礎データを取得した（写真）。

7．保存環境の現状と改善に向けた講習会を文化財活用センターと共催で実施した（10月20日（月）「第10回保存環境調査・管理に関する講習会―調湿材のしくみ―」、8年3月9日（月）「第11回保存環境調査・管理に関する講習会ーニュウハクシミの現状と対策についてー」）。

論　　文

- 水谷悦子ほか３名：「岩窟内環境下の木造建造物の湿害リスク抑制を目的とした日常管理型パッシブ環境制御の実践と課題」『保存科学』65号　pp.13-30　26.3
- 水谷悦子ほか２名：「博物館・美術館等の施設・保存環境管理に関する全国調査―実施経緯と基本集計から見た動向」『保存科学』65号　pp.157-174　26.3

発　　表

- 水谷悦子ほか３名：「博物館・美術館等のアンケート調査による施設管理と改修の動向分析」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 秋山純子ほか３名：「アンケート調査から見えた全国の博物館・美術館等の温湿度管理の現状と課題」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15

ほか８件

刊行物

- 『博物館・美術館等の文化財展示収蔵施設の温湿度環境管理に関する総合調査報告書　【基本集計編】』　26.3
- 『文化財の保存環境にかかる調査研究 令和３年度～令和７年度 研究成果報告書』　26.3
- 『美術館・博物館のための空気清浄化の手引き（平成31年３月）増補版』　26.3



片側開放型 H-NMR の現場試行の様子

文化財の材質・構造・状態調査に関する研究 (ホ03)

研究組織　西田典由、犬塚将英、紀芝蓮、片渕奈美香、寺島海、手島菜摘（以上、保存科学研究センター）、早川泰弘（特任研究員）、岡田健、古田嶋智子（以上、客員研究員）

目　　的　蛍光Ｘ線分析装置や反射分光分析装置等の各種分析装置を併用して、文化財の材質・構造・劣化状態に関する調査研究を行う。日本絵画における顔料の変遷等の研究を進めるとともに、美術工芸品等に用いられている鉛や青銅の腐食に関する調査研究及びその対策に関する検討を行う。

成　　果

1．可搬型分析装置を用いたその場分析
- 可搬型蛍光Ｘ線分析装置・ハイパースペクトルカメラ・ラマン分光分析装置を用いて、絵画等に用いられている彩色材料の調査を実施した。
- 蛍光Ｘ線分析装置による材料調査として、刀剣や古墳壁画の材質調査を実施してその特徴を明らかにした。
- ハイパースペクトルカメラによる調査として、絵画や壁画のような彩色材料の分析を行った。従来の点的な分析とは異なる面的な分析が可能となった。
- ラマン分光分析装置による材料調査として、壁画汚染物質の分析を行ったが、現場での調査では今のところよい結果が得られておらず改善が必要である。

2．金属の腐食と保存環境との関係
- 金属の劣化要因となる化学物質の発生源を調べるための調査手法の開発を行い、開発を行った手法を用いて収蔵庫等で現地調査を実施した。

3．その他の分析調査
- 屏風や民俗資料等の、レントゲン撮影による内部構造の観察を行った。
- ラマン分光・赤外分光・熱分解GC/MSなど、従来あまり用いてこなかった装置を組み合わせて複合的な分析を実施した。

発　　表

- Chih lien CHI, Junko AKIYAMA, Kai TERASHIMA, Noriyoshi NISHIDA, Tsuyoshi CHIBA, Masahide INUZUKA, Keiko Takagi：Analysis of Green Coloring Materials in the Illustrated Natural History Books owned by Takamatsu Matsudaira family Using Hyperspectral Imaging, TECHNART 2025 - International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation, March 8, 2025
- 紀芝蓮、寺島海、犬塚将英：「ハイパースペクトルカメラを用いた可視域から近赤外域における彩色材料の反射分光分析」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.14
- 西田典由、久利希、森田健介、千葉毅、芳賀文絵、紀芝蓮、寺島海、犬塚将英：「拡散反射型赤外分光分析によるトレーシングクロスの材質分析」日本文化財科学会第42回大会　25.7.5
- 寺島海、秋山純子、紀芝蓮、西田典由、犬塚将英、髙木敬子：「高松松平家所蔵博物図譜に用いられたコバルトガラス顔料（スマルト・花紺青）と青色の用法に関する一考察」日本文化財科学会第42回大会　25.7.5



ハイパースペクトルカメラによる調査風景

屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究 (ホ04)

研究組織　朽津信明、石塚麻奈、鈴木琴那（以上、保存科学研究センター）、前川佳文（文化遺産国際協力センター）

目　　的　文化財という範疇には、天然記念物のような自然史資料の概念も含まれており、また名勝や文化的景観など、人文系の有形文化財だけでなく様々なカテゴリーの文化財について、適切な保存修復計画が求められている。本プロジェクトでは、それら多種多様な屋外文化財の価値の本質を理解した上で、その外見だけでなく価値が十分に継承されていくような形での保存方法、そして修復計画を構築していくことを目的とした調査研究を行う。

成　　果

屋外に所在する各種文化財の劣化状況、保存環境、保存対策について、以下の成果を得た。

(1) 大分市の岩屋寺石仏などの屋外石造物を計測して現在の保存状態を正確に記録し（写真）、過去に撮影されていた写真に基づき得られた過去の形状と比較することで、覆屋や樹脂含侵処理などの保存対策の効果について議論を構築した。

(2) 通常時には実体が存在せず、行事の際に組み立てられて一時的に出現する指定文化財の保存修復事例について調査を行い、主として有形民俗文化財や有形文化財の守られるべき価値のあり方とその実現の仕方について分類を行った。

(3) 断層露頭や化石産出露頭における天然記念物の保存の実情について調査し、人文系の屋外文化財保存の場合との考え方の違いについて検証した。

(4) 穴水町の重要文化財・明泉寺五重塔の石材を計測し、金沢市内に別に伝えられていた石材と比較検証し、もともと二基存在した明泉寺五重塔が現状に至るまでの経緯について検証してそれぞれの石材の価値を明らかにした。



岩屋寺石仏における計測風景

論　文

- 朽津信明、鈴木琴那：「三次元計測に基づく明泉寺五重塔の石材伝承経緯の検討」『保存科学』65　pp.129-138　26.3
- 朽津信明：「文化財保存のための化学」『化学と工業』73　pp.316-319　25.8

発　表

- 朽津信明：「秦野市・鶴巻下部大山灯籠行事の「覆屋」について」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 朽津信明、鈴木琴那：「金沢市内に伝わる石材と穴水町・明泉寺五重塔石材との形状比較」日本文化財科学会第42回大会　25.7.5-6

刊行物

- 『屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究』　26.3

伝統材料・技法に関する複合的調査研究 (ホ05(1))

研究組織　早川典子、倉島玲央、西田典由、一宮八重(以上、保存科学研究センター)ほか

目　　的　美術工芸品や建造物等文化財の修復に貢献するため、修復材料・技法についての科学的調査を行い、その有効性についての評価を行う。文化財の構成材料や修復に関連し、伝統的材料・用具とそれらを使用する技法についての調査を行い、科学的評価を踏まえた記録を作成し、文化資産の客観的な情報集積を目的とする。

成　　果

伝統材料・技法に関する複合的調査研究としては、南蛮漆器に関連する加飾技法や使用材料に関する網羅的な調査研究、画絹の組成に関する研究、東洋絵画の補彩に使用される棒絵具の組成の解明、紫根・紅花・青花など伝統染料に関する検討、小麦デンプン糊の保管方法による差異に関する研究を遂行した。

また、文化庁の行う美術工芸品修理に用いる用具・材料の調査に協力し、今後の生産確保が非常に難しいとされる材料や道具について、科学的な評価と安全な保存方法の検討を行っている。7年度は、引き続き紙の原材料のうち、ネリに使用されるノリウツギやトロロアオイなどに関する科学分析と現地調査を行ったほか、楮・ノリウツギに関しては細胞学的な調査と栽培実地調査も遂行した。



棒絵具（藍）の遠心分離試験　製品比較

論　文

- 早川典子ほか：「「文化財の匠プロジェクト」現状報告～保護・育成事業の成果③　科学調査　最近の成果」『月刊文化財』748号　pp.17 -20　26.1
- 京都絵美、早川典子ほか：「製糸技術の異なる画絹の再現検証ー生糸の抱合を中心にー」『文化財保存修復学会誌』69号　pp.1-17　26.3
- 宇高健太郎：「若冲の三大超絶技巧」『和樂』218　pp.156-159　24.9
- KOBAYASHI Koji, KURASHIMA Reo et al.: Scientific Analysis of Two Christian Lecterns in Portugal: Investigation of Surface Decoration 『保存科学』65　pp.99-128　26.3

発　　表

- 北野信彦、倉島玲央ほか：「近世社寺文化財建造物における塗装彩色材料の使い分けに関する研究」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 早川典子ほか：「保管状態の異なる小麦デンプンを原料とした糊の物性の差異について」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 西田典由ほか：「トロロアオイとノリウツギの違いー紙漉きに用いるネリの粘弾性評価」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15

備　　考

本業務の一部は文化庁からの委託補助金事業「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」と連携して遂行された。

文化財修復のための技術と材料に関する調査研究 〔ホ05 (2)〕

研究組織　早川典子、倉島玲央、西田典由、國方沙希、一宮八重（以上、保存科学研究センター）ほか

目　　的　美術工芸品や建造物等文化財の修復に貢献するため、修復材料・技法についての科学的調査を行い、その有効性についての評価を行う。文化財の構成材料や修復に関連し、伝統的材料・用具とそれらを使用する技法についての調査を行い、科学的評価を踏まえた記録を作成し、文化資産の客観的な情報集積を目的とする。

成　　果

◯研究成果

6年度に引き続き、漆・伝統的油性塗料についての旧材料分析や希釈剤に関する研究、染織品や漆塗料に使用された微量の鉄の検知方法の検討、臼杵磨崖仏の石材表面再接着材料評価、ゲルを使用した有機溶媒クリーニング方法の開発、酵素を利用したカビ痕の除去方法の適用など、6年度までの研究をさらに発展させた。

◯研修事業

1.「文化財修理技術者のための科学知識基礎研修」（9月30日～10月2日）

中期計画最終年度となる令和7年度も開催し、5年連続15名程度の参加者への研修を行った。参加者アンケートでは全員が「役立った」としており、今後取り上げる内容についての期待も寄せられた。

2.「文化財保存修復に関するワークショップ―額縁の歴史・技法と保存修復について―」（10月29日～31日）

参加者全員から「とても満足」もしくは「やや満足」の評価が寄せられた。今回は西洋絵画の専門家の参加が多く、アートリサーチセンターとの連携が広く認知されてきた様子が確認された。



文化財修理技術者のための科学知識基礎研修　実習風景

論　　文

- 倉島玲央ほか：「含浸強化処置に用いる漆・有機溶媒の選択が作業性と塗膜の表面状態に与える影響」『保存科学』65　pp.71-82　26.3
- 倉島玲央：「チェンマイの漆とラックについて」『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究 (3) －日本製漆工品と漆工材料調査－』東京文化財研究所　pp.23-26　26.3

発　　表

- 秋山花子ほか：「有機溶媒高含有ゲルを利用した文化財クリーニング方法の検討」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15
- 倉島玲央ほか：「バソフェナントロリン試験紙を用いた黒漆の判別」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.14
- 小谷野匡子、早川典子ほか：「溶菌酵素入り寒天ゲルを使用した日本画のしみ抜き」文化財保存修復学会第47回大会、25.6.15
- 佐藤萌、早川典子ほか：「江戸時代の黒染め染織品に使用された鉄媒染の同定」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.15

備　　考

本業務のうち、「文化財保存修復に関するワークショップ―額縁の歴史・技法と保存修復について―」はアートリサーチセンターと共同主催し、かつ、文化財保護・芸術助成財団からの外国人研究者招致の助成も使用して開催された。

多様な文化財の修復技術に関する調査研究〔ホ06〕

研究組織　犬塚将英、芳賀文絵（以上、保存科学研究センター）、千葉毅（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）、苅田重賀（客員研究員）

目　　的　**災害によって被災した文化財資料の応急処置または保存修復処置に係る技術や方法に関する調査研究を行う。近代以降に使われるようになった新しい保存修復技術や方法に関する調査研究を行う。様々な技術や方法を、保存修復処置を行う現場に効果的に適用するための研究を行う。**

成　　果

1．被災文化財の保存修復技術に関する調査・研究

- 災害時における一時保管施設の活用と文化財の保存状態について継続的な調査を行った。(廃校を利用した収蔵施設の環境調査)
- 文化財防災センターと連携し、水損紙資料を対象に、資料状態、揮発成分及び処置環境の調査を順調に行うことができた。さらに、真空凍結乾燥法を含む被災資料の修復手法及び揮発成分調査手法について検討も行った。

2．近代文化遺産の保存について

- 航空機関連文化財を中心とした近代文化遺産の保存修復に関する調査研究を行った。(航空科学博物館所蔵YS-11試作一号機、南九州市所蔵陸軍四式戦闘機「疾風(1446号機)」)
- 地方自治体等が組織する保存・修理に関する委員会等に参画し、近代文化遺産・被災文化財の保存及び活用に関する調査・助言を行った。
- 東北大学金属材料研究所との共同研究により、金属材料の調査及び金属試料の脱塩方法に関する検証を行った。

本中期5ヶ年の研究成果を取りまとめて、『文化財の修復技術に関する調査研究 令和3年度～令和7年度 研究成果報告書』を刊行した。

論　　文

- 千葉毅：「オランダにおける国際研修「困難な状況下にある文化遺産管理のためのリーダーシップ研修」に参加して」『保存科学』65　pp.175-189　26.3

発　　表

- 芳賀文絵ほか：「水害による被災紙資料の揮発成分と臭気対策について」 日本文化財科学会第42回大会　25.7.5-6
- 千葉毅、芳賀文絵ほか：「南九州市所在のアジア・太平洋戦争期コンクリート製トーチカの調査」 日本文化財科学会第42回大会　25.7.5-6
- 芳賀文絵：「水害により被害を受けた文化財からの揮発成分とその影響」 2026年度室内環境学会学術大会　25.12.10-11
- 秋山花子、千葉毅:「히드록시프로필 셀룰로오스 겔 시트를 이용한 토기 압흔 복제본 채취를 위한 이형제 제거 시도/ ヒドロキシプロピルセルロースゲルシートを用いた土器圧痕レプリカ採取のための離型剤除去の試み」韓国文化遺産保存科学会第62回秋季学術大会　25.11.28-29

刊行物

- 『文化財の修復技術に関する調査研究 令和3年度～令和7年度 研究成果報告書』　26.3



陸軍四式戦闘機「疾風（1446号機）」調査風景

高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究（ホ）

研究組織　犬塚将英、朽津信明、秋山純子、早川典子、佐藤嘉則、芳賀文絵、水谷悦子、倉島玲央、石塚麻奈、島田潤、轟丈瑠、西田典由、紀芝蓮、片渕奈美香（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、宇髙健太郎（以上、客員研究員）、千葉毅（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目　　的　文化庁が行う高松塚古墳・キトラ古墳の壁画の調査及び保存・活用に関して技術的に協力する。

成　　果

〇高松塚古墳壁画に関しては、修理施設内での歩行性害虫調査、浮遊菌・付着菌・落下菌調査に加え、浮遊粒子数測定、ATP測定と空気質調査を行った。また、温湿度推移のモニタリングを継続し、安全な保存環境の維持・改善に努めた。

〇修復後のメンテナンス作業に関連する調査研究としては、漆喰部分・補填箇所について、状態変化の有無に関する確認を定期的に行った。また、修復事業関連の資料アーカイブの作成を６年度に引き続き継続して行った。

〇奈良文化財研究所の関係者と連携し、可視分光分析測定箇所のデータ数を増加し、データ精度を高めて蛍光X線分析のみでは明らかにできなかった色材の存在可能性も指摘するに至った。

○キトラ古墳壁画に関しては、「四神の館」における保存及び公開の際の環境管理について調査協力を行った。集中メンテナンスや「辰」「巳」「申」が存在すると推定される泥に覆われている漆喰片についての保存方法の協議を行った。また、「辰」「巳」「申」の２次元元素マッピングによる調査から得られたデータの解析と協議を行った。

また、７年度は中国の敦煌研究院、北京の中国国家博物館、陝西考古博物館において、研究交流と現地調査を行い、今後の新施設での環境運用に関する知見を得た。

発　　表

- Masahide Inuzuka:「Conservation and Utilization of Mural Paintings of Takamatsuzuka and Kitora Tumulus」International Symposium “Preserving the Past, Creating the Future: Utilization Strategies for Conservation Technique and Digital Content in Mural Tombs”　25.8.29
- Masahide Inuzuka:「Scientific Analysis of Cultural Heritage using Non-invasive Techniques」韓国国立古宮博物館特別展“RE:BORN, Conservation Science Inheriting Time”における特別講演　25.12.18
- 芳賀文絵：「博物館施設における空気質調査と保存環境管理の試み」中国国家博物館・東京文化財研究所学術交流会　25.12.14
- 水谷悦子：「展示収蔵施設の持続可能な保存環境管理」中国国家博物館・東京文化財研究所学術交流会　25.12.14
- 島田潤：「日本の文化財の生物被害対策の現状について」中国国家博物館・東京文化財研究所学術交流会　25.12.14

備　　考　本事業は文化庁より委託された。



修理施設内での微生物調査

文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信 〔コ01〕

研究組織　金井健、松浦一之介、柄澤真子、石田智香子（以上、文化遺産国際協力センター）、境野飛鳥（客員研究員）

目　　的　**海外の文化遺産に関する情報の収集、諸外国の文化遺産保護施策等に関する調査を行う。国際情勢に鑑みつつ優先度の高い国の文化遺産保護関連の法令について条文を和訳し、法令集として刊行する。また世界遺産委員会などユネスコ等が行う主要な国際会合へ出席して情報の収集を行うとともに、文化遺産の保護をめぐる今日的な課題等に関する調査研究を行い、その成果をインターネットなど多様な媒体を通じて国内外に情報発信する。**

成　　果

1．文化遺産保護に関する情報収集及び発信のため以下の国際会議及び研修に参加した。
- 5月6～9日：ユネスコ「アフリカのオーセンティシティに関する国際会議」（オンライン）
- 6月6日：イタリア文化会館「ヴェニス憲章60周年―人類の遺産保存のために―」（都内）
- 6月16日：奈良文化財研究所「これからの発掘調査と保存公開を考える」（オンライン）
- 7月4～12日：ユネスコ第47回世界遺産委員会（フランス・パリ）
- 9月19～10月2日：ACCU 奈良・文化遺産の保護に資する集団研修2025「木造建造物の保存と修復」（奈良県奈良市及びオンライン）
- 11月25日：日本イコモス国内委員会憲章小委員会（オンライン）
- 12月17～18日：ACCU奈良・国際会議「考古遺跡の整備とオーセンティシティ―“復元の是非”を超えて：アジアの多様な実践と論理―」（奈良県奈良市）
- 1月22日：日本イコモス第4小委員会（世界遺産）研究会（オンライン）
- 3月7～9日：ユネスコ「アジア太平洋地域世界遺産都市と気候変動対策に関する国際会議」（京都府京都市）

2．スペイン国立文化遺産研究所の協力のもとでスペイン王国の文化遺産保護関連法令のうち無形遺産法及び各州法の収集と翻訳を行い、昨年度対象の歴史遺産法に概説を加えて『各国の文化財保護法令シリーズ［30］スペイン』を刊行した。

3．例年行っている世界遺産研究協議会は「越境する「遺産」―世界遺産とつながる人々の生活、信仰、環境―」と題して開催し、世界遺産における遺産の価値の考え方や保護の方法、昨今の世界遺産を取り巻く動向等について関係自治体等との情報共有を図った。（12月22日）

　奈良文化財研究所都城発掘調査部の研究プロジェクトに協力し、イタリアの考古遺跡における発掘調査計画や保存整備方針に関して関係機関への聞き取り及び事例調査を行った。（現地派遣：2月21日～3月1日）

報　　告
- 金井健：「ノートルダム大聖堂の記録と再建」文化遺産の世界ウェブサイトレポート　25.12
- 金井健、佐藤桂：「特集：イコモス木の委員会と伊藤延男先生　伊藤延男資料のアーカイビング」イコモスインフォメーションweb2025年秋号　25.9

発　　表
- 金井健：「Outline of the Current Legal Framework for the Restoration of Cultural Properties in Japan」ACCU奈良・文化遺産の保護に資する集団研修　25.9.20
- 松浦一之介：「世界遺産「アグリジェントの考古地区」とシチリア州考古公園システム」世界遺産研究協議会　25.12.22

刊行物
- 『各国の文化財保護法令シリーズ［30］スペイン』　26.3
- 『令和7年度世界遺産研究協議会 越境する「遺産」―世界遺産とつながる人々の生活、信仰、環境―』　26.3



ユネスコ第47回世界遺産委員会（パリ・ユネスコ本部）：本会議で意見を述べる日本政府代表団（座席は左下の白丸部分）

アジア諸国等文化遺産保存修復協力 〔コ02〕

研究組織　安倍雅史、友田正彦、金井健、淺田なつみ、山田綾乃、黒岩千尋、柴田みな、長尾琢磨、平田薫（以上、文化遺産国際協力センター）

目　　的　**東南アジア、西アジアおよびその周辺地域における文化遺産の保存活用に関する調査研究の実施並びに当該地域で行われる文化遺産の保存修復事業への協力を通じて、我が国が有する文化遺産保護に関する技術移転を図るとともに、この分野での国際協力を推進する。**

成　　果

1．カンボジア　アンコール・タネイ寺院遺跡保存整備事業に対する支援等
- アンコール・シエムレアプ地域保存整備機構（APSARA）と共同で中央伽藍前十字テラス修復に向けた予備調査を実施（6月2日～21日、11月17日～12月3日）、「十字テラス修復のための実践ワークショップ」開催（1月21～22日、参加者20名）、十字テラス周囲発掘調査、遺物整理を実施（1月22日～2月4日）。
- アンコール遺跡保存国際調整委員会（ICC-Angkor/Sambor Prei Kuk）第31回本会合及び第40回技術会合への参加（6月19日～20日）。

2．ネパールの歴史的集落の保全に関する支援
- ネパール・キルティプル市との協働による、キルティプル市旧市街内の歴史的民家の保全に向けた調査および専門家ワークショップの実施、ICOMOS Scientific Symposium への参加（5月23日～31日、10月11日～26日）、オンラインワークショップの実施（8月18日）。

3．バーレーンおよび湾岸諸国の文化遺産保護に対する協力
- バーレーン文化古物局と講演会・体験型イベント「バーレーンの歴史と文化」を共催（4月20日、参加者156名）。ディルムン文明期の王墓であるアアリ王墓群Q号墓の3次元計測を実施（2月10日～12日）。
- サウジアラビアで開催された国際会議Digital Heritage Conferenceでの発表（12月7日～12日）。
- UAE で開催された国際学会Seminar for Arabian Studiesでバーレーン事業に関して発表（12月10日～16日）。

4．日本の専門家向けの研修事業
- 日本の専門家を対象に「海外調査のための3次元計測実習」を実施（11月15日、16日、参加者25名）

5．シンポジウムの開催および協力
- エジプト、チェコからエジプト考古学の専門家を招聘し、「考古学と国際貢献：エジプト考古学と国際協力の軌跡」を開催（5月10日、参加者104名）。
- 文化財分野におけるXR活用をテーマとしたイベント「XRミートアップ京都」への参加（9月26日）。
- イラクから考古学・文化遺産保護の専門家3名を招聘し（11月22日～12月1日）、メソポタミア考古学教育研究所及び京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センターとの共催により東京文化財研究所にてシンポジウム「地域社会と文化遺産―南イラク（シュメール）の未来像を考える―」を開催（11月24日、参加者56名）、京都芸術大学にて「地域社会と文化遺産―京都・奈良の事例をふまえて―」を実施（11月30日、参加者43名）。
- 日本西アジア考古学会とセミナー「ペルシア湾岸地域の遺跡を掘る」を共催（11月8日、参加者90名）。
- 日本西アジア考古学会と「第33回西アジア発掘調査報告会」を共催（3月21日、22日）。
- 東京国立博物館で開催された「XRミートアップin東博」に協力、東文研作成のデジタル・コンテンツを出展（3月28日）。

発　　表
- 長尾琢磨、山田綾乃、安倍雅史：「バハレーンにおけるイスラーム墓碑の3次元計測調査（第3次）」第30回日本西アジア考古学会　25.6.22
- 長尾琢磨、山田綾乃、安倍雅史：「3D Measurements of Historical Islamic Tombstones in Bahrain (2023-2025)」57th Seminar for Arabian Studies 25.12.12

刊行物
- “Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor -Progress Report of 2024-” APSARA/TOBUNKEN　26.3
- 『アジア諸国等文化遺産保存修復協力　令和7年度成果報告書』東京文化財研究所　26.3
- “Survey report of Pukhusi Paramaana Chhen” Kirtipur Municipality/TOBUNKEN　26.3

保存修復技術の国際的応用に関する研究 〔コ03〕

研究組織　加藤雅人、前川佳文（以上、文化遺産国際協力センター）、犬塚将英、朽津信明（以上、保存科学研究センター）

目　　的　国内の専門家および諸外国の研究機関とネットワークを構築し、壁画をはじめとする不動産文化財を中心に、保存修復技術の最新動向を踏まえた基礎的・基盤的研究を行うことを目的とする。また、得られた成果は文化遺産国際協働の場で応用するとともに、国内外の関連領域における保存修復技術発展への貢献を目指す。

成　　果

1．トルコ共和国において文化財保存修復に係る共同研究の確立を目指した事前調査を実施した。
- 6月21日～7月15日の期間に現地派遣を行い、トルコの文化財保存に関わる主要機関と協力して、カッパドキア所在のアルハンゲロス・ミハイル聖堂（ケシュリック修道院）にて、保存修復方法の確立に向けた実地共同研究を実施した。

2．スタッコ装飾及び塑像に関する研究調査を実施した。
- 9月9日～12日の期間にソンマ・ヴェスヴィアーナ（イタリア）への現地派遣を行い、東京大学が発掘調査を進めるローマ時代の遺跡において、残存するスタッコ装飾の技法や材料を対象にした調査を実施した。
- 9月8日～27日の期間にシチリア島（イタリア）への現地派遣を行い、ギリシャの植民地時代からローマ時代にかけて築かれた遺跡を対象にしたスタッコ装飾に係る調査研究を実施した。また、今後の研究活動への協力について、現地の関係機関と協議した。
- 11月1日、11月8日～12日及び2月25日～28日、3月9日～11日の期間にフィレンツェ（イタリア）への現地派遣を行い、フィレンツェ大聖堂に所蔵される塑像（16世紀）について、大聖堂付属博物館及び美術監督局協力のもと、技法材料や保存状態に係る研究調査を実施した。

3．石造文化財の保存修復方法の改善を目的とした調査研究を実施した。
- 5月14日～15日の期間に平戸市（長崎県）への現地派遣を行い、過去に修理が行われた石造文化財を対象にした調査研究を実施した。
- 11月8日～12日の期間にフィレンツェ（イタリア）への現地派遣を行い、国立修復研究所や国家認定文化財修復士協力のもと、石造文化財の保存修復材料について実験研究を実施した。

4．クロアチアにおいて、壁画の制作技法や保存状態に関するデータアーカイブの作成に向けたシミュレーションを実施した。
- 11月2日～8日の期間にイストリア地方（クロアチア）への現地派遣を行い、クロアチア文化メディア省美術監督局、イストリア歴史海事博物館、ザグレブ大学と協力し、教会壁画を対象にした壁画保存状態チェックシートの導入実験を実施した。

発　　表
- 前川佳文：「文化財保存学に基づく鏝絵の保存修復」文化財保存修復学会第47回大会　25.6.14
- Yoshifumi Maekawa, et al.: “Conservation and Restoration of Wall Paintings at the Church of Saint Michael the Archangel, Keşlik Monastery”, 2025 Araştırma Sonuçları Caprolanda Oturumu, 25.7.12
- Yoshifumi Maekawa: “Ricerca e studio sulla conservazione e il restauro delle decorazioni in stucco e dei beni culturali in pietra”, Comitato di Valutazione del Piano di Ricerca 2025 del Parco Archeologico di Selinunte, 25.9.14
- Yoshifumi Maekawa, et al.: “Development of a Wall Painting Condition Assessment System Using Data Sheets”, Discussion Meeting on Wall Painting Conservation in the Istrian Peninsula, 25.11.7

刊行物
- 『Church of the Saint Michael the Arcangel, Keşlik Monastery, Cappadocia Joint Research Report on the Conservation and Restoration of Wall Paintings, 2025』 26.3

在外日本古美術品保存修復協力事業 〔コ04〕

研究組織　加藤雅人、武瀟瀟、石渡美鈴（以上、文化遺産国際協力センター）、江村知子（文化財情報資料部）、岡崎卓巳（研究支援推進部）、大河原典子、杉山恵助（以上、客員研究員）

目　　的　**日本の文化財は、欧米を中心に海外でも多く所蔵されている。しかし、日本文化財の保存修復専門家は海外にはほとんどおらず、多くの博物館などで適切な処置に窮している。そこで、本事業では海外で所蔵されている日本文化財の保存修復に関する助言等の協力を行う。また、本格的な修復が必要な絵画作品に関しては日本で修復して返還する。さらに、日本とは異なる条件にある海外所在作品に関して、その保存修復方法の研究を行い、その成果を公開、共有する。**

成　　果

日本絵画の保存修復に関する国際協力事業を実施した。新規に１点の作品を輸入して修復を開始したほか、海外の博物館２館において作品調査を行い、保存修復に関する助言を行った。さらに、本事業で修理した作品について修理報告書の作成・編集を行い、刊行した。

- 作品修復

　リートベルク美術館（スイス・チューリッヒ）所蔵《御幸図屏風》（紙本着色、８曲１隻）を輸入し、修復作業を開始した。あわせて、赤外線撮影および蛍光Ｘ線分析等の科学調査を実施した。また、所蔵館学芸員が来日して修理状況を視察し、進捗状況の報告および今後の修復方針について確認を行った。

　また次期修復作品としてリートベルク美術館（スイス）の作品１件を決定し、合意書の締結を行った。さらに、次年度のこの作品の輸送の調整等を行った。

- 作品調査

　ハンブルク美術工芸美術館（ドイツ・ハンブルク、５月26日～30日）およびカルース博物館（メキシコ・メキシコシティ、３月10～13日）において作品調査を実施するとともに、現地において助言を行った。

- 資料整理

　本事業は約30年の歴史を有し、所蔵館との交渉を含む書簡や現地調査資料など多くの関連資料を蓄積しているが、索引整備やデジタル化は十分に行われていない。そこで、これらの資料の整理およびデジタル化を進めた。

- 基礎研究

　令和６年度に修復が完了し所蔵館へ返却したモントリオール美術館所蔵《女房三十六歌仙扇面貼交屏風》の裏紙復元について、文化財保存修復学会第47回大会において研究発表を行った。

- 報告書

　修復完了作品について日英併記の修理報告書を作成・編集し、刊行した。

発　　表

- 橋本悠ほか：「モントリオール美術館所蔵『紙本金地著色 女房三十六歌仙扇面貼交屏風』の修理報告ー裏貼紙の復元新調について」　文化財保存修復学会第47回大会　25.6.14

刊行物

- 『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』　26.3



ハンブルク美術工芸美術館における作品調査の様子



リートベルク美術館学芸員による修理状況の視察

国際研修 〔コ05〕

研究組織　加藤雅人、副島まどか、石渡美鈴、武瀟瀟（以上、文化遺産国際協力センター）、早川典子、倉島玲央（以上、保存科学研究センター）、菊池理予（無形文化遺産部）、杉山恵助（客員研究員）

目　　的　**近年、日本の材料や道具、保存修復の理念が諸外国の文化財修復に応用されるようになってきた。このような状況において、海外の保存修復関係者に直接、日本の技術や知識を伝える場が求められている。そこで国内外において、関係諸機関との共催、またはそれらの機関の協力を得て研修等を開催し、保存修復関係者への技術移転と、情報共有を行う。**

成　　果

研修を日本国内で1件、海外で1件実施した。

また、次年度の開催に向けて、研修の準備を行い参加者の募集を行った。

1．国際研修「紙の保存と修復」の開催

主催：当研究所、文化財保存修復研究国際センター（ICCROM）

日程：8月25日（月）～9月12日（金）

場所：当研究所及びスタディーツアー

参加者：10名（応募者166名）

参加者所属先所在国：アメリカ合衆国、アイルランド、アラブ首長国連邦、アルゼンチン共和国、イタリア共和国、英国、オーストラリア連邦、カナダ、チェコ共和国、マレーシア

研修内容：

- 講義　日本の文化財保護と装潢修理技術　加藤雅人
- 講義　紙の基礎　加藤雅人
- 講義　日本画修復に使われる接着剤について　倉島玲央、早川典子
- 講義　日本における工芸技術保護の現状と変遷　菊池理予
- 講義及び実演　刷毛　田中重己（国の選定保存技術「表具用刷毛製作」保持認定）、田中宏平
- 実習　装潢修理技術及び取り扱い　国宝修理装潢師連盟（国の選定保存技術「装潢修理技術」保持認定）
- スタディーツアー　手漉き和紙関連各所、装潢修理技術関連各所など

2．国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」の開催

主催：メキシコ国立人類学歴史機構 国立文化遺産保存修復調整機関（CNCPC-INAH）、当研究所、ICCROM

日程：11月12日～26日（当研究所は12日～17日を担当）

会場：CNCPC-INAH（メキシコ合衆国・メキシコシティ）

参加者：9名（応募者：98名）

参加者所属先国：アルゼンチン共和国、グアテマラ共和国、コロンビア共和国、チリ共和国、ボリビア多民族国、メキシコ合衆国

研修内容（日本側講師担当分）：

- 講義　日本における紙文化財の保存修復　加藤雅人
- 講義　紙の基礎　加藤雅人
- 講義　掛け軸の修復　加藤雅人
- 講義　仮張り　加藤雅人
- 講義及び実演　様々な和紙　加藤雅人
- 講義及び実習　装潢に用いる糊　杉山恵助
- 講義及び実習　装潢修理技術　国宝修理装潢師連盟、杉山恵助



国際研修「紙の保存と修復」



国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」

文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究〔シ05〕

研究組織　二神葉子、江村知子、小野真由美、橘川英規、米沢玲、小山田智寛、吉田暁子、田代裕一朗、月村紀乃、石灰秀行、城野誠治、谷口毎子、武藤明子、安岡みのり、廣井彩乃（以上、文化財情報資料部）、薬師寺君子（客員研究員）
広報委員（情報システム部会）：友田正彦（副所長）　各部署情報システム部会員：山崎学、安孫子卓史（以上、研究支援推進部）、田代裕一朗（文化財情報資料部）、石村智（無形文化遺産部）、水谷悦子（保存科学研究センター）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター）
広報委員（年報部会）：友田正彦（副所長）　各部署年報部会員：岡崎卓巳（研究支援推進部）、小野真由美（文化財情報資料部）、今石みぎわ（無形文化遺産部）、千葉毅（保存科学研究センター）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター）

目　　的　**高精細デジタル撮影により、文化財が本来有する情報を目的に応じて正確・詳細に視覚化する光学調査・研究を行い、その成果を公開する。また、東京文化財研究所で行われる調査研究に関する情報や、国内外の文化財に関する多様な情報について分析し、それらを文化財保護に対して活用するための調査研究を行う。さらに、それらの情報の効果的な公開手法に関する調査研究を行い、調査研究の遂行に資する情報基盤としての所内情報システムを整備・充実させる。**

成　　果

1．デジタル画像の形成方法の研究開発
- 所内の他プロジェクトとの連携、また、所外からの依頼により、調査研究や修理のための光学調査、記録作成を実施した。
- 鎌倉芳太郎撮影ガラス乾板を原板とする御後絵の原寸大出力パネル展示を制作、沖縄県立芸術大学附属図書・芸術資料館開催の「御後絵展―鎌倉芳太郎写真の高精細画像を中心に―」において展示した（10月23日～11月3日）。

2．文化財情報に関する調査研究
- 沖縄県立博物館・美術館との共同研究として、調査撮影及び協議を6月と11月に行った。
- 釧路市立博物館との共同研究として、5月及び10月に協議及び考古遺物の記録作成を行った。また、同館での企画展「道東考古―縄文の世界―」（6月29日まで）に協力した。
- タイ文化省芸術局との共同研究として、9月にタイでの日本製漆工品及び日本人漆工専門家に関する調査、及びワット・ラーチャプラディットで開催されたセミナー（9月10日）での成果報告を行った。さらに、過去の成果に関する報告書を刊行した。
- 当研究所でのデータベース運用及び活用、世界遺産のリアクティブモニタリングに関して調査研究を行い、論文や学会等での発表を行った。

3．東京文化財研究所が行う調査研究成果の発信
- 研究情報の発信の一環としてウェブサイトを運用し、『日本美術年鑑』採録文献データベース等のウェブデータベースの新規公開、既存データベースへのデータ追加や機能改善、ウェブサイトの適宜更新を実施した。ウェブサイトのウェブアクセシビリティ対応を進めた。さらに、メールマガジン、ソーシャルメディアを通じた情報発信を行った。
- エントランスロビーパネル展示「無形文化遺産とSDGs」を5月27日に開始、解説パンフレット（日英）を制作した（無形文化遺産部担当）。また令和4年度の展示「タイ・バンコク所在王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディットの漆扉」を、タイ文化省芸術局及び同寺の協力でバンコクの同寺で9月10日に開催した。
- 年報部会員と連携し、『東京文化財研究所年報2024』を6月30日付で刊行した。

4．調査研究及び研究成果発信のための文化財情報基盤の整備・充実
- 情報システム部会員と連携し、情報セキュリティ研修（2月10日開催）や、各職員の端末を含むネットワーク機器及びソフトウェアの保守・監視を行い、セキュリティ水準の維持向上に努めた。
- 文化財情報基盤整備の一環として、居室スイッチの一部を更新し、端末レベルで安定した高速なインターネット接続が可能な環境を整備した。

論　文
- 城野誠治：「9．科学写真 9.1　文化財」『日本写真学会誌』88-3 特集 2024年の写真の進歩　25.9

ほか3件

発　表
- 小山田智寛、石灰秀行、二神葉子：「データベース構造から改めてWordPressを考える」「WordCamp Kansai 2025」 25.11.2

ほか1件

刊行物
- 『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究(3)―日本製漆工品と漆工材料調査―』 東京文化財研究所　80p、26.3

ウェブサイトアクセスランキング（令和７年度　上位10位まで）

1	ガラス乾板データベース	6	『日本美術年鑑』所載美術界年史彙報
2	書画家人名データベース	7	『美術画報』所載図版データベース
3	『日本美術年鑑』所載物故者記事	8	黒田清輝日記及び久米桂一郎日記の日付順アーカイブ
4	総合検索	9	黒田清輝日記
5	東京文化財研究所トップ	10	年紀資料集成

ウェブサイトの主な更新履歴（定期刊行物の公開、活動報告、公募情報を除く）

年月日	更　新　内　容	関 係 部 局
25.4.10	開催案内　「在外日本美術の保存修復技法の比較調査と国際的な保存活用に向けて」公開研究会	文化遺産国際協力センター
25.4.11	開催案内　シンポジウム「考古学と国際貢献：エジプト考古学と国際協力の軌跡」開催	文化遺産国際協力センター
25.4.14	実演記録『平家』第１～７回の映像公開	無形文化遺産部
25.4.16	開催案内　東京文化財研究所における実演記録事業（落語）―林家正雀師の正本芝居噺―	無形文化遺産部
25.4.30	前田青邨文庫、貴重書、近現代カタログデジタル化資料公開	文化財情報資料部
25.5.9	フォーラム「ポスト・エキヒュームSの資料保存を考える」アーカイブ動画と関連資料 公開	文化財情報資料部
25.5.27	エントランスロビー展示「無形文化遺産とSDGs」開始	無形文化遺産部
25.6.3	開催案内　美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究」成果報告会	文化財情報資料部
25.6.3	開催案内　令和７年度　文化財修復技術者のための科学知識基礎研修	保存科学研究センター
25.7.1	開催案内　文化財保存修復に関するワークショップ－額縁の歴史・技法と保存修復について－	保存科学研究センター
25.7.1	開催案内　シンポジウム「紛争下の被災文化遺産と博物館の保護―スーダン共和国の事例から―」	無形文化遺産部
25.7.3	無形文化遺産部　有形の民俗文化財（民具）に関するウェブサイト「民具 再発見 Discover MINGU ！」公開	無形文化遺産部
25.7.25	開催案内　第36回研究会「日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―」	文化遺産国際協力コンソーシアム
25.8.26	無形文化遺産部　記録映像「調べ緒製作の記録（短編）山下雄治」公開	無形文化遺産部
25.9.9	開催案内　第59回オープンレクチャー　かたちを見る、かたちを読む	文化財情報資料部
25.9.25	開催案内　講演会「イギリスと日本における額縁の歴史と保存」	保存科学研究センター
25.9.30	開催案内　令和７年度 海外調査のための３次元計測実習	文化遺産国際協力センター
25.10.2	開催案内　第19回公開学術講座「普及から考える伝統芸能の継承」	無形文化遺産部
25.10.22	開催案内　令和７年度シンポジウム「紛争からの復興と文化遺産」	文化遺産国際協力コンソーシアム
25.10.27	開催案内　シンポジウム「考古学と国際貢献」『地域社会と文化遺産』	文化遺産国際協力センター
25.10.27	開催案内　令和７年度　世界遺産研究協議会	文化遺産国際協力センター
25.11.4	報道発表 文化財害虫ニュウハクシミの国内分布域拡大の現状とベイト剤・設置箱無償配布	保存科学研究センター
25.11.28	開催案内　第37回研究会「文化遺産保護の国際動向」	文化遺産国際協力コンソーシアム
25.12.10	開催案内　2025年度 美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業 報告会	保存科学研究センター 文化財情報資料部

専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充 〔シ06〕

研究組織　橘川英規、江村知子、米沢玲、小山田智寛、吉田暁子、田代裕一朗、黒﨑夏央、山永尚美、淺野真知、荒川理佐、小林真美、中村茉貴、寺﨑直子、山下麻依（以上、文化財情報資料部）、塩谷純（上席研究員）、田良島哲（客員研究員）、小林公治（特任研究員）ほか

目　　的　**当研究所が行う文化財の調査・研究の成果を集約するとともに、専門性の高い資料や情報を蓄積・整理する。資料閲覧室を窓口にして文化財に関する総合的レファレンスを充実させ、調査研究および文化財防災に役立つデータベースの充実並びにアーカイブ機能の更新及び拡張を行う。**

成　　果

1．全所的な文化財情報の発信

- アーカイブWGを例年どおり4回（6月2日、9月3日、12月3日、8年3月4日）開催した。

2．文化財研究のためのデータ蓄積と公開

- 松島健資料を追加公開300件を追加公開（8月）／4×5カラーフィルムのデジタルデータ8,503件をしデータベースに登録した（10月）／4×5モノクロフィルム の高精細デジタル化を実施（33,000件、8年3月）。／機関アーカイブズ「東京文化財研究所調査写真台帳」、「東京文化財研究所図書業務文書」を公開（11月21日）／松浦正昭資料の整理を進め、35mmフィルム4,548点をデジタル化（8年3月）／菅沼貞三資料の台紙貼り写真を整理し、2,229件の目録を公開した（8年3月）／柳澤孝資料の写真フィルム・紙焼き写真をデジタル化して目録1,298件を公開（8年3月）／令和6年度に寄贈された円空資料を追加で受け入れ、写真フィルム約7,000件の整理を進めた／郷家忠臣資料（漆工史）、前田泰次資料（金工史）を受け入れ、順次、公開した。(郷家：347件、前田：120件、8年3月)。

3．アーカイブを利用した研究・外部機関との協力

- 所蔵資料を「野島康三と斎藤与里」展（埼玉県立近代美術館)、「美しいユートピア 理想の地を夢みた近代日本の群像」展（パナソニック汐留美術館ほか)、「中村宏展 アナクロニズムのその先へ」展（静岡県立美術館）に貸出した。
- 大学・大学院学生や専門家などを対象としたガイダンス等を実施（青山学院大学9月25日、共立女子大学10月16日)。

4．資料閲覧室の運営・管理・資料受け入れ数

- 週3回（月・水・金）開室したほか、インターネット経由の資料複写や画像利用等の申請にも対応した。閲覧室利用状況：公開日総数115日・年間利用者合計661人 図書等の受け入れ数：和漢書1,944件、洋書159件、雑誌2,526件、展覧会図録・報告書等2,132件（合計6,761件）

発　　表

- 江村知子、小山田智寛、田良島哲、山永尚美：「文化財情報の発信における課題と展望―修理記録アーカイブの構築―」『月刊文化財』748　26.1

発　　表

- 小山田智寛、田良島哲、山永尚美：「文化財（美術工芸品）の修理記録および修理記録データベースの公開について」東京文化財研究所　25.4.17
- 江村知子、小山田智寛、田良島哲、山永尚美：「(ポスター発表）文化財（美術工芸品）の修理記録データベースについて―「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」事業報告―」国宝修理装潢師連盟第29回研修会　25.10.3
- 小山田智寛ほか3名：「基準なき文化財修理記録のデータベース化を支えたClaris FileMakerの高い柔軟性」Clarisカンファレンス2025　25.11.7
- 米沢玲：「(特別講義）矢代幸雄と美術研究所の設立―日本で最初の美術アーカイブ」奈良大学　25.12.10
- 橘川英規：「デジタルアーカイブ特論：デジタルアーカイブの基礎と活用」東北大学　25.12.25
- 小山田智寛、田良島哲、山永尚美：「修理記録データベースの拡充と利活用の課題」東京文化財研究所　26.2.6

令和７年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）〔シ08〕

研究組織　江村知子、二神葉子、月村紀乃、吉田暁子、黒﨑夏央、橘川英規、小野真由美、小山田智寛、米沢玲、田代裕一朗（以上、文化財情報資料部）、塩谷純（上席研究員）、小林公治（特任研究員）

目　　的　文化財情報資料部の研究成果の一部を広く一般に公開する。

成　　果

11月13日（木）、14日（金）の2日間、一般から聴講者を募集し、第59回オープンレクチャーを開催した。オープンレクチャーでは、中期計画に合わせて5年ごとに大テーマを設定しており、7年度は、大テーマ「かたちを見る、かたちを読む」での開催の最終年となった。外部講師2名と職員の講師2名による2日間の開催とした。講演テーマは次の通りである。

11月13日（木）

- 月村紀乃（文化財情報資料部・研究員）「「銘文」を考える」
- 藤岡奈緒美（島根県立美術館・学芸員）「画僧 風外本高の絵画制作」

11月14日（金）

- 二神葉子（文化財情報資料部・文化財情報研究室長）「タイに渡った蒔絵工―鶴原善三郎と三木栄―」
- 薬師寺君子（文化財情報資料部・客員研究員）「「帝鑑図」とは何か」

公開講座1日目には、若手研究者2名による発表を行い、それぞれ「工芸作品の銘文」、「出雲国で画家として活動した禅僧」という観点から、作品を研究するうえでの新たな視点を提示した。2日目には、20世紀初頭のタイで活動した蒔絵工や、中国由来の画題「帝鑑図」に注目し、一般の聴講者にもわかりやすく解説した。

両日合わせて、外部からの聴講者126名が参加し、アンケート回答者のおよそ9割から「大変満足した」「おおむね満足だった」との高評価を得た。



講演風景



第59回オープンレクチャー　チラシ

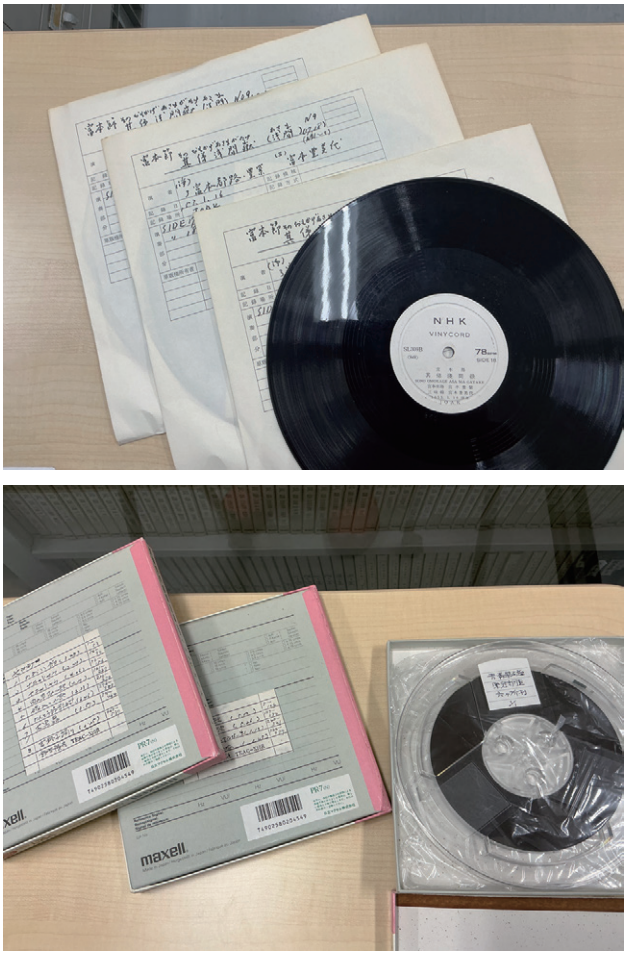
無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化〔ム03〕

研究組織　石村智、前原恵美、鎌田紗弓、中川優子（以上、無形文化遺産部）、飯島満（客員研究員）

目　　的　**無形文化遺産部が所蔵する音声・画像・映像資料のデジタル化。無形文化遺産部所蔵のアナログ資料を中心に、これまでに収集蓄積してきた分野を補完する資料の媒体転換を重点的に実施する。併せて、デジタル化を済ませた音声資料は、インデックス付与を含む整理を推進する。この事業は、将来的には資料のデータベース公開と音声・画像等の配信を目指すものである。**

成　　果

1．映像資料については、再生不可となることが危惧されるHi8、DVCを中心に媒体変換を行った。特に本研究所で収録した実演記録（演芸）およびシベリア調査資料の媒体変換を進めた。
2．音声資料のうち、再生不可となることが危惧されるオープンリールテープおよびカセットテープについて順次、媒体変換を行った（計80時間分）。特に民謡および沖縄方言のデジタル化を実施した。
3．既にデジタル化した音声資料のうち、特に声明をはじめとする寺事の現地録音を中心に内容確認を行い、内容ごとにインデックスを付与する作業を行った。
4．音声資料のうち、文化財保護委員会制作資料（LPレコード等）についてはクリーニング処置を施した上で、デジタル化を進めた。
5．無形文化遺産関連の音声映像記録21点（DVD21点）を所蔵資料として新たに登録した。



無形文化遺産部が所蔵する音声資料（上：文化財保護委員会制作LPレコード、下：オープンリールテープ）

総合研究会 (④シ)

総合研究会は、各研究部・センターの研究員がプロジェクトの成果や経過を発表し、その内容に関して所内の研究者間で自由に討論する場である。令和７年度は下記のスケジュールで開催した。

- 第１回　2025（令和７）年11月５日（水）
  松浦一之介（文化遺産国際協力センター）「遺跡と景観―日本における史跡環境の面的保護にむけて―」

- 第２回　2025（令和７）年12月２日（火）
  由井和子（文化財防災センター／保存科学研究センター）「文化財防災のための保存科学」

- 第３回　2026（令和８）年１月６日（火）
  田代裕一朗（文化財情報資料部）「韓国社会と文化財返還問題に対する認識の変化について」

- 第４回　2026（令和８）年２月３日（火）
  前原恵美（無形文化遺産部　無形文化財研究室長）「男芸者が繋ぐ吉原と江戸の芸能」
  青木慧（無形文化遺産部　日本学術振興会特別研究員）「吉原における音楽文化の視覚的表象―浮世絵・文芸挿絵を中心に―」

文化財情報資料部研究会 (④シ)

文化財情報資料部では、原則として月１回のペースで、美術史研究者を中心とする研究会を開催している。各回では、それぞれの研究成果や進行中のプロジェクトについて報告を行い、出席者との討議を通じて内容の深化を図っている。令和７年度の開催内容は以下の通りである（肩書は発表当時のもの）。

４月17日（木）　小山田智寛（文化財情報資料部主任研究員）
山永尚美（同部アソシエイトフェロー）
田良島哲（同部客員研究員）
「文化財（美術工芸品）の修理記録および修理記録データベースの公開について」

５月21日（水）　Tim T. Zhang（メトロポリタン美術館アジア美術部リサーチ・アソシエート（研究員））
「没倫紹等（墨斎）筆《葡萄図》について」

６月　５日（木）　黒﨑夏央（東京文化財研究所文化財情報資料部アソシエイトフェロー）
「『日本美術年鑑』の現状と課題」

７月17日（木）　呉景欣（米・ラトガース大学アソシエート・ティーチング・プロフェッサー、東京文化財研究所来訪研究員）
「近代日本画家の台湾における活動と画業の発展―木下静涯と同時代の日本画家たちの渡台前後の作品を中心に」
森川もなみ（山梨県立美術館学芸員）
「三水公平の南方従軍スケッチ―戦時下における日本の占領地・植民地の記録」

９月16日（火）　水野裕史（筑波大学芸術系准教授）
「探幽様式としての孔子像―図像の規範化をめぐって」
小野真由美（文化財情報資料部日本東洋美術史研究室長）
「狩野常信の詠歌活動に関する一考察」

９月25日（木）　江村知子（東京文化財研究所文化財情報資料部長）
「山崎架橋図の光学調査について」

10月 9日（木） 美術市場のメカニズムを知る
川島公之（東京美術商協同組合 理事長、繭山龍泉堂 代表取締役社長）
「売立、交換会について」
山口桂（クリスティーズジャパン 代表取締役社長）
「オークションについて」
司会：田代裕一朗（文化財情報資料部研究員）

2月17日（火） 作家資料はどう生き続けるか―美術アーカイブズの「残す」技術と「活かす」実践
塩原理絵子（安曇野市教育委員会）
「望月桂資料調査の位置付けとこれからの展望」
谷口英理（国立アートリサーチセンター）
山永尚美（東京文化財研究所）
「「望月桂関係資料」の受入れ・編成・公開に関する中間報告」
槌賀基範（県立長野図書館）
「信州の「地域デジタルアーカイブ」としての信州デジタルコモンズ」
橘川英規（東京文化財研究所）
「資料をめぐる多層的な循環―松澤宥旧蔵資料の継承と活用のダイナミズム」

3月 4日（水） 堀宜雄（福島県立美術館専門員）
「書簡資料にみる添田達嶺と東西日本画家との交流」
迫内祐司（小杉放菴記念日光美術館学芸員）
「添田達嶺とその資料について」

3月16日（月） 米沢玲（文化財情報資料部文化財アーカイブズ研究室長）
「調査報告―長谷寺・銅造十一面観音立像について」
奥健夫（武蔵野美術大学教授）
「蓮華王院本堂千体千手観音・二十八部衆像再考」

3月19日（木） 木村荘八自筆資料に見る昭和初期の油彩画制作 《パンの会》を中心に
田中淳（大川美術館館長、文化財情報資料部客員研究員）
「東京文化財研究所における木村荘八資料の収集経緯について」
新井由美（奈良工業高等専門学校准教授）
「木村荘八「パンの会」制作に関する諸問題
―東文研所蔵資料「木村荘八制作ノート 自昭和五年至昭和廿一年」を中心として」

文化財情報資料部 プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

東文研 総合検索 （④シ05の一部として実施）

東京文化財研究所が所蔵する図書や雑誌、展覧会カタログ、画像等の資料、東京文化財研究所の定期刊行物、国内外の美術関係文献等について、メタデータを横断的に検索することが可能なウェブデータベースで、デジタルデータを公開する「研究資料データベース」も含め、30件のデータベース、約185万件のデータを検索対象とする。検索画面は日英両言語に対応している。当研究所の定期刊行物については、本文のPDFデータを閲覧することも可能である。なお、日本国外における美術展覧会・映画祭開催情報、及び日本国外で出版された書籍情報に関しては、英国セインズベリー日本藝術研究所が採録した情報を受け入れている。www.tobunken.go.jp/archives/

無形文化遺産部 プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

第19回無形文化遺産部公開学術講座 （①ム01の一部として実施）

伝統芸能を継承するためには普及が欠かせないが、日本では早くから伝統芸能にふれることのできる普及の機会が十分


長唄の演奏


琉球古典音楽の演奏

ではないという声もある。本講座では、学校教育内外における伝統芸能教授の調査事例を起点に、伝統芸能普及のための工夫を紐解き、そこから継承につながる糸口を探った。当日は、学習指導要領や教科書に直接携わる方、教員養成を通して学校現場に関わっている方、伝統芸能のジャンルで活躍されている若手〜中堅の演奏家の方を迎え、伝統芸能の普及から継承への道筋について多角的に意見交換を行った。

日時：2025（令和7）11月7日（金）　13：00〜16：50
会場：東京文化財研究所　セミナー室
主催：東京文化財研究所
参加者：54名

プログラム：
開会挨拶　齊藤孝正
趣旨説明　前原恵美
講演　「学習指導要領と教科書の中の伝統芸能」　飯田勉
報告①「東京都の学校における伝統芸能体験の取り組み」　鎌田紗弓
報告②「沖縄県における学校内外での伝統芸能普及の取り組み」　前原恵美
演奏・対談①　長唄『鞍馬山』 唄：杵屋勝四寿、三味線：杵屋勝司郎
対談 杵屋勝四寿、杵屋勝司郎、鎌田紗弓（聞き手）
演奏・対談②　琉球古典音楽『本花風節（むとぅはなふうぶし）』、『下出し述懐節（さぎんじゃしすっくぇーぶし）』　歌三線：棚原健太
対談 棚原健太、前原恵美（聞き手）
座談会　飯田勉、杵屋勝四寿、杵屋勝司郎、棚原健太、小塩さとみ、前原恵美、鎌田紗弓
閉会挨拶　石村智

無形文化遺産部　プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

研究会　東京文化財研究所における実演記録事業（落語）林家正雀師の正本芝居噺 （①ム01の一部として実施）

無形文化遺産部で実施してきた林家正雀師による落語の実演記録（平成25（2013）年〜令和7（2025）年にかけて31演目を収録）を振り返り、その公開を記念する研究会を開催した。

日時：2025（令和7）年5月23日（金）　14：00〜17：00
会場：東京文化財研究所　セミナー室
主催：東京文化財研究所 無形文化遺産部
参加者：95名

プログラム：
14：00　開会のあいさつ・趣旨説明（前原 恵美・無形文化遺産部 無形文化財研究室長）
14：10　発表1「東京文化財研究所における正本芝居噺の実演記録事業」（飯島 満・無形文化遺産部客員研究員）
14：30　発表2「正本芝居噺の世界」（宮信明氏・京都芸術大学准教授）
15：15　実演1（林家 正雀師）「将門」（素噺）
15：55　実演2（林家 正雀師）『真景累ヶ淵』より「水門前」（道具入り）
16：40　対談（林家 正雀師×宮 信明氏）
16：55　閉会のあいさつ（石村 智・無形文化遺産部部長）

保存科学研究センター　プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

第10回保存環境調査・管理に関する講習会―調湿材のしくみ―

(②ホ02の一部として実施)

本講習会は保存環境の調査、評価方法、環境改善や安全な保管のための資材・用具等に関して、高いレベルでの共通理解を得ることを目的として開催している。今回は安定した相対湿度の維持が求められる展示・収蔵空間にて大きな役割を担う調湿材をテーマとした。調湿材の材質や構造、相対湿度変動を緩和するメカニズムなどについて、主に富士シリシア化学株式会社製「アートソーブ」をベースに解説し、その性能を最大限に活かすための科学的な知見を共有した。

日時：2025(令和7)年10月20日(月)　13：30～15：40
会場：文化財活用センター　会議室
参加者：29名

プログラム：開会・趣旨説明
「調湿材のしくみ」
有村健一(富士シリシア化学株式会社フジシリカゲルグループ)
質疑応答　コーディネーター　水谷悦子(東京文化財研究所)

保存科学研究センター　プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

第11回保存環境調査・管理に関する講習会 ―ニュウハクシミの現状と対策について―

(②ホ02の一部として実施)

本講習会は保存環境の調査、評価方法、環境改善や安全な保管のための資材・用具等に関して、高いレベルでの共通理解を得ることを目的として開催している。今回は、この数年の間に急速に分布を拡げているニュウハクシミについて、その生態や文化財への加害性、文化財施設に必要な対策等、東京文化財研究所による調査研究に基づく最新の知見について解説し、情報共有した。

日時：2026(令和8)年3月9日(月)　13：30～15：40
会場：文化財活用センター　会議室
参加者：48名

プログラム：開会・趣旨説明
「ニュウハクシミの現状と対策について」　島田潤(東京文化財研究所)
質疑応答　コーディネーター　吉田直人(文化財活用センター)

保存科学研究センター　プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等

令和7年度　文化財修復技術者のための科学知識基礎研修

(②ホ05の一部として実施)

近年、文化財の保存修復に関する科学的研究が大きく進み、様々な知見が得られている、一方で、その知見を読み解き、現場で活用する力も文化財修復の上で必要とされてきている現状がある。 本研修では、文化財修復に必要とされる科学の基礎的な知識についての普及を目的とし、最新の研究成果を 盛り込みつつ、文化財修復現場で直接必要となる情報を講義した。2021(令和3)年から始め、今年で5回目の開催。

日時：2025(令和7)年9月30日(火)～10月2日(木)
会場：東京文化財研究所　会議室
主催：東京文化財研究所　会議室

参加者：16名

プログラム：令和7年度　文化財修復技術者のための科学知識基礎研修
　早川典子（東京文化財研究所）「科学知識基礎1、2」
　早川典子（東京文化財研究所）「溶液と接着」
　開会挨拶
　早川典子「科学知識基礎1」
　早川典子「科学知識基礎2」
　加藤雅人「紙の科学1」
　加藤雅人「紙の科学2」
　佐藤嘉則「生物被害・その対応等」
　早川典子「溶液、接着」
　早川典子「合成接着剤1」
　早川典子「合成接着剤2」
　倉島玲央「実験器具・薬品の取り扱い、有機溶媒の使用等（購入、等級、取り扱い、洗浄、保管、廃棄）」
　早川典子「伝統接着剤1（糊、フノリ等）」
　早川典子、倉島玲央「伝統接着剤2（漆・膠等）」
　作品観察・所内見学
　修了式

文化財保存修復に関するワークショップ —額縁の歴史・技法と保存修復について—

（②ホ05の一部として実施）

近年、文化財保存修復に関する調査研究の対象は、伝統的な文化財分野にとどまらず、多様な材料からなる作品や資料へと広がっている。これに伴い、保存科学研究センター修復材料研究室では、海外から講師を招聘し、年1回、国内の専門家向けの研修を開催している。
今年度は、イギリスのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館修復課の上級修復士であるバロウ由紀子氏（BARROW Yukiko）を講師として招き、額縁の保存修復をテーマに、午前の講義と午後の実習からなる3日間のワークショップを開催した。

日時：2025（令和7）年10月29日（水）～31日（金）
会場：東京文化財研究所　会議室・セミナー室
　　国立西洋美術館　彫刻修復室
主催：国立アートリサーチセンター、東京文化財研究所保存科学研究センター、国立西洋美術館
参加者：講義の部67名、実習の部15名

プログラム：
　バロウ由紀子（ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館）

講義
　「額縁の保存と額縁製作に関する情報の普及：事例研究」
　「英国額縁の略史」
　「グレージングの歴史と今日の課題、修復例」

実技
　「シリコーンを用いた型どりによる白亜部材作製、サンプル板への下地塗り・研磨」
　「アクリルギルディング、オイルギルディング」
　「トーニング（上塗り色合わせ）、クリーニング」

令和７年度世界遺産研究協議会　越境する「遺産」―世界遺産とつながる人々の生活、信仰、「環境」―

（③コ01の一部として実施）

世界遺産における「遺産」は、常に概念を多方面に拡大するかたちで展開してきている。その考え方は、新規登録資産に求められる顕著で普遍的な価値（OUV）のみならず、保全状況審査（SOC）や遺産影響評価（HIA）を通じて既登録資産にも遡及的に適用されるため、世界遺産制度に関わる私たちは常に「遺産」の認識を新たにしておくことが重要となる。そこで、変化を続ける「遺産」の考え方に対する共通認識をもつことを意図し、多様な「遺産」の価値を内包する生活や信仰、環境と強く結びついた世界遺産での「遺産」の見方や保護の取組みに関する講演及び国内での実践事例に関する報告とパネルディスカッションを行った。

日時：2025（令和7）年12月22日（月）　13：00 ～ 17：30
会場：東京文化財研究所　セミナー室
参加者：111名

プログラム：
趣旨説明　金井健（東京文化財研究所）
報告　鈴木地平（文化庁）「世界遺産の最新動向」
講演　伊藤文彦（斎宮歴史博物館）「複雑な文化遺産における「遺産」の捉え方～道の文化遺産を事例に～」
松浦一之介（東京文化財研究所）「世界遺産「アグリジェントの考古地区」とシチリア州考古公園システム」
事例報告　胡光（愛媛大学）「四国遍路の世界遺産登録に向けた取組み」
土屋みづほ（大阪府教育庁）「世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の登録および保存管理における「遺産」の捉え方 」
パネルディスカッション
モデレーター　金井健
パネリスト　鈴木地平、伊藤文彦、松浦一之介、胡光、土屋みづほ

講演会・体験型イベント「バーレーンの歴史と文化」

（コ02の一部として実施）

2025（令和７）年４月に大阪・関西万博が開幕し、中東のバーレーンもパビリオンを出展した。これにあわせパビリオンの総責任者であるバーレーン文化古物局総裁シェイク・ハリーファ王子が来日された。東京文化財研究所は、長年、バーレーンにおいて文化遺産保護のための国際協力事業を行ってきた。シェイク・ハリーファ王子からの依頼もあり、この機会を生かして、より多くの方にバーレーンの文化遺産の魅力を知っていただくため、４月20日にバーレーン文化古物局と共催という形で、東京文化財研究所において講演会・体験型イベント「バーレーンの歴史と文化」を開催した。バーレーンや日本の専門家、古墳の伝道師まりこふん氏らが講演を行ったほか、来場者にはVRゴーグルを着用して遺跡の内部を探索していただくなど、各種のXRコンテンツを通じてバーレーンの歴史と文化を楽しんでいただいた。

日時：2025（令和7）年4月20日（日）
会場：東京文化財研究所　セミナー室
主催：東京文化財研究所、バーレーン文化古物局
参加者：156名

プログラム：
講演会　シェイク・ハリーファ・ビン・アハマド・アル＝ハリーファ王子（バーレーン文化古物局）「開催挨拶」
サルマン・アル＝マハリ（バーレーン文化古物局）「考古学が解き明かす古代のバーレーン」
安倍雅史（東京文化財研究所）「謎の海洋王国ディルムンとその古墳群」
西藤清秀（奈良県立橿原考古学研究所）「知られざるタイロス（ティロス）文化の古墳が語る葬送観念」
河野一隆（東京国立博物館）「日本の群集墳からみたバーレーンの古墳群」
まりこふん（古墳にコーフン協会）「いろんな古墳の楽しみ方」

体験型イベント
バーレーン文化古物局「バーレーンの歴史と文化に関するパネル展示と映像展示」
奈良県立橿原考古学研究所「マカバ遺跡で発掘されたタイロス時代の古墳のVR体験」
東京文化財研究所「ディルムン王ヤグリ・イルが埋葬されたアアリ王墓群8号墓のVR体験」
公立小松大学次世代考古学研究センター「マヤ文明コパン遺跡のピラミッド内部のVR体験」
株式会社ホロラボ「裸眼立体視ディスプレイ、Apple Vision Proの体験」
飛騨市・石棒クラブ・名古屋大学・TOPPAN株式会社「石棒神経衰弱」
株式会社ニコン「ボリュメトリックビデオの体験」
Niantic（協力:モバイルスキャン協会）「Scaniverseを利用した文化財の３次元計測体験」
路上博物館と3D撮影旅団「つまめるミュージアムと路上博物館」
堀岡晴美先生（協力：末森薫先生）「古代の印章と楔形文字の体験」

国際シンポジウム「考古学と国際貢献：エジプト考古学と国際協力の軌跡」（コ02の一部として実施）

エジプト考古学における国際協力の動向を議論するため、2025年5月10日（土）に東京文化財研究所セミナー室にて「考古学と国際貢献：エジプト考古学と国際協力の軌跡」と題した国際シンポジウムを開催した。この場には、エジプト本国から、考古部門を所管するエジプト観光考古省・考古最高評議会（Supreme Council of Antiquities）・考古保存記録部門長（当時）であるHisham Elleithy博士を招いた。また日本以外の海外研究機関を代表して、チェコ・カレル大学・エジプト学研究所発掘調査隊長のMiroslav Bátra博士を招聘した。さらに、日本国内から、現在発掘調査あるいは保存修復事業等を実施する各調査隊の代表者らが一堂に集った。複数の機関による調査研究成果を一度に聴くことができる貴重な機会となり、対面のみ、全編英語で実施されたシンポジウムに、国内の専門家を中心に104名が参加した。

日時：2025（令和7）年5月10日（土）
会場：東京文化財研究所セミナー室
主催：東京文化財研究所
参加者：104名

プログラム：
Symposium “Archaeology and International Cooperation in Egypt”
Program
Opening remarks/ Takamasa SAITO (Director General of TOBUNKEN)
Welcome speech/ Dr. Sakuji YOSHIMURA (President of Higashi Nippon International University)
Introduction of guest speakers/ Ayano YAMADA (TOBUNKEN)
Keynote lecture 1　Dr. Hisham ELLEITHY (SCA, Ministry of Tourism and Antiquities)
“Recent and Ongoing International Joint Projects for the Egyptian Antiquities.”
Keynote lecture 2　Dr. Miroslav BÁRTA (Charles University, Czech Republic)
“Rediscovery of the Mariette’s cemetery at North Saqqara - Czech-Egyptian cooperation”
Hisomasa KUROKOCHI (Higashi Nippon International University) and Ayano YAMADA (TOBUNKEN)
“Project of reassembling of the Second Boat of King Khufu”
Mariko SUITA (Kansai University)
“Restoration work for the wall decoration of the mastaba Idout”
Nozomu KAWAI (Tsukuba University)
“Excavation at North Saqqara”
Jiro KONDO (Waseda University)
“Excavation at Al-Khokha in West Bank of Luxor”
Akiko NISHISAKA (Higashi Nippon International University)
“Conservation of the wall paintings in the royal tomb of Amenhotep III”
Yoko TANIGUCHI (Tsukuba University)
“GEM-CC (Conservation Center) and GEM-JC (Joint Conservation) projects supported by JICA”
Tetsu HANASAKA (Tokyo Metropolitan University)
“Excavation at Akoris in Middle Egypt”
So HASEGAWA (Waseda University/ Higashi Nippon International University)
“Archaeological Research at Kom al-Diba’, Buhaira”
Comment and Discussion
Closing remarks: Masahiko TOMODA (Deputy Director General of TOBUNKEN)

シンポジウム「地域社会と文化遺産」（コ02の一部として実施）

現在のイラク現地（主に南イラク・シュメール地方）の文化遺産保護体制や活動の最新状況と、とくに復興後の地元住民にとって文化遺産が果たしている役割、あるいは文化遺産を通じて解決していきたい社会課題について共に協議するために、『地域社会と文化遺産』というコアテーマを掲げたシンポジウムを東京・京都の2会場で実施した。イラクからは、3名の専門家を招聘し、2か所あわせて99名の専門家らが参加した。

東京会場
日時：2025（令和7）年11月24日（月・振休）13：00 ～ 17：40（開場12：30）
会場：東京文化財研究所　セミナー室
共催：東京文化財研究所、メソポタミア考古学教育研究所
後援：駐日イラク共和国大使館、独立行政法人国際協力機構（JICA）、外務省
参加者：56名

地域社会と文化遺産―南イラク（シュメール）の未来像を考える―
Local Communities and Cultural Heritage: Drawing the Future of the Sumer Region in Southern Iraq
プログラム：
開会挨拶　東京文化財研究所　安倍雅史
主旨説明　メソポタミア考古学教育研究所　小泉龍人
基調講演　駐日イラク大使館　ペワン・ザウィタイ臨時代理大使
発表1　文化庁博物館振興室　中尾智行「文化遺産における公共化と価値共創ー考古学と博物館のこれからー」
発表2　飛騨市教育委員会　課長補佐（学芸員）　三好清超「博物館資料「石棒」を未来へ伝える」
発表3　ズィー・カール県考古・文化遺産局　アーメル・アブドゥルラザック・アティヤ「文化遺産の宝庫ズィー・カール」
発表4　ナーシリーヤ博物館　ウィダード・ハマド・アブシャヒル「地域社会の意識改革に向けたナーシリーヤ博物館の役割」
クロストーク
閉会挨拶　小泉龍人
司会：東京文化財研究所　山田綾乃
通訳：イブラ・ワ・ハイト代表　山崎やよい

京都会場
日時：2025年11月30日（日）13：30 ～ 17：30（開場13：00）
会場：京都芸術大学　瓜生山キャンパス　人間館4階　NA402教室
共催：東京文化財研究所、メソポタミア考古学教育研究所、京都芸術大学日本庭園・歴史遺産研究センター
後援：駐日イラク共和国大使館、独立行政法人国際協力機構（JICA）、外務省

地域社会と文化遺産―京都・奈良の事例をふまえて―
Local Communities and Cultural Heritage: Case Studies in Kyoto and Nara
プログラム：
開会挨拶　京都芸術大学　増渕麻里耶
主旨説明　メソポタミア考古学教育研究所　小泉龍人
基調講演　京都芸術大学　仲　隆裕「地域社会と文化遺産―庭園文化に着目して―」
発表1　奈良県地域創造部世界遺産室　山田隆文「奈良県における文化遺産の次世代継承のための取り組みについて」
発表2　京都芸術大学　宇佐美智之「GISを活用したメソポタミア遺跡マッピングプロジェクトの概要と展望」
スタディツアー振り返り　東京文化財研究所　山田綾乃・マザヤ私立大学　イマード・ダウード
クロストーク
閉会挨拶　小泉龍人
司会：東京文化財研究所　安倍雅史
通訳：イブラ・ワ・ハイト代表　山崎やよい

令和５年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業
『美術研究』(調査・研究成果の公開) (シ07)



『日本美術年鑑』

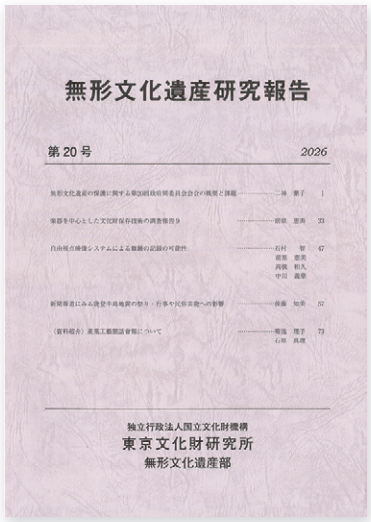
『日本美術年鑑』は、我が国の各年の美術活動と美術研究・批評の状況を記録した刊行物である。文化財情報資料部では当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所が1936（昭和11）年から始めた『日本美術年鑑』の編集を引き継ぎ、刊行を継続してきた。令和５年版は、B5判、144ページとなった。出版に際し、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。

『美術研究』

1932（昭和７）年１月、当研究所の前身である帝国美術院附属美術研究所の初代所長・矢代幸雄の提唱により第１号を刊行、以来90年にわたり日本・東洋の古美術ならびに日本の近代・現代美術とこれらに関する西洋美術についての論説、研究ノート、書評、展覧会評、研究資料等を掲載している。令和７年度は446号、447号、448号を刊行した。出版に際して、東京美術商協同組合、株式会社東京美術倶楽部より助成を受けた。



無形文化遺産部出版関係事業 〔ム04〕

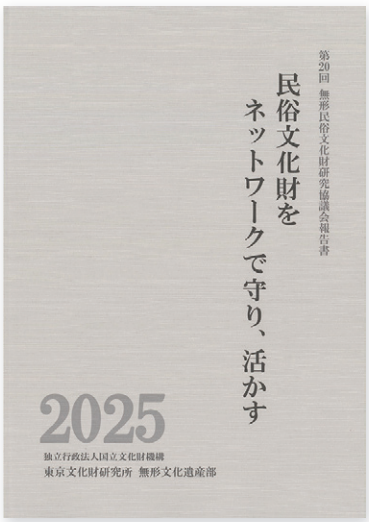


『無形文化遺産研究報告』第20号

無形文化財や無形民俗文化財、文化財保存技術、無形文化遺産保護の国際的な動向等に関する研究論文、調査報告、資料紹介等を掲載している。第20号には報文５本を掲載。2026年３月刊行、92ページ。

第20回無形民俗文化財研究協議会報告書『民俗文化財をネットワークで守り、活かす』

12月５日に開催した第20回無形民俗文化財研究協議会の報告書として刊行。民俗文化財の保存・活用に関わる「ネットワーク」をテーマに、５名の発表者による実践報告および２名のコメンテーターを交えた総合討議の内容を掲載。ネットワークの意義、展望と課題について議論した。2026年３月刊行、96ページ。



保存科学研究センター　2－(4)－②－1)

『保存科学』第65号の出版 (ホ07)

『保存科学』は文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究報告などを報文・報告・資料のカテゴリーで掲載した学術誌であり、1964（昭和39）年に第1号を創刊している。令和7年度は、犬塚将英編集委員長、友田正彦委員、早川典子委員、間渕創委員（文化財活用センター）、貴田啓子委員（東京藝術大学）の5名からなる編集委員会を編成した。投稿された論文に対して査読を行い、報文2報、報告7報、資料4報の計13報の掲載を決定し、第65号を刊行した。2026年3月刊行、189ページ。



広報委員会

『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKEN NEWS』

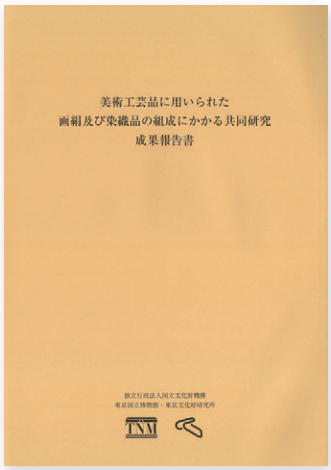
『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKEN NEWS』はそれぞれ、各部・センターからの部会員で構成される東京文化財研究所広報委員会の概要部会、ニュース部会が作成し、編集事務はいずれも研究支援推進部企画渉外係が担当している。



『東京文化財研究所概要』は研究所の組織や活動内容を、写真を多用して日英2ヶ国語により簡潔に紹介している。令和7年度の概要はA4判37ページ。

『TOBUNKEN NEWS』は当研究所の業務について広く知っていただくため、各部・センターの調査研究活動をいくつかピックアップして紹介するとともに、文化財保存に関するコラム等を掲載している。A5判。令和7年度はNo.82（2026年3月刊行、14ページ）を刊行した。





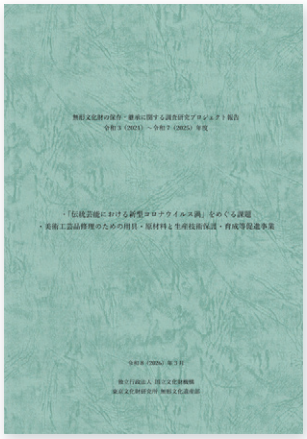
『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』

2025（令和7）年7月29日に開催した、東京国立博物館と東京文化財研究所の共同研究成果報告会の内容をまとめた報告書。この共同研究では日本・東洋の書画作品に用いられた画絹（料絹）をデジタルマイクロスコープで観察・記録・分析し、データベースを構築し、東京国立博物館の所蔵品のデータについては同館のウェブサイトで公開する。画絹の情報がどのように研究に応用できるのか、具体的な方法についても紹介する。2026年3月刊行、68ページ。
（①シ04の一環として刊行）



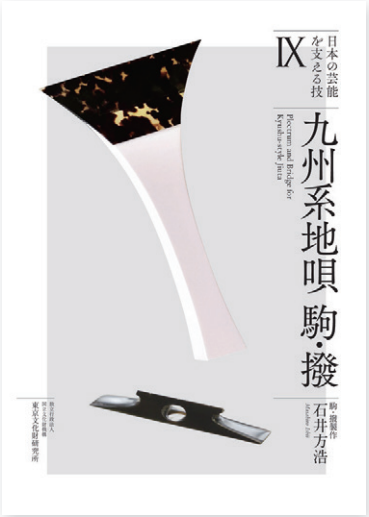
『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究（3）―日本製漆工品と漆工材料調査―』

幕末から明治期に日本で制作され、現在はタイに所在する漆工品に関するこれまでの調査研究の成果をまとめた報告書の第3冊目。本書ではタイの博物館に所蔵される日本製漆工品のほか、漆や染料などの漆工材料に関する調査、1910年代から第二次世界大戦終了までタイで活動した三木栄がタイで制作した儀式用うちわを紹介した。2026年3月刊行、80ページ。
（④シ05の一環として刊行）



『無形文化財の保存・継承に関する調査研究プロジェクト報告　令和3（2021）～令和7（2025）年度「伝統芸能における新型コロナウイルス禍」をめぐる課題／美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術保護・育成等促進事業』

令和3（2021）～令和7（2025）年度の無形文化遺産部無形文化財研究室の調査研究を、「「伝統芸能における新型コロナウイルス禍」をめぐる課題」および「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術保護・育成等促進事業」を中心にまとめた。2026年3月刊行、23ページ。
（①ム01の一環として刊行）



『パンフレット『日本の芸能を支える技』IX 九州系地唄 駒・撥　石井方浩』

2017（平成29）年より継続的に行っている、芸能を支える文化財保存技術の調査と並行して、その製作者と技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2026年3月刊行、12ページ。
（①ム01の一環として刊行）

『パンフレット『日本の芸能を支える技』X 能管　田中康友』

2017（平成29）年より継続的に行っている、芸能を支える文化財保存技術の調査と並行して、その製作者と技術に焦点を当てたパンフレットを順次刊行している。2026年3月刊行、8ページ。
（①ム01の一環として刊行）



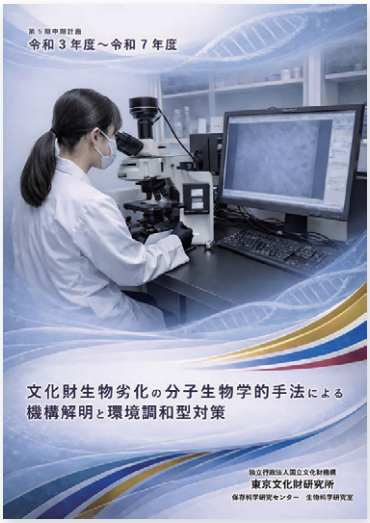


『篳篥蘆舌の原材料・ヨシに関する報告書―淀川河川敷 上牧・鵜殿を中心に―』

篳篥蘆舌に適したヨシが採れることで知られてきた淀川河川敷の上牧・鵜殿のヨシの特性や、その原材料ヨシの安定的な確保のための取り組みについて、他の地域のヨシやヨシ原とともに報告する。2026年3月刊行、29ページ。
（①ム01の一環として刊行）

『第５期中期計画　令和３年度～令和７年度　文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策　研究成果報告書』

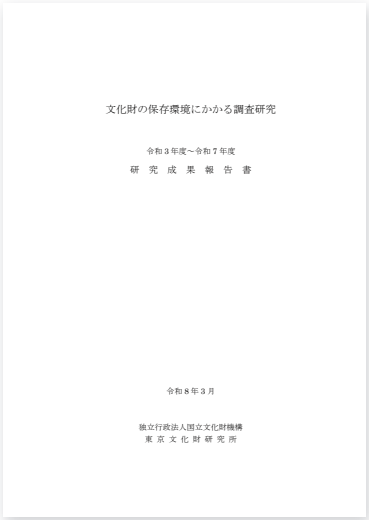
第５期中期計画で行われたプロジェクト研究の成果を纏めた報告書。本書は、分子生物学的手法を用いた生物劣化機構解明の基礎研究成果と、環境低負荷な処理方法を検討した成果をダイジェスト版として纏めたものである。2026年3月刊行、88ページ。
（②ホ01の一環として刊行）





『フォーラム　ポスト・エキヒュームＳの資料保存を考える　報告書』

「ポスト・エキヒュームＳの資料保存を考える」と題して開催したフォーラムの発表内容を纏めた報告書。本書では、2題の基調講演と3題の講演および総合討議の内容を纏めた報告書である。2026年3月電子刊行、80ページ。
（②ホ01の一環として刊行）



『文化財の保存環境にかかる調査研究 令和3年度～令和7年度 研究成果報告書』

文化財の保存環境に関して令和３年度～７年度に実施した、持続可能な保存環境管理を見据えた、保存環境の構築と省エネの両立に関する研究および文化財展示・収蔵空間における空気質測定とその改善に関する研究を成果報告書としてまとめた。2026年３月刊行、312ページ。

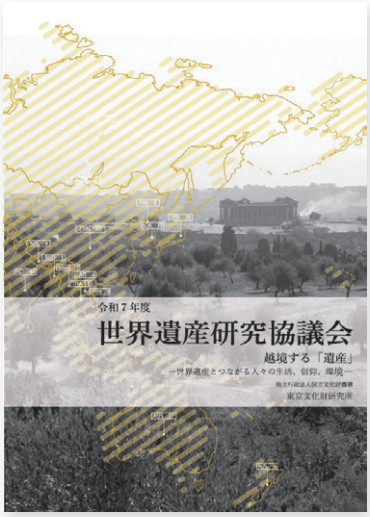
((①ホ02の一環として刊行)



『博物館・美術館等の文化財展示収蔵施設の温湿度環境管理に関する総合調査報告書 【基本集計編】』

令和６年に実施した建物及び空調設備、運用についての「博物館・美術館施設の温湿度管理に関するアンケート」の基本集計結果を報告書にまとめた。2026年３月刊行、88ページ。

((①ホ02の一環として刊行)



『令和７年度世界遺産研究協議会　越境する「遺産」―世界遺産とつながる人々の生活、信仰、環境―』

本冊子は、2025（令和7）年12月22日に世界遺産制度における変化を続ける「遺産」の考え方とその保護の取り組みや課題をテーマに開催した世界遺産研究協議会での講演及びパネルディスカッションの内容を書き起こしたものである。その他、文化庁による2025年の世界遺産委員会での審議等に関する報告を掲載している。2026年３月刊行、69ページ。

(③コ01の一環として刊行)

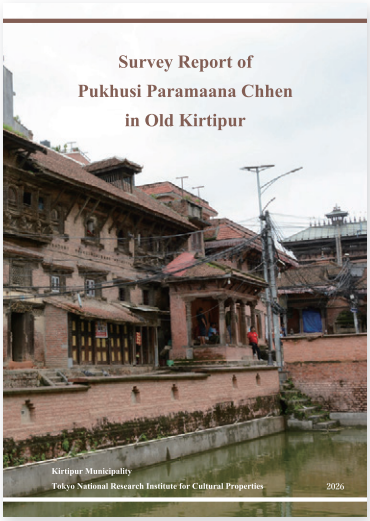


『各国の文化財保護法令シリーズ［30］スペイン』

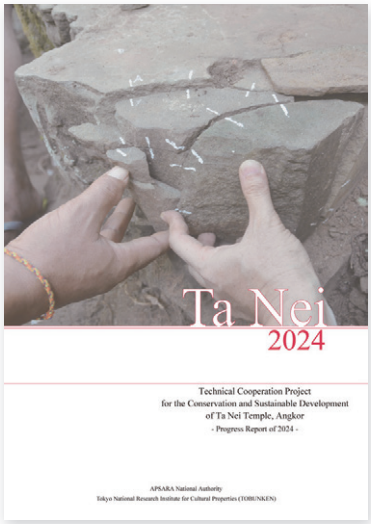
スペインの文化財保護に関する法律について、国の基幹法である歴史遺産法、同法施行勅令及び無形遺産法に各州法の目次を収集して翻訳するとともに、概説を加えて刊行した。日本語及び英語、スペイン語、2026年３月刊行、328ページ。

(③コ01の一環として刊行)

『Survey Report of Pukhusi Paramaana Chhen in Old Kirtipur』



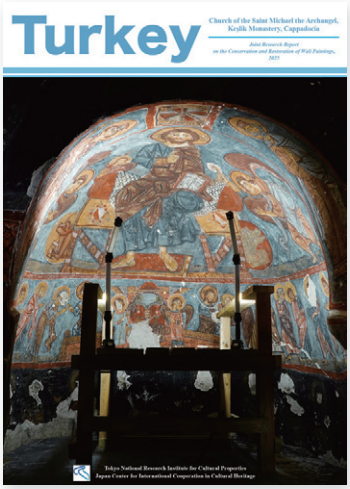
本報告書は、2023（令和5）～2024（令和6）年にかけてネパール・キルティプル市と東京文化財研究所が実施した「キルティプル市旧市街内における歴史的民家の保存活用に関する共同調査」の成果をまとめたものである。2026年3月刊行、88ページ。
（③コ02の一環として刊行）



『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor - Progress Report of 2024 -』

本報告書は、2024（令和6）年にカンボジア王国アプサラ機構と東京文化財研究所の協働により実施した、「カンボジア・アンコール遺跡群・タネイ寺院遺跡の保存と持続的発展のための技術協力事業」の概要と成果をまとめたものである。2026年3月刊行、116ページ。
（③コ02の一環として刊行）

『Church of the Saint Michael the Arcangel, Keşlik Monastery, Cappadocia Joint Research Report on the Conservation and Restoration of Wall Paintings, 2025』



2025（令和7）年6月から7月にかけてテュルキエ（旧トルコ）共和国カッパドキア地方に位置するケシュリック修道院アルハンゲロス・ミハイル聖堂にて実施した壁画の保存修復に係る共同研究についてまとめた報告書。煤汚れなどの堆積物のクリーニング方法や、剥離・剥落箇所の補強処置方法について収録したものである。2026年3月刊行、87ページ。
（③コ03の一環として刊行）

博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）(ホ08)

研究組織　犬塚将英、秋山純子、芳賀文絵、水谷悦子、関根遥、佐野恵子、柘植奈穂（以上、保存科学研究センター）、千葉毅、由井和子（以上、保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目　　的　1）文化財の担当者研修、博物館・美術館等の保存担当学芸員研修を行う。
2）研修の体系を完成させるとともに、研修受講生を対象としたアンケート及び派遣元自治体を対象とした研修成果の活用状況に関するアンケート調査を行い、その結果を踏まえ研修計画を策定する。

成　　果

- 第５回博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）を実施した（7月7～11日、受講者36 人）。
- 令和３年度より保存環境に重きを置いた基礎的な内容を文化財活用センターが「基礎コース」として行い、東京文化財研究所では、「上級コース」としてこれまで博物館・美術館等保存担当学芸員研修を受講されてきた方々や同等の経験を有している方を対象に実施した。
- 研修内容は次のとおりである。文化財修復原論、文化財の科学調査、空気質（空気質について／空気汚染の文化財への影響／空気質の換気の考え方）、保存環境に関する理論と討論、文化財IPM概論・実習、修復材料の種類と特性、屋外資料の劣化と保存、近代化遺産の保護、多様な文化財の保存と修復、博物館の防災、民具の保存と修復、大量文書の保存・対策、紙本作品等の保存と修復、写真の保存・管理。
- 研修終了後にカリキュラム各項目の理解度や有用度、また今後の要望等に関するアンケート調査を行ったところ、受講生の本研修に対する満足度は100%であった。



生物科学研究室の見学の様子

文化財の収集・保管に関する指導助言 (シ)

担　　当　江村知子、二神葉子、橘川英規、米沢玲、城野誠治、吉田暁子、田代裕一朗、月村紀乃（以上、文化財情報資料部）、塩谷純（上席研究員）、小林公治（特任研究員）、加藤雅人（文化遺産国際協力センター）ほか

目　　的　これまでに蓄積された文化財に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて、専門的な見地から保存・伝承・活用等に関する助言を行うことにより、文化財保存の質的向上に貢献する。

成　　果

助言の依頼は国（2件）、地方自治体（14件）、関連機関（16件）、海外（18件）の合計50件で、以下の通りである。

- 文化審議会世界文化遺産部会臨時委員として日本における世界遺産条約の履行のあり方に関する検討での助言
- 文化庁の非常勤調査員として美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業に関する助言
- 国立歴史民俗博物館運営会議委員・資料収集委員会委員として博物館運営に関する検討での助言、及び同館資料収集委員会委員として作品収蔵に関する検討での助言
- 江戸東京博物館資料収蔵委員として作品収蔵に関する検討での助言

以下、文化財調査・保管等に関する協力・助言
愛知県美術館、奄美博物館・奄美市歴史民俗資料館、石川県立美術館、茨木市立文化財資料館、サントリー美術館、和泉市久保惣記念美術館、神奈川県立歴史博物館、茨城県立歴史館、京都府教育委員会、佐賀県立博物館、泉屋博古館東京、種子島開発総合センター「鉄砲館」、徳川美術館、長崎歴史文化博物館、南蛮文化館、中之島香雪美術館、日本二十六聖人記念館、野﨑家塩業歴史館、北海道立北方民族博物館、大和文華館、和歌山県立博物

館、絵金蔵、佐賀県立九州陶磁文化館、仙台市教育委員会、台東区教育委員会、青山学院大学、島根県古代文化センター、山口蓬春記念館、韓国国立中央博物館・韓国国立光州博物館・リウム美術館（韓国）、上海博物館（中国）、タイ国立図書館・タイ国立博物館中央収蔵庫・ナコンキ―リー国立博物館（タイ）、ルーブル美術館・チェルヌスキ美術館・ギメ国立美術館（フランス）、リンデン博物館・ケルン東洋美術館・ライプツィヒ・グラッシー民族博物館（ドイツ）、バウアー財団東洋美術館・リートベルク美術館（スイス）、大英博物館・セインズベリー日本藝術研究所（イギリス）、ポズナン国立美術館（ポーランド）

無形文化遺産部　2－(5)－②－1）

無形文化遺産に関する助言〔ム〕

担　　当　石村智、久保田裕道、前原恵美、今石みぎわ、菊池理予、後藤知美、鎌田紗弓（以上、無形文化遺産部）

目　　的　**これまでに蓄積された無形文化遺産に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて、専門的な見地から保存・伝承・活用等に関する助言を行うことにより、無形文化遺産の継承に資する。**

成　　果

○国への助言

- 文部科学省への「教科用図書検定調査審議会」審議委員としての助言１件
- 文化庁への芸術選奨に関する推薦委員としての助言１件
- 文化庁への「邦楽普及拡大推進事業」に係る広報等推進業務における技術審査委員としての助言１件
- 文化庁への「文化財用具・原材料等代替品実用化研究（三味線の胴皮）」審査委員としての助言１件
- 文化庁への「変容の危機にある無形の民俗文化財の記録作成事業に係る技術審査」審査委員としての助言１件
- 文化庁への文化審議会無形文化遺産部会臨時委員としての助言１件
- 文化庁への伝統文化親子教室事業に係る協力者会議委員としての助言１件
- 文化庁による「文化遺産・無形文化遺産のシナジー（相乗効果）に関する実態把握及び事例収集事業に係る予備的調査研究」（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社受託事業）への助言１件
- 独立行政法人国際交流基金への舞台公演オンライン配信事業に関する助言１件

○地方自治体への助言

- 山形県への山形県指定文化財保存実態調査調査員としての助言１件
- 山形県立博物館の運営協議会委員としての助言１件
- 山形県防災WG委員としての助言１件
- 千葉県への博物館資料審査委員としての助言１件
- 東京都への「アーツカウンシル東京スタートアップ助成」に関する助言１件
- 東京都への東京都民俗芸能大会実行委員としての助言１件
- 東京都による令和７年度「観光まちづくりにおける江戸の文化財等の活用促進事業」（株式会社JTB総合研究所受託事業）への助言１件
- 神奈川県への民俗芸能記録保存調査企画調整委員会委員及び「一人立ち三匹獅子舞」現地調査委員会委員としての助言２件
- 静岡県令和７年度無形民俗文化財アドバイザー支援事業委員としての助言１件
- 島根県への古代文化センター客員研究員及び島根県民俗芸能調査委員会委員としての助言２件
- 柏市への篠籠田の獅子舞調査検討委員会委員としての助言１件
- 武蔵野市への文化財保護委員としての助言１件
- 箱根町への箱根湯立獅子舞伝承・活用等事業に係る整備委員会委員としての助言１件
- 甲府市への天津司舞調査報告書作成事業に関する助言１件
- 岐阜市の「長良川の鵜飼漁の技術」保存活用協議会 調査懇談会構成員としての助言１件
- 京都市への京都芸術センター伝統芸能文化創成プロジェクト推進会議委員としての助言１件
- 京都市への「文化財用具・原材料等代替品実用化研究（三味線の胴皮）」調査委員としての助言１件
- まんのう町へのまんのう町文化財保存活用地域計画協議会委員としての助言　１件
- 文化財保護審議会委員としての助言５件（山形県・山梨県・上尾市・加須市・静岡市）

○関連団体への助言

- 公益社団法人全日本郷土芸能協会への運営に関する助言１件
- 公益財団法人ポーラ伝統文化振興財団への伝統文化ポーラ賞選考委員会選考委員としての助言１件
- 一般財団法人日本青年館への全国民俗芸能大会企画委員としての助言１件
- 一般社団法人技の環の評議員としての助言１件

文化財の虫菌害に関する調査・助言 (ホ)

担　　当　佐藤嘉則、島田潤、轟丈瑠、犬塚将英（以上、保存科学研究センター）

目　　的　**これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から生物被害対策の技術的な協力・助言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献する。**

成　　果

これまでに蓄積された文化財の生物被害対策に関する調査・研究の成果を活かし、国や地方公共団体等からの要請に応じて専門的な見地から技術的な協力・助言を行うことにより、文化財の保存に関する質的向上に貢献した。

主な虫菌害問題の相談元は、例年の通り、国や地方公共団体の博物館、美術館、図書館、教育委員会や社寺などの文化財保存担当あるいは文化財修復工房等であった。対応件数は合計で56件あり、電話、電子メール、WEB会議などで対応し、必要に応じて現地での調査を行い、問題解決に努めた。

相談内容は、ニュウハクシミ関連する案件が多く、その他文化財を加害した虫菌害の相談、文化財IPMの基本事項などがあった。

ニュウハクシミについては拡大防止対策として、防除キットを作成し、ニュウハクシミが確認された館を対象に配布を行った。

その他、主要なガス燻蒸剤であるエキヒュームS販売停止に関する相談も多かったため、関連するフォーラム動画についてYouTubeを介して配信するとともに、講演・講習会などを通して対応策についての指導助言を行った。

文化財の虫菌害を未然に防ぐための啓発・普及活動の一環で、生物被害に関する研修講師を11件担当した。その際に生物科学研究室で開設した「文化財害虫検索サイト」を紹介し、啓発普及ポスターを配布し、広報普及活動を積極的に行った。

文化財の修復及び整備に関する調査・助言 (ホ)

担　　当　朽津信明、犬塚将英、早川典子、倉島玲央、芳賀文絵、石塚麻奈（以上、保存科学研究センター）、千葉毅（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）、加藤雅人、金井健、前川佳文（以上、文化遺産国際協力センター）

目　　的　**地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・調査支援・情報提供等を行う。**

成　　果

○令和７年度に実施した各地の国宝、史跡や重要文化財等の保存や修復に関する指導助言は以下のとおりである。

国宝高松塚古墳壁画、国宝・特別史跡臼杵磨崖仏、国宝延暦寺根本中堂、国宝キトラ古墳壁画、国宝通潤橋、国宝阿弥陀聖衆来迎図、特別史跡王塚古墳、史跡讃岐遍路道 志度寺境内、史跡井寺古墳、史跡日岡古墳、史跡端島炭鉱跡、史跡高島炭坑跡、史跡原城跡、史跡日野江城跡、史跡吉利支丹墓碑、史跡屋形古墳群、史跡築瀬二子塚古墳、史跡出島和蘭商館跡、史跡薬師堂石仏、史跡観音堂石仏、史跡竹田城跡、史跡清戸迫横穴、史跡下藤キリシタン墓地、史跡臼杵城跡、史跡下総国分寺跡附北下瓦窯跡、史跡曽谷貝塚、史跡竹原古墳、史跡菖蒲池古墳、史跡長崎原爆遺跡、重要文化財鳳来寺観音堂、重要文化財浅間神社拝殿、重要文化財祇園橋、重要文化財厳島神社多宝塔板絵、重要文化財防府八幡宮金銅宝塔、重要文化財二条城杉戸絵、重要文化財琉球芸術調査写真〈鎌倉芳太郎撮影／〉、重要文化財法隆寺金堂壁画、重要文化財樵夫蒔絵硯箱、重要文化財厳島神社五重塔、重要文化財氷川丸、重要文化財羅漢寺石仏、特別天然記念物秋芳洞、重要文化財近代教科書関係資料、史跡萩反射炉、重要文化財旧長崎英国領事館、重要文化財旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設、長崎市南山手重要伝統的建造物群保存地区、長崎市東山手重要伝統的建造物群保存地区、横手市増田重要伝統的建造物群保存地区、大田市温泉津重要伝統的建造物群保存地区（温泉屋伊藤家住宅）

○地方自治体指定その他の文化財の保存や修復に関する指導助言は以下のとおりである。

大分県指定史跡臼杵城跡、川崎市市民ミュージアム、群馬県指定史跡南下古墳群、前橋市指定重要文化財山王の宝塔、南九州市指定有形文化財陸軍四式戦闘機「疾風」、南九州市指定史跡旧知覧飛行場給水塔、南九州市旧青戸飛行場トーチカ、航空科学博物館YS-11試作１号機、立飛ホールディングス一式双発高等練習機、知覧特攻平和会館、登録有形文化財機那サフラン酒製造本舗土蔵、静岡市清水区倉庫群、長野県指定天然記念物穴沢のクジラ化石、熊本県益城町馬水狐塚古墳、能登半島地震被災資料、美ら島財団所蔵資料

以上、指導助言件数　計66件

保存科学研究センター　2－(5)－②－1)

文化財の材質・構造に関する指導・助言 (ホ)

担　　当　西田典由、犬塚将英、紀芝蓮、片渕奈美香、寺島海、手島菜摘（以上、保存科学研究センター）、早川泰弘（特任研究員）

目　　的　**地方公共団体等からの要請に応じ、文化財及びその保存・活用に関する協力・助言・調査支援・情報提供等を行う。**

成　　果

令和７年度は、蛍光Ｘ線分析・Ｘ線回折分析・ハイパースペクトルカメラ・ラマン分光等による材質調査及びＸ線透過撮影・顕微鏡による構造調査などの調査・助言を実施した。調査を行った作品、所蔵先、調査月は以下のとおりである。

色材（筑波大・４月）、近代布製品（墨田区・４月）、刀剣（久能山東照宮・４月）、航空機（航空科学博物館・４～５月）、植物標本（千葉大・４月）、建築部材（５月）、絵画（香川県立ミュージアム・５月）、建築素材（喜多方市・５月）、漆工品（沖縄美ら島財団・5～11月）、屏風（出光美術館・6～8月）、紙資料（日立・６月）、仏像（遊行寺・６月）、顔料（嵯峨美大・７月）、顔料（バーレーン・７月）、琉球絵画（沖縄県立博物館・美術館・７月）、仏像（館林市・７月）、油彩画（徳島県立近代美術館・７月～12月）、古墳壁画（双葉町・7～11月）、文書類（東大史料編纂所・９月）、近代化資料（東京書籍・10～11月）、紙資料（石川県箔商工業協同組合・10月）、琉球絵画（沖縄県・10月）、考古資料（明治大学・10月）、汚染原因調査（愛知県・10月）、金属器（さきたま史跡の博物館・11月）、彫刻作品（東博・11月）、紙資料（国文学研究資料館・11～12月）、紙資料（東洋文庫・11月）、日本画（石川県立美術館・11月）、金箔資料（金沢金箔伝統技術保存会・11月）、陶芸資料（沖縄県立博物館・美術館・11月）、紙資料（伊勢型紙保存会・12～8年1月）、仏像（輪王寺及び二荒山神社・12月）、紙資料および石材（朝倉彫塑館・1月）、絵画（愛知県美術館・2月）、民俗資料（個人・2月）、仏像（MOA美術館・3月）

保存科学研究センター　2－(5)－②－1)

美術館・博物館等の環境調査と援助・助言 (ホ)

担　　当　犬塚将英、早川典子、秋山純子、水谷悦子（以上、保存科学研究センター）

目　　的　**国・地方公共団体や大学、研究機関との連携・協力体制を構築し、これらの機関が所有・管理する文化財に関する情報の収集、知見・技術の活用、本機構が行った調査研究成果の発信等を通じて、文化財に関する協力・助言を行う。**

成　　果

1．令和６年度と同様に国公立美術館・博物館、社寺等から保存環境に関する相談を受け、相談内容に応じて援助・助言を行った。今年度は海外からの借用・貸出の際の環境に関する問い合わせが比較的多くあった。

2．令和６年度に実施した建物及び空調設備、運用についての「博物館・美術館施設の温湿度管理に関するアンケート」をまとめ、報告書を作成した。今後はこれをもとに全国の博物館・美術館等に対し、有用な情報を提供できるよう、更に詳細な解析を進めていく予定である。

3．国立アートリサーチセンターとの共催でシンポジウム「ミュージアムと気候変動 ―サステナブルな未来に向けて」を開催し、博物館・美術館等が気候変動に関して抱える課題や実態を検証、具体的なアクションについて議論した。

4．第111回全国図書館大会愛媛大会の第10分科会資料保存において、「図書資料をまもる環境づくり―地球温暖化とどう向き合うか（水谷悦子、第111回全国図書会大会愛媛県大会、10月31日）」と題した基調講演を行い、脱炭素化の要請と保存環境管理を両立するための課題とその考え方について発信した。併せて、図書館からの相談に対応した。

5．空調を稼働させていない施設の収蔵庫において、収蔵資料に茶色い染みがみられたため、空気環境の測定を実施した。有機酸が高い濃度で検出され、改善策として、適切な換気方法を助言した。

6．既存施設を改修して整備された文化財収蔵庫を対象に、所蔵者、建築設計者および設備技術者と複数回の現地調査・打ち合わせを行い、資料の種類や履歴、気候特性に応じた保存環境管理方針の構築を支援した。

東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進 (ホ)

研究組織　朽津信明、早川典子、秋山純子、佐藤嘉則（以上、保存科学研究センター）、安倍雅史、前川佳文（以上、文化遺産国際協力センター）、秋山花子（東京藝術大学）

目　　的　**連携大学院教育の推進**
連携大学院教育を実施し、今後の我が国の文化財保護における中核的な人材を育成する。
・東京藝術大学大学院：システム保存学（保存環境学、修復材料学）

成　　果
年度実績と成果。

（1）令和7年度開講した授業及び担当教員、受講者数
保存環境計画論（前期、火曜1限）　2単位
朽津信明・犬塚将英・秋山純子・佐藤嘉則　14人

修復計画論　　（前期、木曜1限）　2単位
朽津信明・安倍雅史・前川佳文　11人（聴講3人）

修復材料学特論（前期、木曜2限）　2単位
早川典子　14人（聴講1人：博士学生）

保存環境学特論（後期、火曜1限）　2単位
秋山純子・佐藤嘉則　12人

文化財保存学演習
講師：秋山純子「様々な場所の環境測定実習」
日時：7月15日（火）13～17時、14人

（2）成績評価等、文化財保存学専攻運営への協力
教員会議（11回）、入試合同判定会議（2回）


修復材料学特論講義風景

文化財防災センター事業

研究組織　犬塚将英（保存科学研究センター）、後藤知美、千葉毅、由井和子（以上、文化財防災センター）、友田正彦（副所長）、秋山純子、西田典由、芳賀文絵、水谷悦子（以上、保存科学研究センター）、二神葉子、小山田智寛（以上、文化財情報資料部）、久保田裕道（無形文化遺産部）、金井健（文化遺産国際協力センター）

目　　的　**2020（令和2）年10月に国立文化財機構本部に設置された文化財防災センターの東日本ブロック中核施設として、地域防災の構築、災害時ガイドライン等の整備、レスキュー及び収蔵・展示における技術開発、普及啓発、文化財防災に関する情報の収集と活用を進める。災害時には、文化庁及び関連団体と連携し、都道府県文化財保護行政主管課を中心とした地域ネットワークによる被災文化財対応を支援する。**

成　　果

2024（令和6）年1月1日に発生した能登半島地震を受け、国立文化財機構は文化庁が実施する令和6年能登半島地震被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）、被災建造物復旧支援事業（文化財ドクター派遣事業）の事業実施を受託した。これらの事業は文化財防災センターを事務局として、2024（令和6）年2月13日に開始された。

本事業メンバーは6年度から引き続き、文化財レスキュー事業において現地駐在員として、レスキュー活動の調整等の業務を行うとともに、以下に示すような年度当初に計画した通常業務も同時に遂行した。

1．地域防災体制の構築

東京文化財研究所では、文化財防災センター事業の枠組み内で、北海道・東北ブロックの地域防災体制の状況把握及び防災ネットワークの構築の推進を目的とし、道県文化財保護行政主管課・道県内の博物館等施設へのヒアリングを継続的に実施している。

昨年度までと同様に令和7年度も、域内の全道県の文化財保護行政主管課あるいは道県立博物館等施設と、各道県内における文化財防災体制の強化に向けて意見交換や情報共有を行った。12月19日には、全道県の文化財保護行政主管課の担当者にオンライン上で一堂に会していただき、北海道・東北ブロックにおける文化財防災に関する情報交換会を開催した。

あわせて道県から依頼を受けた際には、文化財防災に関わる事業にて講演や発表を行った。今年度については、青森県文化財パトロール事業説明会（青森県）、令和7年度博物館職員研修会（北海道）、山形県文化財日常管理・防災研修会（山形県）、文化財に係る災害時の相互応援に関する協定連絡会議（福島県）にて講演・発表を行った。

2024年（令和6）年7月下旬の大雨によって山形県内の文化財に被害が発生した。山形県新庄市内の文化財収蔵施設では、大雨によって地下スペースが浸水し、そこに収蔵されていた民俗資料が被害を受けた。昨年度から引き続き、山形県から依頼を受け、県や山形文化遺産防災ネットワークと連携し、生物被害対策や温度・湿度等の環境調査に協力し、対応方法や体制の確立への助言や技術支援を行った。

2．災害時ガイドライン等の整備

令和7年度は引き続き、ガイドライン等策定の情報収集のため、全国の無形の文化財の中から災害で被害を受けたものを対象に、被害状況や現状を確認する調査を実施した。さらに、2024（令和6）年1月1日に発生した能登半島地震を受け、石川県および奥能登地域の市町村文化財保護行政主管課等の協力を得て県内の無形の文化財に生じた影響や被害を把握するための調査事業を立ち上げた。今年度は、昨年度中に実施したアンケート調査の結果をもとに、輪島市、珠洲市、能登町にて地域の方に各地の祭り・行事の現状をうかがう現地調査を実施した。

3．レスキュー及び収蔵・展示における技術開発

令和7年度は昨年に引き続き、火災時の保存箱による資料への影響低減効果を評価するため、京都国立博物館と協働で、電気炉および火炎による保存箱の加熱試験を行い、火災時の温度まで対応可能な木箱の温度計測方法について検討した。また塗装を行った木材に関して、火災時に起こり得る変化についての既往の知見が少ないため、室温から燃焼の温度までの広い範囲において塗膜の加熱特性を調査し、塗膜が火炎等に曝された場合に起こり得る変化について知見を得た。

4．普及啓発

10月1日に、文化財防災についてのこれまでの歩みを振り返り、文化財とともにある地域社会の復興と継承を考えるとともに、未来に向けて強化していくべき取り組みについての議論を深めることを目的として、文化財防災センターと朝日新聞社が主催し、国立文化財機構文化財防災センター設立5周年記念シンポジウム「みらいにつなぐ文化財～災害から文化財をまもる～」を開催し


火災時を想定した木箱の温度計測テスト

た。

日時：2025（令和７）年10月１日 13：30～17：20
会場：東京国立博物館 平成館大講堂
主催：文化財防災センター、朝日新聞社
プログラム：
開会挨拶
趣旨説明：髙妻洋成（文化財防災センター センター長）
パネリスト報告１：山下信一郎氏（文化庁 文化財鑑査官）
パネリスト報告２：山梨絵美子氏（日本博物館協会会長、千葉市美術館館長）
パネリスト報告３：宗田好史氏（京都府立大学名誉教授）
基調講演者とパネリストによる討論：
進行・犬塚将英（文化財防災センター 副センター長）
閉会挨拶

５．文化財防災に関する情報の収集と活用

新潟県で開催された「ぼうさいこくたい2025」及び文化財保存修復学会及び日本文化財科学会に参加し、関係者へのヒアリングをはじめ、日本における防災と災害復興に関する情報収集を行うとともに、一般防災との連携や協同の可能性を探った。

６．その他

６年度に引き続き、トルコ共和国との文化遺産防災にかかる国際交流を継続、深化させるため、文化財防災センターでは「令和７年度文化遺産国際協力拠点交流事業　トルコにおける文化遺産防災体制向上のための拠点交流事業」を文化庁より受託した。12月10～18日の期間に日本で行った招聘研修、及び2026（令和8）年２月にトルコ共和国ガズィアンテップ県にて、トルコ文化観光省文化遺産・博物館総局との共催により「災害リスク軽減のための文化遺産保護に関する国際シンポジウム」を開催した。

発　表

- 後藤知美：「文化財を災害から守る」令和７年度青森県文化財パトロール事業説明会　25.5.24
- 後藤知美：「文化財を災害から守る」令和７年度博物館職員研修会　25.7.5
- 後藤知美：「文化財（美術工芸品）の防災・防犯上の留意点」山形県文化財日常管理・防災研修会　25.9.6
- 後藤知美：「文化財（美術工芸品）の防災・防犯上の留意点」山形県文化財日常管理・防災研修会　25.11.29
- 後藤知美：「文化財防災に係る全国的な動向」 26.2.18
- 由井和子、ほか４名：「乾性油を用いた塗膜の過熱による変化について」日本文化財科学会第42回大会 25.7.5-6
- 由井和子、ほか３名：「災害時における保存箱の温湿度緩和効果の検証」日本文化財科学会第42回大会 25.7.5-6

刊行物

- 『令和７年度文化遺産国際協力拠点交流事業 トルコにおける文化遺産防災体制向上のための拠点交流事業成果報告書』 26.3

3. 外部資金等による研究活動

１．科学研究費助成事業…… 75

２．受託調査研究・補助事業・外部機関との共同研究
及び外部資金による研究 …… 108

1. 科学研究費助成事業

研究種目	研究課題	研究代表者	頁
基盤研究（A）	アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から *1	小林 公治	75
	ディルムン文明形成に関する考古学的研究 *1	安倍 雅史	76
研究成果公開促進費（データベース）	沖縄久高島イザイホー映像記録データベース	石村　智	77
基盤研究（B）	能管の「製作技術」と「原材料の安定的な確保」に関する研究	前原 恵美	78
	ブータンにおける伝統的石造民家の建築的特徴の解明と文化遺産保護手法への応用	友田 正彦	79
	日本戦後芸術のアーカイブ構築と学術的方法論の研究：三つのケーススタディをもとに	橘川 英規	80
	染織文化財における繊維・染料の科学的同定方法の確立と保存修復情報拠点の構築	早川 典子	81
	博物館等の文化財収蔵施設における総合的かつ簡易な放散試験方法の開発	古田嶋 智子	82
	行政官と文化財保護の関係史を拓く：建築担当技官が擁する諸資料の集合とアーカイブ化	金井　健	83
基盤研究（C）	占領期の文化財保護に関する研究―GHQ の博物館概念と博物施策の展開―	境野 飛鳥	84
	染織技術史に関する研究―原材料の国産化に焦点をあてて―	菊池 理予	85
	古典的膠及び墨に関する文化財修復材料及び書画制作材料としての材料学的体系化	宇髙 健太郎	86
	磨崖仏で過去に行われた保存対策の効果に関する定量的研究	朽津 信明	87
	一般室を使用した文化財収蔵施設運用法に関する研究	芳賀 文絵	88
	行政映画とその関連資料の整理と管理の支援	山永 尚美	89
	鎌倉時代仏教彫刻・絵画の彩色に関する基礎的調査研究	米沢　玲	90
	織豊時代における公武の知的交流についての研究―本草学から絵事へ	小野 真由美	91
	樹木を素材とする編組品に関する民俗学的基礎研究―広葉樹ヘギ材の籠を中心に	今石 みぎわ	92
	染織品等を対象とした赤外線画像の有効性に関する研究	秋山 純子	93
	漆芸品に与えるクリーニング溶液の影響に関する研究	倉島 玲央	94
	中小規模の博物館で実践可能な文化財防災―地震・水害対策を中心として―	千葉　毅	95
	メタゲノム解析を用いた浮遊菌測定による博物館のゾーニングに関する研究	間渕　創	96
	クフ王第２の船の実物資料を用いた造船から埋納過程の復元研究	山田 綾乃	97
	近代における美術作品の受容と評価―旧長尾美術館を一例として	月村 紀乃	98
	書画の融合と再構築：日中比較研究に基づく東アジア芸術表現の新たな可能性	後藤 亮子	99
	空気質の試験方法の対応関係の調査	由井 和子	100
	文化財の「保護区域」理念生成史：フランス領インドシナを中心とした比較分析	黒岩 千尋	101
	文化財保存における将来世代への責任の動機付け―世代間倫理からの検討	大川 柚佳	102
若手研究	洪水常襲地における水害経験の地域史と災害文化形成プロセスの解明	後藤 知美	103
	瀟湘八景の受容研究　絵画・建築・庭園 *2	武　瀟瀟	104
	日本における土地利用計画に準拠した史跡環境の評価および保護に向けた研究	松浦 一之介	105
	囃子の身体性：日本伝統芸能における音楽と舞踊の相互作用	鎌田 紗弓	106
特別研究員奨励費	江戸期吉原遊廓をめぐる図像研究：音楽学及び表象論的視座から捉える文芸挿絵と浮世絵	青木　慧	107

*1 令和６年度繰越あり
*2 令和６年度からの期間延長

2. 受託調査研究・補助事業・外部機関との共同研究及び外部資金による研究

研究課題	依頼元	研究代表者	頁
(1) 受託調査研究			
文化遺産国際協力コンソーシアム事業	文化庁	友田 正彦	108
デジタル技術を用いたバーレーンおよび湾岸諸国における文化遺産の記録・活用に関する拠点交流事業	文化庁	安倍 雅史	109
スーダンの文化遺産専門家等の能力強化ワークショップ事業	文化庁	石村　智	110
スーダンの被災博物館の保存・修復方針の策定に係る事業	文化庁	石村　智	111
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	文化庁	犬塚 将英	112
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	文化庁	犬塚 将英	113
ワット・ラーチャプラディット拝殿漆扉の現地保存に関する調査	ワット・ラーチャプラディット・サティットマハシマラム（タイ）	二神 葉子	114
墨田区 No.105 遺跡から出土した近代布製品染料・繊維分析	国際文化財株式会社	犬塚 将英	115
(2) 補助事業			
美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業	文化庁	犬塚 将英	116
(3) 共同研究			
ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開	The J. Paul Getty Trust	橘川 英規	117
(4) 助成金一覧			
バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復	公益財団法人住友財団	前川 佳文	118
歴史的建造物のデジタル３次元計測に関する研究	公益財団法人 KDDI 財団	淺田 なつみ	119
楽と舞：雅楽実践の身体コミュニケーション	公益財団法人三島海雲記念財団	鎌田 紗弓	120
フランス領カンボジア・ベトナムにおける遺跡保存のための「保護区域」概念の生成と展開	公益財団法人村田学術振興・教育財団	黒岩 千尋	121
中世漢画における故事仙人図の受容研究－旧大仙院書院の間障壁画を中心に	メトロポリタン東洋美術研究センター	武　瀟瀟	122
薬師寺金堂薬師三尊像の制作背景に関する考察	公益財団法人 鹿島美術財団	黒﨑 夏央	123
旧長尾美術館コレクションに関する基礎的研究 ―作品の付属資料等に見る伝来情報を中心に―	公益財団法人 鹿島美術財団	月村 紀乃	124
公開シンポジウム「技・材料・環境保全－能管からみる伝統楽器の課題－」	公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団	前原 恵美	125
蓬莱園に関する基礎的研究	公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団	松浦 一之介	126
1930 年代前半における韓国絵画コレクション研究－東京文化財研究所所蔵資料をもとに－	国外所在文化遺産財団（大韓民国）	田代 裕一朗	127

3. 成果公開

研究課題	
事業の一部として実施した研究集会・講座等	128
文化遺産国際協力コンソーシアム令和７年度シンポジウム「紛争からの復興と文化遺産」	
文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会「日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―」	
文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会「文化遺産保護の国際動向」	
受託研究の一環として刊行された刊行物	129

アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から

研究組織 小林公治（特任研究員）、倉島玲央（保存科学研究センター）、吉田邦夫（東京大学総合研究博物館）、能城修一、本多貴之、神谷嘉美（以上、明治大学）、猪熊兼樹（東京国立博物館）、鳥越俊行（奈良国立博物館）、末兼俊彦（京都国立博物館）、高田知仁（研究協力者、サイアム大学）

目　的 **唐の螺鈿をアジア螺鈿の始発点と位置付け、それが東・東南・南アジアなどにいつどのように伝わり、それぞれの地域でどのような発展を遂げたのか各時代地域を対象として具体的に検証する。唐代螺鈿の系譜や形成過程を探るため、西・中央アジアや殷周代の螺鈿との関係性についても広く検討したい。本研究では代表者・分担者・協力者らが行う個別研究を総合化して実証的にアジア螺鈿史全体像の構築と各地各時代それぞれの文化交流実態を明らかにしていく。**

成　果

令和７年度は本研究の最終年度であるが、国内ではこれまで継続して調査研究を行っている日本製輸出螺鈿漆器（南蛮漆器類、長崎青貝細工）に対する熟覧調査に加え、X線CT調査のほか、XRF分析、蛍光X線分析などの科学調査を共同実施したほか、これまで未実施であった螺鈿の主要材料である夜光貝について奄美大島および種子島にて生産地調査を初めて行った。海外についてはこれまで不十分であったフランス、ドイツにてアジア全域に関係する螺鈿器物等の調査を積極的に実施した。

成果としては、令和６年度に日本国内で実施した在ポルトガル南蛮漆器類書見台２基について昨年度に続き表面装飾科学調査結果を英文で公刊した。また南蛮漆器類から読み取れるイエズス会などのキリスト教修道会動向について、海外シンポジウムにて英語発表したことは、物質文化史研究の意義を示す上で有効だったと考えている。

１．国内調査・協議ほか

- 5月30日、徳川美術館にて同館所蔵螺鈿漆器類調査。6月6日、メキシコ、タバスコ大学オカーニャ教授に同行し東京国立博物館にて同館所蔵南蛮漆器類調査、意見交換。同月20日、長崎歴史文化博物館にて同館所蔵漆器類の熟覧・科学調査。9月25～26日、南蛮文化館にて同館所蔵南蛮漆器類の熟覧・XRF調査。11月3日、石川県立美術館にて同館所蔵螺鈿漆器および関連陶磁器調査。12月5～6日、奄美博物館ほかにて同島遺跡出土夜光貝資料調査およびフワガネク遺跡ほか踏査。同月9日、種子島鉄砲館および広田遺跡ミュージアムにて同館および南種子町と意見交換。3月11～12日、岐阜市歴史博物館所蔵南蛮漆器類の熟覧および奈良国立博物館でのCT調査、意見交換。

２．国外調査・協議（所蔵品調査および意見交換等に限定）

- 7月15～22日、タイ国立図書館所蔵貝多羅葉経典表板調査、国立博物館中央収蔵庫所蔵タイ製螺鈿漆器調査ほか。9月1日、フランス、パリ市内修復工房にて同所蔵漆器調査。同月2日ルーブル美術館にて同館所蔵イスラム系螺鈿器物調査。同月3日、同市内チェルヌスキ美術館および同市内古美術商にて同所蔵螺鈿器物調査。同月4日、ギメ美術館にて同館所蔵日本製螺鈿漆器調査。同月5日、デヌリー館にて同館所蔵ベトナム螺鈿器物ほか調査および意見交換。同月12日、ドイツ、シュトゥットガルト市内リンデン博物館にて同館所蔵螺鈿漆器類調査。10月25～27日、中国、上海博物館にて「紅翠斗芳菲」展ほか調査および同館と意見交換。30日成都市内にて四川大学研究者と研究協議。2月6日、アイルランド、ダブリン市内チェスター・ビーティーにて同館所蔵品調査および意見交換。同月9～10日、英国、エジバラ市内スコットランド国立博物館コレクションセンターにて同館所蔵品調査および意見交換。同月11・16日、ロンドン市内V&A East Storehouseにて同館所蔵品調査。同月12～13日、ブリティッシュ・ミュージアムにて同館所蔵アジア漆器類調査および意見交換。同月14日、古美術商にて同所蔵西アジア系螺鈿器物調査。同月17日、V&A South Kensingtonにて同館所蔵品調査および意見交換。

３．調査研究成果の公開と、研究情報の国際発信

論　文

- KOBAYASHI Kojiほか：Scientific Analysis of Two Christian Lecterns in Portugal: Investigation of Surface Decoration.『保存科学』65　pp.99-128　26.3

報　告

- 小林公治：「島原角屋に伝わる螺鈿漆器について（1）」『角屋研究』28　pp.1-14　26.1

発　表

- 大西智洋、小林公治ほか：「日本二十六聖人記念館所蔵「日傘」の修復と科学調査報告」 第９回東アジア文化遺産保護学会国際学術シンポジウム　25.10.31
- Koji Kobayashi.: Approaching the Jesuit and Catholic Missionary Activities through the Asian Export Lacquer: Namban Lacquer and its Related Objects, 3rd IAJS-ISSJR Online Colloquium 26.3.6ほか2件

ディルムン文明形成に関する考古学的研究

研究組織 安倍雅史（文化遺産国際協力センター）、岡崎健治（鳥取大学）、庄田慎矢（奈良文化財研究所）、佐々木蘭貞（帝京大学）

目　的 本研究の目的は、アアリ古墳群西に残されているディルムン最初期の王墓群と、ディルムンの交易船などを対象にした水中考古学調査を実施することによって、ディルムンにおける王権の発達、そしてそれを支えたであろう海洋交易の実態を明らかにし、ディルムン文明形成の具体的な様相を描き出すことにある。

成　果

ペルシア湾に浮かぶバーレーンは、東京23区と神奈川県の川崎市をあわせた程度の小さな島国である。しかし、バーレーンには、1950年代まで、7万5千基もの古墳が残されていた。古墳時代の日本列島に造られた古墳の総数が15万基といわれているので、この小さな島国には日本列島全土の古墳の半数にあたる数の古墳が存在していたことになる。

これらの古墳が築造されたのが、バーレーンがディルムンと呼ばれた時代であった。ディルムンは、メソポタミアの文献史料に登場するメソポタミアの周辺にあった王国の1つである。この王国は、前2050年から前1700年にかけての文明期と呼ばれる時代に、メソポタミアとオマーン半島、インダスを結ぶ海洋交易を支配し、繁栄をとげた。

メソポタミアは、年間降水量が200mmに満たない乾燥地であり、またティグリス河とユーフラテス河が運んだ大量の泥が堆積してできた巨大な沖積平野であるため、金属や貴石、良質な木材といった文明生活を営むうえで必要不可欠な資源が存在しない。ここで活躍したのがディルムンであった。

資源の乏しいメソポタミアには、ディルムンの商人の手によって、オマーン半島の銅やアフガニスタンのラピスラズリや錫、インダスの砂金や象牙、紅玉髄、良質な木材、ディルムンの真珠など、大量の商品が運び込まれていた。いわばメソポタミア文明を物流の面からささえ、この文明の生命線を握っていたのが、ディルムンであった。

この時代、ディルムンの社会は急速に発展を遂げた。バーレーンには、7万5千基にもおよぶ古墳が造られ、階層化が進み、王権が発達した結果、メソポタミア文明のものと比較しても遜色のない王都や神殿、巨大な王墓が建造された。

アアリ古墳群は、ディルムンの古墳群の1つである。このアアリ古墳群の北辺には、直径が50m、高さが10mを超える巨大古墳が十数基存在し、ディルムンの王の墓だと考えられている。そのため、これら巨大古墳群は、アアリ王墓群と称されている。近年の研究によって、この王墓群は、前1950年～前1700年ごろに築造されたことがわかってきている。

さて、同じアアリ古墳群の西側（アアリ古墳群西）に、6基の周壁を伴う大型古墳が存在する。これらの周壁付き古墳は、アアリ王墓群に比べ規模は劣るものの、近年、周壁を有していることから、じつはアアリ王墓群に先行するディルムン最初期の王墓群ではないかと指摘され、注目を集めている。

今年度、バーレーンに調査団を派遣し、このアアリ古墳群西にある6基の周壁付き古墳の1つR5号墓の発掘調査を実施した。

この結果、R5号墓は墳丘の直径が20m、高さが2mと規模は小さいものの、1. H形の主体部、墓道、周壁とのちのアアリ王墓群に特徴的な要素を複数有しており、また2. 前2050年～前2000年ごろに特徴的な洋梨形土器が出土したことから、アアリ王墓群に先行するディルムン最古の王墓の1つであることが明らかとなった。

また、主体部からは、大腿骨や上肢骨といった人骨の一部が出土し、ディルムンの王のものと思われる。今後、DNAの分析なども試みたいと考えている。

発　表

- Masashi ABE et al: The First Season of Excavations at Aali West, Bahrain. The 58th Seminar for Arabian Studies 25.12.12

沖縄久高島イザイホー映像記録データベース

研究組織 石村智（無形文化遺産部）、小山田智寛（文化財情報資料部）、佐野真規（客員研究員）

目　　的 本データベースは沖縄久高島の祭祀「イザイホー」が最後に行われた1978（昭和53）年の映像資料約17時間分をデジタルアーカイブ化し、その内容をデータベースとして公開するものである。イザイホーは久高島の女性が祭祀集団「神女」に就任するための通過儀礼であり、12年に一度行われ、琉球王国時代から約400年にわたって続いてきた。しかし1978（昭和53）年に行われたものが実質的な最後となっており、危機に瀕する伝統文化となっている。この映像をデジタルによって保存し、活用することで、無形の文化遺産たるイザイホーを後世に伝えていくのが本研究の目的である。

成　　果

- 令和７年度は「沖縄久高島イザイホー映像記録データベース」を完成させ、その公開を行った。
  URL：https://www.tobunken.go.jp/ich/izaiho/
- さらに本事業のアウトリーチとして、映画『沖縄久高島のイラブー』（文化財映像研究会・東京シネマ新社、2024年）の英語版『IRABŪ of the Kudaka Island, Okinawa』（文化財映像研究会・東京シネマ新社、2025年）をアーツカウンシル東京の助成金を得て2025年７月に完成させた。さらに『IRABŪ of the Kudaka Island, Okinawa』をエストニアで開催された第39回パルヌ国際映画祭（2025年10月）に出品し、「先住民部門」で特別賞を受賞した。



「沖縄久高島イザイホー映像記録データベース」のポータルサイト


映画『IRABŪ of the Kudaka Island, Okinawa』が第39回パルヌ国際映画祭（2025年10月）で特別賞を受賞した時の様子

能管の「製作技術」と「原材料の安定的な確保」に関する研究

研究組織 前原恵美（無形文化遺産部）、倉島玲央（保存科学研究センター）、亀川徹（東京藝術大学）、森田都紀（京都芸術大学）

目　的　日本の伝統的な管楽器の多くは、古くから日本人の生活の近くにあった「竹」を主たる原材料としてきた。能楽囃子や歌舞伎・邦楽囃子に用いられる「能管」も例外ではない。「竹」は一見、確保が容易な原材料と思われるが、研究代表者が進めてきた、楽器を中心とした文化財保存技術の調査によれば、管楽器の種類により様々な竹の種類、形状、使用部分、一次加工等の要件があり、実際には入手困難な状況にある。特に今やほとんど手に入らない「煤竹」を適材としてきた能管の原材料への危機感は大きい。そこで、本研究では「能管」を取り上げ、能管の製作技術から原材料の要件を明らかにし、安定的な確保のための方向性を見出したい。

成　果

令和7年度の成果は以下のとおりである。

【研究会】（全6回）

第1回研究会（リモート）：4月17日
　今年度の計画、学会発表・公開研究会について　ほか
第2回研究会（リモート）：5月8日
　林能管製作技術の記録撮影進捗報告　ほか
第3回研究会（リモート）：6月19日
　学会発表の方針、東博所蔵能管熟覧、能管CT撮像準備　ほか
第4回研究会（東京）
　東博所蔵能管、能管製作技術工程について　ほか
第5回研究会（奈良）：7月9日
　能管のCT撮分析、試奏実験について　ほか
第6回研究会（リモート）：11月4日
　東洋音楽学会大会研究発表準備　ほか

【調査】（全10回）

第1回調査（東京）：4月17日
　田中康友氏聞き取り調査①（前原）
第2回調査（東京）：4月21日
　田中康友氏聞き取り調査②（前原）
第3回調査（東京）：4月25日
　田中康友氏聞き取り調査③（前原）
第4回調査（東京）：4月27日
　田中康友氏聞き取り調査④（前原）
第5回調査（東京）：7月4日
　東博所蔵能管熟覧（前原、亀川、森田、倉島、小林慧人（研究協力者））
第6回調査（奈良）：7月9～11日
　CT撮像（前原、森田）
第7回調査（東京）：8月7日
　東京芸大にて試奏実験（前原、亀川、森田、倉島）
第8回調査（東京）：10月30日
　東文研にて及川資料等の調査（前原、森田）
第9回調査（東京）：11月14日
　田中康友氏聞き取り調査⑤（前原、森田）

【学会発表】

- 前原恵美（研究代表者）、倉島玲央、亀川徹、森田都紀（以上研究分担者）、小林慧人（研究協力者）による共同発表「能管の原材料と製作技術に関する調査報告」一般社団法人東洋音楽学会第76回大会　沖縄県立芸術大学　25.11.30

【公開研究会】（本研究会の一部は公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財材の助成による）

- 前原恵美（研究代表者）、倉島玲央、亀川徹、森田都紀（以上研究分担者）、小林慧人（研究協力者）、福原寛乃（邦楽囃子笛方演奏者）による公開研究会「能管の原材料と製作技術に関する調査研究報告」を開催、東京文化財研究所地下会議室、25.12.19

　研究者5名の発表に加え、福原寛乃氏の複数の能管による試奏とインタビュー、能管製作者の田中康友氏も加えて意見交換を行った。27名の参加者があり、質疑応答も活発に行われた。


公開研究会



調査報告書

報告書

- 「能管の原材料と製作技術に関する調査研究報告」の刊行（本報告書刊行の一部は公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成による）、26.3.29

ブータンにおける伝統的石造民家の建築的特徴の解明と文化遺産保護手法への応用

研究組織 友田正彦（副所長）、金井健、淺田なつみ、黒岩千尋（以上、文化遺産国際協力センター）、海野聡（東京大学）、マルティネス・アレハンドロ（京都工芸繊維大学）、福嶋啓人（奈良文化財研究所）、向井純子（立命館大学）、鳥羽瀬公二（日本伝統建築技術保存会）、Yeshi Samdrup、Tashi Wangchuk、Ugyen Dorji、Sangay Choden（以上、ブータン内務省文化・国語振興局）

目　　的 **本研究は、ブータンの東部地域に所在する伝統的な石造民家を主な対象として、その意匠、構造、材料、構法等の物理的な特徴の分析と考察を行い、建築形態の伝播や建築形式の変遷、建築技術の発展の過程を明らかにすることを目的とする。さらには、調査研究の成果を、民家建築保存のための価値評価や保存活用計画作成における基礎資料として、ブータンの文化遺産保護実務に還元することを射程に入れている。**

成　　果

1．中部、南部、北西部地域における民家調査

- 5月13日から23日にかけて、東文研職員2名及び外部専門家1名を派遣し、ブータン内務省文化・国語振興局（DCDD）職員2名と共同で、中部トンサ、南部シェムガン、北西部ガサの3県で伝統的民家建築の調査を実施した。このうちシェムガン、ガサについては従来未調査の地域を訪問した。いずれの県においても、事前情報と現地観察を踏まえ、建築年代が古いと思われる民家や特徴的建物を抽出し、実測や家人への聞き取りを含む詳細調査を行った。

　シェムガン県では、支配階層に属する石造民家1棟を中心に調査を実施した。同県の南部地域はインド国境に近く、この建物でも石積壁の構築にベンガルの職人の参画が伝承されるなど、建設技術の面でも興味深い事例を収集することができた。また、標高の低い亜熱帯地域のため、竹や木を用いた木造軸組構造の高床民家がみられるなど、中央ブータンとは大きく異なる建築文化が存在することも確認できた。

　一方、ガサ県は標高の高い山岳部で人口も希薄な地域だが、県庁にあたるゾン（城郭）に近接して、それに類似する非常に分厚く堅牢な石積壁をもつ古民家が存在し、その詳細調査を行った。後世の増築や一部の廃墟化を経ているものの、当初の姿を考察することがかなりの程度可能であり、伝承の通り相当に古い時期の建築と想像されることから、さきの物件とともに、早急に保存のための措置を講じることが望まれる。

　ブータンの伝統的民家は、首都ティンプーが位置する西部地域では版築造、東部や標高の高い北部では石造が支配的で、東西の境界は中部ブムタン県付近にあることがこれまでの調査で明らかになっている。トンサ県では双方の構法がみられ、今回は版築造と石造各4棟のほか、両者の混構造である1棟を調査した。

　こうした構法の違いは、地形や自然資源、あるいは材料調達や技術者の問題、各家の家格や社会的地位など、さまざまな条件によって規定されると考えられ、今後、ふたつの構法の所在範囲や併存のあり方を詳しく調査することで、民家の建築構法の変遷や伝播について更なる手がかりが得られることを期待している。

2．その他

- 首都ティンプーのDCDDにて、同局が若手職員を対象に実施する研修プログラムの一環として、日本における建築遺産保存の取り組みや、遺産価値評価における国際的な変遷に関する講義を行ったほか、現地調査後には同じく若手職員に対する成果報告会を開催した。
- 前年度に東部地域の2県で行った民家調査の成果を日本語でまとめた概報を作成、刊行した。
- 当初の計画では秋頃に再度の現地調査を実施するとともに、ここまでの調査成果を総括する現地セミナーを開催する予定であったが、DCDD側の事情により年度内に派遣を実施できなかったため、研究期間を1年間延長することとした。

発　　表

- 友田正彦、金井健、マルティネス・アレハンドロ、福嶋啓人、海野聡、向井純子：「ブータンの伝統的民家における上階への動線について」 日本建築学会大会学術講演会　25.9.10
- 金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子：「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価　その 3　顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」 日本建築学会大会学術講演会　25.9.12

刊行物

- 『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査　2024年春調査　概報』東京文化財研究所　26.3

日本戦後芸術のアーカイブ構築と学術的方法論の研究：三つのケーススタディをもとに

研究組織 橘川英規（文化財情報資料部）、三上豊（客員研究員）、平澤剛（明治学院大学）、半田滋男、細谷修平（以上、和光大学）

目　的 本研究では、東京文化財研究所にすでに収蔵されている戦後芸術の資料アーカイブズ、画廊やアートスペースなどの組織のアーカイブズ、作家個人のアーカイブズといった大きく三つに分類される資料群を対象とし、その調査分析、修復保存、機関への収蔵手続き、デジタル化、データベース作成と公開など一連の作業を行う。そして、そのプロセスを公開しながら、日本の戦後芸術資料のアーカイブとその活用による学術的方法論の新たな可能性を提起していく。

成　果

- 本研究の第2年目では、民間組織が保管する資料群として、引き続き東京画廊アーカイブズの調査を行い、その活動記録の整理・分析を進めた。アート・スペース虹などの戦後美術の重要な拠点の資料の調査・リスト作成を進め、比較検証し、各組織の活動の特異性と横断性を明らかにした。また、作家や関係者への調査を実施し、資料との照合を進めた。

　さらに、公的機関や民間組織・遺族・関係者が保管する作家個人の資料群として、松澤宥や中村宏、石子順造、山根貞男のアーカイブズの調査を実施。また、文化財情報資料部研究会「作家資料はどう生き続けるか」(26.2.17) で、県立長野図書館「信州デジタルコモンズ」担当者・槌賀基範氏を招聘、地域資料デジタルアーカイブの構築・運に関する情報交換を行った。また瑛九を研究する民間グループによる作家顕彰に関するシンポジウムに参加し、アーカイブズの学術的活用に関する意見交換を行った。また戦後美術における最重要メディアであった雑誌『美術手帖』編集長・宮澤壮佳旧蔵資料の調査・分析を進めた。

　これらの成果を踏まえ、第3年目はシンポジウムを開催し、国際的ネットワークの構築を進め、日本の戦後芸術研究の基盤形成に寄与することを目指す。

調　査

「マルセル・デュシャン＋松澤宥」展、10.3、長野県立美術館（三上）／上甲ミドリ展、26.1.23、富山県立美術館（橘川）／「中村宏：時代錯誤のその先へ」展、26.2.3、2.10、静岡県立美術館（橘川［2.3］、三上［2.10］）／「プラカードのために」展、26.2.4、国立国際美術館（三上）／「かみ派」、26.2.21、長野県伊那文化会館（橘川）

発　表

- 橘川英規：「資料をめぐる多層的な循環：松澤宥旧蔵資料の継承と活用のダイナミズム」第8回文化財情報資料部研究会「作家資料はどう生き続けるか：美術アーカイブズの「残す」技術と「活かす」実践」　東京文化財研究所　26.2.17
- 橘川英規：「作品・資料をめぐる多層的な循環：「瑛九継承」のダイナミズム」瑛九へのオマージュ 2026　変化する世界と新たな価値の想像展 開催記念シンポジウム（主催：「瑛九へのオマージュ展」実行委員会）埼玉県立近代美術館　26.3.8



宮澤壮佳旧蔵資料


研究会「作家資料はどう生き続けるか」(2月17日)

染織文化財における繊維・染料の科学的同定方法の確立と保存修復情報拠点の構築

研究組織 早川典子、一宮八重（以上、保存科学研究センター）、菊池理予（無形文化遺産部）、石井美恵（佐賀大学）、佐藤萌（東京国立博物館）、緒方規矩也、橘洋一、廣岡青央（以上、京都市産業技術研究所）

目　　的 **本研究は、日本における繊維文化財、特に染織品や繊維遺物に焦点を当て、それらを構成する繊維と有機系色材（染料）の、極微量分析と非破壊分析を併用した複合的な同定方法に関する科学的な実証研究を、海外の研究機関と連携をとりながら行い、日本の繊維と色材の情報拠点となる基盤を構築することを目的とする。また、その総合的な成果を実際の文化財修復に活用することを目指す。**

成　　果

令和7年度は、染料および繊維の基礎データを取得することを目的とした。

- 繊維の基礎データとしては、特に植物繊維に焦点を当て、その断面試料を作成し、デジタルマイクロスコープを用いて1000倍～2500倍程度での観察と、紙の繊維同定に用いるC染色液での呈色試験を行った。特に芭蕉布の製造過程による差異を解明するために、製造過程の異なる芭蕉試料を収集し、基礎データ取得を行った。さらに、楮を使用した大布についても同様のデータを取得した。

  また、本科研の前から継続している絹の繊維形状の観察と織組織による絵画の支持体（画絹）の編年を目的に、その計測方法と結果についてまとめ、発表した。

- 染料については、日本の古来からある染料に関連し、染料、標準色素、木綿・絹・羊毛に染色した試料を佐賀大学にて研究分担者が作製した。これらを東京文化財研究所にて、三次元蛍光スペクトル、IR、ラマン分光分析により分析し、データ取得を進めた。

  分担者の所属する京都産業技術研究所では、HPLCによる基礎データ取得を進めた。



写真1 作製した染料試料

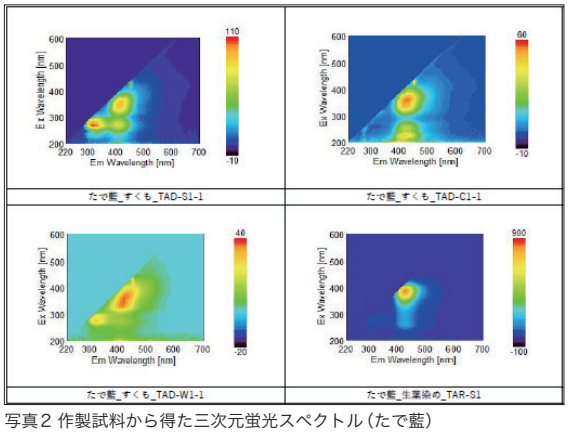


写真2 作製試料から得た三次元蛍光スペクトル（たで藍）

博物館等の文化財収蔵施設における総合的かつ簡易な放散試験方法の開発

研究組織 古田嶋智子（客員研究員・国立アイヌ民族博物館）、犬塚将英、秋山純子、芳賀文絵（以上、保存科学研究センター）、鈴木昌樹（林産試験場）

目　　的 本研究では、研究代表者らが開発中のサンプリングバッグによる放散試験方法を基盤として、空気捕集方法や捕集ツールを含めた総合的、かつ博物館での実施を可能とする簡易な放散試験方法の開発を目的とする。

成　　果

1．サンプリングバッグによる試験方法の検討

今年度は、放散試験時に専用のサンプリングバッグ（以下、バッグ）を固定するための治具について検討した。試案した形状の治具を3Dプリンタにより試作し、操作性や組立性を確認した。また、試作治具を用いたバッグの気密性を評価するため、バッグ内の二酸化炭素濃度を測定した。

治具の形状は、可搬性及び拡張性を考慮し、同一形状のパーツによる組み合わせる構造とした。加えて、重り挿入型の構造についても検討し、試作した。

二酸化炭素濃度測定は、治具の自重のみの場合に加え、追加の重り4kgと8kgを付加した条件で実施した。その結果、自重のみの場合には換気率で0.1 h-1を上回ったが、4kgと8kgの重りを付加した条件では0.1 h-1を下回り、最小では0.02 h-1の値を示した。



固定用治具の一例

2．空気捕集ツールの検討

バッグ内空気の捕集について、少量捕集に適し、また乾式である固相マイクロ抽出法（Solid Phase Micro Extraction）の適用性を検討した。今年度は、性能評価として検出限界値、及びバッグからの空気捕集における再現性を確認した。

3．聞き取り調査の実施

全国の博物館や研究機関における化学物質の課題や材料試験（放散試験）の実態を把握するため、資料保存担当者及び研究者を対象に聞き取り調査を実施した。今年度は、対象となる博物館1館において調査を実施した。調査では、具体的な聞き取りと併せて基礎的データの収集を目的としてヒアリングシートを作成し、各設問に対する回答を記入の上、提出いただいた。

行政官と文化財保護の関係史を拓く：建築担当技官が擁する諸資料の集合とアーカイブ化

研究組織 金井健、淺田なつみ（以上、文化遺産国際協力センター）、鈴木智大、髙野麗（以上、奈良文化財研究所）、黒坂貴裕（八戸工業大学）、西川英佑（関西大学）

目　的 **日本の文化財建造物の保護は、文化財保護法のもとで文化財の対象や保護の措置を暫時拡大し、大きな発展を遂げてきた。本研究では、東京及び奈良の両文化財研究所に所蔵されながら十分に活用できていない文化財建造物保護行政実務を担った技術官僚が残した資料の史料的価値に着目し、同資料群のさらなる拡充と包括的かつ汎用性の高いアーカイブズへの再組成を通じて、我が国の文化財保護に対する正確な理解を醸成する前提となる認知の基盤形成を目指す。**

成　果

1．対象資料の所在確認と収集

文化財保護委員会及び文化庁文化財保護部（後の文化財部）で建造物課長を務めた建築担当技官12代・11名について網羅的に対象資料の所在確認を行った。

課長名	対象資料の所在
1）関野克	東京文化財研究所、博物館明治村
2）服部勝吉	東京家政学院大学
3）関野克	東京文化財研究所、博物館明治村
4）日名子元雄	個人、滋賀県教育委員会
5）伊藤延男	東京文化財研究所、武蔵野大学
6）鈴木嘉吉	奈良文化財研究所
7）工藤圭章	不明
8）吉田靖	奈良文化財研究所
9）宮澤智士	個人
10）村上訒一	個人／処分済
11）亀井伸雄	個人／処分済、東京文化財研究所
12）苅谷勇雅	個人

関野克資料の博物館明治村所蔵分については、行政・研究関係の資料を選別したうえで、6月に当研究所で寄贈を受けた。服部勝吉については、教授を務めた東京家政学院大学に資料が寄贈されたとされているが、後継者である橋本文雄及び服部文雄に関係する資料は確認できたものの、服部勝吉本人に関する資料は確認できなかった。日名子元雄については、戦前の保存行政に関する資料を個人が保管しており、滋賀県教育委員会で調査されたが、戦後の保護行政や研究に関する資料は確認できていない。宮澤智士以降については、個人保管資料は研究関係が中心であり、行政関係の資料は、現地指導・調査等の際に撮影された写真を除いて保管されていない。このうち宮澤智士資料は6月、個人宅において対象資料の選別と収集（借用）を行った。なお、亀井伸雄については所長時代の研究資料が当研究所に未整理で保管されている。このほか、宮本長二郎、大和智、村田健一の各個人保管の研究資料について収集（借用）を行った。

2．収集資料の整理とデジタルアーカイブ化

ウェブサイトでのデータベース公開を前提に、共通のデジタルデータ仕様及び資料整理台帳（Excel形式）を作成し、収集資料の整理及びデータ化（PDF及びTIFF形式）を進めた。データ化は、本年度は昨年度着手済の伊藤延男資料を中心に進めるとともに、博物館明治村寄贈分の関野克資料についても資料整理と並行して行った。さらに、経緯は不明であるものの当研究所に保管されていた天田起雄の写真資料についてもデータ化を行った。

3．研究成果の発表・報告

関野克資料及び伊藤延男資料に収録された行政関係の一次資料を用いて、我が国の文化遺産保護の国際関係黎明期における建築遺産の保存修復理念に関する考察を行い、その成果を日本建築学会計画系論文集に投稿した。

論　文

- 金井健：「ベニス憲章の邦訳にみる日本における建築遺産保存修復理念の言語化とその理解」『日本建築学会計画系論文集』（第91巻第846号　掲載見込み）



文化財保護委員会初期の指定候補建造物調査（1955（昭和30）年頃）右から2人目が伊藤延男氏　伊藤延男資料（分類 PH102）

占領期の文化財保護に関する研究 ―GHQの博物館概念と博物施策の展開―

研究組織 境野飛鳥（客員研究員）

目　的 本研究では、第二次世界大戦後の占領期にGHQの専門家が自国の博物館制度の認識を背景に、当時の日本の博物館の総体を捉えようとしていた事実に着目し、GHQの目から見た日本の博物館を探り、巨視的な視点から占領期の博物館概念及び博物館施策を明らかにする。

成　果

本研究では、国立国会図書館憲政資料室の『GHQ/SCAP文書』および戦前戦後に文化財保護に尽力した日本人専門家の資料の調査も幅広く実施し、占領期の博物館（美術館を含む）施策や文化財保護行政に関わる新たな資料の発掘を試みた。以下に分析した資料の内容を一部紹介する。

A. シャーマン・E・リーの講演録にみる日本の博物館像

1946（昭和21）年12月18日にシャーマン・E・リーが阪神地域の美術品収集家に向けて、講演を行った記録が残されている。講演録からは、リーが「民主的な博物館」の構想を掲げていたことがうかがえる。リーは、当時のボストン美術館を規範として引用しつつ、博物館が単なる貯蔵庫ではく、重要な知的拠点として機能すべきだと主張している。また、当時の日本の博物館に対しては、特定の階層の人に利用が限定されていること、美術品の保存に特化していること、学芸員等の専門家の不遇な状況などを課題として挙げ、公衆への公開と教育を重視する必要性、美術品を保管する建物や施設の要件、学芸員の専門性に伴う処遇改善などに言及している。

B. チャールズ・F・ギヤラガーの「地域文化プログラム」にみる博物館像

1946（昭和21）年から1947（昭和22）年にかけて、チャールズ・F・ギヤラガーは『PRELIMINARY STUDY OF PROJECTED MUSEUM FACILITIES UNDER REGIONAL CULTURE PROGRAM』の中で、全国に分散化された博物館体制を構築することに言及している。構想では、①国全体の美術史を反映する国立博物館、②地域の民俗文化を重視する地域博物館、③主題別の地方・専門博物館の三層に博物館を分類している。特に、地域博物館については、単なる人口規模だけでなく、地理的な利便性、歴史・文化的な独自性、そして既存の博物館集中エリアとの重複回避を考慮し、全国を８つのブロックに分け、札幌・仙台・新潟又は長野・名古屋・神戸・広島・高松・福岡などを候補地として挙げている。

C. GHQによる東西の博物館の現況調査

1946（昭和21）年から1947（昭和22）年にかけて、CIE (Civil Information and Education Section) の分析・研究部（Analysis and Research Division）では、東西の博物館の大規模な現況調査を実施し、1947年（昭和22）４月には『MUSEUMS AND ART GALLERIES IN THE TOKYO METROPOLITAN AREA』と題された報告書、同年６月には『MUSEUMS IN THE KYOTO-NARA-OSAKA AREA』と題された報告書が発行されている。前者は東京圏の27の博物館の関係者に対して、後者は関西圏の26の博物館および東山御文庫を中心とした京都の皇室諸貯蔵庫の関係者に対して、インタビューした内容で構成されている。両報告書を読み比べていくと、当時の東西の博物館のおかれていた状況の違いが読み取れる。特に、収蔵品の保管状況について、東京圏では建物も収蔵品も戦禍を被っているものが多くあった一方で、関西圏では戦争の被害は直接的なものではなく、戦時中の疎開・返還過程での損傷が問題となっていた事実が確認される。また、東京圏では多くの施設で防火設備や防虫剤（ナフタリン等）が不足していた一方で、関西圏では防虫剤での処置が行われていた実態が浮き彫りとなった。

発　表

- Asuka Sakaino: Protecting Cultural Heritage in Occupied Japan: Unraveling Museums from GHQ's Perspective, 2026 AAS Annual Conference, 2026.3.14

染織技術史に関する研究
―原材料の国産化に焦点をあてて―

研究組織 菊池理予（無形文化遺産部）、中村弥生（文化学園大学）

目　的 **本研究は、従来の「染織史」研究を、我が国における染織品の「原材料の加工技術」やその生産地に関する情報を関連させることで再考し、新たに「染織技術史」として構築することを目的とする。そこで、染織品の国産化が進んだ近世に注目し、我が国における染織品の原材料の加工技術と染織技法の関わり、その染織技法の我が国における受容（利用）を検証することで、我が国の「衣生活」について考察する。**

方　法

本研究では、染織品を制作する際の原材料の「加工技術」に注目し、以下の項目について調査研究を行う。

①我が国における原材料の生産工程と産地に関する調査。②現在に受け継がれた染織技術における原材料加工技術、及び利用に関する調査。 ③近世染織品に利用されていた技法、及び原材料の物性的特徴と加工技術の調査。④近世おける衣生活と染織技法の関わり。以上を踏まえたうえで、本研究では上記①②③④の項目につき、1）文献調査、2）現地調査、3）作品調査の方法によりアプローチする。

成　果

1．文献整理の継続

研究３年度である令和７年度も昨年度より引き続き、文献調査を中心として研究を進めた。

昨年度より、平成27年度～平成30年度科学研究費若手研究A（課題番号　15H05379）「染織技術の伝承に関する研究―材料・道具に焦点をあてて―」（研究代表者　菊池理予）で整理を行った都道府県史に記載された染織技術関連の項目について特に各地域で生産されていた原材料の記述に着目して再整理に着手した。

前回の記載情報の整理では、都道府県史（263冊）から染織関連項目の抽出を行い、記述（5,115件）を内容ごとに分類した。その際の記述内容の分類は、県番号、出典、出版年、開始頁、終了頁、繊維（絹・麻・木綿等）、染織工程、物流、技術伝播、特産品、日用品、キーワード・備考、時代、本文概要の項目で整理した。作業は、この記述が、技術伝播や流通の基礎情報となることを考慮し、記載された染織技術の生産目的が換金物であるのか、実用品であるのか、または藩などの保護を受けた特産物であるのか、記載情報から原材料や制作物の入荷・出荷の情報がないか等を留意して抽出をした。前回は技術の伝播に注目したため、技術交流や物流などの情報について焦点を当てて整理を行ったが、今回は、特に「その地域で作っていたもの・やっていたこと」や「どんな繊維や技術・道具（製法）、製品が入り込んでいたか」、「その地域で生産しているもの（原材料）」について詳細に抽出を行うこととした。

７年度は８道県（北海道、青森県、岩手県、秋田県、山形県、宮城県、福島県、茨城県）について再整理を行った。本年度は、29都府県（栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、静岡県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県、鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県、徳島県、香川県、愛媛県、高知県、福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県）について再整理が完了した。

８年度は10県（新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、愛知県、滋賀県、三重県）の整理を行い、都道府県を通じての分析を行う予定である。

2．日本家政学会へのエントリー

2026（令和8）年５月に開催される日本家政学会に「都道府県史から見た染織技術に用いられた原材料の国産化に関する考察Ⅰ」と題して発表を予定している。

本発表では、本年度までの都道府県史情報の再整理のうち、中国・四国・九州・沖縄地方についての分析結果の報告を行う予定である。主な分析結果は、以下である。

① 原材料の国産化に関する記述は繊維・染料・媒染剤の三類型に整理された。繊維では木綿、養蚕（家蚕・野蚕）、麻（苧麻・大麻）のほか、葛・楮・芭蕉など靭皮・葉鞘繊維に関する繰糸・製織などの加工技術が記されていた。染料では紅花及び藍の栽培・加工技術に関する記述が多い一方、特に沖縄では地域固有の植物染料が確認され、地域性の強い染織文化が示唆された。媒染剤では明礬の製造がみられた。

② 繊維技術には時代的推移が認められ、中世には麻と養蚕が中心であったのに対し、近世以降は木綿が広く普及し、近代には養蚕や繰糸に関する記述が増加した。これらの技術は地域に根づき、近世以降には特産物（換金物）や自家用として生産された例も確認される。

８年度以降は、まだ再整理の終わっていない10県を加えて、全国的傾向と地域差のさらなる検討を行う予定である。

古典的膠及び墨に関する文化財修復材料及び書画制作材料としての材料学的体系化

研究組織 宇髙健太郎（客員研究員）

目　　的 古典的膠について、物理化学的性質、他材料との相互作用、諸用途適性等の体系化を進める。膠は伝統的な高分子複合材料であり、特に一部古典的膠はその特性から過年度研究成果が文化財修復等にも活用されている。状況対応性が高くかつ効率に優れる材料の製造方法を探り、持続性のある活用システムの確立を検討する。また膠の代表的応用材料である墨について、諸原料の性状分析等とともに、製造条件が製品の性能等に及ぼす影響の検証を多角的に進める。

成　　果

墨は煤及び膠を主原料として作られ、東洋書画等において古来広く用いられてきた象徴的な材料である。煤は諸燃焼条件によって粒子径や凝集構造、化学的特性が多様であり、またそれらは東洋伝統書画において墨の色相や質感等の本質的規定因でもある。当該材料は主にアモルファスカーボン/疑似グラファイトからなるが、表面にヒドロキシ基やカルボキシル基等の極性官能基も偏在しており、それらは荷電傾向や親水性/疎水性と関係し、墨液において分散剤等との相互作用にも深く関わっていると考えられる。また、膠はゼラチンを主成分とする複合材料である。好適な膠の供給安定化や調製効率化に関し、製造に際して散発的に生じる暗色化の機構解明及び解決が課題となっている。反復的再現実験を通して当該現象の因子は若干種あることが分かっており、うち一種に関しては解決方法が過年度研究を通して確立、実用化されている。

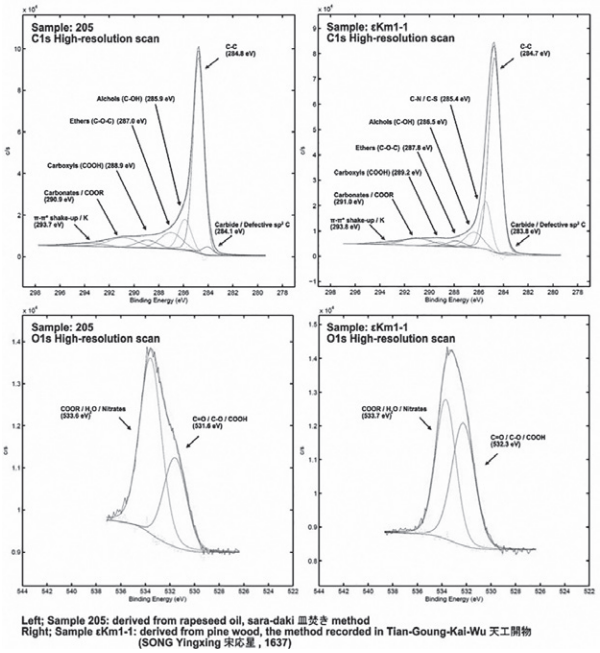
墨及び煤等について走査型電子顕微鏡（SEM）及びレーザー回折散乱（LD）式粒度分布測定装置を用いた粒子径及び凝集体規模測定を進めた。また煤試料を調製乃至確保、選定等した。それらに関するＸ線光電子分光分析（XPS）結果の一部を図１に示す。煤試料に関して、原料や他製造条件によって煤粒子表面の構成元素や結合状態に一定の差異が認められた。またさらに、複数製造単位の古典的膠を諸条件において調製した。正常製造単位の原料残渣及び暗色化の生じた製造単位の原料残渣についてエネルギー分散型Ｘ線分析（EDX）を行い比較した結果、S K α（2.307 keV）、Mn K α（5.894 keV）、Fe K α（6.398 keV）、Cu K α（8.040 keV）等の検出強度に有意な差異は認められず、製造に際して散発的に生じる暗色化に関して金属化合物や錯体等の関与の蓋然性は低いことが窺われた。現象発生状況を併せ踏まえると、何らかの微細な有機成分、特に微生物由来成分等が関与している可能性が示唆される。今後さらに質量分析や核酸分析等を検討のうえ、未解決因子の同定ならびに製造条件最適化・安定化指標の確立を図りたいと考えている。

発　　表

- 宇髙健太郎：「墨用煤の性状及び古典的膠の製造方法改良に関する研究」 文化財保存修復学会第47回大会　於 富山国際会議場　25.6

講　　演

- UDAKA Kentaro:「墨與膠的科學與實踐 / Science and Applications of Inkstick (Sumi/ Mo/ Meok) and Animal Glue」シンポジウム 東洋傳統書畫的技法材料與裝潢 (Techniques, Materials, and Conservation of Traditional East Asian Calligraphy and Paintings). 於 國立臺灣師範大學（台湾 台北） 25.8
- 宇髙健太郎:「伊藤若冲作品の技法材料及び機構等に関する概説」 膠文化研究会第17回公開研究会「膠・滲・暈―若冲から近代日本画まで―」 於 東京藝術大学（予稿集 pp. 7-13） 25.11
- 宇髙健太郎:「墨及び膠の実体と活用」 於 嵯峨美術大学（配布資料 pp. 1-32） 25.12



Left; Sample 205: derived from rapeseed oil, sara-daki 皿焚き method
Right; Sample εKm1-1: derived from pine wood, the method recorded in Tian-Goung-Kai-Wu 天工開物 (SONG Yingxing 宋応星 , 1637)

図１ 煤試料 XPS 分析結果

磨崖仏で過去に行われた保存対策の効果に関する定量的研究

研究組織 朽津信明（保存科学研究センター）、安倍雅史（文化遺産国際協力センター）、脇谷草一郎（奈良文化財研究所）

目　　的 **文化財に対して過去に行われた保存対策の効果を検証することは、次の保存対策や他の様々な文化財の保存を考えていく上で重要な情報となる。本研究では、磨崖仏に対して過去に行われた保存対策の効果を定量的に議論することを試みる。覆屋構築や樹脂含浸処理などの保存対策が行われる前と行われて以降の劣化速度を定量的に比較検証することにより、それぞれの保存対策有効性を検証し、今後の保存対策を検討する際にも貢献することを目的とする。**

成　　果

１．磨崖仏の経年劣化に関する計測と保存対策の評価

令和６年度に計測を行った福島市指定史跡・名勝である岩谷観音と須賀川市指定史跡・和田大仏において取得したデータを解析することで、両磨崖仏の劣化について検証した。その結果、約30年前に樹脂含侵処理が行われた岩谷観音において、僅かこの５年の間に15㎜以上の劣化が進行した部分が存在することが確認された（図）。これに対して保存処理がこれまで全く行われていない和田大仏では、データの得られた2021（令和3）年と2024（令和6）年との間に15㎜以上の差異は検知することができておらず、そこまで大きな劣化は進行していないと判断された。この両者では、造られている岩盤が異なり、現在の環境条件も異なっており、像の形状や劣化の検証時期も異なっているため、「劣化が検知できたかどうか」を単純に横並びで比較することはできないが、樹脂含侵のような保存対策を行えば劣化しないわけではないし、保存処理を行わなければ必ず劣化が進行するというわけでもなく、その他の様々な条件を加味して議論されなければならないことを意味している。

この他、過去に樹脂含侵処理と覆屋の改築による保存対策が行われた大分県指定史跡・岩屋寺石仏で計測を行い、過去に得られていたデータを取得して比較検証を行った。その結果、2023（令和5）年取得のデータと2025（令和7）年の本研究によるデータとの間に差異が検知されており、過去に保存対策が行われた磨崖仏で僅か２年で劣化が進行していることが明らかにされた。その一方で、柱穴内部に陰刻されている天文15年の修理銘については、現時点でも極めて良好に残存していることが判明し、劣化に対しては環境条件の影響が非常に大きいことが確認され、このような観点からさらに解析を進めている。

２．関連石造物の保存対策に関する調査と情報収集

磨崖仏に限らず、屋外石造文化財で過去に科学的な保存対策が行われた事例について調査を進めた。令和７年度の調査対象は以下である。

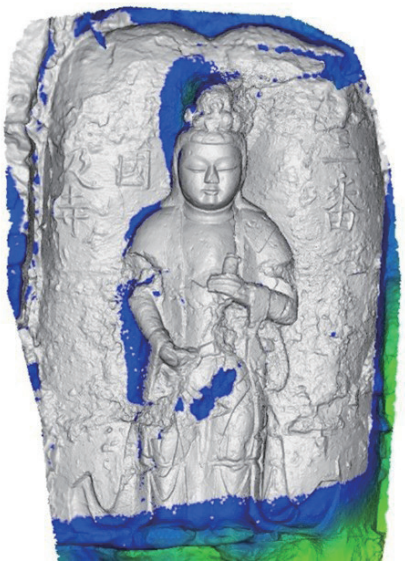
過去に合成樹脂含侵処理が行われた、香川県指定有形文化財である三豊市の勝造寺層塔、未処理の屋外石塔である神谷神社層塔、過去に合成樹脂を用いた保存処理が行われた穴水町の国指定重要文化財・明泉寺五重塔、などである。これらについては現状の形状を取得するとともに、可能な範囲で過去の形状情報の取得も進めており、劣化の評価を試みている。

論　文

- 朽津信明、鈴木琴那：「三次元計測に基づく明泉寺五重塔の石材伝承経緯の検討」『保存科学』65　pp.129-138　26.3

発　表

- 朽津信明、鈴木琴那：「金沢市内に伝わる石材と穴水町・明泉寺五重塔石材との形状比較」　日本文化財科学会第42回大会　九州大学伊都キャンパス　25.7.5、6



福島市・岩谷観音の劣化箇所
2021（令和 3）年と 2024（令和 6）年の間に5 mm 以上の差異が検知された部位を着色表示

一般室を使用した文化財収蔵施設運用法に関する研究

研究組織 芳賀文絵（保存科学研究センター）

目　　的 **文化財収蔵を目的としない一般室の環境と被災文化財資料、それぞれのリスクと限界を明らかにすることで、緩やかな環境制御を行うためのガイドラインを得るため、一般室における保存環境の温湿度特徴の抽出、一般室の保存環境に適した資料保存方法のあり方についての検討することを目的としている。一般室における資料保管に関する課題を明らかにし、より現実的な文化財保存のための指標を得ることを目指す。**

成　　果

災害により被災した文化財を、一時的に文化財収蔵を目的としない建物や部屋（以下、一般室）に保管する場合、通常の博物館・美術館施設と比較して、厳密な温湿度管理の実施が困難である。本研究では、これらの一般室において許容可能な温湿度条件およびその変動幅を明らかにするとともに、文化財の管理者が現実的に実施可能な緩やかな環境制御により、必要十分な収蔵環境を確保するための指針の構築を目的としている。

本年度は、これまでに実施してきた調査結果を整理・統合し、学会等において成果発表を行った。また、得られた知見を基に、より実践的な環境制御手法の検討に向けた発展的な調査を実施した。

1．廃校等を利用した文化財収蔵環境に関する調査

文化財収蔵を目的としない建物・空間の環境特性を把握するため、廃校施設を活用した収蔵環境の温湿度調査データについて、複数施設間の比較解析を行い、建物特性に起因する温湿度挙動の特徴を整理した。これにより、一般室特有の環境変動傾向やその影響要因についての知見を深化させた。

さらに、これらの実測結果を踏まえ、恒温恒湿槽内に模擬的な室内環境を再現し、その中に木質材料を設置した場合の温湿度応答について検討を行った。特に、木材による吸放湿挙動に着目し、空調設備を用いない環境における湿度緩和効果およびその限界について基礎的なデータを取得した。

本調査は、沼津市教育委員会、沼津市歴史民俗資料館、高山市教育委員会、飛騨高山まちの博物館、高知県文化生活スポーツ部歴史文化財課県史編さん室の協力のもと継続して実施している。

2．被災文化財の保存環境に関する調査

被災文化財の保存におけるリスク評価の一環として、被災資料から発生する揮発成分の調査を継続的に実施し、それらが周辺の文化財材料に与える影響について検証を行った。

具体的には、被災資料とともに各種材質試験片を設置し、揮発成分による劣化促進の有無を評価する試験を実施した。また、川崎市市民ミュージアムの協力のもと、水損した紙資料からの揮発成分の分析を継続し、被災資料特有の放散特性およびその時間変化に関する知見を蓄積した。

発　　表

- 芳賀文絵ほか：「水害による被災紙資料の揮発成分と臭気対策について」日本文化財科学会第42回大会　25.7.5-6
- 芳賀文絵：「水害により被害を受けた文化財からの揮発成分とその影響」2025年度室内環境学会　学術大会　25.12.10-11

行政映画とその関連資料の整理と管理の支援

研究組織 山永尚美（文化財情報資料部）、佐藤洋（共立女子大学）

目　　的 **行政にまつわる活動、出来事、人物等を克明に記録した映像資料は、文字で書かれた資料とは異なる歴史的・証拠的価値を持つという点で、後世に残されるべき歴史資料であるといえる。本研究は、①かつて作成された行政活動にかかわる映像資料とその関連資料の所在調査を行い、②それらを長期的に管理・保存して行くための体制構築を支援することを目的とする。**

成　　果

最終年度にあたる令和7年度は、研究開始当初より計画に含めていた英国文化機関の訪問調査とともに、これまでに収集・整理した情報のとりまとめと映画関連資料の目録化を遂行した。

英国では、複数の文化機関において、政府映画の整理・管理の在り方にまつわる調査を実施した。調査は現地視察及びヒアリングを基本的な手法とし、あわせて政府映画（government films）を保存する文書館ないし関連文化機関に関する文献調査も実施した。調査対象とその内容は以下のとおり。

- 10月21日　ロンドン市公文書館　メディアテークにおける音声・映像資料の管理方法について、主として情報登録システム及び専門職人材の体制に関してヒアリングを実施した。
- 10月21日　大英図書館　音声・映像資料部門において、音声資料とその関連データの管理方法についてヒアリングを実施した。
- 10月22日　イギリス国立公文書館　英国政府によって製作された映画にかかわる公文書の調査を実施した。具体的には、第二次世界大戦後における同館の前身パブリック・レコード・オフィス（PRO）から英国映画協会及び帝国戦争博物館への政府映画の移管経緯を記した文書群（PRO文書1、52、54、85）について文献調査を行った。
- 10月24日　ノーフォーク・レコードオフィス　州公文書館における文書資料の管理・保存・修復の体制とともに、サウンド部門での音声資料の整理・管理方法（特にメタデータ記述及び情報登録システム）についてヒアリングを実施した。
- 10月24日　イースト・アングリア映画アーカイブ収蔵庫の視察と映像資料の整理及び管理方法についてヒアリングを実施した。

本研究では、これまで日本と米国を主たる対象として、政府映画の管理体制について調査・報告を重ねてきた。これに対し、本年度に実施した英国調査を通して、第二次世界大戦後の同時期における他地域への研究対象の拡張を可能とする有益な知見を得ることができた。

またノーフォーク・レコードオフィスの調査では、文書館における音声・映像資料の整理手法に着目した。その結果、視聴覚資料固有の記述規則（たとえば音声資料の場合、国際音声・視聴覚アーカイブ協会（IASA）が発行する IASA Cataloguing Rules など）を参照して作成されたデータを、国際文書館会議（ICA）による史料記述の一般原則 ISAD(G) に準拠した一般文書と同一のシステム内で管理する工夫がなされていることを確認した。これらの実践は、本研究課題にとって、今後の展開可能性を拓く上で重要な示唆を与えるものである。

行政活動にかかわる映画関連資料の整理という課題については、（一社）記録映画保存センターが所蔵する複数の映画関連資料群のうち、かつて岩波映画製作所が作成した制作資料すなわち組織文書に含まれる「作品カード」群の目録化を完了させた。

このカード群は、同社が約半世紀にわたる活動の中で制作した作品の基礎情報を体系的に記録した一次資料である。この手書きカードを一覧表形式で目録化したことにより、同社の映像作品を通時的かつ悉皆的に把握しうる基盤が整備された。

その結果、同社における官公庁系の委託作品は全体の二割に満たないことが明らかとなった。一方で、特殊法人およびそれに準じる公社類については、官公庁側に含めて再検討する余地があり、その場合にはこの比率が現在の数値より高くなる可能性がある。この点については、法人種別や設立根拠法等を考慮したさらなる精査を要することが、今後の課題として残された。

刊行物

- 井出竜郎、井上いぶき、藤井萌、山口まどか、湯地ふたば、山永尚美：「岩波映画製作所『作品カード』資料目録」一般社団法人記録映画保存センター（ウェブ目録、URL: https://kirokueiga-hozon.jp/search-library/sakuhin-search）26.3

鎌倉時代仏教彫刻・絵画の彩色に関する基礎的調査研究

研究組織 米沢玲（文化財情報資料部）、犬塚将英（保存科学研究センター）

目　　的 本研究は、鎌倉時代中期から後期にかけて製作された仏教彫刻の彩色の文様パターンや図様の分類を同時代の仏教絵画と比較しながら考察を進め、併せて彩色材料の科学調査を行い、基礎的かつ総合的なデータを蓄積する。調査で得られた考察やデータから彩色の同時代性あるいは地域的な特徴や傾向を分析し、彫刻史と絵画史の研究に新たな視点をもたらすことを目指す。

成　　果

1．絵画作品の調査

研究計画の２年次である令和７年度は、マイクロスコープ（マイクロアドバンス社、DS-100シリーズ）を用いた絵画の表面彩色の調査を実施した。主に鎌倉から南北朝時代に制作された仏教絵画12件について、２回の調査（10月14日、11月18日、於：龍谷ミュージアム）を行い、彩色の顕微鏡写真を撮影。得られた画像から彩色顔料の粒子を観察し、比較検討を進めている。

2．蛍光Ｘ線分析装置を用いた彫刻の彩色調査

2026（令和8）年3月5日、静岡・MOA美術館が所蔵する多聞天眷属像の調査を実施した。調査ではポータブル蛍光Ｘ線分析装置（XRF、Bruker社製、Tracer 5i）によって非破壊で表面彩色の元素分析を行い、併せてデジタルマイクロスコープVHX-8000（キーエンス社製）による撮影を行い顔料の粒子の状態を観察した。MOA美術館の多聞天眷属像は令和６年度に同様の彩色調査を実施した東京国立博物館所蔵の持国天眷属・増長天眷属像と、もともとは一組の彫刻であり、文永四年（1267）の制作であることが分かっている。同様の環境下で制作された彫刻として、元素分析による顔料の特定、顔料の品質等を比較検討する対象として非常に適している。得られたデータを基に用いられた顔料の特定を進めている。

調査には研究分担者の犬塚将英が参加したほか、西田典由、片渕奈美香、手島菜摘（以上、保存科学研究センター）の協力を仰いだ。

織豊時代における公武の知的交流についての研究 ―本草学から絵事へ

研究組織 小野真由美（文化財情報資料部）

目　的 織豊時代（16世紀後半）の公家日記には、同時代の動向と公武の文化交流が記録されている。たとえば『時慶記』には、草花の贈答や鑑賞、連歌絵や演能などの交流がみられ、そのころ花木の表象が重要な役割を果たしたことがわかる。障壁画のみならず建築装飾にも草花の意匠が多用され、その背景には公家文化に早くから受容されていた本草学が想定される。本研究では公家日記を通読し、公武の知的交流における草花や本草学の記述と視覚芸術への影響を考察する。

成　果

1．本研究の前提

本研究は、織豊期における公武の知的交流のなかで形成された「草花」という表象に焦点を当てるものである。今年度は第二段階として、中国本草学書、虫歌合図巻、四季草花小禽図屏風を対象に、近世初期における「自然」の言語化と視覚化が交わる局面を考察した。草花図や本草学書、詠歌作品が公武の知的交流のなかで共有され、新たなジャンルを形成していった可能性に着目し、木下長嘯子をはじめ、九条家、藤堂家・黒田家・細川家・津軽家等の文化的動向を視野に入れ、花・虫・詩歌といった主題が文化的コードとしてどのように機能したのか、その様相の解明を試みた。

2.「四季草花小禽図屏風」調査

東京国立博物館において「四季草花小禽図屏風」を調査した。本図は巨樹を配さず草花を前景化する草花図屏風の系譜に属する作例であり、昨年度調査を行った米国メトロポリタン美術館本ときわめて密接な関連を有する。本図については、ベティーナ・クライン氏により主題を「浄土の庭」とみなす解釈が提示されているが、本調査ではこれに加え、本草学的視点および中国草虫図との図像的連関に着目し、主題形成の背景について再検討を行った。

3．イタリア文明博物館所蔵「虫歌合図巻」の調査

文明博物館において、17世紀初頭の作例である「虫歌合図巻」を調査した。本図は、草花と擬人化された昆虫を描き、和歌を添える構成をとるもので、「四生歌合」の一例に位置づけられる。古代以来、花と虫は詠歌およびやまと絵の主題として選択されてきたが、本調査では、とくに16世紀末から17世紀末にかけての展開に注目し、詩歌と絵画の関係、および本草学的関心との接点という観点から考察した。

4．中国本草学書の視覚芸術への影響に関する調査

東京国立博物館において、中国で刊行され日本に伝来した本草学書の調査を行った。とりわけ挿図を伴う本草書は、受容当初より日本の視覚芸術に影響を与えた可能性が高い点に留意した。本調査では、中国本草学書が植物認識の「コード」として機能し、絵画制作においても一定の役割を果たしていた側面について検討を加えた。

5．公家日記の調査およびデジタルテキスト化

昨年度に引き続き公家日記の精査を行い、植物に関連する記事を抄出のうえデジタルテキストデータ化した。とくに『言経卿記』より有意義な記事を複数抽出することができ、近世初期における植物認識と文化実践を具体的に示す資料を得た。

6．研究成果の刊行

本調査の前半部分を論文集として刊行した。公家日記・織豊期の庭園資料・本草学書受容の相互関係を整理し、近世初期における自然観と視覚表現の関係を再検討した。

調　査

- 5月　国内・東京国立博物館
- 10月　イタリア・文明博物館
- 11月　国内・東京国立博物館

論　文

- 小野真由美：「長谷川派における白藤という表象に関する一考察」『科研報告論集 織豊期における公武の知的交流―本草学から絵事へ―』第Ⅰ巻　26.1
- 小野真由美:「西洞院時慶の庭―草花をめぐる知の連環を読む」 同上
- 小野真由美:「安土桃山時代の本草学」 同上
- Mayumi ONO:「Art, Flowers, and Connoisseurship under the Tokugawa Shogunate: The Cultural Bond between Kanō Tan'yū and Lord Nagai Naomasa」DOI: 10.5281/zenodo.15817137　25.7

樹木を素材とする編組品に関する民俗学的基礎研究 —広葉樹ヘギ材の籠を中心に

研究組織 今石みぎわ（無形文化遺産部）

目　的 本研究は、従来「タケ細工の代替品」としてしか評価されてこなかった樹木を素材とする編組品を、「タケ以前」の編組技術を体現するものと捉え直し、研究の乏しい広葉樹ヘギ材による籠類を中心に、近代における伝承の実態と地域性、およびその成立背景となる環境的・社会的条件を明らかにすることを目的とする。これにより、樹木による編組品の技術的・機能的独自性や、文化的・歴史的意義を再評価し、日本列島における編組技術史を再編することを目指す。

成　果

1．情報の集約

広葉樹ヘギ材を中心とする伝統的な籠について、研究協力者とともに、引き続き文献等から全国の事例を収集・整理した。また比較対象としてのマダケの籠について、その歴史的実態（形態や製作技術および普及度合の変遷）を検討するため、中世・近世の絵画資料等の分析を開始した。

2．現地調査

現地調査として、技術伝承者や使用者に対して聞き取り調査を行ったほか、資料館等に収蔵されている民俗資料について、研究協力者とともに調査を実施した。調査地は以下の通りで、広葉樹ヘギ材の籠のみならず、比較のため、他素材（蔓、ササ、タケ、樹皮）の籠についても実態調査を行った。

1. 徳島県那賀町木頭・木沢地区、高知県大豊町・香美市での調査（5月）
2. 石川県白山市、新潟県三条市での調査（6月）
3. 栃木県小山市での調査（6月）
4. 長野県山ノ内町での調査（7月・3月）
5. 岐阜県郡上市での調査（7月・11月）
6. 静岡県静岡市での調査（8月）
7. 秋田県仙北市での調査（11月）
8. 長野県阿智村での調査（12月）
9. 埼玉県ときがわ町での調査（2月）
10. 東京都町田市での調査（2月）
11. 千葉県木更津市での調査（3月）

※このうち広葉樹ヘギ材の籠は1,2,5,6,7,8

3．木籠に関する科学的調査の実施

森林総合研究所との共同研究として、2地域の伝承者より提供を受けたイタヤカエデの適材・不適材に関する力学特性評価を実施した。8年度、その他の編材となる樹種（ミズナラ等）でも同様の実験を行い、樹種選択の背景にある科学的合理性について検討を加える。また8年度実施する木籠とマダケ籠の構造力学的比較に向けた準備として、構造力学の専門家である久保光徳氏の協力を得て、木籠とマダケ籠各1点の3Dデータ取得・分析を実施した。

4．研究会等の実施

(1) 編組品を主題とする研究会「箕の研究会」を東京文化財研究所で実施し、編組品関連の発表や実演を行うとともに、関係者と情報交換をした。

- 箕の研究会特別講座「木材組織の基礎講座と肉眼（ルーペ）観察の実習」参加者23名
  講師：高橋敦（株式会社古生態研究所）
- 第12回箕の研究会（12月12日）参加者12名
  松永篤知「東南アジアの箕とその周辺」
  キム・ヘイン「韓国と日本のコリヤナギ」

(2) 10月に来日したアメリカ人籠職人による「オークによるアパラチアンバスケット講座・実演会」を10月22日に東京文化財研究所で開催。参加者は15名で活発な質疑応答がなされた。

発　表

- 今石みぎわ：「日本列島における木を編む文化—秋田市太平箕を中心に—」「バスケタリーと線状物に関する人類学的研究—植物生態と民族技術に着目して」第2回研究会 国立民族学博物館　25.9.28
- 今石みぎわ：「箕を語る—日本列島の「箕」の文化」「論田・熊無の藤箕製作技術」保存継承活動15周年記念講演会 氷見市立博物館　25.10.4
- IMAISHI, Migiwa: “Japanese Landscapes and Lifeways Reflected in the Baskets in the Dai Williams Collection” Workshop on the Japanese Collection of the Hearst Museum, Part 3, UC Berkeley(リモート開催)　25.11.15
- 今石みぎわ：「明宝における「木籠」の文化—全国との比較を通して」日本民具学会第47回大会 岐阜県郡上市 25.11.9
- IMAISHI, Migiwa: “Human–Nature Relationships and Their Contemporary Significance as Seen through the Baskets of the Dai Williams Collection” Reinterpreting Japanese Collections in Museums: Case Studies from the Phoebe A. Hearst Museum of Anthropology and Beyond, UC Berkeley, USA, 26.1.21

染織品等を対象とした赤外線画像の有効性に関する研究

研究組織 秋山純子（保存科学研究センター）

目　　的 本研究の目的は染織品に使用された彩色材料の面的調査に赤外線画像を適用し、その有効性を明らかにすることである。特に、文化財の中でも素材として脆弱な構造を持つ染織品に対して、非接触かつ低負荷で実施可能な赤外線調査の有用性を検討する。さらに、本研究において赤外線画像からどのような情報が得られるか検証を重ねていくことで、脆弱な文化財に対する科学調査の有効な手段として位置づけ、簡便かつ安全な調査法としての確立を目指す。

成　　果

本年度は5月6日～9日、イタリア・ペルージャで開催された「TECHNART 2025」国際学会および国内学会において成果発表を行った。TECHNARTは文化遺産に対する科学的アプローチを主題とする国際学会であり、今回は、蛍光X線マッピング分析（MA-XRF）や粉末X線回折マッピング分析（MA-XRPD）、ハイパースペクトルイメージング（RIS）などの非接触・面的分析の応用例に加え、機械学習を用いた画像解析、環境に配慮した修復材料の開発など、最新の研究動向が共有された。

香川県指定有形文化財『高松松平家所蔵博物図譜』に用いられた緑色色材を対象として、ハイパースペクトルカメラによる反射スペクトル測定と主成分分析（PCA）を用いた材料分類・推定を試みた研究成果を発表した。その結果、これまでの彩色材料の分析データと統計的手法を組み合わせることで、絵画材料や技法の解明に有効であることが確認された。また、赤外線画像での彩色材料の推定に、より確実性が増す可能性が示された。国内学会では、同歴史資料において、コバルトガラス顔料（スマルト・花紺青）が確認され、その使用法に関する研究成果を発表した。赤外線画像でも群青とコバルトガラス顔料では灰色の濃淡に違いがあることが確認できた。

媒染剤の違いによって、赤外線画像上の見え方に差異が生じるかを検証するため、絹に染料と媒染剤を塗布した試料を用意し、赤外線撮影をした。併せて、ハイパースペクトルカメラで赤外領域の分光スペクトルを確認し、赤外線画像の見え方と比較した。その結果、媒染剤の違いによって赤外領域に差異が生じる可能性が確認された。

発　　表

- Shiren Ki, et al.: Analysis of Green Coloring Materials in the Illustrated Natural History Books owned by Takamatsu Matsudaira family Using Hyperspectral Imaging, International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation 2025.5.7
- 寺島海ほか：「高松松平家所蔵博物図譜に用いられたコバルトガラス顔料（スマルト・花紺青）と青色の用法に関する一考察」 日本文化財科学会第42回大会 25.7.27



図1 「TECHNART 2025」開会式の様子

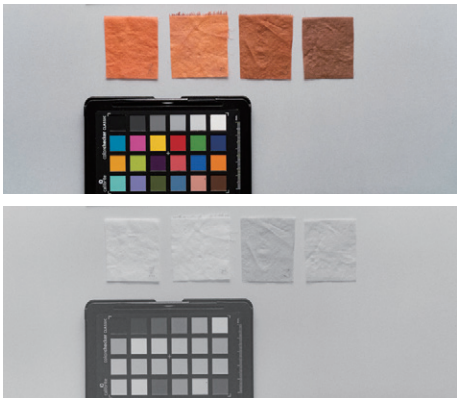


図2 染料と媒染剤を塗布した試料
刈安→媒染剤→茜（上：カラー画像 下：赤外線画像）
媒染剤（左からアルミ、酢処理、銅、鉄）

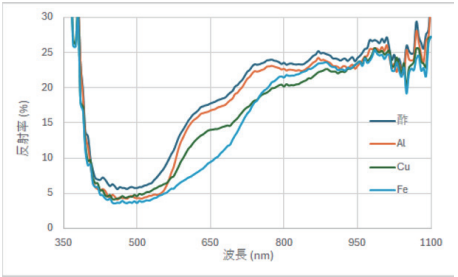


図3 試料の分光スペクトル

漆芸品に与えるクリーニング溶液の影響に関する研究

研究組織 倉島玲央（保存科学研究センター）

目　的 本研究では、油彩画や陶磁器、染織品等の修理時に溶媒やゲルの使用の検討が増えてきた中で、漆芸品修理におけるその有効性とリスクについて、クリーニング前後、および予後における視覚的変化と物性に着目し、科学的に検証することを目的とする。検証した結果については、漆芸品の修理技術者と情報を共有し、現場での安全で有効な修理方法の一つとして提供することを目標とする。

成　果

6年度のクリーニングに関する聞き取り調査から、日本の美術工芸品としての漆工品の多くは漆や膠等による修復が行われていることが多く、既存の綿棒や綿布に水やエタノールを含ませての拭取りが基本操作であり、合成樹脂が一部使用された箇所のみ有機溶剤を含浸して取り除く方法で、ある程度対応ができていることが分かった。そのうえで、現在のクリーニングおよびその後の修復における課題としては、①クリーニング対象の黒色塗膜が蝋色由来か松煙由来かで使用したクリーニング溶液による予後が変わりうるか、②カビに覆われた漆器に対して溶菌酵素溶液を使用しても問題が生じないか、③水に触れると不可逆的に変色してしまう漆塗膜の場合、どのようにクリーニングをすればよいか、等が挙げられた。それに従い、7年度は下記の通りに研究計画を進めた。

1　劣化漆塗膜資料の作製と漆塗膜の評価

6年度作成した疑似的に劣化させた蝋色漆塗膜試料について、CIELAB表色系における色味、光沢度、表面粗さを計測し、元の試料と比較した。表色系における色味を表す数値上においては値の変化がほとんど見られなかった一方で、光沢度が大きく減少した。劣化によって漆塗膜上のクラックや微小の凹凸が生じていることをレーザー顕微鏡下で確認しており、表面粗さが上昇していたことが光沢度低下の要因であるといえる。8年度は、上記の評価方法を主に用いて、クリーニング後の漆塗膜の状態を引き続き測定・解析する。

2　クリーニング効果とリスクの評価

①クリーニング対象の黒色塗膜が蝋色由来か松煙由来かで使用したクリーニング溶液による予後が変わりうるか検証するため、生漆（A）、透漆にカーボンを加えた黒漆（B）、鉄粉と反応させた手製の黒漆（C）、水酸化鉄と反応させた市販の黒漆（D）、B、C、Dの上から透漆を摺り漆（B’、C’、D’）、砥粉下地（E）、地粉下地（F）の未劣化および小程度、中程度の劣化試料を用意した。この試料に対して、水で軽く湿らせた綿棒でクリーニングし、予後が変わるかモニタリングを実施している段階である。また副次的ではあるが、使用した綿棒を用いて、黒漆が鉄粉で反応させた蝋色漆か、松煙等のカーボンを混和させた漆かを特別な機器を必要とせずにオンサイトで判別できる方法を考案した。具体的には、クリーニングに使用した綿棒を鉄イオン検出試験紙に押し付けて呈色が生じるかを確認するものである（表1）。黒漆（鉄由来）の試料は総じて呈色反応が強く、今後黒漆の実用的な判別ができないか検討を進めている。

②カビに覆われた漆器に対して溶菌酵素溶液を使用した場合の予後の検証、③水に触れると不可逆的に変色してしまう漆塗膜のクリーニング方法については、現在、それに向けた試料を作製中である。

表1　鉄イオン検出試験紙を用いた黒漆の判別結果

試料	漆の種類	SEM/EDS分析による検出元素	Feの検出（試験紙A[a]/試験紙B[b]）		
			未劣化[c]	劣化：小[d]	劣化：中[e]
A	生漆	C,O,N	0/0	0/0	0/0
B	黒漆（カーボン由来）	C,O,N	0/0	0/<2	1/<5
B’	黒漆（カーボン由来）→透漆	C,O,N	0/0	0/<2	1/<5
C	黒漆（鉄由来、手製）	C,O,N,Fe	0/0	1/5	10/50
C’	黒漆（鉄由来、手製）→透漆	C,O,N,Fe	0/0	1/5	10/25
D	黒漆（鉄由来、市販）	C,O,N,Fe	0/0	1/5	<10/50
D’	黒漆（鉄由来、市販）→透漆	C,O,N,Fe	0/0	1/5	<10/25
E	砥粉下地	C,O,N,Fe,Al,Si,K	0/0	0/<2[f]	0/2[f]
F	地粉下地	C,O,N,Fe,Al,Si,K	0/0	0/<2[f]	1[f]/5[f]

a)Canadian Conservation Instituteの提供するスケール（測定目盛：0-1,1-10,10-20,20-50,50-）に基づく。
b)鉄イオン試験紙Bに附属するスケール（測定目盛：0-2,2-5,5-10,10-25,25-50,50-100 mg/L）に基づく。
c)キセノン光照射0h、d)キセノン光照射24h、e)キセノン光照射96h、f)粒状の呈色

報　告

- 倉島玲央ほか：「バソフェナントロリン試験紙を用いた黒漆の判別」 文化財保存修復学会第47回大会　25.6.14

中小規模の博物館で実践可能な文化財防災 ―地震・水害対策を中心として―

研究組織 千葉毅（保存科学研究センター、文化財防災センター）

目　　的 本研究の目的は、博物館における既存の文化財防災手法の効果向上を図ることにある。阪神・淡路大震災以降、博物館における耐震対策としてテグスや免震台の有用性、S字形フックの効果等は浸透してきている。しかし、例えば、テグスの効果的な設置方法に関する研究はこれまでになく、特に中小規模の博物館では、学芸員個々人の経験による「職人的」手法で設置されているのが実態である。そのため、中には効果の薄い設置方法も散見される。このような状況に鑑み、本研究では、耐震対策を中心として、博物館における既存の文化財防災手法に対して実験的、定量的な分析を行い、既存手法の効果向上を図る。

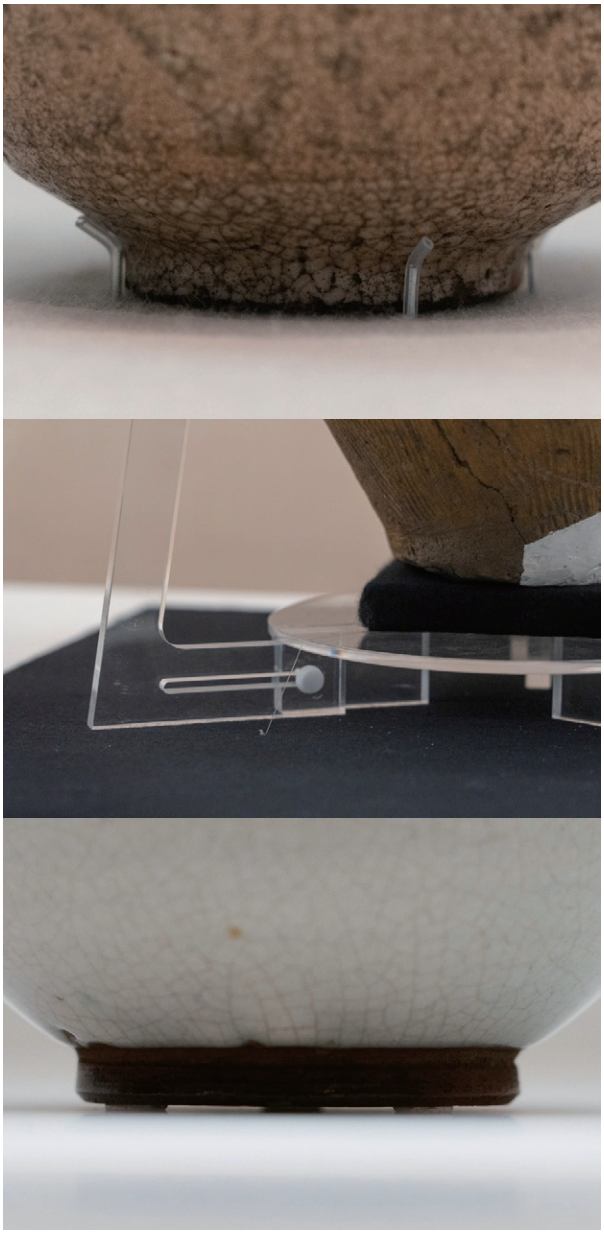
成　　果

本研究では、中小規模の博物館において実践されている文化財防災の既存手法の効果向上を図ることを目的としている。一般的に用いられている既存手法の確認を行うため、複数のサンプル館を対象に、以下についてのヒアリング調査を行った。

- 資料を取り扱う日常の学芸業務（展示作業、館内輸送、収蔵庫での保管等）の中で実施している具体的な災害対策
- 災害対策の実際の作業を行うのは誰か
- 災害対策手法をどこでどのように学んだか
- 災害対策手法に関する館内での情報・技術共有の機会の有無やその方法
- 災害対策に関する訓練等の実施状況
- 実際の展示室、収蔵庫での対策状況の調査

この結果、多くの館において、災害対策の具体的な手法を学ぶ機会は少なく、また実際の作業にあたっても担当者が各自の知識や経験に基づいて実施している状況がほとんどであることが改めて明らかとなった。また具体的な手法に関する館内での情報共有も積極的に行われている事例は少ないことが分かった。

8年度には、現状とニーズを把握するためのアンケート調査を実施するとともに、一般的に用いられている既存手法の検証（主にテグス、粘着剤等）、改良についての実験的分析を進める予定である。



様々な展示資料の固定方法

メタゲノム解析を用いた浮遊菌測定による博物館のゾーニングに関する研究

研究組織 間渕創（保存科学研究センター）

目　　的 本研究は、博物館や美術館における浮遊菌測定を用いたゾーニングにメタゲノム解析を利用し、従来よりも確度の高いゾーニングを可能にすることを目的とする。博物館等での汎用的な活用を視野に入れた測定手法、評価方法の開発を行う。

成　　果

博物館等での生物被害管理の基礎はゾーニングによる施設管理である。博物館等でのゾーニングを目的とした浮遊菌測定において、従来手法の課題である菌叢評価へメタゲノム解析を組み入れるにあたっては、その目的に即した手法を開発しなければならない。

本研究では、浮遊菌の捕集手法の検討、メタゲノム解析により得られた微生物群集構造を利用したゾーニング方法の開発、実用性の検証と最適化を行う。

第１年次ではメタゲノム解析に用いる浮遊菌の捕集方法について検討を行った。浮遊菌サンプラーと生培地を用いて浮遊菌を捕集し一定条件で培養してから両面界面活性剤水溶液でリンスすることで浮遊菌胞子を回収する手法を採用した。

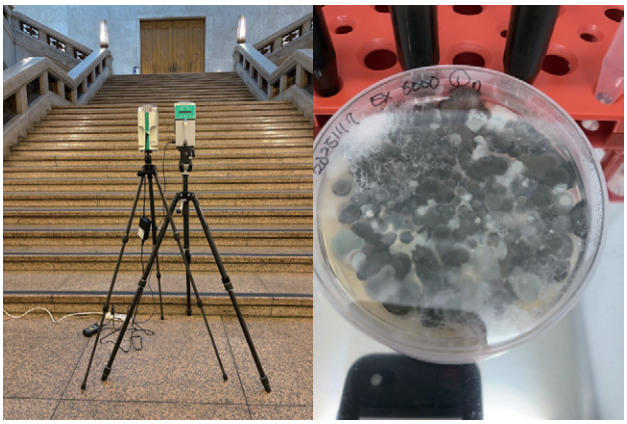
本手法によって回収した浮遊菌の懸濁液についてアンプリコンシーケンス解析（ITS）を行った。検体の特殊な事前調製を要せずとも民間の受託解析サービスで群集構造を得ることができた。

同一の浮遊菌捕集条件、培養条件で回収した検体のβ多様性解析（Unweighted UniFracを採用）では比較的近い距離にプロットされたが明確な評価にまでは至らず、浮遊菌の捕集条件や解析条件を精査していく必要があった。

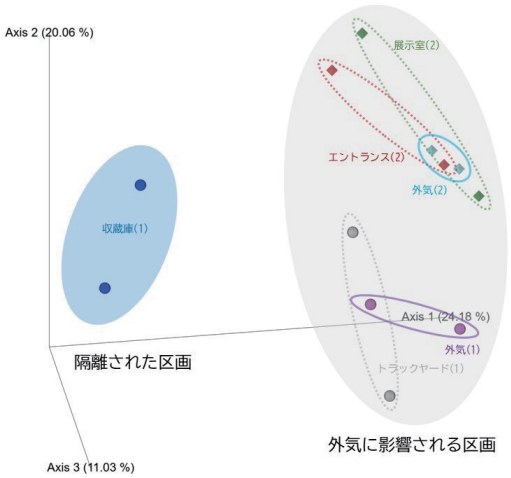
２年次である７年度は浮遊菌の捕集条件や解析条件を精査するとともに、当初の計画通り実際の博物館において本手法によって浮遊菌を捕集し、館内の各区画を群集構造によってグルーピングが可能であるかの検証を博物館２館において行った。

１館については、過去の継続的な浮遊菌調査や風向風量測定からある程度区画間の浮遊菌の相関が分かっている館内９カ所及び外気において浮遊菌を捕集し（n=2）群集構造解析を行ったが、明確なグルーピングにまでは至らなかった。空気サンプリング量（m3）が十分でなかったことからリード数が不足したことが主な原因と考えられた。

２館目では空気サンプリング量を６倍まで増やして館内４か所及び外気で浮遊菌を捕集し（n=2）群集構造解析を行った。その結果、外気に影響される区画のグループ（トラックヤード、エントランス、展示室）と収蔵庫については分離することができた。少なくとも博物館施設内のゾーニングにおいて、重要区画である収蔵庫の隔離性については評価可能であると考えられた。外気に影響を受ける区画のグループについては一定の傾向は見られたものの、群集構造の類似度については解析条件の検証や有意差検定を含め今後詳細に検証する。



浮遊菌の捕集風景と、捕集した浮遊菌の培養状況



博物館２の各区画の微生物群集構造についてのβ多様性解析（Unweighted UniFrac）

クフ王第２の船の実物資料を用いた造船から埋納過程の復元研究

研究組織 山田綾乃（文化遺産国際協力センター）

目　　的 本研究は1700点におよぶ古代エジプト古王国時代のクフ王の葬送船の部材を実測調査し、既往研究で得られた本船が造船後一度解体されたのち、再び組み立てられ、さらに解体されて納められたとの仮説を実物資料の考古学的な調査・分析から実証的に検討し、造船から船坑に納められるまでの過程を明らかにするものである。本研究を通じて従来不明瞭であった葬祭施設で繰り広げられた船を葬る儀礼行為を具体化することを目指す。

成　　果

1．部材の実測・記録

７年度の主な調査の目的は、部材配列の特定である。そこで部材に記されている番付の記録を集中的に行った。番付は船の部材を組み立てる際の配列を指示する記号であり、船大工あるいは組み立てる作業員によって施されたものと推定される。クフ王第２の船の全体像を復元するにあたって、現時点で課題となっているのが天蓋梁、甲板梁、目板、凹形支柱であった。このうち天蓋梁、甲板梁については配列の特定にまで至ることができた。目板に関しては、船を４区画に分ける記号＋数字の組み合わせが認められたが、残存数が少ないため、全部材の配列の特定は難しく、法則の解明に留まった。一方、凹型支柱はこれまでに明らかになっている法則性に合わず、番付の意味を引き続き検討している。

７年度調査で概ね部材そのものの実測は完了した。

期　　間：9月5日～10月1日
調査対象：クフ王第２の船
実施場所：大エジプト博物館保存修復センター
　　クフ王第２の船の保存修復用テント
調査主体：エジプト・日本合同調査隊
　　（日本側隊長・吉村作治　東日本国際大学総長）

2．実測データの分析と公開

本年度成果として、『昌平エジプト考古学会研究』に屈曲部材、凹型支柱、凹曲面角材についての概報を発表した。

3．研究途中経過の発表

６月22～26日にチェコ共和国・プラハのカレル大学で開催された学会Abusir and Saqqara in the Year 2025で、本研究の途中経過となる内容を報告した。



日本オリエント学会第 67 回大会ポスター発表

報　　告

- 柏木裕之、山田綾乃：「クフ王第２の船　屈曲部材、端部が半円に加工された板材（追加）―実測調査報告 その7―」『昌平エジプト考古学会紀要』第12号、pp.3-20　26.3
- 山田綾乃・柏木裕之「クフ王第２の船　凹形支柱―実測調査報告 その8―」『昌平エジプト考古学会紀要』第12号、pp.21-38　26.3
- 柏木裕之・山田綾乃「クフ王第２の船　端部を凹曲面に加工した角材―実測調査報告 その9―」『昌平エジプト考古学会紀要』第12号、pp.39-53　26.3

発　　表

- Ayano Yamada, Hiromasa Kurokochi, Eissa Zidan, Mamduha Taha, Sakuji Yoshimura: “Ship elements and construction techniques of the second boat of Khufu from the perspective of archaeological and architectural analysis”, Abusir and Saqqara in the Year 2025, Charles University. 25.6.22-26.
- 山田綾乃・柏木裕之「クフ王帰属の２隻の木造船の共通点・相違点の整理」日本オリエント学会第67回大会（ポスター）　25.10.12

近代における美術作品の受容と評価
―旧長尾美術館を一例として

研究組織 月村紀乃（文化財情報資料部）

目　　的 長尾美術館は、わかもと製薬の創業者である長尾欽弥・よね夫妻が、1946（昭和21）年に神奈川県鎌倉市に開いた美術館である。現在では国宝や重要文化財に指定されるような「名品」を多く所蔵していたが、その収集には美術史研究者が深く関わっていた。本研究では、所蔵者と研究者との関係性の中で、作品が「発見」され、「名品」として認められていく過程のケーススタディとして長尾美術館に着目し、同館が昭和初期の美術史学に与えた影響を考察する。

成　　果

1．旧蔵品の調査

主に戦前に刊行された美術図録や展覧会目録から、長尾欽弥あるいは長尾美術館の旧蔵品に関する情報を集めてリスト化を進めた。このうち、現在の所在が判明する作品12点について、実見調査を実施した。



東洋美術国際研究会関係資料
「時代衣裳絵葉書 第二輯」（東洋美術国際研究会発行）
「綸子地染分四季花鳥文様縫箔小袖」（長尾美術館旧蔵）

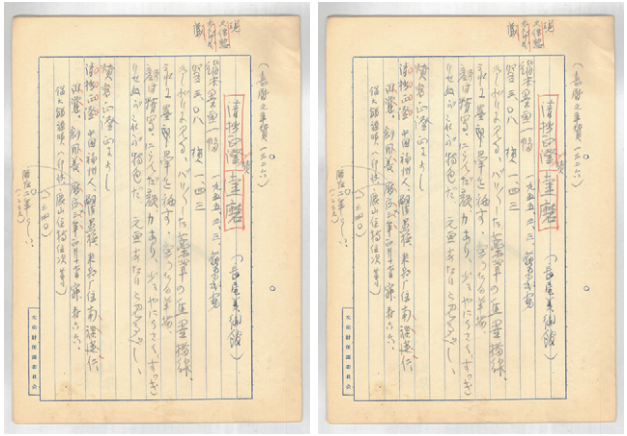
2．美術史研究者に関する資料の調査

東京文化財研究所が所蔵する「東京文化財研究所年史資料」のうち「美術懇話会関係資料」と「東洋美術国際研究会関係資料」、および「田中一松資料」について調査をおこなった。

長尾欽弥は、美術研究所に拠点を置いた「美術懇話会」や「東洋美術国際研究会」に理事として参画していた。両会関係資料には、長尾が所蔵する作品の図版が掲載された展覧会図録や会報誌、絵葉書などが含まれており、長尾欽弥が、自らのコレクションを、研究所の所員や美術史研究者へ紹介する機会を得ていたことを確認した。

また、「田中一松資料」には、のちに東京国立文化財研究所長となる田中一松が、戦前に長尾の所蔵品を調査した際の調書があることから、重要美術品の認定、重要文化財や国宝の指定との関連を検討した。

さらに、東京藝術大学 未来創造継承センター 大学史史料室が所蔵する「上野直昭関係資料」のうち、長尾欽弥から上野へ宛てた書簡2通、および長尾美術館の初代館長を務めた児島喜久雄から上野へ宛てた書簡28通・葉書24通の調査を実施し、翻刻をおこなった。



田中一松資料
「清拙正澄賛達磨」（長尾美術館旧蔵）調書

書画の融合と再構築：日中比較研究に基づく東アジア芸術表現の新たな可能性

研究組織 後藤亮子（客員研究員）

目　的 **本研究は、東アジアにおける「書画」の伝統概念を、日中比較を通じて再検討することを目的とする。日本において失われつつある書画概念を、過去の対象としてではなく、現代の芸術創造に関わる生きた概念として捉え直し、特に書と画の不可分な関係性と一体的な創造プロセスに着目し、その融合の様相を明らかにする。書法と絵画の有機的関係、文人画の規範性、近代金石画の展開などの分析を通じて、東アジア芸術表現の新たな可能性を提示する。**

成　果

研究初年度にあたる令和7年度は、書画概念の近代における形成・再構築過程の解明に注力し、文献研究と実作者・実技者との対話を組み合わせた多角的アプローチを採用した。とりわけ、近代中国書画学の創始者・余紹宋（1882-1949）の思想を中心軸に据え、書法美学が絵画にもたらした影響および金石画における筆法美学の展開について研究を進めた。

1．余紹宋の書画思想の包括的分析を完成させ、論文「書画一道——余紹宋と近代中国書画学の形成」を東京文化財研究所『美術研究』第449号に投稿、採録決定（2026（令和8）年8月刊行予定）。本論文は、近代中国における「書画」概念の再構築過程を、余紹宋の言説と編著を通じて体系的に解明したもので、本研究課題全体の基盤を成す中核的成果である。

2．2024（令和6）年11月に東京藝術大学で開催された公開シンポジウム「墨と線の表現」での講演「中国の筆法をどう理解するか」を論文化し、武田裕子・新川美湖・松浦昇・川嶋渉との共同講演録として東京藝術大学紀要に投稿した（8月）。日本画家・実作者との対話を通じ、書法美学と絵画表現の関係を理論化する試みであり、研究課題の「日中比較」「書画の融合」の実践的検討となった。

3.「金石画と中国絵画のモダニティ」と題する研究発表を、第28回水色（水墨と色彩表現）科研オンライン研究会（主宰：東京藝術大学・荒井経）にて行った（7.23）。本発表では、書画一体を基盤とする中国絵画における近代性の問題を、金石画と黄賓虹を具体的事例としつつ、身体的実践に基づく認識論の意義とともに論じ、本研究課題の理論的枠組みの一端を提示した。

発　表

- 後藤亮子：「金石画と中国絵画のモダニティ」第28回水色（水墨と色彩表現）科研オンライン研究会　25.7.23

空気質の試験方法の対応関係の調査

研究組織 由井和子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目　　的 **本研究は、国内の文化財分野において空気質の測定に用いられる簡易試験法と、海外において採用されている方法、異分野で用いられる試験法等の間の対応関係を整理することを目的とするものである。文化財の劣化要因とされるガスについて、容器に所定濃度・所定湿度の標準ガスを流通させながら各試験法による試験を行い、変色などの変化を記録し、それらを対応表等の形で比較できるようにすることを目標とする。**

成　　果

博物館、美術館における収蔵品の長期的な保存のため、わが国では展示・収蔵環境において、有機酸など収蔵品を劣化させると考えられているガスに対して、パッシブインジケータ等、ガスと指示薬の変色反応を用いた簡易的な濃度判定が行われるが、海外では金属片の腐食による変色を用いた試験が行われ、また国内でもフィルムの保存に関してはA-D Stripsという試験紙による判定、産業用途には別の簡易試験など、分野ごとに異なる試験法が採用されている。本研究では各分野において空気質の測定に用いられているインジケータ等をできるだけ同一条件で標準ガスにさらして変色等の変化をそれぞれ測定し、測定法の間の対応関係を整理する。

今年度はインジケータ等の機材を一定濃度・湿度の標準ガスに曝露するための装置作成を行った。具体的には以下の検討を行った。

1．準備（1）空気質の測定に関する情報収集

空気質の測定に関する先行研究の文献調査を行った。また、空気質の測定にかかわる研究者らから、標準ガスを安定して発生・流通させる方法や、海外の試験法であるオディーテストで用いる機材および手順についてヒアリングを行った。

2．準備（2）ガス発生方法の検討

標準ガスの発生、希釈、調湿方法について、それぞれ検討した。標準ガスの発生は市販のパーミエータを用いて行った。調湿空気は湿潤空気と乾燥空気の混合により調整し、湿潤空気（相対湿度約100%）は、水に空気をバブリングしながら通気する方法を検討した。乾燥空気はガスボンベを用いる場合のほか、乾燥剤にエアポンプで空気を通気して乾燥する方法を検討した。パーミエータから得られる高濃度のガスを含む空気を調湿空気と混合することで、所定の濃度のガスを含む調湿空気を一定流量で流すためのシステムを整えた。

3．準備（3）材料選定

空気質測定のための容器や配管には（1）ガスのリークがないこと、(2) ガスの吸着が少ないこと、(3) 容器材料からのガスの放散がない、もしくは試験結果に影響しないこと、の3つの要件を満たす必要があり、今回の目的のためにはさらに、ガスを流通させられる構造である必要がある。海外で採用されている試験法では、プロトコルにより使用する機器の種類や洗浄方法等が細かく定められていることがあるが、指定されている機器の一部は国内において販売がないため、入手方法を検討するとともに、今年度は国内で調達することのできた容器および配管について、それぞれ検討を行った。

ガスのリークは、配管類の前後の流量を比較することで検討した。市販の蓋のうち数種類は、ガラス瓶および配管と組み合わせてガスのリークの少ないシステムを構築できることを確認した。

ガスの吸着は、容器、チューブ等の配管部品にパーミエータで発生させた高濃度標準ガスを一定時間通気した後、それらを水で洗浄し、洗浄水に溶けたガスを定量するなどで検討した。なお、本検討を通して、チューブの素材によって圧力損失の程度が大きく異なり、実際の運用では配管の長さを短くすること、フッ素系樹脂の配管を用いると良いことなどが確認された。

容器材料からの放散による影響の判定は、劣化となるガスを含まない調湿空気のみを容器に通気して実際に簡易測定を行い、変色等の有無から判断した。

4．試作

調湿ガスをガラス瓶等に通気するシステムを試作し、想定通りに動作することを確認した。

文化財の「保護区域」理念生成史：フランス領インドシナを中心とした比較分析

研究組織 黒岩千尋（文化遺産国際協力センター）

目　　的 本研究は、文化財周辺の歴史的景観や風土を保護するため、一定の区画を設けてその内部の森林保全や建築制限を行う「保護区域」の制度が、各地でどのような歴史的経緯のもとに成立し如何に相互作用して現在へと至っているのか、フランス領インドシナと同時代のフランスおよび日本を対象にその過程を比較考察により明らかにし、現在の保護状況を考察することを目的とし、各地の公文書館での史料調査と遺跡等でのフィールドワークを行う。

成　　果

1．カンボジアにおける史料調査

- フランス領インドシナ（特にカンボジア）の遺跡保護関連制度の制定プロセスやその背景を確認するため、プノンペンの国立公文書館にて1月26日～2月5日に調査を行った。
- カンボジアで唯一、フランス領時代に「保護区域」が設置されたアンコール遺跡群の区域の範囲の制定やマネジメントに関連する公文書や書簡など、文字史料30ファイル974ページ、地図7点、写真20点を入手した。
- その他、植民地時代の写真・地図・文書が多数アーカイブ化されている、フランス国立図書館のオンラインアーカイブにて、関連する遺跡等について随時史料収集を行った。

2．遺跡群および周辺地域での事例調査

- 1月31日にカンボジアの遺跡保護状況の調査のため、古代都市アンコール・ボレイ、プノム・ダ寺院、アシュラム・マハ・ロセイ寺院およびアンコール・ボレイ博物館を訪問した。
- 2月1日に関連史料の調査のため、プノンペン市内のSOSORO博物館を訪問した。
- フランス領インドシナとの比較検討のため、第4年次に日本国内での文化遺産保護やその区域設定の事例調査を検討しているが、日本での近年の事例の視察として、10月8日～10日に重要文化的景観研修に参加し、和歌山県有田川町を訪問した。

3．史料の読解、分析

- 1月～2月調査にて得られた史料の分析はこれから実施予定であるが、これまでに分析してきたアンコール遺跡群の「保護区域」の範囲の変遷過程に関連する史料が今回確認され、重点的に読解を開始している。

4．調査研究の成果の発表

- 1月～2月調査にて得られたアンコール遺跡群の「保護区域」関連の史料から今後、読解した内容を論文にまとめて報告予定である。



プノム・ダ寺院

文化財保存における将来世代への責任の動機付け —世代間倫理からの検討

研究組織 大川柚佳（客員研究員）

目　　的 将来世代に向けて文化財を保存することの重要性は国際的な倫理規範に明示されている。しかし専門外の人々がどの程度それにコミットするべきかには議論の余地がある。哲学的見地にたってみても、我々がまだ見ぬ人々になぜ責任を負うかはそれほど明らかでない。将来への責任に関する議論を発展させてきた分野に世代間倫理があり、本研究はその蓄積を文化財保存の文脈に応用しようとするものである。本研究の目的は、現在世代が将来世代に対して文化財を保存する責任があるか、あるとしたらそれはどのような責任であるかを保存の思想と実践に照らしつつ検討することである。

成　　果

本研究の目的に基づき以下2点について検討した。

1.「将来世代のために文化財を保存する」の含意

- イギリスの文化遺産専門家Jane Hendersonの論文「Beyond lifetimes: who do we exclude when we keep things for the future?」（2020）を精読し、日本の状況へのアクチュアリティを主眼として検討した。Hendersonによれば、将来世代への配慮を目的とした保存の取り組みは、現在の特性の層の利益強化として機能しうる。つまり、いかに将来世代へ配慮しようとも、現在の不平等を是正しない限りは将来恩恵を受ける層もまた限定的である。またHendersonによれば、保存の目的は、文化財（遺産）をより長く残すことそのものではなく、そこから主体が享受する経験の豊かさにある。こうした主張の理論的含意や妥当性を、日本における保存実践や、活用が注目される現況と比較しつつ論じた。

2．文化財保護への関心とその必要性

- 文化財保存の分野では、文化財は「心のインフラ」として人間にとって必要なものであるという主張がみられる。他方政治哲学には、人間らしく生きるために必要な条件に関する研究の蓄積があるが、そこで文化財はどのように扱われているのか。これを明らかにするとともに、人類が将来にわたって文化財を保存していくことがどのような意味で「必要」なのかについて、主体の自律、必要といった諸概念の検討を通じて探究した。こうして、必ずしも万人が意識的に文化財を求めるわけではないという現実と、それでもなお文化財が人間一般にとって重要な意義を持つという立場を調停するような理論を模索した。本研究の成果は2年次に発表予定である。

発　　表

- 大川柚佳：「将来世代への配慮と排除の構造：文化遺産の保存修復における世代間倫理」オンライン政治理論研究会（OPTF）第11回定期研究報告会　25.9.15

洪水常襲地における水害経験の地域史と災害文化形成プロセスの解明

研究組織　後藤知美（無形文化遺産部）

目　　的　**洪水常襲地である関東地方では、水害は日常生活を脅かす身近な危機であり、水害発生を前提とした生活様式が育まれてきた。関東地方は、地域住民中心の水害対策が講じられてきた一方で、洪水被害の頻発から、明治時代以降、近代土木技術を用いた行政主導の大規模な河川改修工事が行われたという別の側面ももつ。本研究では、地域の生活のなかで育まれてきた、災害対応のための知識や工夫の総体「災害文化」の形成・変遷過程を、近代以降の河川行政の変遷や地域の水害経験の歴史と関連付けることで、実証的に明らかにする。**

成　　果

災害予防林に関する現地調査（茨城県常陸大宮市）

茨城県常陸大宮市を流れる久慈川流域に広がる竹林は、久慈岡地区の人々によって水害から集落を守るために整備されてきた。江戸時代後期、村の庄屋が中心となり当時の住民たちの手で竹の植林が進められ、河川氾濫による村への被害を軽減させようとしたのが、竹林の始まりと伝わる。



写真１　辰ノ口展望台から見た竹林（渡瀬綾乃氏撮影）

令和４年度から開始した資料調査によって久慈岡地区の竹林が地区の人々が組織する共同組合によって管理されてきたことが明らかになっている。地区の人々は、水害から集落を守る機能を維持するため竹林の管理を行ってきたのである。また同時に竹林の竹材を販売することで、組合が収入を得ていたことも分かっており、竹林は地域を守るとともに暮らしを豊かにする共有資源としても継承されてきた。

ただし、大規模な河川改修が行われると、竹林は本来の機能上での必要性は薄れるようになったため、管理が十分に行き届かず荒廃が進みつつあった。かつて竹林の維持管理を担っていた組合も活動を休止していたようである。そうした状況下で、近年、新たに地元有志による町おこしに活用されるようになり、再び地元住民の手により整備が行われることとなり、現在では再びかつての姿を取り戻しつつある。竹林は災害から暮らしを守るためのものであったがそこにはもとより集落の経済を支える機能も内包されており、現代社会においては後者の機能が継続されている状況といえる。

令和5～6年度にかけて常陸大宮市教育委員会の協力を得て、大正・昭和時代に竹林を管理してきた共同組合に関する歴史的資料に関する現地調査を実施している。今年度は昨年度に引き続き、組合資料の写真をもとにその記述内容について翻刻を行った。また、あわせて現在、竹林の利活用を進めている久慈岡地区有志の方々にお会いし、竹林に関する取り組みについてうかがう現地調査を実施した。

これらの調査成果については、民俗学における災害研究の動向をまとめた報告（「災害と民俗学」『3STEPシリーズ9 民俗学』）内にて、水害常襲地に育まれた災害文化の一つとして紹介した。

報　　告

- 後藤知美：「災害と民俗学―災害と暮らしの調和を探る」『3STEPシリーズ9 民俗学』昭和堂　26.1

瀟湘八景の受容研究　絵画・建築・庭園

研究組織　武瀟瀟（文化遺産国際協力センター）

目　　的　**中国で成立した「瀟湘八景」は、室町時代に日本で最も流行した水墨山水画のテーマである。絵画に限らず、文学、庭園など、多様な分野に取り入れられ、東アジア文化圏における文化の伝播―受容と変容―の研究にとって重要な位置を占める。本研究は、瀟湘八景という画題の日本での受容を、文学、絵画、庭園など、領域横断的な視点から研究し、瀟湘八景の日本での受容の様相を解明し、総合的に全貌を把握することを目指している。**

成　　果

1．庭園の現地調査

令和7年度には、瀟湘八景と庭園景観との関係を検討するため、以下の地域において現地調査を実施した。

9月に、和歌山県和歌山市に所在する養翠園をはじめとする和歌山市内の庭園について調査を行った。養翠園は江戸時代に流行した西湖模造庭園の代表例として知られる。本調査では、西湖景観の造形と庭園表現との関係を確認するとともに、瀟湘八景との関連について検討を行った。

また、10月に夢窓疎石の作庭と伝承される西芳寺庭園、龍安寺方丈庭園、大徳寺龍源院竜吟庭についても調査を実施し、中世禅宗寺院庭園における景観構成の特徴を確認した。

12月に山口県において調査を行い、常栄寺雪舟庭園および常徳寺庭園をはじめとする、絵画との関連が指摘される庭園について現地調査を実施した。また、大内氏館庭園遺跡および井上公園（大内館庭園石移築）についても調査を行い、室町期庭園景観の構成要素について検討した。これらの調査により、京都を中心とする中世庭園との共通性について確認することができた。

2．絵画作品調査

10月および11月の二度にわたり、京都国立博物館で開催された「特別展 宋元仏画―蒼海を越えたほとけたち」において、本研究に関連する展示資料の調査を行った。

また、11月には小峰城歴史館で開催された「松平定信の文化力―つくり・しらべ・うつし・つたえる―」展において、本研究に関連する庭園絵図を含む展示資料の調査を実施した。

さらに12月には毛利博物館を訪問し、展示されていた雪舟筆《四季山水長巻》について調査を行った。加えて、台湾故宮博物院の百年院慶特別展「甲子萬年：國立故宮博物院百年院慶特展」（北院・南院）および北院特別展「千年神遇―北宋西園雅集傳奇」に展示される関連作品の調査も実施した。

3．研究成果の普及

- 日本における瀟湘八景の受容について、庭園との関係から考察を行い、その研究成果を日本美術史学会会誌『美術史』に投稿した。



養翠園

日本における土地利用計画に準拠した史跡環境の評価および保護に向けた研究

研究組織　松浦一之介（文化遺産国際協力センター）

目　　的　本研究は、日本国内に所在する考古学的価値をもつ史跡を対象とし、関連する農林水産業、自然公園、都市計画などの土地利用計画に基づく規定をその環境の保護に有効な手段として再編成するための考察をつうじ、景観との関係で遺跡を保護する道筋を示すことを目的とする。くわえて、遺跡に内在する価値の保存に留まる現状の史跡を、景観と一体的かつ能動的に保護するための考古公園に発展させる可能性を検討することを射程に入れている。

成　　果

1．史跡環境に関する現地調査

- ６年度までに実施した日本国内の史跡環境評価に基づき事例研究を選出し、令和７年度に下記の地域および日程で現地調査を実施した。

第１回調査（北海道）
８月４日～６日：北斗遺跡、伊茶仁カリカリウス遺跡、古道遺跡、三本松遺跡ほか

第２回調査（福井県）
８月20日～21日：一乗谷朝倉氏遺跡、白山平泉寺旧境内ほか

第３回調査（福岡県）
９月５日～８日：大野城跡、大宰府跡、水城跡、宗像神社境内、津屋崎古墳群ほか

第４回調査（福岡県、大分県、熊本県）
10月８日～13日：宗像神社境内沖津宮、富貴寺境内、江田船山古墳ほか

第５回調査（奈良県）
11月18日～21日：平城宮跡、唐招提寺旧境内、薬師寺旧境内、法華寺境内、東大寺境内ほか

2．史跡環境に関する分析

- 考古学的価値をもつ史跡1,627件（2,245か所）の環境を航空写真などから調査した結果、個々については全体の48.6%が良好または顕著と評価できた。一方、地域ごとの保存環境は、近畿や北部九州をはじめ史跡の55.6%が集中する平野部、いわゆる国土軸において悪化していることが判明した。
- 悉皆的な統計調査から、国内における史跡の指定面積は平均15ha程度と考えられるが、100ha以上の比較的広い事例を少なくとも48件確認することができた。これには景観的な価値の保全を目的として追加指定された事例（宗像神社境内沖津宮：1,257ha）が含まれ、学術的価値に基づく従来の指定とは異なるあり方を指摘できた。また、これら広い指定面積の史跡は、その半数が自然公園など顕著な環境に含まれる、もしくは隣接して環境と一体的に保護されること、さらに自然公園の中には、平均的な面積の史跡および関連する多数の埋蔵文化財包蔵地を含む事例（釧路湿原国立公園と北斗遺跡：23ha）が存在し、遺跡環境を広域的に保護するうえで一定の有効性が認められた。
- 事例研究のうち旧宗像郡では、景観計画に基づく景観地区が史跡と自然公園を含めるように設定され、工作物の誘導には一定の効力が認められた。一方、土地利用の具体的な規定は農業振興計画や森林整備計画等に設けられ、これらが関連する区域に含まれる埋蔵文化財包蔵地の現状保存に対して部分的に有効なことが窺えた。しかしながら当該計画等は、そのような効力を積極的に認識した区域設定を行うものではないことが分かった。
- 以上の主な研究結果については、11月５日および12月６日に研究発表を行った。

発　　表

- 松浦一之介：「遺跡と景観―日本における史跡環境の面的保護にむけて―」　令和７年度第１回総合研究会　25.11.5
- 松浦一之介：「日本における史跡環境の面的保護に関する課題」　2025年度日本遺跡学会全国大会　25.12.6



旧宗像郡における史跡（津屋崎古墳群）の環境の調査

囃子の身体性：日本伝統芸能における音楽と舞踊の相互作用

研究組織 鎌田紗弓（無形文化遺産部）

目　的 「はやす（栄やす・映やす）」の語に表れる通り、伝統芸能における囃子（音楽）は、その演奏表現によって舞踊・演技を引き立てる。諸要素の協調は演者の身体コミュニケーションに多くを委ねているが、演者同士の表現がいかに影響し合うかというパフォーマンスの実態はあまり検討されてこなかった。本研究は、舞踊の有無によって演者同士の相互作用がどのように変化するかを、主観的な意識や、発音情報およびその間の身体動作・呼吸に着目して分析する。

成　果

1．音楽・舞踊構成にかんする調査検討

- 減額された予算状況をふまえて収録規模を確定し、実演協力者（演奏家・舞踊家）および研究協力者、モーションキャプチャスタジオ担当者との打合せを経て、演目の収録構成、配置等を決定した。一続きの上演としてモーションキャプチャを行う制約上、不自然にならない範囲で有効エリア内において後見から小道具を受け渡す形とすることで、出入りによるトラッキングの中断を避けることとした。また舞踊小道具の干渉について、一部について収録に先立ってスタジオで実地検証した。
- 探索的研究として6年度まで実施した音楽合奏のみの収録について、演者の校閲を経てデータコーパスを公開した。

2．実演分析のための呼吸・身体動作・発音情報の高精度計測

- 14名の実演家、高岡明氏（桜美林大学）、工藤和俊氏（東京大学）、宮田紘平氏（東京大学）、清水大地氏（神戸大学）らの研究協力を得て2026（令和8）年3月に実施した。舞踊の有無によって演奏がどう変わるのかを比較分析するため、条件を分けた複数テイクを設定した。複数アングルのカメラ、演奏者個別および全体にマイクを配した視聴覚データと、ウエラブルセンサによる呼吸データ、モーションキャプチャデータの収録を行っている。呼吸データを取得するにあたっては、東京文化財研究所研究倫理審査委員会の審査を経て、承認を受けている。

刊行物

- Sayumi Kamata, Martin Clayton, Akira Takaoka, Kazutoshi Kudo, Kohei Miyata, Daichi Shimizu. “Nagauta-bayashi.” OSF. doi:10.17605/OSF.IO/638V9. 26.2

江戸期吉原遊廓をめぐる図像研究：音楽学及び表象論的視座から捉える文芸挿絵と浮世絵

研究組織 青木慧（無形文化遺産部、特別研究員）

目　　的 本研究は、近世日本における文芸挿絵や浮世絵に表象された吉原遊廓の音楽文化に対し、音楽学的分析と、東洋美術・東洋音楽研究において深化が待たれる表象論的視座を導入することで、その様態を多角的に解明するものである。図像に埋め込まれた情報から音楽実践の実態を捉えるとともに、当時の社会における娯楽媒体としての機能を分析し、現代における学術資料としての価値を再考・再定義することを目指す。

成　　果

1．図像解釈における方法論の検討

令和7年度は、研究課題「江戸期吉原遊廓をめぐる図像研究：音楽学及び表象論的視座から捉える文芸挿絵と浮世絵」に基づき、主として、近世に成立した文芸挿絵・浮世絵に描かれた音楽情報の基礎的整理、及び図像解釈の方法論構築に従事した。まず、浮世絵をはじめとする図像資料に表象される楽器・奏者・奏楽場面等を音楽学的視点から把握すべく、近世邦楽史、楽器史、遊里文化史、美術史に関する先行研究を参照した。併せて、筆者よる、洒落本・随筆等の近世文芸資料の読解を通した吉原の音楽文化に関する分析成果（研究課題/領域番号20J22465）を援用し、図像資料に描かれる三味線・箏・尺八等の諸楽器が、当時いかなる社会的意味や文化的文脈において受容されていたかについて、知見の体系化を進めた。とりわけ、遊女・女芸者・男芸者・幇間・客といった主体の属性に応じ、特定の楽器がいかなる場面で描出されるかに着目し、それらが単なる画中の小道具に留まらず、身分・教養・親密性・娯楽性等を表示する記号として機能している蓋然性を検討した。

2．図像の比較検討及び描写内容の類型化

吉原を題材とした図像における音楽表象の読解手法を確立するため、複数の作例を比較検討し、描写内容の類型化に着手した。現時点では、【俯瞰図における都市空間の一要素としての奏楽描写】、【張見世等の制度的・儀礼的場面に付随する奏楽描写】、【座敷内の酒宴・遊興場面における演出的な奏楽描写】、【遊女の私的空間や余暇場面における日常的な楽器配置】等が、今後の分析における主要な表象類型となる見通しを得た。これらの一連の類型化により、同一の楽器が描かれる場合であっても、場面設定や構図の差異によってその意味内容が変容する可能性が示唆された。例えば楽器配置に着目した場合、奏楽中ではない「（床の間等に）静置された楽器」の存在が、主体の高い教養やその空間の私性を象徴する記号として機能している点は注目に値する。とりわけ、箏については、文芸資料においても高位の遊女のステータスを象徴する楽器として記述される例が多く、図像資料と文芸資料の双方においてその位置づけの整合性が確認された。こうした具体例の蓄積は、本研究が試みる図像解釈の妥当性を裏付ける重要な成果といえる。

3．今後の課題

一方、図像資料の体系化に際しては、看過し得ない課題も表出した。挿絵や浮世絵は実態の直接的な再現とは限らず、娯楽媒体としての特性上、構図の誇張、人物配置の演出、象徴化された楽器表象といった多層的な脚色を含む。また、先行する作品が後続作に継承されていく、構図の「型」の存在も想定され、個別作品の孤立的な分析では不十分であることが判明した。今後は、絵師ごとの作画傾向、当該作品の制作意図、挿絵と浮世絵との相互影響関係及び同時代の文芸資料における記述との整合性の検証等を通じ、図像における虚構と実態の相関を精査する必要がある。今後は、令和7年度の基礎研究を基盤とし、吉原を題材とした図像資料における音楽文化表象の特質をより緻密に分析し、近世社会における音楽実践と視覚的表象形成の相関解明へと発展させたい。

文化遺産国際協力コンソーシアム事業

研究組織　友田正彦、金井健、五嶋千雪、金子雄太郎、米山大三郎、五十畑亜貴子（以上、文化遺産国際協力センター）

目　　的　**文化遺産国際協力コンソーシアム（以下、コンソーシアム）が掲げる、「海外の文化遺産保護に関する国内の連携・協力を推進する」という目標のもと、事務局として各種分科会活動や情報データベースの構築、シンポジウム・研究会の開催等を行うことによって、日本の文化遺産国際協力を支援・促進する役割を担う。**

成　　果

1．コンソーシアムの会議の開催

- 運営委員会を２回開催し、コンソーシアム全体としての活動方針等を協議したほか、総会の開催に代えて、本年度の事業報告を会員に送付した。
- 企画分科会、東南アジア・南アジア分科会、西アジア分科会、東アジア・中央アジア分科会、欧州分科会、アフリカ分科会、中南米分科会を計16回開催した。

2．情報収集と情報発信

- 第36回研究会「日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―」を東京文化財研究所で開催し、動画の公開、報告書の刊行を行った。（開催日：９月14日）
- 第37回研究会「文化遺産保護の国際動向」を東京文化財研究所で開催し、動画の公開、報告書の刊行を行った。（開催日：１月17日）
- シンポジウム「紛争からの復興と文化遺産」を東京大学弥生講堂一条ホール（ライブ配信併用）で開催し、動画の公開、報告書の刊行を行った。（開催日：11月30日）
- 文化遺産保護の国際情勢に関する情報収集とコンソーシア活動の発信及び会議運営への協力のため以下の国際会議に参加した。
  - –ユネスコ世界遺産委員会（フランス・パリ：７月５～16日）
  - –ACCU奈良・国際会議「考古遺跡の整備とオーセンティシティ―“復元の是非”を超えて：アジアの多様な実践と論理―」（奈良市：12月17～18日）
  - –ユネスコ「アジア太平洋地域世界遺産都市と気候変動対策に関する国際会議」（京都市：３月７～９日）
- 会員向けのメールニュース（コンソーシアムイベント告知、国内外文化遺産関連イベントの案内等）を配信したほか、WEBサイト、SNS、メールニュース等を通じて、コンソーシアム活動のPRを行った。
- 文化遺産の不法輸出入等防止の情報収集を行った。

3．文化遺産国際協力推進に資する調査

- 2023年９月にマグニチュード6.9の大地震があったモロッコ王国を対象として、震災復興の過程における有形・無形の文化遺産の復旧状況と課題を把握し、国際協力による支援の可能性や支援国が配慮すべき点を把握することを目的に、国立考古・文化遺産科学研究所（INSAP）の協力のもとで現地調査を行い、報告書を刊行した。（現地派遣：10月13～28日）。

発　　表

- 金子雄太郎：文化遺産国際協力コンソーシアム令和６年度国際協力調査「韓国の遺産保護に係る制度改革および国際協力体制に関する調査」コンソーシアム東アジア・中央アジア分科会　25.6.23

刊行物

- 『Report on the 34th Seminar: School Education and Cultural Heritage』 25.10
- 『文化遺産国際協力コンソーシアム第35回研究会　文化遺産保護と奈良文書―国際規範としての受容と応用―報告書』 26.2
- 『Report on the JCIC-Heritage Symposium: Restoration of the Notre-Dame de Paris and Philosophy of Monuments Conservation』 26.3
- 『文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会 日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―　報告書』 26.3
- 『文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会 文化遺産保護の国際動向　報告書』 26.3
- 『文化遺産国際協力コンソーシアム令和７年度シンポジウム　紛争からの復興と文化遺産』 26.3
- 『2025 Survey for International Cooperation Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage: Survey on the state of the Cultural Heritage in the 2023 Al Haouz Earthquake Affected Areas in Morocco 』 26.3

備　　考　本事業は文化庁より委託された。

文化庁文化遺産国際協力拠点交流事業「デジタル技術を用いたバーレーンおよび湾岸諸国における文化遺産の記録・活用に関する拠点交流事業」

研究組織　安倍雅史、淺田なつみ、山田綾乃、黒岩千尋、長尾琢磨、柴田みな、平田薫（以上、文化遺産国際協力センター）

目　　的　バーレーンからの要請に従い、文化遺産に関するワークショップを実施した。

成　　果

バーレーン、クウェート、サウジアラビアの文化遺産専門機関からの要請を受け、文化遺産保護における3次元計測の活用に関する人材育成事業を以下の通り実施した。

1．クウェートでの研修

10月22日から24日にかけ、文化遺産国際協力センターとクウェートのNCCAL(The National Council for Culture, Arts and Literature）で3次元計測に関するワークショップを共催した。今回は、「遺跡のUAV測量」をテーマとし、クウェート市内で座学を行うとともに、ファイラカ島の青銅器時代の遺跡において実習を行った。

クウェート大学の考古学専攻の学生とNCCALに所属する専門家の計15名が参加した。またバーレーンからも専門家が一人参加した。講師として、中部大学の渡部展也先生の協力を得た。

2．バーレーンでの研修

10月28日から30日にかけ、文化遺産国際協力センターとバーレーン文化古物局で3次元計測に関するワークショップを共催した。バーレーンでは過去に複数のワークショップを実施しており、今回は中級者向けに「建造物の3次元計測」をテーマとし、レーザースキャナーやフォトグラメトリなどを用いたさまざまな建造物の3次元計測の手法を、座学と実習で学ぶプログラムとした。

バーレーンから11名、アラブ首長国連邦から2名、計13名の文化遺産担当の専門家が参加した。講師として、公立小松大学の野口淳先生、産業技術総合研究所の中村良助先生、㈱ホロラボの藤原龍先生らの協力を得た。

3．サウジアラビアでの研修

11月2日から4日にかけて、文化遺産国際協力センターとサウジアラビア文化遺産庁は、3次元計測に関するワークショップを共催した。同国で初めての開催となる今回は「考古資料の3次元計測」をテーマとし、座学と実習で学ぶプログラムとした。遺跡や博物館の調査や管理業務に携わる専門職員ら計25名が参加した。講師として、公立小松大学の野口淳先生、産業技術総合研究所の中村良助先生、奈良文化財研究所の高田祐一先生、ドゥドコ・アナスタシア先生、㈱ホロラボの藤原龍先生、㈱Nianticの白石淳二先生の協力を得た。

4日には、国立博物館を会場としてXRミートアップ in リヤドを開催した。公立小松大学からは「ホンジュラスのコパン遺跡VR体験」、奈良文化財研究所からは「XR平城京」、産業技術総合研究所・奈良文化財研究所からは「3DDB Viewerプロジェクト」、株式会社ホロラボからは「京都VR」、株式会社Nianticからは「Scaniverse」体験、東京文化財研究所からは「バーレーンのアアリ王墓のVR体験」と「カンボジアのタネイ寺院遺跡のVR体験」などを出展した。ワークショップの参加者だけではなく、一般の博物館来館者の参加も得た。

備　　考　本事業は、文化庁より、令和7年度文化遺産国際協力拠点交流事業を受託して実施した。

文化庁文化遺産国際協力拠点交流事業「スーダンの文化遺産専門家等の能力強化ワークショップ事業」

研究組織　石村智（無形文化遺産部）、二神葉子（文化財情報資料部）、千葉毅（保存科学研究センター）、栗原祐司（国立科学博物館）、清水信宏（北海学園大学）、関広尚世（京都市埋蔵文化財研究所）

目　的　**スーダン人文化遺産専門家等を日本に招へいし、現在武力紛争下にあるスーダンの文化遺産（有形・無形）を保護するための能力強化ワークショップを実施した。また関連シンポジウム「紛争下の被災文化遺産と博物館の保護―スーダン共和国の事例から」を開催し、同国の文化遺産の現状を一般の人にも広く知ってもらうための機会を持った。**

成　果

ワークショップは8月13日（水）～16日（土）の4日間にわたって東京文化財研究所の地下会議室において実施された。参加者は日本から6名（石村・二神・千葉・栗原・清水・関広）、スーダンから3名（Intisar Soghayroun 氏・Ikhlas Alyas 氏・Ezeldin Musa 氏 ）、イギリスから1名（Julie Anderson氏）に加え、イギリスからオンラインで2名（Michael Mallinson氏・Helen Mallinson氏）であった。

ワークショップでは第一日目にスーダン文化遺産研究の第一人者である2名（Anderson・Intisar）から、スーダンの歴史と文化遺産に関する包括的なレクチャーがあった。第二日目は、日本人専門家から緊急時の文化遺産保護についてのレクチャー（千葉）があった後、スーダン人専門家および外交官からそれぞれ同国の文化遺産の現状（Ikhlas）および文化政策の概要（Ezeldin）の報告があった。第三日目は日本人専門家から博物館の保護の国際動向（栗原）、ユネスコによる文化遺産保護の現状（二神）および日本からの文化遺産国際協力の現状（石村）についてそれぞれ報告があった。第四日目は全体討議で、ディスカッサント（清水・M. Mallinson・H. Mallinson）を交えて、スーダンの文化遺産保護に資する国際協力のあり方について議論が行われた。

関連シンポジウムは8月16日（土）に東京文化財研究所のセミナー室において開催された。このシンポジウムは一般向けのものであり、スーダンの文化遺産の現状を多くの人々に知ってもらうとともに、本事業の意義と効果を広報する目的で実施された。なお本シンポジウムはICOM日本委員会および日本イコモス国内委員会との共催によって開催された。

刊行物

- 『Proceedings of Tokyo International Workshop for Safeguarding Sudan's Cultural Heritage』 26.3

備　考　本事業は、文化庁より、令和7年度文化遺産国際協力拠点交流事業を受託して実施した。



ワークショップ参加者


関連シンポジウムの様子



関連シンポジウムのフライヤー

文化庁緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）「スーダンの被災博物館の保存・修復方針の策定に係る事業」

研究組織　石村智（無形文化遺産部）、二神葉子（文化財情報資料部）、千葉毅（保存科学研究センター）、栗原祐司（国立科学博物館）、清水信宏（北海学園大学）、関広尚世（京都市埋蔵文化財研究所）

目　　的　本事業は、武力紛争により被災したスーダン国内の博物館の保存・修復方針の策定を目的とし、その協議のためスーダンの博物館に関する専門家および国際機関の専門家を日本へ招へいし、国際専門家会議を開催した。また文化庁・外務省・国際協力機構（JICA）・国立民族学博物館において、国際協力の担当者とのコンサルテーション・ミーティングを行った。

成　　果

本事業では以下の四名のスーダン人専門家を日本に招へいした。

- Abdelrahman Ali氏（ユネスコ・ハルツーム 文化部門長）
- Khalid Fathalrahman氏（イセスコ文明対話センター所長）
- Shadia Abdrabo氏（スーダン国立古物博物館機構副局長（博物館部門））
- Elnzeer Tirab氏（スーダン国立民族学博物館館長）

専門家会議は2026年2月24日（火）に東京文化財研究所の地下会議室において実施された。参加者は日本人専門家4名（石村・二神・千葉・関広）、スーダン人専門家4名（Abdelrahman・Khalid・Shadia・Elnzeer）に加え、今回の招へい事業で来日することが出来なかったAmani Noureldaim氏（国立民族学博物館諮問委員会委員長）がオンラインで参加した。

専門家会議ではまず日本駐箚スーダン共和国特命全権大使Elrayih Mohamed Elawad Hydoub氏による開会のあいさつが行われた。その後、Khalid氏によってイセスコ（ICESCO）による文化遺産国際協力の概要の報告、Abdelrahman氏によってユネスコ・ハルツームによるスーダン国内の文化遺産保護の取り組みの報告が行われた。その後、二神によってユネスコによる世界遺産保護のメカニズムの解説が行われた。続いてShadia氏によるスーダン国内の博物館の状況、とりわけハリファ・ハウス博物館とゲジーラ博物館の報告が行われ、Elnzeer氏による国立民族学博物館の状況の報告が行われた。さらにオンラインで参加したAmani氏からはカッサラ・コミュニティ平和公園におけるコミュニティ博物館の取り組みの報告があった。続いて、石村によって日本による文化遺産国際協力の枠組みについての解説があった。その後、総合討論が行われ、スーダン国内の博物館、とりわけハリファ・ハウス博物館とゲジーラ博物館に対してどのような国際支援を行うべきかの具体的な協議が行われた。会議の締めくくりとして、犬塚将英（文化財防災センター副センター長／保存科学研究センター長）による閉会のあいさつがあった。

また本事業では文化庁・外務省・国際協力機構（JICA）・国立民族学博物館においてそれぞれコンサルテーション・ミーティングが行われた。

（1）　外務省大臣官房国際文化協力室とのコンサルテーション・ミーティング（2月25日）
（2）　国際協力機構（JICA）とのコンサルテーション・ミーティング（2月25日）
（3）　外務省中東アフリカ局アフリカ第一課への表敬訪問（2月25日）
（4）　文化庁文化財鑑査官への表敬訪問および文化資源活用課文化遺産国際協力室とのコンサルテーション・ミーティング（2月26日）
（5）　国立民族学博物館館長への表敬訪問および末森薫准教授とのコンサルテーション・ミーティング（2月27日）

なお本事業の実施にあたっては駐日スーダン共和国大使館のElrayih Mohamed Elawad Hydoub特命全権大使、Ali Mohamed参事官の全面的な協力を得た。

備　　考　本事業は文化庁より委託された。



文化庁におけるコンサルテーション・ミーティングの様子

国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務

研究組織　犬塚将英、朽津信明、秋山純子、早川典子、佐藤嘉則、芳賀文絵、水谷悦子、倉島玲央、石塚麻奈、島田潤、轟丈瑠、西田典由、紀芝蓮、片渕奈美香（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、宇髙健太郎（以上、客員研究員）、千葉毅、由井和子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目　　的　国宝高松塚古墳壁画の恒久的な保存方針に基づき、壁画の修理、修理環境の保全及び壁画の保存・活用に係る調査・研究業務を実施する。

成　　果

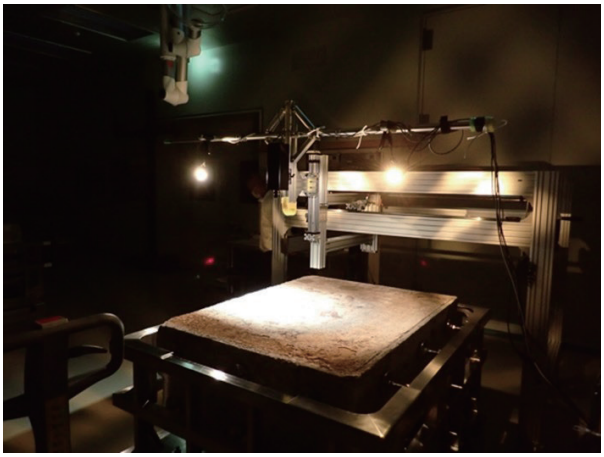
○壁画の制作技法に関する事項

- 奈良文化財研究所とともに、ハイパースペクトルカメラを用いて東壁女子群像が描かれている壁画の彩色材料の分析調査を実施した。また、東壁女子群像・東壁女子群像の分光分析及びデータ解析に関する協議を行った。
- 高松塚古墳壁画の保存活用に資するため、模擬試料を複数種作成し、実験室環境下における変形挙動のモニタリングを行った。
- 壁画の維持管理方針やその具体的内容について、科学的・学術的な助言を文化庁へ行った。また、維持管理の作業内容を検討するため、修理施設等で文化庁及び関係者との協議を行った。

　修復処置を施した代表的な箇所４点につき、目視状態観察と測色を含めた経過観察を継続的に行った。
- 壁画の修理作業に関する各種データの整理とアーカイブ化を行った。このために、現地にて、関係者と協議やアーカイブ資料の整理をした。

○壁画の保存環境の維持管理に関する事項

- 高松塚古墳壁画を良好な環境で保存活用するため、修理施設の温湿度、並びに空気質、浮遊粒子、浮遊微生物、付着微生物、並びに落下微生物（年２回）、生息生物のモニタリング調査（年４回）を実施し、適切な保存環境の維持管理を行った。
- 高松塚古墳壁画が適切な場所で保存管理・公開が行われることを見据え、これまでの環境調査データをもとにして古墳壁画の保存環境管理指針の策定に関する研究を行った。



ハイパースペクトルカメラを用いた東壁女子群像の調査風景

○その他

- 今年度行われた国宝高松塚古墳壁画仮設修理施設（国営飛鳥歴史公園内）の一般公開に際して、延べ４名を派遣し、立会い説明等を行った。
- 古墳壁画保存関連の事業全般について情報共有を行い、効率的で正確な作業を行うために、奈良文化財研究所と古墳壁画保存対策プロジェクトチーム会議を二回開催した。
- 文化庁主催の「古墳壁画の保存活用に関する検討会」（第37、38回）に、奈良文化財研究所とともに事務局として出席した。

備　　考　本事業は、文化庁より委託された。

特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務

研究組織　犬塚将英、朽津信明、秋山純子、早川典子、佐藤嘉則、芳賀文絵、倉島玲央、島田潤、轟丈瑠、西田典由、水谷悦子、石塚麻奈、國方沙希、紀芝蓮、片渕奈美香（以上、保存科学研究センター）、片山葉子、宇髙健太郎（以上、客員研究員）、千葉毅、由井和子（保存科学研究センター併任、文化財防災センター）

目　　的　**特別史跡キトラ古墳から取り出された壁画の保存修復措置に係る資料整備、古墳・壁画の保存・活用に係る調査・研究の業務を実施する。**

成　　果

特別史跡キトラ古墳から取り出された壁画の保存修復措置に係る資料整備、古墳・壁画の保存・活用に係る調査・研究の業務を実施した。

〇キトラ古墳壁画の制作技法に関する事項

- これまでの分析調査から得られたデータの解析と今後の壁画面のモニタリングの検討を奈良文化財研究所とともに行った。

〇キトラ古墳壁画の保存環境の維持管理に関する事項

- 再構成されなかった漆喰片を含むキトラ古墳壁画（5面）の最適な保存管理方法について、キトラ古墳壁画保存管理施設（キトラ古墳壁画体験館四神の館内）等で、関係者の協議を行い、必要な指示を行った。
  特に本年度は、再構成されずに保管されている辰巳申についての処置を開始したため、その点について国宝修理装潢師連盟と連携を取りつつ、指導助言を行った。今後、四神の館におけるはめ込みまでの予定も計画検討した。また、泥に転写された午の処置についても、該当する部分の漆喰の再構成を開始した。
- キトラ古墳壁画の保存管理に最適な設備環境に関し、保存科学・生物学等の観点から、必要な検討を行い、壁画の適切な保存・活用のための知見を提供した。



午の存在該当部分の漆喰片再構成

備　　考　本事業は文化庁より委託された。

ワット・ラーチャプラディット拝殿漆扉の現地保存に関する調査

研究組織　二神葉子（文化財情報資料部）、佐藤嘉則、島田潤（以上、保存科学研究センター）、藤井義久（客員研究員）

目　　的　タイ・バンコクに所在する王室第一級寺院ワット・ラーチャプラディット・サティットマハシマラムの日本製漆扉部材について、望ましい保存環境と虫害等の対策を含む、拝殿内の漆扉部材の保存に関する調査及び計画の提案を行う。

成　　果

タイの首都バンコクに所在するワット・ラーチャプラディット・サティットマハシマラム（以下、「ワット・ラーチャプラディット」）は、ラーマ４世によって1864（元治元）年に建立された王室第一級寺院である。同寺の拝殿の窓及び出入口の扉には、伏彩色螺鈿もしくは彩漆蒔絵が施された、漆塗りのパネル状の部材（以下、「漆扉部材」）がはめ込まれており、一部でも現存する漆扉部材の点数は伏彩色螺鈿67点、彩漆蒔絵32点にのぼる。これまでに当研究所が実施した調査を通して、これらの漆扉部材は寺院建立の直前、1862（文久2）年頃に日本で制作されたことが確認されており、これらはタイのみならず日本にとっても重要な美術作品といえる。東京文化財研究所は2011（平成23）年以来、この漆扉部材の保存修復に関する技術支援、及びタイ所在日本製漆工品や漆工材料も含む関連の調査研究を行っている。

漆扉部材は2021（令和3）年以来、タイ文化省芸術局（以下、「芸術局」）により本格的な修理が行われている。同寺がタイの人々にとって重要な祈りの場であることから、修理後は収蔵施設ではなく、拝殿内の元の位置に戻される予定である。しかし、拝殿に空調設備はなく、温湿度等の環境は博物館施設のように制御されてはいない。また、部材の一部には虫害の痕跡が見られるため、修理後の漆扉部材が置かれる環境として保存上の課題があると考えられる。

以上のような理由から、当研究所がワット・ラーチャプラディットから、漆扉部材の望ましい保存環境と虫害等の対策を含む、拝殿内の漆扉部材の保存に関する調査及び計画の提案を行うよう依頼を受け、当研究所及び同寺の間で、受託研究実施のための覚書を2024（令和6）年7月11日付で締結した。

令和7年度は、6月9日～11日にタイでの調査を実施した（派遣期間6月8日～12日）。現地では、ワット・ラーチャプラディットにおいて、拝殿の状況やシロアリ等の木材を食害する生物の有無を確認するとともに、虫損が見られる漆扉部材の目視調査を、タイ文化省芸術局の専門家とともに実施した。受託研究開始当初、部材の虫損が最近のものではなく、虫害がすでに収束している可能性も考慮したが、調査の結果、床のわずかな空隙から建物内にシロアリが侵入しており、食害を受けるおそれがあることが判明した。また、芸術局の専門家からワット・ラーチャプラディットやその他の文化財の害虫対策の手法について、情報収集を行うとともに、寺院の関係者を交えて協議を行った。



ワット・ラーチャプラディットでの虫害に関する調査

帰国後は、拝殿内の文化財害虫の同定を進めるとともに、持続可能な害虫対策に関して検討を実施した。

備　　考　本事業は、ワット・ラーチャプラディット・サティットマハシマラムより依頼された。

墨田区No.105遺跡から出土した近代布製品染料・繊維分析

研究組織　犬塚将英、早川典子、西田典由、紀芝蓮、片渕奈美香、寺島海（以上、保存科学研究センター）、安倍雅史（以上、文化遺産国際協力センター）

目　　的　墨田区No.105遺跡から、原型を保った黒色の布地が複数出土した。本研究の目的は、これらの布地がどのような素材からなり、どのような染料で染色されていたのかを解明することである。

成　　果

墨田区No.105遺跡から、原型を保った黒色の布地が複数出土した。本研究では、これらの布地がどのような素材からなり、どのような染料で染色されていたのかの解明を目的とする。

1．出土した布地の材料に関する知見を得るために、顕微赤外分光分析装置・顕微レーザーラマン分光分析装置・蛍光X線分析装置・X線回折装置などを用いて分析を行った。

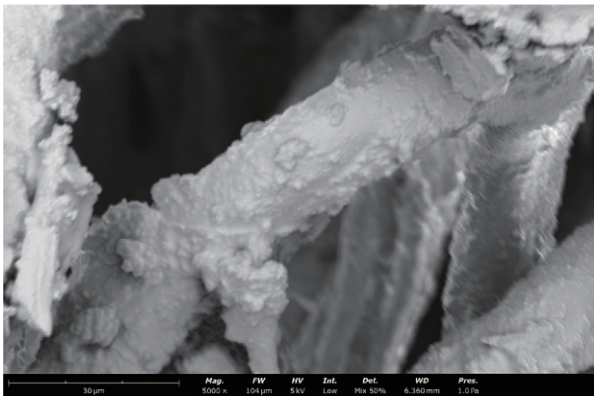
2．繊維の構造を詳しく調べるために、電子顕微鏡観察を行った。

3．以上の分析結果及び観察結果に基づき、受託研究受託元と協議を行い、歴史的な背景等の知見等と照らし合わせて考察を行った。

4．東京文化財研究所で得られた調査結果は墨田区から発行される調査報告書（2026（令和8）年6月刊行予定）にて公開される予定である。



出土した布資料



出土した布の電子顕微鏡観察結果

備　　考　本事業は国際文化財株式会社より委託された。

美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業

研究組織　犬塚将英、早川典子、倉島玲央、西田典由、一宮八重（以上、保存科学研究センター）、江村知子、小山田智寛、山永尚美（以上、文化財情報資料部）、前原恵美、菊池理予、小田原直也（以上、無形文化遺産部）、安倍雅史（文化遺産国際協力センター）ほか

目　　的　**美術工芸品修理において必要とされる用具や材料の今後の供給が危ぶまれている。生産者が極めて減少してきており、後継者がいない場合も多く、今後の供給の確保に関する事業の緊急性が高まっている。本事業では、美術工芸品保存修理に関する情報のアーカイブ化を行うとともに、生産者の支援と、周辺自治体等からの理解を高めるため、これらの用具材料に関する記録とその科学的裏付け調査をしつつ、人材育成等の協力を行う。**

成　　果

1）文化財修理を支えるネットワーク構築

文化財修理技術者への聞き取り調査を継続し、7年度は、甲冑修復の小澤正実氏を訪問、実態調査した（10月）。椿・ノリウツギ等の材料に関して、京都大学農学部粟野達也准教授、武田薬品工業株式会社　京都薬用植物園と連携し、情報交換しつつ研究を行っている。ノリウツギの確保に関し共同研究している標津町の担当者や東北大学名誉教授鈴木三男氏とともに2月に情報交換会を開催した。また、伊勢神宮神宝調製に使用される伝統材料のうち本事業に関連する調査を行った（国産生糸生産6月、キハダ採取6月、水晶採掘9月）。

2）修理記録や用具・原材料の生産技術のアーカイブ化

将来の保存修理事業や、保存修理に関する調査研究の材料として再利用できるように、アーカイブを構築する。6年度公開の修理記録データベースに7年度は5,143件を追加し合計11,532件の情報をウェブサイトで公開した（12月）。また実際の修理報告書などのデジタル化にも着手し、関係者と協議を重ねながらデータベースとの紐付け作業を行った。 この成果を3回の口頭およびポスター発表を行った（4月、10月、11月）。

3）用具・原材料の安定的な供給・使用に向けた研究（科学的研究・技術の記録化）

科学的研究については、ノリウツギ等のネリに加え、今後の確保が危機的なものとして椿、木灰、棒絵具も対象として遂行した。ノリウツギについて、標津町での保存方法・トロロアオイとの差異などについて研究を行い、文化財保存修復学会第47回大会（6月）および和紙文化研究会例会（9月）で発表した。また、椿の植物構造について、京都大学や京都薬用植物園と共同研究を開始し、吉野町での実際の栽培に関し調査し（6月）、また、高知でも同様の調査を行った（9月）。和紙製作に使用する木灰について、その煮熟と科学的成分の関連を調査した。装潢文化財で使用されてきた湿潤小麦デンプン（生沈）についても、乾燥小麦デンプンとの比較調査し、成果を学会発表した。また、装潢作品の補彩に用いる棒絵具のうち一種類については生産が途絶したため、他の同色絵具と化学成分の差異を調査している。10月には、蒔絵筆の生産をされている熊野筆を現地調査した。

用具について、彫刻刃物の使用方法に、砥石による手入れと株式会社小信の彫刻刃物を用いた木彫製作技術の記録映像を加えて再編集し、記録映像「普及編」としてウェブサイト公開（2月）。また、鏨金具製作に必用な魚々子鏨・蹴彫り鏨製作研修（選定保存技術「美術工芸品錺金具製作技術」保持者・松田聖の後継者・松田浩佑）の記録映像を編集しウェブサイト公開（2月）。

原材料については6年度撮影したフノリの採取・加工を編集、ウェブサイト公開（9月）。早川典子による布海苔の解説『文化財修理と布海苔の重要性』をウェブサイト公開（10月）。鳥羽市立海の博物館特別展示「ふのりと日本人」への映像提供。ノリウツギの採取・一次加工を撮影（6月）、編集して8年度にウェブサイトで公開予定。

修理技術について、6年度に撮影した文化財修理技術者の座談会を編集した「文化財修理技術者〜美術工芸品の選定保存技術〜」①〜③をウェブサイト公開（5月）。今年度より国有品修理（絵画／彫刻／漆工）の修理技術記録撮影を開始し（絵画：9月、12月、彫刻：12月）、修理技術者からの提供映像を併せて編集の終わった工程からウェブサイト公開を開始（絵画：「解体・クリーニング」「剥落止め」「表打ち」3月、彫刻：「調査・クリーニング」2月）。

そのほか、6年度に撮影を行った亀井剛（同「時代裂用綜絖製作」保持者）・鳥原雄治（同「金銀糸・平箔製作」保持者）の編集を行い、8年度にウェブサイトで公開予定。『月刊文化財』にかかる漆工品修理技術者座談会の記録映像を撮影（8月）、編集して8年度にウェブサイトで公開予定。

4）人材育成・情報発信

8年2月に、研究報告会を開催した。報告会は対面・オンライン併用で99名の参加者があった。フノリの生産地の対馬において漁協関係者に向けて、フノリの文化財用途の説明会を開催した（5月）。さらにノリウツギについて一般向けリーフレットを作成した。また、修理記録データベースや調査研究成果をまとめたウェブサイトを構築し、公開した（4月）。

備　　考　本事業は文化庁より委託された。

ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開

研究組織　橘川英規、江村知子、淺野真知、荒川理佐（以上、文化財情報資料部）、山梨絵美子（客員研究員）

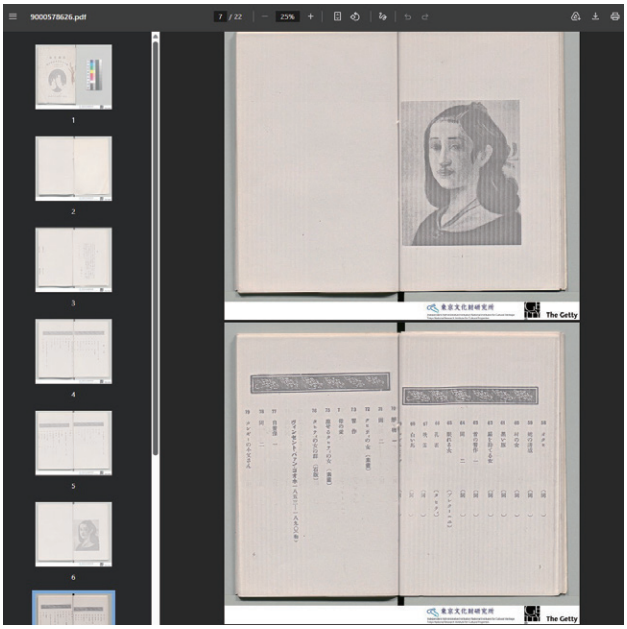
目　　的　本事業は、アメリカ・ゲッティ研究所との共同研究によって、日本美術史研究に関する基礎資料のデジタル化とウェブ公開を行うものである。現在47の大学・美術館等専門機関が協力する、美術に関するデジタル図書のポータルサイト「ゲッティ・リサーチ・ポータル」（https://portal.getty.edu/）を通じて、日本美術史研究に関する基礎資料を国内外に発信することで、日本美術への理解向上に貢献することを目的としている。2016（平成28）年2月に共同研究に関する協定書を締結して以降、近代美術の展覧会資料や江戸時代の版本など3,158件の図書等のデジタル化、オープン・アクセス化を実施し、その書誌情報をゲッティ研究所に提供してきた。本事業の発展性・効率性が認められたことにより、2021（令和3）年に共同研究に関する協定書を延長し、事業を継続している。

成　　果

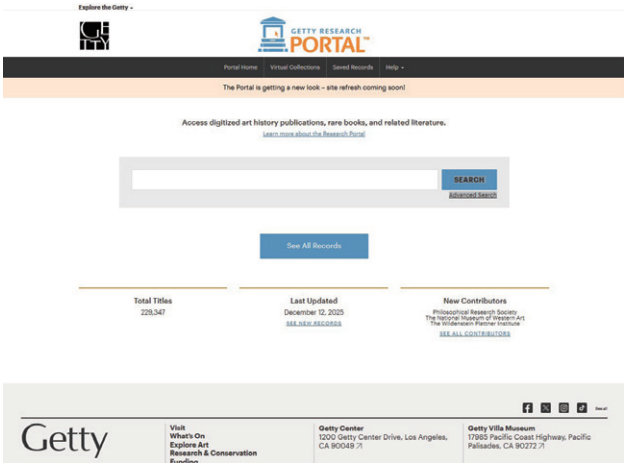
本事業では、海外の日本美術史研究者、特に初学者に対して有益な情報提供となるように、ゲッティ研究所副所長のキャスリーン・サロモン氏、プロジェクト担当者のメーガン・サラベラ氏らとデジタル資料の提供・公開に2016（平成28）年から取り組んできた。令和5年度に本事業の対象として合意した以下（2）～（5）のコンテンツ追加を進めた（（1）～（3）は令和6年度までに実施完了）。

（1）前田青邨文庫
（2）貴重書（和書）
（3）貴重書（洋書）
（4）近現代展覧会カタログ（1945（昭和20）年以前刊行）
（5）古美術展覧会カタログ（1945（昭和20）年以前刊行）

（4）・（5）のうち802件の書誌情報を整備し、ゲッティ・リサーチ・ポータルに掲載するため、ゲッティ研究所に提供した。



本事業でデジタル化した資料：
『白樺主催美術展覧会目録』（白樺同人、1913（大正2）年）



ゲッティ・リサーチ・ポータルのトップ画面

備　　考　本事業は、ゲッティ研究所と共同で実施した。

バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復

研究組織　前川佳文（文化遺産国際協力センター）、ダニエラ・マリア・マーフィー（文化協会バスティオーニ）、ステファーニア・フランチェスキーニ（壁画保存修復士）、マリア・レティッツィア・アマドーリ（ウルビーノ大学）

目　　的　ミャンマーのバガン遺跡は、11世紀から13世紀にかけて栄えたビルマで初めての統一王朝バガン朝の時代に建てられた仏教遺跡群である。遺跡内には煉瓦造の仏塔や寺院が約3,000基建ち並んでおり、その中のひとつであるローカテイパン（Loka-Hteik-Pan）寺院の内壁は、12世紀前半に描かれた仏教壁画で埋め尽くされている。本研究では、このうち南壁に描かれた壁画を対象にその技法材料や損傷傾向の調査を行い、適切な保存修復方法を確立することを目的とする。

成　　果

本事業は、バガン遺跡群（ミャンマー）に所在する寺院祠堂壁画の保存修復を目的として実施を予定していたが、現地の治安情勢の回復が見通せない状況を踏まえ、関係機関との協議を行った結果、事業の継続は困難であると判断した。このため、本事業は中止とし、交付を受けた助成金については返還手続きを行うこととなった。

備　　考　本研究は、公益財団法人住友財団の助成を得た。

歴史的建造物のデジタル３次元計測に関する研究

研究組織　浅田なつみ（文化遺産国際協力センター）、加戸啓太（千葉大学大学院工学研究院）、野口淳（公立小松大学次世代考古学研究センター）、白石明香（埼玉県立さきたま史跡の博物館）

目　　的　**本研究は、歴史的建造物の保全に関わる様々な段階におけるデジタル３次元計測の活用の可能性について、実践を踏まえながら検討するものである。歴史的建造物の調査研究、修理設計や施工管理、維持管理、情報公開など、歴史的建造物の保全に関わる各段階において、様々な既存のデジタル３次元計測手法を用い、実際のフィールドでの活用手法やその適性、効果や限界を検証する。**

成　　果

1．実　践

歴史的建造物の保全におけるデジタル３次元計測の活用方法を検討するため、以下３件について、３次元レーザースキャナー、３次元写真測量、iPhone Lidarなどで計測、データ活用を行った。※東京文化財研究所が所有する3Dレーザースキャナー Matterport Pro3、Artek Leoを主に使用した。

(1)　千葉県芝山町における成田空港の大規模拡張に伴う地域資料の緊急保全活動（協力：北総地域資料・文化財保全ネットワーク、芝山町教育委員会、千葉大学工学部頴原研究室）

成田空港の大規模拡張に伴う集落移転により失われる歴史的建造物および地域景観を対象として、3Dレーザースキャナー（Matterport Pro3）による記録保存を実施した。

(2) ブータンの伝統的民家の建築調査における3Dレーザースキャニングの活用（科研費「ブータンにおける伝統的石造民家の建築的特徴の解明と文化遺産保護手法への応用」(研究代表者 友田正彦) の一環として実施)。

ブータンで５月に実施した民家建築調査（p.79参照）において、部分的に3Dレーザースキャニングを導入した。３Dレーザー計測は、不整形かつ壁厚が一様でないブータンの版築造および石造建築について正確な記録の作成に貢献した。

(3) カンボジア・タネイ寺院遺跡での境内、部材計測（運営費交付金「カンボジア・タネイ寺院遺跡保存整備計画」の一環として実施）

カンボジア・タネイ寺院遺跡で実施している十字テラスの修復に向けた調査（運営費コ02）の一環として、異なる場所に保管されている十字テラス周囲の欄干の構成部材を、Artek Leoを用いて3D計測を行った。高精度の形状記録をもつ3Dデータを１：10スケールにて3Dプリンターで出力し、今後、十字テラスの修復計画において仮組の検討等に活用する予定である。3Dプリンターの出力は、共同研究者である加戸啓太助教の研究室で実施している。

また、タネイ寺院遺跡境内全域の建造物群を3Dレーザー計測で記録した。取得データは、「XRミートアップ東京」（3月28日）でタネイ寺院遺跡VR体験として公開した。

2．情報収集

HBIMや３次元モデルの活用を先行して実践している実務者・研究者らに、特に歴史的建造物の保存修理設計の実務における３次元計測の活用手法について、オンラインや対面でヒアリング調査を実施した。

発　　表

- Natsumi Asada: Documentation technique for historic buildings in relation with type of construction method: Three case studies of digital 3D documentation practices in timber frame, stone masonry, and rammed earth structures, Digital Heritage Conference. Riyadh. 25.12.10
- 浅田なつみ：「歴史的建造物の保存における３次元計測データの活用」　公立小松大学次世代考古学研究センターセミナーシリーズ第６回「次世代考古学と異分野融合研究」　公立小松大学　26.3.14

備　　考　本研究は、(公財) KDDI財団の助成を得た。

楽と舞：雅楽実践の身体コミュニケーション

研究組織　鎌田紗弓（無形文化遺産部）、工藤和俊（東京大学大学院総合文化研究科）、宮田紘平（国立研究開発法人理化学研究所）、高岡明（桜美林大学芸術文化学群）、清水大地（神戸大学人間発達環境学研究科）、Martin Clayton、Simone Tarsitani（以上、英国ダラム大学音楽学部）

目　　的　本研究の目的は、日本の伝統芸能・雅楽の視聴覚／生理学データおよび演者の語りを収録分析し、身体コミュニケーション（呼吸・動作同調）の実態を解明することである。これは、演奏者の内的な美的価値観や意識の探求につながる基礎研究で、すでに科学的データが蓄積されつつある他ジャンルの音楽・舞踊研究との新たな接点をもたらす。

成　　果

1．データ分析に基づく舞楽・管絃の比較

- 前年度に実施した舞楽・管絃の実験収録データを対象に、(A) オンセット分析に基づく舞楽・管絃の比較、(B) 動作パターンの抽出に基づく舞の分析を行った。
  (A) では、テンポ推移や拍ごとの延長傾向には舞楽・管絃の違いがみられた一方、楽器間のペアワイズ非同期性の分布には共通した傾向が認められた。時間進行のあり方は異なりながらも、楽器間のずらし方には一定の共通性があることが示された。
  (B) では、舞人の向き、音楽の進行、舞の動作カテゴリー等を映像トラックにアノテーションし、舞における動作パターンおよび動作構造を整理した。楽曲構成が舞の身体動作がどのように重なり合うかという観点から、多層的かつ柔軟な動作協調の検討を進めた。

2．実演協力者インタビュー内容の分析

- 前年度に実施した実演協力者インタビューの記録を集約し、音楽要素と舞踊要素の相互作用、およびそれを支える各演者の身体コミュニケーションに対する主観的意識について検討した。特に、演者同士が「拍感」や呼吸・間合い、舞楽・管絃の時間進行をどのように捉えて共有しているのかに注目した。これにより、演者の語りと計測値の両面から、舞楽・管絃における身体コミュニケーションについて考察する手がかりを得た。

発　　表

- 鎌田紗弓：「楽と舞：雅楽実践の身体コミュニケーション」　三島海雲記念財団 2025 年度学術研究奨励金研究報告会　25.9.19

備　　考　本研究は、東京文化財研究所・東京大学・桜美林大学・神戸大学・理化学研究所・ダラム大学の共同研究として、三島海雲記念財団 2024年度学術研究奨励金の助成を受けている。

フランス領カンボジア・ベトナムにおける遺跡保存のための「保護区域」概念の生成と展開

研究組織　黒岩千尋（文化遺産国際協力センター）

目　　的　フランス領インドシナでは、多数の遺跡群が植民地化された当初から「モニュメント」として保存の対象となり、宗主国フランスの保存制度が導入された。その過程で制度事項の一部が独自に加筆修正されていることをこれまで明らかにしてきたが、その過程には当時の同地域のモニュメントをめぐる社会背景や課題が表出している。その事例として「保護区域」の概念を対象に、カンボジア・ベトナムの遺跡群での展開の解明と意義を考察することを目的とする。

成　　果

1．ベトナムの史料館での史料調査

- フランス領ベトナム（トンキン・アンナン・コーチシナ）の遺跡保護制度と適用状況に関する史料と文献収集のため、ホーチミンの第二国立公文書センターにて6月23日～7月5日に調査を行った。フランス領時代に保護の対象として「歴史的記念物」に指定された建造物や自然景勝地に指定されたサイトのリストや指定のための審議会の議事録など、文字史料計6ファイル592ページを収集した。
- その他、植民地時代の写真・地図・文書が多数アーカイブ化されている、フランス国立図書館のオンラインアーカイブにて、関連する遺跡等について随時史料収集を行った。

2．遺跡群および周辺地域での事例調査

- 7月2日～3日にベトナムの遺跡調査と保護状況の調査のため、ベトナム南部アンザン省に位置するオケオ遺跡とオケオ文化展示館、アンザン省博物館、カントー博物館、ヴィンロン博物館を、ホーチミン市トンドゥックタン大学の研究協力者と共に訪問・見学した。

3．史料の読解、分析

- 史料の読解、分析は継続中であるが、指定された「歴史的記念物」の年代ごとの傾向や推移が、これまでに確認されている。

4．調査研究の成果の発表

- 2024（令和6）年に実施した内容とあわせて、フランス領インドシナ（カンボジア・ベトナム）にて1910～1930年代に導入された遺跡周辺への「保護区域」の設置事例とその指定経緯を梗概にまとめ、9月10日～12日に開催された日本建築学会学術講演会にて報告した。
- 今後、歴史的記念物指定のプロセスや年代ごとの推移について、読解した内容を論文にまとめて報告予定である。

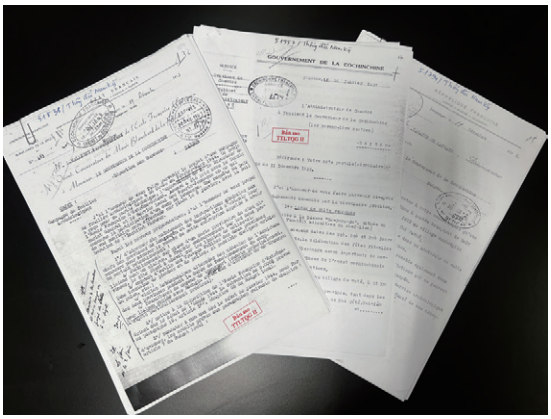
論　　文

- 黒岩千尋：「フランス領インドシナの遺跡保存と『保護区域』―アンコール遺跡群の保存と公園化」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025　pp.627-628　25.9

備　　考

- 本研究は、公益財団法人　村田学術振興・教育財団の助成を得た。

- なお、本研究は2024（令和6）年5月に開始し2025（令和7）年4月に完了予定であったが、海外渡航調査および史料収集の進捗状況により、期間を12月まで延長して実施した。



収集史料の一部


オケオ遺跡（Go Cay Thi遺跡屋外展示）

中世漢画における故事仙人図の受容研究
―旧大仙院書院の間障壁画を中心に

研究組織　武瀟瀟（文化遺産国際協力センター）

目　　的　本研究は、旧大仙院書院の間障壁画（東京国立博物館蔵、以下本作）を中心に、中世日本における漢画受容の具体的様相、とりわけ故事人物図および仙人図の受容と変容を明らかにすることを目的とする。

成　　果

調査研究

九州国立博物館調査（6月）

九州国立博物館において特別観覧調査を実施した。調査対象作品は以下の通りである。

P-2文阿弥花伝書　文鏡筆
A-60 伝狩野元信筆　春夏耕作・秋冬山水図屏風
A-32 狩野正信筆　山水図（重要文化財）
A-94 伝狩野玉楽筆　山水図
zz7527山水図　藝愛筆（重要文化財、文化庁所蔵）

東京における資料・作品調査（7月）

国立国会図書館、東京大学東洋文化研究所、東京国立博物館資料館において関連文献および写真資料の調査を実施した。また、東京国立博物館で狩野派屏風絵《囲棋観瀑図屏風》(A-11689) の調査を行った。

大徳寺大仙院調査（10月）

同院の庭園（国宝）および方丈建築（国宝）について調査と特別撮影を行った。調査は一般公開前の時間帯に特別許可を得て実施したものであり、方丈書院の間の建築構成（隣接する仏間周辺を含む）を確認するとともに、障壁画との位置関係、さらに書院空間と庭園との視覚的関係についても検討を進めた。

東北大学附属図書館調査（1月）

東北大学附属図書館において、『君台観左右帳記』二点を調査した。これにより、室町期書院飾りの構成や調度類の配置について具体的な知見を得ることができた。

スミソニアン国立アジア美術館調査（2月）

2月18日および19日の二日間、スミソニアン国立アジア美術館において、以下の作品を調査した。

F1916.534 朱買臣図
F1911.249 渭水訪賢図（伝李唐）
F1911.296 渭水訪賢図（伝夏珪）
F1955.25, F1955.26四季花木草花図下絵山水図押絵貼屏風（六曲一双　伝狩野元信）
F1963.5a-g 山水図
F1956.8a-c, F1956.9, F1956.10山水図（三幅対　伝狩野元信）
F1904.365 山水図
F2020.5.1a-j竹林人物図
F1919.126洞庭秋月図

調査中には同館中国美術部学芸員および保存修復部職員と意見交換を行い、中国人物画題の図像伝統や画絹の継ぎ目、支持体構造などの技術的特徴について知見を得た。

論　　文

- 武瀟瀟：「旧大仙院方書院の間『故事仙人図』の再考―建築・庭園の視座を加えて」東京大学東洋文化研究所中国美術論文発表会　26.1.17

備　　考

本研究は、メトロポリタン東洋美術センターの助成を得た。



スミソニアン国立アジア美術館における調査の様子

薬師寺金堂薬師三尊像の制作背景に関する考察

研究組織　黒﨑夏央（文化財情報資料部）

目　　的　**奈良・薬師寺金堂薬師三尊像は、日本を代表する仏教彫刻として名高い。本研究では、その制作背景について、とくに本像にみられる造形的特色に注目し、国内外の関連作例との比較検討を通して考察する。また、大陸の造像との関わりという観点から、中国・朝鮮半島に加え、より広いアジア地域へと視野を広げて本像を捉え直すことにより、その歴史的・思想的背景の一端を明らかにすることを目指す。**

成　　果

• 造形的特色の検討

薬師寺像の両脇侍像が条帛を着用しないことに着目し、国内外の他の作例との比較検討を行った。その結果、同時代の作例が条帛を着用しているのに対し、本像ではこれを着用しないという特徴が際立つことが確認された。こうした検討を通じて、薬師寺像の造像年代や造像背景について考察を広げるための手がかりが得られた。制作背景を考察するうえで、条帛非着用という造形的特色に注目する視点の有効性を確認することができたものと考える。

• 作例の実見調査

造形的検討を進めるにあたり、関連作例の実見調査を行った。薬師寺像の源流を考えるうえで重要と考えられる長安（現西安）の造像作例を確認した。また、アジア地域の広がりのなかで本像を捉えるため、中国とインドの双方から影響を受けたベトナムの作例も実見した。

• 研究の意義

薬師寺像に関する研究は、これまで制作年代の問題が中心となる傾向にあった。本研究では、造形的特色の検討や関連作例の実見調査を通して、その優れた造形がいかに成立したのかという制作背景にまで視点を広げることを目指した。こうした検討により、年代論だけでは捉えきれない薬師寺像の成立事情を考えるための手がかりが得られたものと考える。あわせて、アジアにおける造像活動のなかで本像を考えることにより、より広い視野から本像を捉え直す必要性が確認された。

論　　文

• 黒﨑夏央：「薬師寺金堂薬師三尊像の制作背景に関する考察」『鹿島美術研究（年報第43号別冊）』2026（令和8）年11月15日発行予定

備　　考

本研究は、鹿島美術財団　美術に関する調査研究助成の助成を得た。

旧長尾美術館コレクションに関する基礎的研究
―作品の付属資料等に見る伝来情報を中心に―

研究組織　月村紀乃（文化財情報資料部）

目　　的　**わかもと製薬の創業者である長尾欽弥・よね夫妻が収集した作品を母体として、1946（昭和21）年に神奈川県鎌倉市に開館した長尾美術館は、1965（昭和40）年頃には事実上の解散状態に至った。本研究では、国内外に散逸した同館の旧蔵品を目録化し、箱書や蔵品票、書簡など伝来に関わる資料を調査することで、個々の作品の収集経緯や、展覧会での公開歴も含めた、旧長尾美術館コレクションの全体像の把握を目指す。**

成　　果

1．美術館の活動実態の調査

長尾美術館が活動していた当時の資料として、東京文化財研究所が発行する『日本美術年鑑』などのデータブックを参照し、設立の経緯、所在地の変遷、役員の構成といった組織の基本情報を整理した。

また、長尾欽弥・よね夫妻の行動に関する調査として、美術雑誌の記事のほか、小林一三（逸翁）や松永安左エ門（耳庵）ら数寄者の日記資料などから、関係する記述を抽出した。

これらの情報に、長尾美術館を会場とする展覧会、あるいは、長尾美術館コレクションが出品された展覧会の開催歴を加える形で、長尾美術館および長尾夫妻の動向をまとめた年表を作成した。

2．旧蔵品および直筆資料の調査

長尾美術館旧蔵品のうち、所在が判明する作品について実見調査をおこなった。調査にあたっては、箱の紐や包み裂に注目して比較することで、それらが長尾美術館のもとにあった際に付された可能性を検討した。

また、長尾欽弥本人による身辺記と考えられる「好田荘雑記」（個人蔵）を調査し、翻刻をおこなった。こうした直筆資料と、旧蔵品の箱書や蔵品票を照合することで、長尾欽弥の筆跡に関する判断材料を整備した。

3．長尾美術館旧蔵品データベースの構築

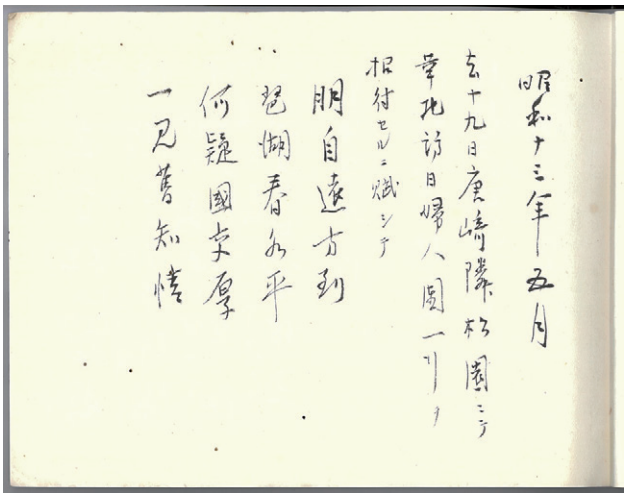
現時点では、旧長尾美術館コレクションに関する完全な目録などは確認されていない。そこで、主に戦前の美術図録や展覧会目録から、長尾欽弥あるいは長尾美術館の旧蔵品を抽出したリストをFileMaker上で作成した。さらに、伝来や付属品に関する情報、展覧会への出品歴のほか、書籍・雑誌への掲載歴なども逐一加えていくことで、旧蔵品についての情報を集約した、研究の核となるデータベースを構築した。

以上のような研究成果については、2026（令和8）年11月15日発行予定の『鹿島美術研究（年報第43号別冊）』に発表予定である。

備　　考

本研究は、公益財団法人鹿島美術財団の助成（美術に関する調査研究）を得た。





「好田荘雑記」（個人蔵）

公開シンポジウム「技・材料・環境保全―能管からみる伝統楽器の課題―」(仮)

研究組織　前原恵美（無形文化遺残部）、亀川徹（東京藝術大学）、森田都紀（京都芸術大学）、倉島玲央（保存科学研究センター）、小林慧人（森林総研関西支所）、今石みぎわ（無形文化遺産部）

目　　的　**科学研究費助成事業「能管の『製作技術』と『原材料の安定的な確保』に関する研究」(基盤研究（B)、研究代表者：前原恵美）の成果を基盤に、研究範囲を拡大した成果および課題をより具体的に一般にむけてわかりやすく公開し、幅広い情報共有と課題意識を促す機会を創出する。**

成　　果

（一社）東洋音楽学会第76回大会（沖縄県立芸術大学、26.11.30）での共同発表「能管の原材料と製作技術に関する調査報告」(前原恵美、亀川徹、森田都、倉島玲央による共同発表）を踏まえ、その成果を時間的な制約にとらわれず、かつ演奏家、能管製作者にも加わってもらって公開研究会を開催した。研究者による発表だけでなく、演奏家の試演により能管の響きの違いを実際に聴いたり、演奏家や製作者のコメントをもらったり、質疑応答を行うことで、より実感を伴った成果公表の場となった。また、さまざまな能管や原材料となる竹を簡易展示し、参加者に触れたり試奏してもらったりする場を提供して、体験型の研究会を目指した。

また、学会発表、公開研究会の成果を踏まえて『能管の原材料と製作技術に関する調査報告』を刊行した。

公開研究会

- 公開研究会「能管の原材料と製作技術に関する調査研究報告」25.12.19 (東京文化財研究所)
  1．趣旨説明 (前原恵美)
  2．能管製作者・原材料・製作技術の歴史と現在
  　①歴史について (森田都紀)
  　同　②現状について (前原恵美)
  　同　③本研究で扱った能管について (前原恵美)
  3．能管の原材料・製作技術と響き
  　①音響実験の方法について (前原恵美)
  　同　②音響実験に用いた能管について (森田都紀)
  　同　③吹き心地の傾向について (前原恵美)
  　同　④吹き心地と音響分析結果の関連について (亀川徹)
  　同　⑤試奏とインタビュー (邦楽囃子笛方：福原寛乃、　聞き手：前原恵美) (写真1)
  4．能管の原材料のこれから①竹材の科学分析からわかること (倉島)
  5．意見交換・総括（能管製作者：田中康友、今石みぎわ、前原恵美 (写真2)

※会場に能管や竹を展示、触れてもらう場を設けた。

刊行物

- 『能管の原材料と製作技術に関する調査報告』(26.3刊行、29ページ)

備　　考　本事業は、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団助成研究の助成を得た。



写真1　公開研究会の試演



写真2　公開研究会の意見交換・総括

蓬莱園に関する基礎的研究

研究組織　松浦一之介（文化遺産国際協力センター）

目　　的　**本研究は、かつて江戸三名園の一つに数えられた旧平戸藩上屋敷の庭園「蓬莱園」の遺構に関する文献史料や考古資料を２年間の計画で調査し、その新たな知見から当該遺構の重要性を再評価するための情報を整理・蓄積するとともに、近世・近代の遺跡を保護する視点として、現在に伝承される有形文化と無形文化との関係性に着目すべきことを提示するための基礎的研究である。**

成　　果

1．史料の調査

- 蓬莱園が廃園する直前の1937（昭和12）年に東京高等造園学校が作成した記録類を確認することを目的として、東京農業大学において７月24日に調査を実施した。本調査では、「平山勝蔵史料」とよばれる一群の記録類の中から蓬莱園に関する写真17点、図面８点その他を観察し、それらの写真撮影を実施した。
- 松浦史料博物館が所蔵する蓬莱園関連の絵図と古文書を確認することを目的として、同館において10月16日に調査を実施した。調査では、『鳥越邸之圖二枚』ならびに『家世續傳』のうち「宗陽公本傳」および「天祥公本傳」その他を観察し、写真撮影を実施した。

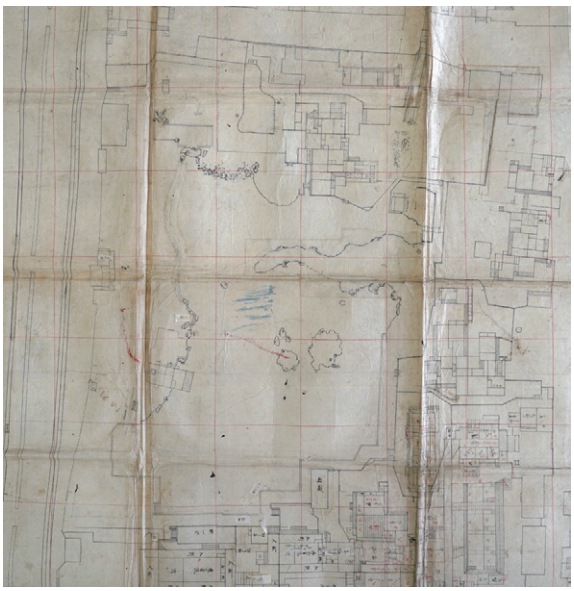
2．史料の分析

- 「平山勝蔵史料」のうち、従来その存在が知られていなかった『蓬莱園庭園植樹計画図』から、廃園直前に同園を公園として保存活用しようとする動きがあったことが窺える。なお、廃園直前に同校が作成した「蓬莱園実測圖」の原本その他については、これを確認することができなかった。
- 「松浦史料」のうち『鳥越邸之圖二枚』は、いずれも「申三月廿日」と張紙された包紙に入る。そのうち１面は、1812（文化９）年に作成された「分間図」を1816（文化13）年に書き写した『御上屋敷』の絵図であることが判明した。もう１面については年代が不詳だが、神戸大学が所蔵する1845（天保16）年製の『松浦壱岐守江戸御屋敷之圖』と比較すると、文化年間の絵図と殿舎の配置等に共通点が多く、また文化３年の火災後に再建された「金綺楼」が描かれており、文政年間前後に作成されたものと推測される。また、このことから1834（天保５）年に作成された『蓬莱園記』に記述される同園の様子は、この年代不詳の絵図に描かれる状況と深く関係するものと考えられる。
- 『蓬莱園記』については、1891（明治24）年の刊行本および1834（天保５）年に作成され、現在国立国会図書館デジタルコレクションに所収される『蓬莱園記草』を参考に現代語訳中である。

備　　考　本研究は、公益財団法人文化財保護・芸術研究助成財団の助成を得た。



松浦史料博物館蔵『鳥越邸之圖二枚』のうち文化13年絵図（庭園部分）



松浦史料博物館蔵『鳥越邸之圖二枚』のうち年代不詳絵図（同上）

1930年代前半における韓国絵画コレクション研究
―東京文化財研究所所蔵資料をもとに―

研究組織　田代裕一朗（文化財情報資料部）

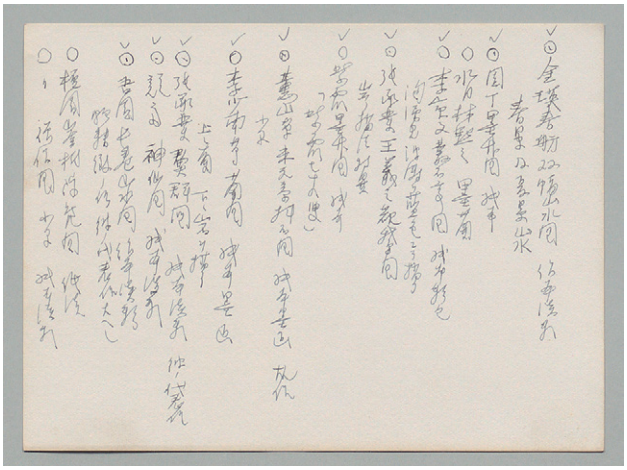
目　　的　**本研究に先立ち、2023～24年度に実施した先行助成研究では、関野貞による1931～33年の韓国絵画調査資料を整理し、李秉直、李漢福、朴栄喆ら主要コレクターの所蔵品情報を記した調査メモを翻刻した。しかし、これらの記載は作者名や作品名などに限られており、調査メモのみから具体的な作品を特定することは困難であった。そこで本研究では、調査メモを東京文化財研究所および国立中央博物館所蔵のガラス乾板と照合することで作品の特定を進め、1930年代における韓国絵画個人コレクションの実態ならびに作品移動史の解明に向けた基盤構築を目指すものである。**

成　　果

本研究の実施期間は、2025（令和7）年10月1日～2026（令和8）年12月31日である。

先行助成研究で翻刻した調査メモ42面に加え、新たに翻刻を進めている8面を含む計50面の調査メモと、ガラス乾板545枚（東京文化財研究所所蔵272枚、韓国国立中央博物館所蔵273枚）の照合を鋭意進めている。

備　　考　本研究は、韓国 国外所在文化遺産財団の助成（国外韓国文化財海外研究支援事業）を得た。



関野貞調査メモ（李秉直所蔵品に関する調査メモ、1933年8月26日付）　東京文化財研究所蔵
※4～5行目に「○李寅文　叢石亭図　紙本彩色 淘湧ナル波涛ヲ藍色ニテ描ク」と記載



ガラス乾板（原板番号：14544）　東京文化財研究所蔵
※李寅文「叢石亭図」、撮影当時の所蔵者は「李秉直」
※当該作品は現在、韓国・澗松美術館蔵

文化遺産国際協力コンソーシアム令和7年度シンポジウム「紛争からの復興と文化遺産」

本シンポジウムは、紛争終結後における文化遺産保護活動の事例を踏まえて、国際社会による支援や協力の可能性、文化遺産の復興が国や社会の復興に与える影響、日本の果たすべき役割等について再考することを意図し、国の復興や社会の再建プロセスにおける重要なカギとしての文化復興の意義や、復興支援のパッケージの中に有形・無形の文化遺産保護分野の支援を位置づけることの重要性について、文化遺産国際協力に関わる研究者や外交の専門家による議論を通じて展望した。

日時：2025（令和7）年11月30日（日）　13：00〜17：00
会場：東京大学弥生講堂一条ホール
主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁
参加者：117名
プログラム：
趣旨説明　山内和也（文化遺産国際協力コンソーシアム西アジア分科会長）
講演
　星野俊也（国連システム合同監査団）「紛争からの復興と文化遺産：国際社会の役割とは」
　松本太（一橋大学）「日本の中東外交と文化遺産の保護」
　下田一太（筑波大学）「カンボジアにおける遺跡保存と地域発展」
　西藤清秀（橿原考古学研究所）「パルミラ遺跡の破壊を契機とするシリア人人材育成と遺跡復興に向けた活動」
パネルディスカッション
　モデレーター　清岡央（読売新聞）
　パネリスト　星野俊也、松本太、下田一太、西藤清秀、山内和也

文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会「日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―」

近年、少子高齢化や都市への人口集中、地球温暖化の進行など、急速な社会的・環境的変化を背景に、世界各国で文化遺産保護のあり方を見直す動きが進んでいる。本研究会では、特に過去10年間で政策転換が進んだ東アジアの3か国ー日本・中国・韓国ーを取り上げ、各国が直面する社会的背景や政策的課題、制度的対応を共有するとともに、共通の課題への取り組みを通じた相互理解の促進を図り、あわせて各国が推進する文化遺産国際協力の最新動向等について議論を行った。

日時：2025（令和7）年9月14日（日）　13：00〜17：00
会場：東京文化財研究所　セミナー室
主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁　2025–2026日中韓文化交流年記念事業
参加者：82名
プログラム：
趣旨説明　小嶋芳孝（文化遺産国際協力コンソーシアム東アジア・中央アジア分科会長）
講演
　塩川達大（文化庁）「日本の文化財保護政策と文化遺産国際協力」
　杜暁帆（中国・復旦大学）「中国における文物保護法の改正および文化遺産国際協力の現状」
　ベク・ヒョンミン（韓国・国家遺産庁）「国家遺産基本法と国家遺産体制への転換」
　パク・ヒョンビン（同上）「国家遺産庁の国際交流協力の現況と課題」
パネルディスカッション
　モデレーター　海野聡（東京大学）
　パネリスト　塩川達大、杜暁帆、ベク・ヒョンミン、パク・ヒョンビン、友田正彦（文化遺産国際協力コンソーシアム

事務局長）
コメンテーター　八並廉（九州大学）

事業の一部として実施した研究集会・講座等　　受託「文化遺産国際協力コンソーシアム事業」の一部として実施

文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会「文化遺産保護の国際動向」

文化遺産国際協力に関する情報の更新を目的に、定期的に取り上げるテーマとして開催している研究会である。今回は、2025年に行われた世界遺産条約および無形文化遺産保護条約に基づく国際会議に加えて、ケニア・ナイロビで行われた文化遺産のオーセンティシティに関する国際会議での議論を取り上げ、直近の文化遺産国際協力の潮流を共有する場とした。

日時：2026（令和8）年1月17日（土）　13：30〜16：30
会場：東京文化財研究所　セミナー室
主催：文化遺産国際協力コンソーシアム、文化庁
参加者：73名
プログラム：
趣旨説明　岡田保良（文化遺産国際協力コンソーシアム副会長）
講演
　西和彦（文化庁）「世界遺産条約をめぐる昨今の動向」
　野嶋洋子（アジア太平洋無形文化遺産研究センター）「無形文化遺産の保護に関する条約をめぐる近年の国際動向」
　岡崎瑠美（芝浦工業大学）「アフリカにおける遺産のオーセンティシティに関する国際会議での議論」
パネルディスカッション
　モデレーター　岡橋純子（聖心女子大学）
　パネリスト　西和彦、野嶋洋子、岡崎瑠美
　コメンテーター　八並廉（九州大学）

受託研究の一環として刊行された刊行物

『科研報告論集 織豊期における公武の知的交流―本草学から絵事へ―』第Ⅰ巻



本調査の前半部分を論文集として刊行した。公家日記・織豊期の庭園資料・本草学書受容の相互関係を整理し、近世初期における自然観と視覚表現の関係を再検討した。とくに、詩歌・庭園・絵画という異なる領域において共有される自然認識の枠組みに着目し、公武の知的交流のなかで形成された表象の構造を明らかにすることを試みた。2026年1月刊行、56ページ。
（（織豊時代における公武の知的交流についての研究―本草学から絵事へ）24K03498の一環として実施）



『ブータンにおける祭礼芸能の変容実態とその保護に関する研究　東ブータンのメラ地域におけるヤクチャムをめぐって』

令和4〜6年度科学研究費補助金（基盤C／課題番号22K01088）による調査報告として刊行したもの。ブータン東部のメラ地域におけるヤクチャムと呼ばれる祭礼芸能について、その基本的内容と近年の変容の実態を現地調査に基づいてまとめたもの。2026年3月刊行、197ページ。



『ノリウツギの手引き』

文化財の修復に用いる紙を漉く際に欠かせないノリウツギのネリについての啓発を図る目的で発行した。ネリとは何か、和紙の原材料と文化財修復の関係、ノリウツギ産地の標津町の紹介などを記載。2026年3月発行、8ページ。

（補助事業：用具原材料の一環として刊行）

『Report on the 34th Seminar: School Education and Cultural Heritage』

本報告書は、昨年度刊行した令和6年度文化遺産国際協力コンソーシアム第34回研究会「学校教育と文化遺産」報告書の英語版である。英語、2025年10月刊行、60ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）





『文化遺産国際協力コンソーシアム第35回研究会　文化遺産保護と奈良文書―国際規範としての受容と応用―　報告書』

本報告書は、昨年度刊行した令和6年度文化遺産国際協力コンソーシアム第35回研究会報告書「Report on the 35th Seminar “30 Years of the Nara Document in the Global Context of Heritage Conservation”」の日本語版である。2026年2月刊行、96ページ。

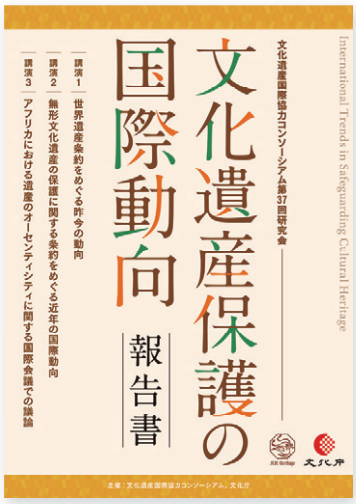
（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）

『文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会　日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―　報告書』

本報告書は、文化遺産国際協力コンソーシアムが2025（令和7）年9月14日に開催した第36回研究会「日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―」の内容をまとめたものである。2026年3月刊行、60ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）





『文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会　文化遺産保護の国際動向　報告書』

本報告書は、文化遺産国際協力コンソーシアムが2026（令和8）年1月17日に開催した第37回研究会「文化遺産保護の国際動向」の内容をまとめたものである。2026年3月刊行、54ページ。

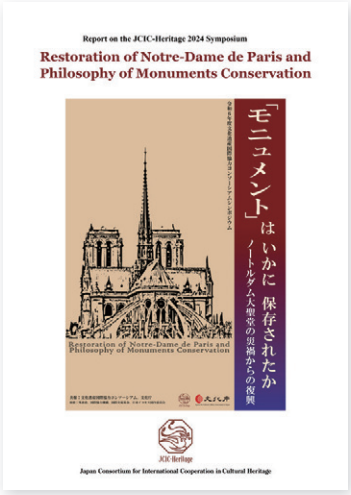
（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）



『2025 Survey for International Cooperation Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage: Survey on the state of the Cultural Heritage in the 2023 Al Haouz Earthquake Affected Areas in Morocco』

本報告書は、2023年9月に大地震があったモロッコ王国を対象に、有形・無形の文化遺産の復旧状況を把握し、国際協力による支援の可能性や支援国が配慮すべき点を把握することを目的に国立考古・文化遺産科学研究所（INSAP）と共同で行った現地調査の成果をまとめたものである。英語、2026年3月刊行、236ページ。

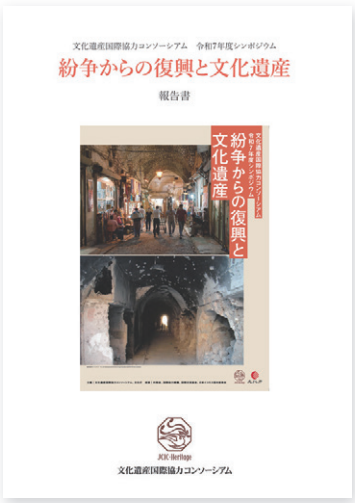
（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）



『Report on the JCIC-Heritage 2024 Symposium: Restoration of Notre-Dame de Paris and Philosophy of Monuments Conservation』

本報告書は、昨年度刊行した文化遺産国際協力コンソーシアム令和6年度シンポジウム「〈モニュメント〉はいかに保存されたか：ノートルダム大聖堂の災禍からの復興」報告書の英語版である。英語、2026年3月刊行、77ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）



『文化遺産国際協力コンソーシアム　令和7年度シンポジウム　紛争からの復興と文化遺産　報告書』

本報告書は、文化遺産国際協力コンソーシアムが2025（令和7）年11月30日に開催した令和7年度シンポジウム「紛争からの復興と文化遺産」の内容をまとめたものである。2026年3月刊行、65ページ。

（文化遺産国際協力コンソーシアム事業の一環として刊行）

4. 個人の研究業績

凡　例

氏　名
（1 公刊図書等）
（2 報告）
（3 論文）
（4 解説、翻訳等）
（5 学会発表）
（6 講演会、研究会発表等）
（7 所属学会、委員等）
（8 教育等）

秋山 純子 | AKIYAMA Junko （保存科学研究センター）
(2 報告)「博物館・美術館等の施設・保存環境管理に関する全国調査―実施経緯と基本集計から見た動向」（水谷悦子、伊庭千恵美、秋山純子)『保存科学』65　pp.157-174　26.3
(4 解説)「研究成果概要」『文化財の保存環境にかかる調査研究　令和３年度～令和７年度　研究成果報告書』 pp.2-4　東京文化財研究所　26.3
(4 編集)『文化財の保存環境にかかる調査研究　令和３年度～令和７年度　研究成果報告書』 312p　東京文化財研究所　26.3
(5 学会発表)「Analysis of Green Coloring Materials in the Illustrated Natural History Books Owned by Takamatsu Matsudaira Family Using Hyperspectral Imaging」（Chih lien CHI, Junko AKIYAMA, Kai TERASHIMA, Noriyoshi NISHIDA, Tsuyoshi CHIBA, Masahide INUZUKA and Keiko TAKAGI）　TECHNART 2025　― International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation　Perugia, Italy　25.5.6-5.9
(5 学会発表)「アンケート調査から見えた全国の博物館・美術館等の 温湿度管理の現状と課題」（秋山純子、伊庭千恵美、 水谷悦子、由井和子）　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「博物館・美術館等のアンケート調査による 施設管理と改修の動向分析」(水谷悦子、伊庭千恵美、秋山純子、由井和子)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「夏季の美術館収蔵庫における温湿度環境と熱負荷の設定温度変更による影響」（伊庭千恵美、水谷悦子、 秋山純子）　2025年度 日本建築学会 近畿支部研究発表会　大阪保健医療大学、大阪工業技術専門学校　25.6.29
(5 学会発表)「岩石上の漆喰層に描かれた壁画のための適切な保管環境の検討 ー実環境における吸放湿過程での漆喰層に対するデジタル画像相関法を用いたひずみ測定ー」（岡深雪、脇谷草一郎、柳田明進、魚島純一、荘旺璋、水谷悦子、秋山純子、伊庭千恵美）　日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.5-6
(5 学会発表)「高松松平家所蔵博物図譜に用いられたコバルトガラス顔料（スマルト・花紺青）と青色の用法に関する一考察」(寺島海、秋山純子、紀芝蓮、西田典由、犬塚将英、高木敬子)　日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.5-6
(5 学会発表)「乾性油を用いた塗膜の加熱による変化について」(由井和子、秋山純子、犬塚将英、小谷竜介、高妻洋成)　日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.5-6
(5 学会発表)「設定温度の変更が美術館収蔵庫の温湿度環境と熱負荷に与える影響の検討」(伊庭千恵美、水谷悦子、秋山純子) 令和7年度空気調和・衛生工学会大会　香川大学 幸町キャンパス　25.9.3
(5 学会発表)「美術館の温湿度環境とエネルギー消費の調査および改善方法の提案その２ 設定温度の変更が夏季の収蔵庫の温湿度に与える影響」（伊庭千恵美、水谷悦子、秋山純子）　2025年度 日本建築学会大会（九州）　九州大学　25.9.10
(5 学会発表)「美術館の温湿度環境とエネルギー消費の調査および改善方法の提案 その３ 設定温度の変更が夏季の収蔵庫の熱負荷に与える影響」（伊庭千恵美、水谷悦子、秋山純子）　2025年度 日本建築学会大会（九州）九州大学　25.9.10
(6 講演)「最適ではなく適切な保存環境を考える」 NCARシンポジウム006「ミュージアムと気候変動 ―サステナブルな未来に向けて」　国立新美術館　26.2.28
(6 講義)「文化財と保存科学」 特殊研究講座　昭和女子大学　25.6.18
(6 講義)「温湿度環境の調査と解析」 第14回文化財IPMコーディネータ資格取得のための講習会と試験　飯田橋レインボービル　25.12.10
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会、文化財保存修復学会
(7 委員等)「法隆寺金堂壁画　保存活用委員会」保存環境ワーキング・グループ専門委員、国立アイヌ民族博物館運営会議構成員、国立アイヌ民族博物館ワーキング会議構成員、埼玉県立歴史と民俗の博物館協議会委員、国立民族学博物館人間文化研究基幹研究プロジェクト研究協力
(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻連携教授

青木 慧 | AOKI Kei （無形文化遺産部）
(5 学会発表)「江戸期吉原遊廓におけるはやり歌の研究―随筆を通した《岡崎女郎衆》・見世すががきの歌・継節の考察―」 東洋音楽学会第146回例会　武蔵野音楽大学　25.6.7
(5 学会発表)「江戸期吉原遊廓におけるはやり歌の研究―随筆を通した《岡崎女郎衆》・見世すががきの歌・継節の考察―」 楽劇学会第118回例会　オンライン　25.6.20
(5 学会発表)「江戸期宿場町の音楽文化を再考する ―文学・絵画史料をめぐって―」 東洋音楽学会第76回大会　沖縄県立芸術大学　25.11.30
(7 所属学会等) 楽劇学会、東洋音楽学会、日本音楽学会
(8 教育) 東京藝術大学音楽学部楽理科教育研究助手、横浜国立大学教育学部非常勤講師

淺田 なつみ | ASADA Natsumi （文化遺産国際協力センター）
(2 報告)「3. Partial Repair of the East and West Entrances of the Central Tower」（MAO Sokny, ICH Sreng, PROM Sopheak, RO Sovandaroth, CHHAY Loeun, MOM Sophon, SOM Sopharath, KIM Sothin, TOMODA Masahiko, ASADA Natsumi, KUROIWA Chihiro）『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.17-33　APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　26.3
(2 報告)「4. Preliminary Survey for the Restoration of the Cruciform Terrace in front of the Central Complex」(TOMODA Masahiko, ASADA Natsumi, YAMADA Ayano, MAO Sokny, SIM Dany, SOEUN Danet, PHONE Tara, SOM Sopharath, KIM Sothin)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.35-50　APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　26.3
(2 報告)「2.3. Description of the building」（Natsumi Asada, Chihiro Kuroiwa, Bhola Krishna Maharjan, Hirakaji Maharjan, Era Maharjan）『Survey Report of Pukhusi Paramaana Chhen in Old Kirtipur』 pp.25-34　Kirtipur Municipality and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　26.3
(2 報告)「2.4. Building Transition of Pukhusi Paramaana Chhen」『Survey Report of Pukhusi Paramaana Chhen in Old Kirtipur』 pp.35-58　Kirtipur Municipality and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　26.3
(3 論文)「ネパール・パタン旧市街の仏教僧院における被災建物の復旧過程」（淺田なつみ、サキャラタ）『日本建築学会計画系論文集』90　pp.1382-1393　日本建築学会　25.6
(3 論文)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価　その３　顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」（金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子）『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025　pp.619-620　日本建築学会　25.9
(3 論文)「イランの垂直軸型風車　その２：風車を有する集落の構成」（淺田なつみ、Alireza Khaksar)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025　pp.565-567　日本建築学会　25.9
(3 論文)「東京都台東区谷中「花重」保存再生プロジェクト　その３：町家「花重」の保存再生の方針について」(椎原晶子、渡邉尚恵、淺田なつみ)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025　pp.593-594　日本建築学会　25.9
(4 解説)「物故者（令和4年）池田武邦」『日本美術年鑑　令和五年版』

pp.118-119　東京文化財研究所　26.1
(4 編集)『Survey Report of Pukhusi Paramaana Chhen in Old Kirtipur』88p　Kirtipur Municipality and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　26.3
(4 記事)「ICOMOS Scientific Symposium 2025 ハヌマンドカ王宮でのサイトビジット参加報告」『日本イコモス季刊誌（オンライン）2025 年冬号』　https://icomosjapan-information.org/20241/2025-winter/ハヌマンドカ王宮でのサイトビジット/　日本イコモス国内委員会　25.12
(4 記事)「風と水を扱う技術」『文化遺産国際協力センターウェブサイト　コラム（オンライン）』　https://www.tobunken.go.jp/kokusen/column-2025-01/　文化遺産国際協力センター　25.5
(5 学会発表)「イランの垂直軸型風車　その２：風車を有する集落の構成」（淺田なつみ、Alireza Khaksar）　日本建築学会大会学術講演会　九州大学伊都キャンパス　25.9.11
(5 学会発表)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価　その 3　顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子)　日本建築学会大会学術講演会　九州大学伊都キャンパス　25.9.12
(5 学会発表)「東京都台東区谷中「花重」保存再生プロジェクト　その３：町家「花重」の保存再生の方針について」(椎原晶子、渡邉尚恵、淺田なつみ)　日本建築学会大会学術講演会　九州大学伊都キャンパス　25.9.12
(6 発表)「Candidate houses for “Historic House of Kirtipur”」　Online Workshop for Conservation of Historic Settlement of Kirtipur　Online　25.8.18
(6 発表)「Reconstruction Process of Buddhist Monasteries Damaged by Gorkha Earthquake in Patan Old City in Nepal」(Natsumi Asada, Lata Shakya)　ICOMOS AGA 2025 Scientific Symposium, Perceptions of Heritage and Resilience　Lumbini Buddhist University　25.10.17
(6 発表)「Documentation technique for historic buildings in relation with type of construction method: Three case studies of digital 3D documentation practices in timber frame, stone masonry, and rammed earth structures」　Digital Heritage Conference 2025　Riyadh International Convention & Exhibition Center　25.12.10
(6 発表)「Preliminary survey on settlements with ancient windmills in Razavi Khorasan and South Khorasan」(Natsumi Asada, Alireza Khaksar, Mohammad Ali Bozorgmehr)　イラン考古学最前線（2026）東京文化財研究所　26.3.6
(6 発表)「歴史的建造物の保存における 3 次元計測データの活用」　公立小松大学次世代考古学研究センターセミナーシリーズ第 6 回「次世代考古学と異分野融合研究」　公立小松大学　26.3.14
(6 講義)「ネパール・ゴルカ地震後の歴史的建造物の復旧」　東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻：修復計画論　東京藝術大学　25.5.8
(6 講義)「Utilisation of 3D Digital Documentation in Heritage Conservation Practice」　Practical Workshop for Restoration of the Cruciform Terrace in Ta Nei temple “3D Digital Documentation for Restoration Planning”　Angkor Conservation Office　26.1.21
(7 所属学会等) ICOMOS、都市史学会、日本建築学会

安倍 雅史 | ABE Masashi （文化遺産国際協力センター）

(1 公刊図書)「第 9 章 ディルムンとマガンー「万物の黎明」から見たペルシア湾岸の古代文明」『考古学の黎明ー最新研究で解き明かす人類史（小茄子川歩、関雄二（編））』 光文社新書　pp.317-336　25.9
(1 公刊図書)『古代オリエントの遺跡と文明ー悠久なるイランと考古学者たち』 吉川弘文館　137p　26.1
(1 公刊図書) (Seiji Kadowaki, Masashi Abe, Chie Akashi, Saiji Arai, Yui Arimatsu, Yasuhisa Kondo, Shogo Kume, Takehiro Miki, Hiroto Nakata, Takahiro Odaka and Kazuya Shimogama)『Curating the Prehistoric Past: Studies on West Asian Archaeology and Beyond in Honour of Yoshihiro Nishiaki』 Archaeopress　395p　26.3
(1 公刊図書)「A Study on the Early Dilmun Burial Mounds with Subsidiary Burials」(Masashi ABE, Kenji OKAZAKI)『Curating the Prehistoric Past: Studies on West Asian Archaeology and Beyond in Honour of Yoshihiro Nishiaki』 Archaeopress　pp.367-386　26.3
(2 報告)「3 次元計測と国際協力事業」『ICOMOS Japan information web 2026 年春号』 26.3
(2 報告)「新・クウェート歴史散策①ペルシア湾を舞台にした海上交易のはじまり」『日本クウェイト協会報 danah』247 号　pp.15-18　26.2
(3 論文)「Reflections of Neolithic Subsistence Changes in Lithic Industries: A Case Study of the Hormangan Site」(Morteza Khanipour, Masashi ABE)『Ancient Iranian Studies』4(13) 号　pp.3-29　25.7
(3 論文)「Funeral Practice at an Early Pre-Pottery Neolithic B Settlemet in Masyoon (Northwest Saudi Arabia)」(Kenji Okazaki, Akinori Uesugi, Shogo Kume, Masashi Abe, Abudulmohsen Almunif, Sumio Fuji)『Asian Journal of Paleopathology』7　pp.1-10　25.9
(3 論文)「ディルムンの王墓を掘るーバハレーン、アアリ古墳群西プロジェクト 2025 ー」(安倍雅史、末森薫、笠原朋与、長尾琢磨、鈴木崇司)『西アジア発掘調査報告会報告集』 pp.45-48　26.3
(3 論文)「シリア内戦下における歴史資料の被災と国際援助」『歴史学研究増刊号』 pp.183-189　25.10
(5 学会発表)「シリア内戦下における歴史資料の被災と国際援助」2025 年度歴史学研究会大会　駒澤大学　25.5.20
(5 学会発表)「Surviving at the Edge of the Lut Desert: Archaeozoological Analysis of the Kale Kub, a Possible Uruk Outpost in Eastern Iran」(Sarieh Amiri, Homa Fathi, Mohammad, Hossein Azizi Kharanaghi, Masashi Abe, Hossein Davoudi, Marjan Mashkour)　16th ICAZ Working Group, Archaeozoology of Southwest Asia and Adjacent Areas　Munich, Germany　25.5.27
(5 学会発表)「バハレーンにおけるイスラーム墓碑の 3 次元計測調査（第 3 次）」(長尾琢磨、山田綾乃、安倍雅史)　日本西アジア考古学会第 30 回大会　東海大学　25.6.22
(5 学会発表)「バーレーン、アアリ古墳群西の第 1 次調査」(安倍雅史、末森薫、笠原朋与、長尾琢磨、鈴木崇司)　日本西アジア考古学会第 30 回大会　東海大学　25.6.22
(5 学会発表)「The First Season of Excavations at Aali West, Bahrain」(Masashi ABE, Kaoru, SUEMORI, Tomoyo KASAHARA, Takuma NAGAO, Takashi SUZUKI)　The 58th Seminar for Arabia Studies　Zayed National Museum, Abu Dhabi　25.12.12
(5 学会発表)「3D Measurements of Historical Islamic Tombstones in Bahrain (2023-2025)」(Takuma NAGAO, Ayano YAMADA, Masashi ABE)　The 58th Seminar for Arabia Studies　Zayed National Museum, Abu Dhabi　25.12.12
(5 学会発表)「ディルムンの王墓を掘るーバハレーン、アアリ古墳群西プロジェクト 2025 ー」(安倍雅史、末森薫、笠原朋与、長尾琢磨、鈴木崇司)　第 33 回西アジア発掘調査報告会　東京文化財研究所　26.3.21
(6 講演)「謎の海洋王国ディルムンとその古墳群」 講演会・体験型イベント「バーレーンの歴史と文化」 東京文化財研究所　25.4.20
(6 講演)「東京文化財研究所による中東バーレーンでの発掘調査と研修事業」 博物館の国際研修ー文化をめぐる包摂的かつ協働的な活動の可能性　国立民族学博物館　25.10.4
(6 講演)「砂漠の王国ヨルダンと海洋の王国バーレーンの世界遺産：遊牧民と海洋民が残した古代遺跡」 大阪・関西万博開催記念 古墳サミット　フェニーチェ堺　25.11.29
(7 所属学会等) 日本オリエント学会、日本西アジア考古学会
(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻連携准教授

石灰 秀行 | ISHIBAI Hideyuki （文化財情報資料部）

(6 発表)「データベース構造から改めてWordPressを考える」(小山田智寛、石灰秀行、二神葉子) WordCamp Kansai 2025 グランフロント大阪 25.11.2

石村 智 | ISHIMURA Tomo (無形文化遺産部)
(1 公刊図書)「内なる他者へのまなざし：沙流川調査の前史としての済州島調査」(大西秀之、石村智)『アイヌ民族への知の返還：民族誌情報の還元と活用』 京都大学学術出版会 pp.171-184 26.3
(3 論文)「天翔ける船」『海ノ民話学ジャーナル』1 pp.44-47 日本海洋文化総合研究所 26.3
(3 論文)「自由視点映像システムによる舞踊の記録の可能性」(石村智、前原恵美、高橋和久、中川義章)『無形文化遺産研究報告』20 pp.47-56 26.3
(4 編集)『Proceedings of Tokyo International Workshop for Safeguarding Sudan's Cultural Heritage』 322p 東京文化財研究所 26.3
(5 学会発表)「パラオの旧日本軍沈船と今」 第43回日本オセアニア学会研究大会・総会 東京外国語大学 26.3.21
(6 発表)「Protecting while promoting: Two designation systems for traditional crafts in Japan」国際会議「2025 World Forum for Intangible Cultural Heritage」 Jingwansa, Seoul 25.9.17
(6 発表)「民話は文化遺産となりうるか？：奄美における景観の記憶」海ノ民話学共同研究会 日本建築学会会議室 25.12.26
(6 発表)「ヒトはなぜ踊るのか？：水平的運動・垂直的運動・象徴的運動」 科学研究費「マテリアマインド：物心共創人類史学の構築」第4回全体会議 慶應義塾大学 26.1.11
(6 発表)「舞台裏から見るということ：自由視点映像システムによる芸能の記録における課題と展望」 科学研究費「マテリアマインド：物心共創人類史学の構築」国際共同ワークショップ「実験考古学の最前線：モノと動作解析のパースペクティブ」 愛知学院大学 26.2.21
(6 発表)「Climate change Impact on Intangible Cultural Heritage」 国際会議「Asia-Pacific Regional Conference and Capacity—Building Workshop on World Heritage Cities and Climate Action」 立命館大学 26.3.7
(6 講演)「ユネスコ無形文化遺産としての高麗人参」 2025韓・日高麗人参シンポジウム TKPガーデンシティ幕張 25.12.4
(6 司会)「第3セッション「灯台観光を基軸とした新たなコラボレーション：人、場所、ストーリーをつなぐ」」 海と灯台学カンファレンス2025 TOKYO FMホール 25.10.20
(6 司会)「セッション04：アーカイブ資料の活用による身体技法の比較研究」 科学研究費「マテリアマインド：物心共創人類史学の構築」第4回全体会議 慶應義塾大学 26.1.11
(6 パネリスト)「座談会「海ノ民話」から学ぶ海のめぐみ」 はこだて国際科学祭 函館市地域交流まちづくりセンター 25.8.24
(7 所属学会等) ICOMOS、沖縄文化協会、考古学研究会、史学研究会、東南アジア考古学会、日本オセアニア学会
(7 委員等) 考古学研究会常任委員

石塚 麻奈 | ISHITSUKA Mana (保存科学研究センター)

石渡 美鈴 | ISHIWATA Misuzu (アソシエイトフェロー)
(4 編集)(武瀟瀟、石渡美鈴、加藤雅人、副島まどか)『在外日本古美術品保存修復協力事業「女房三十六歌仙扇面貼交屏風」 No.2020-1』 151p 東京文化財研究所 26.3
(4 翻訳)「3 Conservation」『The Cooperative Program for the Conservation of Japanese Art Objects Overseas, Byobu Screens Featuring the Thirty-six Poetesses』 pp.93-131 東京文化財研究所 26.3
(7 所属学会等) Australian Institute for the Conservation of Cultural Material

一宮 八重 | ICHIMIYA Yae (アソシエイトフェロー)
(1 公刊図書)「チリメン絵資料の悉皆調査ー川上コレクションの調査から見えてきたこと」『書物學』 勉誠社 pp.27-34 25.11
(1 公刊図書)(ジョイス・H・タウンゼント (著) 早川典子、鳥海秀実、一宮八重 (著))『文化財保存修復のための科学 材料・化学入門』朝倉書店 152p 26.2
(1 共著)「科学調査 最近の成果」(早川典子、倉島玲央、西田典由、一宮八重)『月刊文化財』748 pp.17-20 26.1
(4 解説)「ガラス絵の魅力にせまる 観察と自然科学的手法からみた材料・技法」(水本和美、一宮八重、新免歳靖、上部隆男、降旗千賀子、塚田全彦)『大ガラス絵展ー波濤 (うみ) をこえ、ガラスにきらめくファンタジアー』 pp.41-54 大ガラス絵展実行委員会、浜松市美術館 26.2
(5 学会発表)「A study on Japanese folk art of the 18th - 19th centuries: crêpe print, *doro*-e painting, and glass painting」the 16th Pacific Rim Conference on Ceramic and Glass Technology and ACerS Glass and Optical Materials Division Meeting conference (PACRIM 16 / GOMD 2025) Hyatt Regency, Vancouver 25.5.4
(5 学会発表)「悉皆調査と再現実験による縮緬版画の特徴に関する報告」(一宮八重、大和あすか、宮寺雷太、三井田盛一郎) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「江戸時代の黒染め染織品に使用された鉄媒染の同定」(佐藤萌、一宮八重、倉島玲央、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「近世日本彩色資料に用いられた黄色色材の判別方法について」(大和あすか、一宮八重、西田典由) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「有機溶媒高含有ゲルを利用した文化財クリーニング方法の検討」(秋山花子、一宮八重、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(6 発表)「報告1 今年度の科学調査の成果」 美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.6
(7 所属学会等) 文化財保存修復学会

犬塚 将英 | INUZUKA Masahide (保存科学研究センター)
(1 公刊図書)「蛍光X線で解読するキトラ古墳壁画」(大迫美月、犬塚将英、脇谷草一郎、田村朋美、早川典子)『文化資源が秘めた歴史物語ー先端分析技術で鮮やかに読み解く』 東北大学金属材料研究所 pp.14-17 25.9
(1 公刊図書)「アオトラ石の自然科学的特性ー非破壊分析法の確立に向けてー」(建石徹、犬塚将英)『日本列島各地の磨製石斧の変遷と技術』 雄山閣 pp.126-130 25.11
(4 解説)「物故者 (令和4年) 澤田正昭」『日本美術年鑑 令和五年版』 p.117 東京文化財研究所 26.1
(4 解説)「被災地でレスキューされた文化財の一時保管施設における環境管理」『地域の宝をみんなで守る 文化財防災・救援プロジェクト2025 コラム⑦』https://readyfor.jp/projects/bunbou2025/announcements/378320 25.5
(5 学会発表)「Analysis of Green Coloring Materials in the Illustrated Natural History Books Owned by Takamatsu Matsudaira Family Using Hyperspectral Imaging」(Chih lien CHI, Junko AKIYAMA, Kai TERASHIMA, Noriyoshi NISHIDA, Tsuyoshi CHIBA, Masahide INUZUKA and Keiko TAKAGI) TECHNART 2025 — International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation Perugia, Italy 25.5.6-5.9
(5 学会発表)「ハイパースペクトルカメラを用いた可視域から近赤外域における彩色材料の反射分光分析」(紀芝蓮、寺島海、犬塚将英) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14-6.15
(5 学会発表)「近世社寺文化財建造物における塗装彩色材料の使い分けに関する研究」(北野信彦、大西功紗、生駒萌、本多貴之、倉島玲央、犬塚将英) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14-6.15

(5 学会発表)「高松松平家所蔵博物図譜に用いられたコバルトガラス顔料(スマルト・花紺青)と青色の用法に関する一考察」(寺島海、秋山純子、紀芝蓮、西田典由、犬塚将英、高木敬子) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5-7.6
(5 学会発表)「拡散反射型赤外分光分析によるトレーシングクロスの材質分析」(西田典由、久利希、森田健介、千葉毅、芳賀文絵、紀芝蓮、寺島海、犬塚将英) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5-7.6
(5 学会発表)「乾性油を用いた塗膜の過熱による変化について」(由井和子、秋山純子、犬塚将英、小谷竜介、高妻洋成) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5-7.6
(5 学会発表)「The History and Current Status of Cultural Heritage Disaster Risk Management in Japan」(TATEISHI Toru, KODANI Ryusuke, INUZUKA Masahide and KOZUMA Yosei) 東アジア文化遺産保存国際シンポジウム 成都 25.10.30-11.2
(6 講演)「被災地における文化財のレスキュー活動とIPM」 文化財に係るコンプライアンス研修会 プラザおでって 25.5.30
(6 講演)「Conservation and Utilization of Mural Paintings of Takamatsuzuka and Kitora Tumulus」 International Symposium "Preserving the Past, Creating the Future: Utilization Strategies for Conservation Technique and Digital Content in Mural Tombs" 韓国国立古宮博物館 25.8.29
(6 講演)「Non-invasive Analysis of Painting and Pigments in the Tokyo National Research Institute for Cultural Properties」 The 100th Anniversary of the National Palace Museum Collections Management and Conservation Forum 台湾国立故宮博物院 25.9.3
(6 講演)「Scientific Analysis of Cultural Heritage using Non-invasive Techniques」 韓国国立古宮博物館特別展 "RE: BORN, Conservation Science Inheriting Time" における特別講演 韓国国立古宮博物館 25.12.18
(6 講演)「Scientific Analysis of Cultural Heritage using Non-invasive Techniques」 特別講演 韓国国立文化遺産研究院 25.12.19
(6 講義)「日本における文化財防災の歩みと文化財防災センターの取り組み」 トルコにおける文化遺産防災体制向上のための拠点交流事業 招聘研修 奈良文化財研究所 25.12.10
(6 司会)「基調講演者とパネリストによる討論「地域社会の復興と文化財」」 国立文化財機構文化財防災センター設立5周年記念シンポジウム みらいにつなぐ文化財〜災害から文化財をまもる〜 東京国立博物館 25.10.1
(7 所属学会等) ICOM-CC、IIC、日本建築学会、日本物理学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員等)「法隆寺金堂壁画 保存活用委員会」壁画ワーキング・グループ材料調査班専門委員、ひたちなか市史跡保存対策委員、史跡十五郎穴横穴群及び虎塚古墳保存活用計画策定委員、文化財の保存と公開における熱湿気環境WG委員、文化財保存修復学会創立百周年記念事業委員、日本文化財科学会第22期評議員、国立科学博物館 外部評価委員

今石 みぎわ | IMAISHI Migiwa (無形文化遺産部)

(2 報告)「趣旨説明 民俗技術や有形の民俗文化財のネットワーク」『第20回無形民俗文化財研究協議会報告書 民俗文化財をネットワークで守り、活かす』 pp.3-5 東京文化財研究所 26.3
(4 解説)「書評 菊地和博著『東北の民俗歴史論―儀礼・祭礼・芸能』」『山形新聞』(4月16日付) 山形新聞社 25.4
(4 記事)「民具を未来に活かすために」『湖国と文化』192 pp.18-23 びわ湖芸術文化財団 25.7
(5 学会発表)「明宝における「木籠」の文化―全国との比較を通して―」日本民具学会第47回大会 明宝コミュニティセンター(岐阜県郡上市) 25.11.9
(6 発表)「日本列島における木を編む文化―秋田市太平箕を中心に―」国立民族学博物館共同研究「バスケタリーと線状物に関する人類学的研究―植物生態と民族技術に着目して」第2回研究会 国立民族学博物館 25.9.28
(6 発表)「「民俗文化財をネットワークで守り、活かす」発題」(今石みぎわ、久保田裕道) 第20回無形民俗文化財研究協議会 東京部文化財研究所 25.12.5
(6 発表)「Human–Nature Relationships and Their Contemporary Significance as Seen through the Baskets of the Dai Williams Collection」 Reinterpreting Japanese Collections in Museums: Case Studies from the Phoebe A. Hearst Museum of Anthropology and Beyond Phoebe A. Hearst Museum of Anthropology, Berkeley, USA 26.1.21
(6 発表)「有形の民俗資料(民具)の保存・継承―自治体によるコレクション管理の現状と今後の展望―」 法政大学資格課程主催シンポジウム「博物館の持続可能なコレクション管理―選択と責任の新たな枠組み―」 法政大学市ヶ谷キャンパス 26.1.24
(6 講演)「民俗学へのご招待―そこからどんな世界が見える?」 令和7年度博物館講座 岡山県立博物館 25.6.8
(6 講演)「箕を語る―日本列島の「箕」の文化」「論田・熊無の藤箕製作技術」保存継承活動15周年記念講演会 氷見市立博物館 25.10.4
(6 講演)「民具としてみるござ・むしろ」 フォーラム「い草×花ござ 歴史/文化/職人技」 岡山県立博物館 25.11.16
(6 講演)「集められた民具からわかること―日本各地の箕・籠を例にして」 私たちのくらしをモノから見る―民具と生活財の視点から 香川県文化会館 26.3.7
(6 講義)「Japanese Landscapes and Lifeways Reflected in the Baskets in the Dai Williams Collection」 Workshop on the Japanese Collection of the Hearst Museum, Part 3 (リモート開催) Center for Japanese Studies, Barkeley, University of California 25.11.15
(7 所属学会等) 東北民俗の会、日本民具学会、日本民俗学会
(7 委員等) 国立民族学博物館共同研究員、文化庁文化財部調査員、日本民具学会理事、日本民俗学会理事、山形県文化財保護審議委員、山形県立博物館運営協議会委員、一般社団法人技の環評議員、「長良川の鵜飼漁の技術」保存活用協議会 調査懇談会構成員

武 瀟瀟 | WU Xiaoxiao (アソシエイトフェロー)

(4 編集)(武瀟瀟、石渡美鈴、加藤雅人、副島まどか)『在外日本古美術品保存修復協力事業 女房三十六歌仙扇面貼交屏風 No.2020-1』 151p 26.3
(4 翻訳)「1 はじめに(Introduction)」『在外日本古美術品保存修復協力事業 女房三十六歌仙扇面貼交屏風 No.2020-1』 pp.1-4 26.3
(4 翻訳)「2.1 作品解説(Art Historical Analysis of the Artwork)」(江村知子)『在外日本古美術品保存修復協力事業 女房三十六歌仙扇面貼交屏風 No.2020-1』 pp.7-17 26.3
(6 司会)「パネル:東アジアからみた日本美術―外来文化輸入の再検討―」(閻志翔、廣谷妃夏、陳雪溱、馬歌陽) 東アジア日本研究者協議会第9回国際学術大会 翰林大学 25.11.1
(7 所属学会等) 意匠学会、美術史学会

宇髙 健太郎 | UDAKA Kentaro (客員研究員)

(5 学会発表)「墨用煤の性状及び古典的膠の製造方法改良に関する研究」 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.22-6.23
(6 講演)「墨與膠的科學與實踐 (Science and Applications of Inkstick (Sumi/ Mo/ Meok) and Animal Glue)」 東洋傳統書畫的技法材料與 裝 潢 (Techniques, Materials, and Conservation of Traditional East Asian Calligraphy and Paintings) 國立臺灣師範大學 25.8.26-8.27
(6 講演)「伊藤若冲作品の技法材料及び機構等に関する概説」 膠文化研究会第17回公開研究会「膠・滲・暈 ―若冲から近代日本画まで―」 東京藝術大学 25.11.29
(6 講演)「墨及び膠の実体と活用」 嵯峨美術大学 25.12.10

(6 講義)「日本画模写: 書画の構造と技法材料、膠の製法と性状、墨の構造と機能、制作や修理における活用」 東洋美術学校 25.9.13-10.25
(6 講義)「日本画 材料技法演習: 膠とはなにか？; 製造方法と性状; 分類; 応用 墨、文化財修復」 尾道市立大学 25.11.19-11.20
(7 所属学会等) 文化財保存修復学会
(7 委員等) 膠文化研究会運営委員
(8 教育) 東洋美術学校非常勤講師、尾道市立大学非常勤講師

江村 知子 | EMURA Tomoko (文化財情報資料部)

(2 報告)「共同研究の経緯と展望」『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』 pp.8-9 東京国立博物館・東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「文化財情報の発信における課題と展望―修理記録アーカイブの構築―」(江村知子、小山田智寛、田良島哲、山永尚美)『月刊文化財』748 pp.8-12 26.1
(3 論文)「Shutendōji Beyond Time and Space: The 'Shutendōji Begins' Exhibition at the Suntory Museum of Art」『Orientations』56(3) pp.112-121 25.4
(3 論文)「酒呑童子の旅」『酒呑童子ビギンズ展図録』 pp.178-183 サントリー美術館 25.4
(4 解説)「住吉廣行筆「酒呑童子絵巻」(ライプツィヒ・グラッシー民族博物館)、住吉弘尚筆「酒呑童子絵巻」」(根津美術館) 作品解説」『酒呑童子ビギンズ展図録』 pp.201-203 サントリー美術館 25.4
(4 編集)『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』 68p 東京国立博物館・東京文化財研究所 26.3
(4 解説)「女房三十六歌仙扇面貼交屏風 (モントリオール美術館)」『在外日本古美術品保存修復協力事業報告書 No.2020-1』 pp.7-17 東京文化財研究所 26.3
(4 編集)『ノリウツギの手引き』 12p 東京文化財研究所 26.3
(4 記事)「「物故者」鎌田純子、西本周子」『日本美術年鑑』令和5年版 pp.117-118、134-135 東京文化財研究所 26.1
(6 発表)「酒呑童子の旅」酒呑童子絵巻リレートーク「三人寄れば、鬼退治」サントリー美術館 25.5.18
(6 発表)「趣旨説明」美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究 成果報告会 東京文化財研究所 25.7.29
(6 発表)「山崎架橋図の光学調査について」令和7年度第6回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 25.9.25
(6 発表)「(ポスター発表) 文化財 (美術工芸品) の修理記録データベースについて―「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」事業報告―」(山永尚美、小山田智寛、田良島哲、江村知子) 一般社団法人 国宝修理装潢師連盟 第29回定期研修会 京都府民総合交流プラザ 京都テルサ 25.10.3
(6 発表)「基準なき文化財修理記録のデータベース化を支えた Claris FileMaker の高い柔軟性」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲、江村知子) Claris カンファレンス 2025 虎ノ門ヒルズフォーラム 25.11.7
(6 司会) 2025年度 美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業 報告会 東京文化財研究所 26.2.6
(7 所属学会等) アート・ドキュメンテーション学会、美術史学会
(7 委員等) 文化庁文化財第一課非常勤調査員、国立歴史民俗博物館運営委員、国立歴史民俗博物館資料収集委員、江戸東京博物館収蔵委員、美術史学会専門委員
(8 教育) 学習院大学文学部学芸員課程非常勤講師

大川 柚佳 | OKAWA Yuka (客員研究員)

(3 論文)「作者の意図への配慮は西洋絵画修復を正当化しうるか―意図論争を通じた分析美学的検討」『フィルカル』11(1) pp.290-308 26.2
(6 発表)「将来世代への配慮と排除の構造：文化遺産の保存修復における世代間倫理」 オンライン政治理論研究会 (OPTF) 第11回定期研究報告会 オンライン 25.9.15
(7 所属学会等) ICOM-CC、Institute of Conservation、文化財保存修復学会

大河原 典子 | OKAWARA Noriko (客員研究員)

(7 所属学会等) 日本色彩学会、日本美術院、文化財保存修復学会
(8 教育) 鎌倉女子大学児童学部教授

岡田 健 | OKADA Ken (客員研究員)

(4 エッセイ)「斑鳩町の住民となって法隆寺を思う (二)「国宝」について考えるーその一」『聖徳』255 11-25 法隆寺 26.1
(5 学会発表)「法隆寺五重塔塑像の保存環境実態調査 その1) 調査概要」(安福勝、岡田健、小椋大輔、脇谷草一郎、Wu Fan) 文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5
(5 学会発表)「法隆寺五重塔塑像の保存環境実態調査 その2) 予備調査結果」(Wu Fan、小椋大輔、安福勝、岡田健、脇谷草一郎) 文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5
(6 発表)「Biohistory of Cultural Heritage —Dunhuang, Longmen, and Seokguram— What are we looking at? (文化遺産の生命誌―敦煌、龍門、石窟庵)」 2025 シルクロード人文学国際学術会議「石窟庵：統一新羅仏教美術と建築の精華から世界文化遺産へ」 Lahan Select Gyeongju 25.10.17
(6 講演)「日本による中国文化遺産の保護協力活動を振り返る」 第92回夏期講座 京都国立博物館 25.8.2
(6 講義)「「文化財」に関するしごと」 特別授業 南山中学校女子部 26.1.14
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、東アジア文化遺産保存学会、美術史学会
(7 委員等) 東京都文化財保存活用大綱策定検討委員会委員 (座長)、大分市文化財保存活用地域計画策定協議会委員 (副座長)、人間文化研究機構人間文化研究創発センタープロジェクト研究アドバイザリーボード委員
(8 教育) 奈良大学文学部非常勤講師、奈良女子大学文学部非常勤講師、関西大学大学院文学研究科非常勤講師、別府大学大学院史学・文化財学専攻非常勤講師

小田原 直也 | ODAWARA Naoya (アソシエイトフェロー)

(4 映像撮影)『ノリウツギ採取・加工 北海道 標津町』 25.6
(4 映像撮影)『月刊文化財 漆工品修理の現状と課題 ―選定保存技術「漆工品修理」保持者座談会―』 25.8
(4 映像撮影)『重要文化財 阿弥陀如来坐像 (文化庁所蔵) 保存修理事業 クリーニング・胴内調査』 25.12
(4 映像撮影)『重要文化財 阿弥陀如来坐像 (文化庁所蔵) 保存修理事業 クリーニング・胴内調査 再撮影』 25.12
(4 映像撮影)『重要文化財 絹本著色浄土曼荼羅図 (文化庁所蔵) 保存修理事業 解体・クリーニング・剥落止め』 25.9
(4 映像撮影)『重要文化財 絹本著色浄土曼荼羅図 (文化庁所蔵) 保存修理事業 表打ち1回目』 25.12
(4 映像撮影)『美術館・博物館関係者のための漆工品保存に関するセミナー』 26.1
(4 映像制作)『絵画修理の工程1「解体・クリーニング」』 26.3
(4 映像制作)『絵画修理の工程2「剥落止め」』 26.3
(4 映像制作)『絵画修理の工程3「表打ち1回目・2回目」』 26.3
(4 映像制作)『彫金鏨製作・研修 錺屋 松田』 26.2
(4 映像制作)『彫刻修理の工程1「クリーニング・調査」』 26.3
(4 映像制作)『伝統材料と道具のひみつ ―宇陀紙編―』 25.9
(4 映像制作)『板布海苔の製造技術』 25.9
(4 映像制作)『美術工芸品を未来に伝えるために ～文化財修理の技術・用具・原材料～』 25.4
(4 映像制作)『文化財修理／木彫技術 「木彫刃物と砥石」記録編』

26.3
(4 映像制作)『文化財修理と「布海苔の重要性」』 25.10
(4 映像制作)『文化財修理技術者 〜美術工芸品の選定保存技術〜 ①〜③』 25.5
(4 映像制作)『木造彫刻の修理を支える 一株式会社小信の彫刻刃物一』 26.2

小野 真由美 | ONO Mayumi （文化財情報資料部）
(3 論文)「Art, Flowers, and Connoisseurship under the Tokugawa Shogunate: The Cultural Bond between Kanō Tan'yū and Lord Nagai Naomasa」『DOI: https://doi.org/10.5281/zenodo.15817137』 pp.1-18 25.7
(3 論文)「長谷川派における白藤という表象に関する一考察」『科研報告論集 織豊期における公武の知的交流―本草学から絵事へ―』第Ⅰ巻 pp.4-19 26.1
(3 論文)「西洞院時慶の庭―草花をめぐる知の連環を読む」『科研報告論集 織豊期における公武の知的交流―本草学から絵事へ―』第Ⅰ巻 pp.20-43 26.1
(3 論文)「安土桃山時代の本草学」『科研報告論集 織豊期における公武の知的交流―本草学から絵事へ―』第Ⅰ巻 pp.44-55 26.1
(4 編集)『科研報告論集 織豊期における公武の知的交流―本草学から絵事へ―』第Ⅰ巻 pp.1-56 26.1
(6 発表)「狩野常信の詠歌活動に関する一考察」 令和7年度第5回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 25.9.16
(6 発表)「欧州美術資料調査報告（イタリア）」 東京文化財研究所 25.11.25
(7 所属学会等) 史学会、デジタルアーカイブ学会

小山田 智寛 | OYAMADA Tomohiro （文化財情報資料部）
(2 報告)「文化財情報の発信における課題と展望―修理記録アーカイブの構築―」(江村知子、小山田智寛、田良島哲、山永尚美)『月刊文化財』748 pp.8-12 26.1
(3 論文)「文化財データベースにおける検索とキーワードの関係について」『美術研究』446 pp.57-64 25.8
(6 発表)「文化財（美術工芸品）の修理記録および修理記録データベースの公開について」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲) 令和7年度第1回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 25.4.17
(6 発表)「(ポスター発表)文化財（美術工芸品）の修理記録データベースについて―「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」事業報告―」(山永尚美、小山田智寛、田良島哲、江村知子) 一般社団法人 国宝修理装潢師連盟 第29回定期研修会 京都府民総合交流プラザ 京都テルサ 25.10.3
(6 発表)「データベース構造から改めてWordPressを考える」(小山田智寛、石灰秀行、二神葉子) WordCamp Kansai 2025 グランフロント大阪 25.11.2
(6 発表)「基準なき文化財修理記録のデータベース化を支えた Claris FileMaker の高い柔軟性」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲、江村知子) Claris カンファレンス 2025 虎ノ門ヒルズフォーラム 25.11.7
(6 発表)「修理記録データベースの拡充と利活用の課題」(田良島哲、山永尚美、小山田智寛) 2025年度美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.6
(6 講演)「ウェブ上での情報発信 現状と評価基準」 青山学院大学教育課程連携協議会講演会 オンライン 25.10.22
(7 所属学会等) アート・ドキュメンテーション学会、デジタルアーカイブ学会、美学会

片倉 峻平 | KATAKURA Shumpei （客員研究員）
(4 書評)「一般財団法人人文情報学研究所監修、大向一輝・永崎研宣・西岡千文・橋本雄太・吉賀夏子編『IIIF [トリプルアイエフ] で拓くデジタルアーカイブ コンテンツの可能性を世界につなぐ』」『アーカイブズ学研究』42 pp.53-60 25.6
(7 所属学会等) The Alliance of Digital Humanities Organizations、情報知識学会、情報処理学会、中国出土資料学会、デジタルアーカイブ学会、日本中国語学会
(7 委員等) デジタルアーカイブ学会DAフォーラム運営委員、情報処理学会人文科学とコンピュータ研究会運営委員、日本中国語学会選挙管理委員
(8 教育) 東北大学学術資源研究公開センター 史料館特任講師

片渕 奈美香 | KATAFUCHI Namika （アソシエイトフェロー）
(2 報告)「初期合成染料の染色堅牢性評価と変退色挙動の検討」『堅ろう度標準化研究委員会 第３回講演会 講演要旨集』 pp.16-26 繊維学会 堅ろう度標準化研究委員会 25.9
(4 編集)「文化財の材質・構造・状態調査に関する研究 令和3年〜令和７年度 研究成果報告書」『研究成果報告書』 pp.1-14 東京文化財研究所 26.3
(6 講演)「初期合成染料の染色堅牢性評価と変退色挙動の検討」 繊維学会 堅ろう度標準化研究委員会 第3回講演会 昭和女子大学 8号館 オーロラホール 25.9.2
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、文化財保存修復学会

片山 葉子 | KATAYAMA Yoko （客員研究員）
(3 論文)「Characterization of fungal carbonyl sulfide hydrolase belonging to clade D β-carbonic anhydrase」(Ryuka Iizuka, Takahiro Ogawa, Rikako Tsukida, Keiichi Noguchi, David Hibbett, Yoko Katayama, Makoto Yoshida)『FEBS Letter』599(8) pp.1146-1158 25.4
(3 論文)「Diverse virome and microbiome and their interactions for biodeterioration of Angkorian Bayon Temple in Cambodia.」(Pengfei Hu; Shanshan Meng, Xinghua Ding; Zhichao Zhou; Fasi Wu; Yoko Katayama; Ji-Dong Gu)『Total Environment Microbiology』1(3) 100018, 13p 25.9
(3 論文)「First high-quality genome assembly of Umbelopsis nana isolated from forest soil」(Ryuka Iizuka, Tomohiro Suzuki, Nozomu Watanabe, Javier F Tabima, David Hibbett, Yoko Katayama, Makoto Yoshida)『G3 Genes|Genomes|Genetics』jkag022 12p 26.1
(3 論文)「Water characteristics and retention in Angkor sandstone monuments and their linkage with microorganisms responsible for ammonia oxidation and nitrate accumulation」(Youfen Qian, Naama Lang-Yona, Pengfei Hu, Yali Wang, Yoko Katayama, Ji-Dong Gu)『Science of The Total Environment』969(178636) 11p 26.2
(5 学会発表)「Physiological characterization of a key enzyme involved in gaseous COS assimilation in the filamentous fungus Trichoderma harzianum」(Ryuka Iizuka, Akiko Ono, Tomohiro Suzuki, Yoko Katayama, Makoto Yoshida) IRG56 Scientific Conference on Wood Protection Yokohama, Japan パシフィコ横浜 25.6.24
(5 学会発表)「糸状菌における大気濃度の気体状硫化カルボニルに対する生理的応答」(飯塚瑠翔、小野晶子、鈴木智大、片山葉子、吉田誠) 第76回 日本木材学会大会広島大会 広島大学東広島キャンパス 26.3.17
(6 講演)「硫黄酸化とアンコール遺跡の微生物」 第28回日本水環境学会シンポジウム 富山県立大学 25.9.18
(7 所属学会等) American Society of Microbiology、環境バイオテクノロジー学会、日本生化学会、日本土壌微生物学会、日本農芸化学会、日本微生物資源学会、日本微生物生態学会、日本水環境学会

加藤 雅人 | KATO Masato （文化遺産国際協力センター）
(2 報告)「1 はじめに」『在外日本古美術品保存修復協力事業 女房三十六歌仙扇面貼交屏風 No.2020-1』 pp.1-2 東京文化財研究所 26.3

(2 報告)「1 Introduction」『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.3-4　東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「2.3 彩色材料の調査」(加藤雅人、金旻貞)『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.68-71　東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「2.3 Research of Coloring Materials」(KATO Masato, KIM MinJung)『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.72-93　東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「3.2 詳細と補足」(橋本悠、加藤雅人)『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.120-122　東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「3.2 Extended Conservation Report」(HASHIMOTO Yu, KATO Masato)『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.123-124　東京文化財研究所　26.3
(3 論文)「Aging of Phosphorylated Cellulose Nanofibers under Moist-Heat Condition」(Akane Sakiyama, Tsuguyuki Saito, Audrey Moores, Masato Kato, Shuji Fujisawa)『Biomacromolecules』27　pp.451-458　25.12
(4 解説)「3.3 屏風の下地について」『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.125-129　東京文化財研究所　26.3
(4 解説)「Structure and Paper Layers of a Panel Used for a Folding Screen」『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 pp.130-132　東京文化財研究所　26.3
(4 編集)(武瀟瀟、石渡美鈴、加藤雅人、副島まどか)『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 151p　26.3
(5 学会発表)「モントリオール美術館所蔵「紙本金地著色　女房三十六歌仙扇面貼交屏風」の修理報告　裏貼紙の復元新調について」(橋本悠、金旻貞、中井千章、大野恭子、宇都宮正紀、加藤雅人)　文化財保存修復学会　第47回大会　富山国際会議場　25.6.14
(6 発表)「Recent Research in the Conservation of Modern Japanese Paper」Faces of Memory, 14th Annual International Scientific Seminar Matenadaran, Mesrop Mashtots Research Institute of Ancient Manuscripts　25.10.14
(6 発表)「近代歴史資料の用紙にかかる調査研究」　令和7年度 近代歴史資料の保存・修理に関する研究協議会　文化庁東京庁舎　25.11.27
(6 講演)「文化財に関わる近現代の日本の紙」　日中文化財保存修復研修会　京都府民総合交流プラザ・京都テルサ　25.11.4
(6 講義)「Paper conservation in Japan」　国際研修「紙の保存と修復」　東京文化財研究所　25.8.25
(6 講義)「Paper Basics」　国際研修「紙の保存と修復」　東京文化財研究所　25.8.27
(6 講義)「紙文化財の保存と修復」　東洋美術学校　東洋美術学校　25.9.20-9.27
(6 講義)「紙」　文化財修復技術者のための科学知識基礎研修　東京文化財研究所　25.9.30
(6 講義)「Conservation of paper cultural properties in Japan」　国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」　メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.12
(6 講義)「Restoration of Hanging Scrolls」　国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」　メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.12
(6 講義)「Washi – Japanese Paper― Basic」　国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」　メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.13
(6 講義)「KARIBARI」　国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」　メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.15
(6 講義)「Variety of washi and those characteristics」　国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」　メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.17
(6 講義)「保存修復応用演習２」　学部科目　東北芸術工科大学　25.12.8
(6 講義)「保存修復特別研究２」　大学院科目　東北芸術工科大学　25.12.9
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、日本木材学会、文化財保存修復学会
(8 教育) 東北芸術工科大学芸術学部客員教授、東洋美術学校保存修復科非常勤講師

金井 健 | KANAI Ken (文化遺産国際協力センター)

(1 公刊図書)「建築物を国宝たらしめた「造形美」と「装飾美」」『歴史道 vol.41 国宝の真実』 朝日新聞出版　pp.54-65　25.9
(1 公刊図書)「Q&Aで知る「国宝」の日本史」『歴史人 2026年1月号 No.181』 ABCアーク　pp.66-75　25.12
(2 報告)「概要」『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査　概報』 pp.6-11　東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「建築」(友田正彦、金井健、海野聡、向井純子、黒岩千尋)『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査　2024年春調査　概報』 pp.19-64　東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「まとめ」『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査　概報』 p. 65　東京文化財研究所　26.3
(3 論文)「ブータンの伝統的民家における上階への動線について」(友田正彦、金井健、マルティネス・アレハンドロ、福嶋啓人、海野聡、向井純子)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025　pp.449-450　日本建築学会　25.9
(3 論文)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価　その 3　顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025　pp.619-620　日本建築学会　25.9
(4 解説)「物故者（令和4年）磯崎新」『日本美術年鑑　令和五年版』 pp.143-144　東京文化財研究所　26.1
(4 記事)「ノートルダム大聖堂の記録と再建」『文化遺産の世界ウェブサイトレポート』 https://www.isan-no-sekai.jp/report/10056　文化遺産の世界　25.12
(4 記事)「特集：イコモス木の委員会と伊藤延男先生　伊藤延男資料のアーカイビング」(金井健、佐藤桂)『日本イコモス季刊誌（オンライン）2025年　秋号』 https://icomosjapan-information.org/20241/20252025-autumn/伊藤延男/　日本イコモス国内委員会　25.9
(6 発表)「ブータンの伝統的民家における上階への動線について」(友田正彦、金井健、マルティネス・アレハンドロ、福嶋啓人、海野聡、向井純子)　日本建築学会大会学術講演会　九州大学伊都キャンパス　25.9.10
(6 発表)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価　その 3　顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子)　日本建築学会大会学術講演会　九州大学伊都キャンパス　25.9.12
(6 講義)「文化財建造物の保存」　令和7年度文化財担当者専門研修　建造物保存活用計画策定課程　奈良文化財研究所　25.7.1
(6 講習会)「建築から読み解く、文化財保存の舞台裏」　東京建築祭 2025　東京文化財研究所・黒田記念館　25.5.21
(6 講習会)「Outline of the Current Legal Framework for the Restoration of Cultural Properties in Japan」　ACCU奈良・文化遺産の保護に資する集団研修　奈良県コンベンションセンター　25.9.20
(6 司会)「文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会：日中韓における文化遺産政策のいまー近年の法改正をめぐる背景と展望ー」

東京文化財研究所　25.9.14
(6 司会)「令和６年度世界遺産研究協議会：越境する「遺産」–世界遺産とつながる人々の生活、信仰、環境–」 東京文化財研究所　25.12.22
(6 司会)「文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会：文化遺産保護の国際動向」 東京文化財研究所　26.1.17
(7 所属学会等) ICOMOS、日本遺跡学会、日本建築学会
(7 委員等) 旧長崎英国領事館修理委員会、長崎市伝統的建造物群保存地区保存審議会、旧佐世保無線電信所（針尾送信所）施設整備検討委員会、萩反射炉整備委員会、横手市伝統的建造物群保存審議会、ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所文化遺産保護協力事業委員会

金子 雄太郎 | KANEKO Yutaro （アソシエイトフェロー）
(4 編集)『第35回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会 文化遺産保護と奈良文書ー国際規範としての受容と応用ー 報告書』 96p　文化遺産国際協力コンソーシアム　26.2
(4 編集)『第36回文化遺産国際協力コンソーシアム研究会 日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望― 報告書』 60p　文化遺産国際協力コンソーシアム　26.3
(6 発表)「文化遺産国際協力コンソーシアム令和6年度国際協力調査　韓国の遺産保護に係る制度改革および国際協力体制に関する調査」文化遺産国際協力コンソーシアム第41回東アジア・中央アジア分科会　オンライン　25.6.23
(6 講義)「文化遺産保護と国際協力」 文化遺産Ⅰ　帝京大学　25.7.22
(6 講義)「世界遺産と若者」 遺産保護行政論　筑波大学　25.11.9
(7 所属学会等) ICOMOS

鎌田 紗弓 | KAMATA Sayumi （無形文化遺産部）
(3 論文)「Analysis of Unmetered Coordination in the Tōgaku Ensemble of Japanese Court Music (Gagaku)」（Martin Clayton, Sayumi Kamata）『Analytical Approaches to World Music』13(2)　pp.1-47　25.12
(4 解説)「解説（「浦島」「綱館」「神田祭」「道行旅路の嫁入」）」『国立劇場歌舞伎音楽既成者研修発表会 第27回「音の会」解説書』 pp.4-8　独立行政法人日本芸術文化振興会　25.8
(4 記事)「Nagauta-bayashi (The Nagauta-bayashi Data Collection)」（Sayumi Kamata, Martin Clayton, Akira Takaoka, Kazutoshi Kudo, Kohei Miyata, Daichi Shimizu）『Open Science Framework』osf.io/638v9.　26.2
(5 学会発表)「雅楽の稽古における唱歌使用の観察的検討」（村上瞳、鎌田紗弓、野中哲士） 2025年度日本認知科学会第42回大会　早稲田大学　25.9.12
(5 学会発表)「Comparing metred, unmetred, and dance-framed coordination in gagaku」（Sayumi Kamata, Martin Clayton） AAWM Special Topics Symposium 2025 Music Theories, Histories, Analysis, and the Musical Cultures of Asia　Cornell University　25.10.12
(6 発表)「楽と舞：雅楽実践の身体コミュニケーション」 三島海雲記念財団 2025 年度学術研究奨励金研究報告会　品川プリンスホテル　25.9.19
(6 発表)「東京都の学校における伝統芸能体験の取り組み」 第19回東京文化財研究所無形文化遺産部 公開学術講座『普及から考える伝統芸能の継承』 東京文化財研究所　25.11.7
(6 発表)「五線譜は何を表し、何を取りこぼすか：日本伝統音楽研究と記譜のジレンマ」 シンポジウム「文化の交差点としての五線譜：目と耳で探る West meets East」 京都大学　26.2.17
(6 講演)「伝統音楽合奏における共有のかたち：雅楽に見る対人協調」　学術講演研究室セミナー　東京大学　25.5.26
(6 講演)「Interpersonal coordination in Japanese traditional music ensembles」 International Symposium on Embodied Interaction in Musical Performance　The University of Tokyo　25.6.29
(6 講義)「「合わせる」身体：日本伝統音楽の合奏と協調」 音響設計特別講話　九州大学（オンライン）　25.10.22
(7 所属学会等) European Seminar in Ethnomusicology、International Council for Traditions of Music and Dance、楽劇学会、歌舞伎学会、東洋音楽学会、日本音楽学会

川瀬 由照 | KAWASE Yoshiteru （客員研究員）
(7 所属学会等) 正倉院文書研究会、美術史学会、仏教芸術学会、密教図像学会、早稲田大学美術史学会
(8 教育) 早稲田大学文学学術院教授

苅田 重賀 | KANDA Shigeyoshi （客員研究員）
(6講演)「日本の航空の始まりのころ」（苅田重賀、堤宇叶）「小学生向け 夏休み航空宇宙教室」～未来の航空・宇宙人材を育てる特別な２日間～　航空会館　25.8.13

紀 芝蓮 | CHI Chih lien （アソシエイトフェロー）
(5 学会発表)「Investigation on the use of smalt in 17th–18th-century Japanese illustrations using MA-XRF and RIS-VNIR」（Kai Terashima, Chih lien Chi, Keiko Kida） TECHNART 2025　— International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation　Congress Centre of the Hotel Giò　25.5.6
(5 学会発表)「Analysis of Green Coloring Materials in the Illustrated Natural History Books owned by Takamatsu Matsudaira family Using Hyperspectral Imaging」（Chih lien CHI, Junko AKIYAMA, Kai TERASHIMA, Noriyoshi NISHIDA, Tsuyoshi CHIBA, Masahide INUZUKA, Keiko Takagi） TECHNART 2025　— International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation　Congress Centre of the Hotel Giò　25.5.8
(5 学会発表)「ハイパースペクトルカメラを用いた可視域から近赤外域における彩色材料の反射分光分析」（紀芝蓮、寺島海、犬塚将英）　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.14
(5 学会発表)「高松松平家所蔵博物図譜に用いられたコバルトガラス顔料（スマルト・花紺青）と青色の用法に関する一考察」（寺島海、秋山純子、紀芝蓮、西田典由、犬塚将英、髙木敬子） 日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.6
(5 学会発表)「拡散反射型赤外分光分析によるトレーシングクロスの材質分析」（西田典由、久利希、森田健介、千葉毅、芳賀文絵、紀芝蓮、寺島海、犬塚将英） 日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.6
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、文化財保存修復学会

菊池 理予 | KIKUCHI Riyo （無形文化遺産部）
(2 報告)「デジタルマイクロスコープを用いた画絹調査方法の紹介およびその精度の検討について」（早川典子、菊池理予、山田祐子）『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』 pp.10-19　東京国立博物館・東京文化財研究所　26.3
(2 報告)「趣旨説明」『「第18回無形文化遺産部公開学術講座文化財修理と在来絹製作一絹織製作研究所の技術をつなぐー」報告書』 pp.4-14　26.3
(2 報告)「鼎談」「染織品の修理と修理材料の依頼ー実例を通じてー」（依田尚美、秋本賀子、菊池理予）『「第18回無形文化遺産部公開学術講座文化財修理と在来絹製作一絹織製作研究所の技術をつなぐー」報告書』 pp.62-67　26.3
(2 報告)「寄稿　天津司舞　御姫様の衣装の製作年代についての検討」『天津司舞　報告書』 pp.101-103　26.3
(4 編集)（菊池理予、石原真理）『「第18回無形文化遺産部公開学術講座文化財修理と在来絹製作一絹織製作研究所の技術をつなぐー」報告書』 78p　東京文化財研究所無形文化遺産部　26.3
(4 資料紹介)「〈資料紹介〉産業工藝懇話會報について」（菊池理予、石原真理）『無形文化遺産研究報告』20　pp.73-90　26.3

(4 記事)「インタビュー「志村明と絹ー沖縄時代の養蚕ー」」(志村明、秋本賀子、伴野豊、菊池理予他)『「第18回無形文化遺産部公開学術講座文化財修理と在来絹製作ー絹織製作研究所の技術をつなぐー」報告書』 pp.71-77 26.3
(6 発表)「趣旨説明」 2025年度美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.9
(6 発表)「報告2 今年度の記録映像の成果について」(菊池理予、小田原直也、前原恵美) 2025年度美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.9
(6 講義)「日本の染織品の技術保存と繊維」 染織文化財の保存にたずさわる人のためのサイエンスリテラシー研修 2025 佐賀大学 25.7.19
(6 講義)「Protection of Craft Techniques in Japan: Present Condition and Transitions」 国際研修「紙の保存と修復」 東京文化財研究所 25.9.9
(6 講義)「文化財としての「絹」に関する基礎知識」(菊池理予、早川典子) 令和7年度文化財(美術工芸品)保存修理講習会 文化庁 25.12.12
(7 所属学会等) 国際服飾学会、日本家政学会、美術史学会、服飾文化学会、文化財保存修復学会

橘川 英規 | KIKKAWA Hideki (文化財情報資料部)

(1 共著)「浅野徹著述目録」『浅野徹著述目録』「浅野徹著述目録」刊行賛同人 pp.57-114 25.6
(1 共著)「鹿子木孟郎文献目録」『生誕151年からの鹿子木孟郎』 泉屋博古館 pp.232-241 25.9
(1 共著)「中村宏書誌」『中村宏 アナクロニズム(時代錯誤)のその先へ』 静岡県立美術館 pp.272-281 26.3
(4 記事)「「物故者」門田秀雄、原田泰治、国島征二、一柳慧、大宮政郎」『日本美術年鑑』令和5年版 pp.106-107、107-108、108-109、132-133、137-138 東京文化財研究所 26.1
(6 発表)「資料をめぐる多層的な循環:松澤宥旧蔵資料の継承と活用のダイナミズム」 令和7年度第8回文化財情報資料部研究会「作家資料はどう生き続けるか―美術アーカイブズの「残す」技術と「活かす」実践」 東京文化財研究所 26.2.17
(6 講演)「作品・資料をめぐる多層的な循環:「瑛九継承」のダイナミズム」 瑛九へのオマージュ 2026 変化する世界と新たな価値の想像展 開催記念シンポジウム 埼玉県立近代美術館 26.3.8
(6 講義)「デジタル・アーカイブ特論」 大学院文学研究科認証アーキビスト養成コース 東北大学 25.12.25
(7 所属学会等) アート・ドキュメンテーション学会

朽津 信明 | KUCHITSU Nobuaki (保存科学研究センター)

(2 報告)「「小豆島 石の文化財」~地域の宝ものを発信する~」『文化財協会報 協会創立70周年記念誌』 pp.46-53 香川県文化財保護協会 26.2
(2 報告)「石造物の調査法について」『環境変動に備えた石造文化財の調査・保存法の現状と未来』 pp.34-39 26.2
(2 報告)『屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究報告書』 175p 26.3
(3 論文)「三次元計測に基づく明泉寺五重塔の石材伝承経緯の検討」(朽津信明、鈴木琴那)『保存科学』65 pp.129-138 東京文化財研究所 26.3
(3 論文)「文化財保存のための化学」『化学と教育』73 pp.316-319 日本化学会 25.8
(5 学会発表)「秦野市・鶴巻下部大山灯籠行事の「覆屋」について」 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「金沢市内に伝わる石材と穴水町・明泉寺五重塔石材との形状比較」(朽津信明、鈴木琴那) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学伊都キャンパス 25.7.5-7.6
(5 学会発表)「地球温暖化による劇的環境変動に適した石造文化遺産の調査・保存法の総合的研究(6)ー災害事例の調査による石垣の調査・保存法の現状と課題と未来ー」(塚本敏夫、植田直見、雨森久晃、山口繁生、坂本俊、若杉勇輝、田邉征夫、三村衛、朽津信明、金田明大、大川拓也) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学伊都キャンパス 25.7.5
(5 学会発表)「地球温暖化による劇的環境変動に適した石造文化遺産の調査・保存法の総合的研究(5)ー竹田城花屋敷曲輪での地盤ボーリングコアの土質調査ー」(三村衛、北田奈緒子、植田直見、雨森久晃、山口繁生、坂本俊、若杉勇輝、田邉征夫、朽津信明、金田明大、大川拓也) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学伊都キャンパス 25.7.5-7.6
(5 学会発表)「泉崎横穴における岩盤と顔料の潜在変数の学習による分光壁画解析」(古谷大介、藤村友貴、舩冨卓哉、森本哲郎、高松淳、朽津信明、池内克史、向川康博) 第200回CG・第41回DCC・第243回CVIM合同研究発表会 松江テルサ 25.11.17
(5 学会発表)「微分可能レンダリングと拡散モデルによる正面復元画像を参照とした泉崎横穴3Dモデルの仮想修復」(鶴貝拓海、藤村友貴、舩冨卓哉、森本哲郎、高松淳、大石岳史、朽津信明、池内克史、向川康博) 第200回CG・第41回DCC・第243回CVIM合同研究発表会 松江テルサ 25.11.17
(6 発表)「石造物の調査法について」 シンポジウム環境変動に備えた石造文化財の調査・保存法の現状と未来 元興寺文化財研究所 26.2.23
(6 講演)「国宝臼杵磨崖仏の保存」 国宝指定30周年記念シンポジウム 臼杵市中央公民館ホール 25.8.30
(7 所属学会等) 日本応用地質学会、日本地形学連合、日本地質学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員等) 特別史跡王塚古墳保存整備検討委員会委員、清戸迫横穴保存活用計画策定委員会委員、臼杵城跡保存活用計画策定委員会、大悲山石仏保存修理指導委員会委員、重要文化財羅漢寺石仏防災施設整備事業委員、「通潤橋」保存活用検討委員会委員、史跡屋形古墳群整備指導委員会委員、後閑3号墳及び下増田上田中1号墳保存活用計画策定委員会委員、簗瀬二子塚古墳保存活用計画策定委員会委員、史跡原城跡、日野江城跡専門委員会委員、嘉島町史跡保存整備検討委員会委員、長崎市出島史跡整備審議会委員、高島炭鉱整備活用委員会委員,熊野磨崖仏 附 本宮磨崖仏及び鍋山磨崖仏保存活用計画策定検討委員会委員、秋芳洞再生事業評価委員会委員、令和7年度琉球王国文化遺産集積・再興事業監修者、令和7年度琉球王国文化遺産集積・再興事業 石彫ワーキング委員、重要文化財祇園橋附石造記念碑保存修理専門委員会委員、史跡曽谷貝塚検討委員会委員、下総国分寺跡附北下瓦窯跡整備基本計画策定検討会委員、地盤調査規格・基準委員会 WG10 地盤環境調査WG メンバー
(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻併任教授、東京大学理学部非常勤講師

國方 沙希 | KUNIKATA Saki (アソシエイトフェロー)

(3 論文)「Delamination of wax-resin linings in oil paintings: Visualization and analysis using infrared active thermography and terahertz time-domain imaging」(Saki Kunikata, Yuko Tsuchiya, Kaori Fukunaga)『Journal of Cultural Heritage』73 pp.295-304 25.5
(5 学会発表)「Challenges in Detecting Delamination in Lined Oil Paintings Using Pulsed Phase Thermography: Considering the Effects of Paint Variations」(Saki Kunikata, Yuko Tsuchiya, Daiki Shiozawa, Takahide Sakagami) 18th International Workshop on Advanced Infrared Technology and Applications (AITA 2025) Integrated Research Center of Kobe University 25.9.15-9.19
(7 所属学会等) 文化財保存修復学会、日本非破壊検査協会
(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻ゲスト講師

久保田 裕道 | KUBOTA Hiromichi （無形文化遺産部）

（1 共著）「まつりを繋ぐ、郷土を繋ぐ―民俗芸能の明治神宮奉納をめぐって―」『明治神宮大全第１巻』 吉川弘文館 pp.500-518 25.11
（1 共著）「都市型の祭礼と農村の芸能」『音楽史事典』 丸善出版 pp.70-71 25.12
（1 共著）「無形文化遺産情報ネットワークの取り組み」『必携文化財防災の手引き』 丸善出版 pp.56-62 26.1
（1 共著）（久保田裕道、本林靖久）『ブータンにおける祭礼芸能の変容実態とその保護に関する研究 東ブータンのメラ地域におけるヤクチャムをめぐって』 東京文化財研究所 197p 26.3
（2 報告）「無形文化遺産の記録とその課題」『文化遺産の世界』https://www.isan-no-sekai.jp/report/10039 25.11
（2 報告）「民俗芸能としてみた天津司舞」「芸態」『国重要無形民俗文化財調査報告書 天津司舞』 甲府市教育委員会 pp.24-29、137-150 26.3
（2 報告）趣旨説明（民俗芸能や祭礼行事のネットワーク）『民俗文化財をネットワークで守り、活かす』（第20回無形民俗文化財研究協議会報告書）』 pp.1-3 26.3
（3 論文）「文化財と宗教民俗―2020年代の今を問うための発題として」『宗教民俗研究』35 pp.32-51 25.3 ※令和7年度に刊行
（4 解説）「神着木遣太鼓」『東京都民俗芸能大会パンフレット』 p.8 26.3
（4 監修）『日本のすごい祭り』 112p イカロス出版 25.7
（4 監修）『祭の地図 日本の祭りと伝統行事』 232p 帝国書院 25.7
（4 連載）「桜咲く太々神楽」『日本政策金融公庫調査月報』199 p.46 25.4
（4 連載）「カトマンズ盆地の雨乞祭り」『日本政策金融公庫調査月報』200 p.46 25.5
（4 連載）「子どもたちの獅子舞」『日本政策金融公庫調査月報』201 p.46 25.6
（4 連載）「小さな富士山に登る祭り」『日本政策金融公庫調査月報』202 p.46 25.7
（4 連載）「獅子舞をめぐる夏の旅」『日本政策金融公庫調査月報』203 p.46 25.8
（4 連載）「十五夜に降臨する神の獅子」『日本政策金融公庫調査月報』204 p.46 25.9
（4 連載）「南の島の無形文化遺産」『日本政策金融公庫調査月報』205 p.46 25.10
（4 連載）「獅子舞の王国」『日本政策金融公庫調査月報』206 p.46 25.11
（4 連載）「郷土の祭り文化を考える」『日本政策金融公庫調査月報』208 p.46 25.12
（6 発表）「Creative Utilization of Folk Performing Arts in Japan」 2025 East Asia Intangible Cultural Heritage International Forum 25.11.7
（6 発表）「「民俗文化財をネットワークで守り、活かす」発題」（今石みぎわ、久保田裕道） 第20回無形民俗文化財研究協議会 東京部 文化財研究所 25.12.5
（6 講演）「獅子舞のカタチとココロ～神奈川の獅子舞を考える～」 相模民俗学会 横浜市立歴史博物館 25.5.18
（6 講演）「獅子舞の未来を考えよう～麒麟獅子と日本のシシマイ～」 因幡麒麟獅子舞の会研修会 鳥取市文化センター 25.7.12
（6 講演）「獅子舞の未来を考えよう」 文化遺産シンポジウム 高松商工会議所 25.8.17
（6 講演）「獅子舞のカタチとココロ～和歌山の獅子舞を考える～」 和歌山県民俗芸能保存協会民俗文化財講演会 印南町中央公民館 25.12.7
（6 講演）「山梨の民俗芸能振興を考える」 山梨県文化財研修会 山梨県恩賜林記念館 26.1.20
（6 講演）「沖縄の伝統行事にみる空手文化とユネスコ無形文化遺産への道」 沖縄空手シンポジウム 沖縄空手会館 26.3.20
（6 講義）「獅子舞の儀礼文化」 儀礼文化学会 儀礼文化学会事務局 25.6.8
（7 所属学会等）儀礼文化学会、シシマイ学会、静岡県民俗学会、日本宗教民俗学会、日本ブータン学会、日本民俗学会
（7 委員等）文化審議会無形文化遺産部会臨時委員、伝統文化親子教室事業に係る協力者会議委員、山梨県文化財保護審議会委員、神奈川県民俗芸能記録保存調査企画調整委員会委員、「一人立ち三匹獅子舞」現地調査委員会調査委員長、千葉県博物館資料審査委員会委員、東京都民俗芸能大会実行委員会委員、島根県古代文化センター客員研究員、島根県民俗芸能調査委員会委員、静岡市文化財保護審議会委員、武蔵野市文化財保護委員、京都芸術センター伝統芸能文化創成プロジェクト推進会議委員、篠籠田の獅子舞調査検討委員会委員、箱根湯立獅子舞伝承・活用等事業に係る整備委員会委員、まんのう町文化財保存活用地域計画協議会委員、公益社団法人全日本郷土芸能協会理事、一般社団法人儀礼文化学会常務理事、一般財団法人日本青年館第72回全国民俗芸能大会企画委員、一般社団法人日本民俗学会理事、ポーラ伝統文化振興財団伝統文化ポーラ賞選考委員

倉島 玲央 | KURASHIMA Reo （保存科学研究センター）

（2 報告）「科学調査 最近の成果」（早川典子、倉島玲央、西田典由、一宮八重）『月刊文化財』748 pp.17-20 26.1
（2 報告）「チェンマイの漆とラックについて」『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究(3)－日本製漆工品と漆工材料調査－』 pp.23-26 東京文化財研究所 26.3
（2 報告）「各地のヨシの比較―上牧・鵜殿のヨシの特性把握に向けた予備的調査― 4.ヨシの黒変について」『簞築蘆舌の原材料・ヨシに関する報告書―淀川河川敷 上牧・鵜殿を中心に―』 pp.20-21 東京文化財研究所無形文化遺産部 26.3
（3 論文）「含浸強化処置に用いる漆・有機溶媒の選択が作業性と塗膜の表面状態に与える影響」（倉島玲央、玉川みほの、早川典子）『保存科学』65 pp.71-82 26.3
（3 論文）「Scientific Analysis of Two Christian Lecterns in Portugal: Investigation of Surface Decoration」（KOBAYASHI Koji, KAMIYA Yoshimi, CHI Chihlien, KURASHIMA Reo）『保存科学』65 pp.99-128 26.3
（5 学会発表）「パソフェナントロリン試験紙を用いた黒漆の判別」（倉島玲央、早川典子、鷺野谷一平、室瀬智弥） 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
（5 学会発表）「江戸時代の黒染め染織品に使用された鉄媒染の同定」（佐藤萌、一宮八重、倉島玲央、早川典子） 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
（5 学会発表）「近世社寺文化財建造物における塗装彩色材料の使い分けに関する研究」（北野信彦、大西功紗、生駒萌、前川実穂、本多貴之、倉島玲央、犬塚将英） 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
（5 学会発表）「能管の原材料と製作技術に関する調査報告」（前原恵美、森田都紀、亀川徹、小林彗人、倉島玲央） 東洋音楽学会第76回大会 沖縄県立芸術大学首里当蔵キャンパス 25.11.30
（6 発表）「4 能管の原材料のこれから 竹材の化学分析からわかること」公開研究会「能管の原材料と製作技術に関する調査研究報告」東京文化財研究所 25.12.19
（6 講義）「On Adhesive Materials for Restoration of Paper in Japan」INTERNATIONAL COURSE ON CONSERVATION OF JAPANESE PAPER 東京文化財研究所 25.8.26
（6 講義）「実験器具・薬品の取り扱い」「文化財修復技術者のための科学知識基礎研修」（令和7年） 東京文化財研究所 25.10.1
（6 講義）「伝統接着剤2（漆）」「文化財修復技術者のための科学知識基礎研修」（令和7年） 東京文化財研究所 25.10.2
（6 講義）「漆について」 令和7年度文化財（美術工芸品）保存修理講習会 文化庁特別会議室 25.12.12

(7 所属学会等) 漆を科学する会、漆工史学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員等) 文化財保存修復学会編集委員

黒岩 千尋 | KUROIWA Chihiro （アソシエイトフェロー）

(2 報告)「Chapter 1 Introduction」(TOMODA Masahiko, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.1-4 Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 2 Protection of the Terrace on the West Embankment of the East Baray」(KUROIWA Chihiro, TOMODA Masahiko, MAO Sokny, ICH Sreng, MOM Sophon, SOM Sopharath, KIM Sothin)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.5-15 Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 3 Partial Repair of the East and West Entrances of the Central Tower」(MAO Sokny, ICH Sreng, SIM Dany, PROM Sopheak, RO Sovandaroth, CHHAY Loeun, MOM Sophon, SOM Sopharath, KIM Sothin, TOMODA Masahiko, ASADA Natsumi, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.17-33 Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 5 Statues Discovered in Ta Nei Temple」(KUROIWA Chihiro, NET Simon, CHHOUK Somala, SIM Dany, TOMODA Masahiko)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.51-54 Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 6 Protection of the West Terrace」(MAO Sokny, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.55-58 Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Appendix II Inventory on the Statues Discovered in the West Area of Ta Nei Temple」『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.93-103 Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「2.3. Description of the building」(Natsumi Asada, Chihiro Kuroiwa, Bhola Krishna Maharjan, Hirakaji Maharjan, Era Maharjan)『Survey Report of Pukhusi Paramaana Chhen』 pp.25-33 Kirtipur Municipality and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 26.3
(2 報告)「4. 明治～昭和初期の木造旅館・料亭建築にみる「月見館」」『温泉旅館 月見館 歴史調査報告書』 pp.28-36 NPO法人GREEN WIND ASIA 26.3
(2 報告)「集落」(友田正彦、黒岩千尋)『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査 概報』 pp.12-18 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「建築」(友田正彦、金井健、海野聡、向井純子、黒岩千尋)『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査 概報』 pp.19-64 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「インベントリー」『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査 概報』 pp.105-142 東京文化財研究所 26.3
(3 論文)「カンボジア王国シェムリアップ市歴史的地区における10年間の地域防災活動とその支援」(高田大道、黒岩千尋、伯耆原智世、小岩正樹、長谷見雄二)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025 pp.343-344 日本建築学会 25.9
(3 論文)「フランス領インドシナの遺跡保存と「保護区域」―アンコール遺跡群の保存と公園化」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025 pp.627-628 日本建築学会 25.9
(3 論文)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価 その3 顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025 pp.619-620 日本建築学会 25.9
(4 編集) (TOMODA Masahiko, KIM Sothin, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 116p Authority for the Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA), and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(4 編集)『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査 概報』 143p 東京文化財研究所 26.3
(6 発表)「フランス領インドシナの遺跡保存と「保護区域」―アンコール遺跡群の保存と公園化」 日本建築学会大会学術講演会 九州大学伊都キャンパス 25.9.10-9.12
(6 発表)「カンボジア王国シェムリアップ市歴史的地区における10年間の地域防災活動とその支援」(高田大道、黒岩千尋、伯耆原智世、小岩正樹、長谷見雄二) 日本建築学会大会学術講演会 九州大学伊都キャンパス 25.9.10-9.12
(6 発表)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価 その3 顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子) 日本建築学会大会学術講演会 九州大学伊都キャンパス 25.9.10-9.12
(6 講義)「アンコール遺跡群―遺跡保存制度の歴史といま」 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻：修復計画論 東京藝術大学 25.5.15
(6 講習会)「Inventory of the Statues in Ta Nei Temple」 Practical Workshop for Restoration of the Cruciform Terrace Angkor Conservation Office 26.1.21
(6 パネリスト)「多摩科技シンポジウム（2025)」 東京都立多摩科学技術高等学校 25.11.8
(7 所属学会等) 建築史学会、東南アジア考古学会、日本建築学会

黒﨑 夏央 | KUROSAKI Natsuo （アソシエイトフェロー）

(4 記事)「「物故者」藤子不二雄A、岡崎和郎、朴亨國」『日本美術年鑑』令和5年版 pp.115-116、122-123、142-143 東京文化財研究所 26.1
(6 発表)「『日本美術年鑑』の現状と課題」 令和7年度第3回文化財情報資料部研究会 東京文化財研究所 25.6.5
(7 所属学会等) 美術史学会、仏教芸術学会会

五嶋 千雪 | GOSHIMA Chiyuki （アソシエイトフェロー）

(2 報告)「I. Introduction」(Taku Iida, Ahmed Skounti)『2025 Survey for International Cooperation Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage: Survey on the state of the Cultural Heritage in the 2023 Al Haouz Earthquake Affected Areas in

Morocco』 pp.2-5 Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage, National Institute of Archaeological Sciences and Heritage 26.3
(4 編集)『Report on the 34th Seminar: School Education and Cultural Heritage』 60p Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage 25.10
(4 編集)『2025 Survey for International Cooperation Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage: Survey on the state of the Cultural Heritage in the 2023 Al Haouz Earthquake Affected Areas in Morocco』 236p Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage, National Institute of Archaeological Sciences and Heritage 26.3
(4 編集)『文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会 文化遺産保護の国際動向 報告書』 54p 文化遺産国際協力コンソーシアム 26.3
(6 発表)「「海外の文化遺産の保護に係る国際的な協力の推進に関する基本的な方針」の改訂について」 第21回文化遺産国際協力センター定例勉強会 25.6.5
(7 所属学会等) ICOM

古田嶋 智子 | KOTAJIMA Tomoko (客員研究員)
(4 エッセイ)「博物館と空気環境」『室内環境』28(1) p.57 室内環境学会 25.4
(7 所属学会等) ICOM、ICOM-CC、室内環境学会、日本建築学会、文化財保存修復学会
(8 教育) 東京藝術大学美術学部非常勤講師

後藤 知美 | GOTO Tomomi (無形文化遺産部)
(1 共著)「文化遺産と民俗学」『3ステップシリーズ9 民俗学』 昭和堂 pp. 211-225 26.1
(2 報告)「新聞報道にみる能登半島地震の祭り・行事や民俗芸能への影響」『無形文化遺産研究報告』20 pp. 1-15 26.3
(4 解説)「小木地区の祭礼」『小木歴史・文化LOCALMAGAZINE』 pp. 29-46 能登町教育委員会 26.3
(5 学会発表)「能登半島地震・奥能登豪雨発生後の祭り・行事の再開過程と支援の方向性」 日本災害復興学会能登復興実践研究交流会 金沢大学 25.11.23
(5 学会発表)「奥能登地域における無形民俗文化（祭事）の復興状況と課題」 シンポジウム・能登らしい暮らし・文化の復興の現局面と次のフェーズを考える 東北大学 26.2.27
(7 所属学会等) 現代民俗学会、災害復興学会、日本民具学会、日本民俗学会、歴史人類学会
(8 教育) 國學院大學観光まちづくり学部非常勤講師

後藤 亮子 | GOTO Ryoko (客員研究員)
(6 発表)「金石書画と中国のモダニティ」 東京藝術大学水色科研第28回オンライン研究会 25.7.23
(7 所属学会等) 美術史学会

小林 公治 | KOBAYASHI Koji (特任研究員)
(2 報告)「展覧会評 根津美術館開催の特別展「百草蒔絵薬箪笥と飯塚桃葉」によせて」『美術研究』466 pp.65-72 25.8
(2 報告)「島原角屋に伝わる螺鈿漆器について（1）」『角屋研究』28 pp.1-14 公益財団法人 角屋保存会 26.1
(3 論文)「Scientific Analysis of Two Christian Lecterns in Portugal: Investigation of Surface Decoration」（KOBAYASHI Koji, KAMIYA Yoshimi, CHI Chih lien, KURASHIMA Reo)『保存科学』65 pp.99-128 26.3
(5 学会発表)「ポルトガルに伝世した中文銘IHS箔絵螺鈿漆器書見台のCT調査」(鳥越俊行、小林公治、ウルリケ・ケルバー、加藤沙弥) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「日本二十六聖人記念館所蔵「日傘」の漆塗膜調査と製作技術の検討」（大西智洋、本多貴之、壷内幹太、小林公治、デ・ルカ・レンゾ、宮田和夫） 日本文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5
(5 学会発表)「日本二十六聖人記念館所蔵「日傘」の修復と科学調査報告」(大西智洋、デ・ルカ・レンゾ、宮田和夫、小林公治） 第9回東アジア文化遺産保護学会国際学術シンポジウム 成都市天府国際大酒店 25.10.31
(5 学会発表)「Approaching the Jesuit and Catholic Missionary Activities through the Asian Export Lacquer: Namban Lacquer and its Relatives」 The third online colloquium, The Societal Engagements of the Jesuits: From Europe to Japan and Brasil—A Comparative Perspective オンライン 26.3.6
(7 所属学会等) 漆工史学会、東南アジア考古学会、早稲田大学考古学会
(8 教育) 武蔵野美術大学造形学部非常勤講師

齊藤 孝正 | SAITO Takamasa (所長)
(7 所属学会等) 東洋陶磁学会
(7 委員等) 東洋陶磁学会常任委員、法隆寺金堂壁画保存活用委員会委員、文化財虫菌害研究所評議員、文化財保護・芸術研究助成財団事業委員、文化遺産国際協力コンソーシアム運営委員会委員

境野 飛鳥 | SAKAINO Asuka (客員研究員)
(5 学会発表)「Protecting Cultural Heritage in Occupied Japan: Unraveling Museums from GHQ's Perspective」 2026 AAS Annual Conference Vancouver Convention Center 26.3.14
(7 所属学会等) ICOMOS、日本建築学会、日本歴史学会

佐藤 嘉則 | SATO Yoshinori (保存科学研究センター)
(2 報告)「陸前高田市立博物館で津波被災した植物材料の民俗資料の菌類叢解析」(佐藤嘉則、木川りか)『文化財保存修復学会誌』69 pp.39-50 文化財保存修復学会 26.3
(2 報告)「活性炭を基材とする吸着剤を用いた遺物から発生する還元型硫黄ガス濃度の低減効果」(和泉田絢子、島田潤、渡辺祐基、奥島希子、木川りか、佐藤嘉則、柳田明進、脇谷草一郎)『保存科学』65 pp.31-40 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「湿度制御温風処理後の建造物におけるシバンムシ類の経時的な生息調査」(島田潤、轟丈瑠、仁木真奈美、本間裕梨奈、原田正彦、藤井義久、佐藤嘉則)『保存科学』65 pp.139-146 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「漆塗り工芸品の湿度制御温風処理におけるひずみ・温度・色差の変化ー模擬試験体と鐙の例ー」(島田正理、近藤修平、原田正彦、藤原裕子、藤井義久、佐藤嘉則)『保存科学』65 pp.49-70 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「和紙の平衡含水率について ー市販の楮紙および美濃紙における測定結果ー」(近藤修平、島田正理、藤原裕子、藤井義久、佐藤嘉則、仁木真奈美)『保存科学』65 pp.41-48 東京文化財研究所 26.3
(2 コメント)「「ニュウハクシミ」紙を食べる害虫 生息19都道府県に拡大」『NHK NEWS おはよう日本』 日本放送協会 25.11
(2 コメント)「Japanese experts warn of rapid spread of foreign bookworm」『NHK WORLD NEWS』 日本放送協会 25.11
(2 コメント)「紙を食べる「ニュウハクシミ」文化財害虫 生息 全国へ急拡大、危機感」『東京新聞（日刊）』 p.20 中日新聞東京本社 25.11
(2 コメント)「古文書かじる外来害虫、１９都道府県に拡大」『読売新聞（夕刊）』 p.10 読売新聞社 25.11
(2 コメント)「How hungry little bookworms are taking a bite out of Japanese history」『NHK WORLD NEWS』 日本放送協会 25.11
(2 コメント)「NEWS 虫めがね「古文書食べる「文化財害虫」」」『中日こ

どもウィークリー』 p.3　中日新聞社　25.12
(2 コメント)「文化財害虫　駆除どうする　外来種急増　薬剤は使用中止」『中日新聞（日刊）』 p.29　中日新聞社　25.12
(2 コメント)「【編集日記】古文書を守れ」『福島民友』 p.1　福島民友新聞社　25.12
(2 コメント)「1匹見かけたら、3年後には2万匹に…爆発的繁殖力「ニュウハクシミ」の生態　文化財をむしばむ小さな脅威」『RKK NEWS 熊本放送』 RKK熊本放送　26.1
(2 コメント)「【文化財のあした】爆発的に繁殖 外来害虫の脅威 被害抑止、博物館の連携で」『毎日新聞』 p.11　毎日新聞社　26.1
(2 コメント)「【ニュースを問う】SDGｓと文化財保存「駆除から予防へ　市民も支え」」『中日新聞（日刊）』 p.7　中日新聞社　26.3
(3 論文)「Trends in Integrated Pest Management (IPM) in Japan」『SENRI ETHNOLOGICAL STUDIES』116　pp.153-161　国立民族学博物館　26.3
(3 論文)「三内丸山遺跡「子どもの墓」土遺構で発生したキノコの同定と真菌叢解析」（轟丈瑠、長尾理伶、西澤智康、佐藤嘉則、石崎武志)『保存科学』65　pp.1-12　東京文化財研究所　26.3
(4 解説)「ポスト・エキヒュームSの生物被害対策を考える」『文化財の虫菌害』89　pp.1-2　公益財団法人文化財虫菌害研究所　25.6
(4 解説)「カビの調査と環境の解析」『第14回文化財IPMコーディネータ資格取得のための基礎知識』 pp.22-29　公益財団法人文化財虫菌害研究所　25.12
(4 解説)「カビに関する基礎知識」『文化財の虫菌害防除と安全の知識2026年』 pp.21-30　公益財団法人文化財虫菌害研究所　26.1
(4 ラジオ出演)「森本毅郎・スタンバイ！ニュース・ズームアップ」『TBSラジオ』 株式会社TBSラジオ　25.12
(5 学会発表)「海水損紙資料に出現した微生物由来の赤色色素の再現とクリーニング方法の検討」(仁木真奈美、佐藤嘉則、貴田啓子)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「水浸させた紙試料の湿熱殺菌処理における物性変化」(小野寺裕子、貴田啓子、佐藤嘉則)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「新たな文化財害虫と考えられるヒメハキリバチによる建造物被害」(島田潤、轟丈瑠、山田紀代美、佐藤嘉則)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「ATP測定法を用いた収蔵環境の清浄度評価と維持管理基準の提案」(轟丈瑠、山田紀代美、佐藤嘉則)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「2024年能登半島地震における文化財保存修復学会の復興支援活動報告」（中村晋也、間渕創、日髙真吾、田井東浩平、黄川田翔、佐藤嘉則、天野真志）　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「ニュウハクシミの若齢期における生存率と食糞の関係」（江原愛菜、西澤智康、轟丈瑠、島田潤、渡辺祐基、木川りか、佐藤嘉則）　日本文化財科学会第42回大会　九州大学伊都キャンパス　25.7.5
(5 学会発表)「ニュウハクシミの接触走性の評価」(渡辺祐基、島田潤、佐藤嘉則、木川りか)　日本文化財科学会第42回大会　九州大学伊都キャンパス　25.7.5
(5 学会発表)「土遺構の保存に関する総合的研究―三内丸山遺跡の事例―」（石崎武志、佐藤嘉則、轟丈瑠、西澤智康）　第9回東アジア文化遺産保護学会国際学術シンポジウム　天府国際大酒店　25.10.30
(6 講演)「文化財収蔵庫の保存環境をめぐる現状と課題」 第18回生活とカビに関する講演会　大田区民ホールアプリコ小ホール　25.6.13
(6 講義)「今後の資料保存のための生物被害防除の考え方」 第47回文化財の虫菌害・保存対策研修会　オンライン配信　25.7.1
(6 講義)「環境制御（虫菌害対策）」 令和7年度　アーカイブズ・カレッジ　史料管理学研修会　国文学研究資料館　25.9.2
(6 講義)「有害生物対策」 令和7年度　アーカイブズ研修Ⅲ/公文書管理研修Ⅲ　国立公文書館　25.9.12
(6 講義)「生物劣化への対応～修理工房における文化財IPM～」 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修　東京文化財研究所　25.9.30
(6 講義)「水損紙資料の微生物被害と応急処置」 令和7年度 文化財防災センター研修 水損資料の応急処置ワークショップ　奈良文化財研究所　25.10.30
(6 講義)「カビの調査と環境の解析」 第13回文化財IPMコーディネータ資格取得のための講習会　飯田橋レインボービル　25.12.12
(6 講義)「水損紙資料の微生物被害と応急処置」 令和6年度被災文化財基礎研修　オンライン配信　26.2.20-3.5
(6 講義)「微生物に関する基礎知識と文化財を加害するカビの特徴」 第46回文化財の虫菌害防除作業に関する講習会　家の光会館コンベンションホール　26.3.3
(6 講習会)「文化財虫菌害の実例や対応」(佐藤嘉則、島田潤)　文化財IPM社内講習会　株式会社修護　25.4.2
(7 所属学会等) 日本土壌微生物学会、日本微生物生態学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員等) ひたちなか市史跡保存対策委員会、日本文化財科学会編集委員、国立民族学博物館文化資源共同研究員、(公財) 文化財虫菌害研究所文化財IPMコーディネータ委員会委員、(公財) 文化財虫菌害研究所防除作業主任者能力認定委員会委員、国立歴史民俗博物館資料保存環境検討委員会委員、「法隆寺金堂壁画 保存活用委員会」保存環境ワーキング・グループ専門委員、文化財保存修復学会大会プログラム作成委員
(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻連携准教授、学習院大学学芸員課程非常勤講師

塩谷 純 | SHIOYA Jun （上席研究員）

(3 論文)「黒田清輝の画業について　神津港人の視点から」『美術研究』447　pp.1-12　25.12
(4 記事)「コレクションの来し方 《黒き猫》の旧蔵者、秋元洒汀について」『季刊永青文庫』127　pp.19-21　公益財団法人永青文庫　25.10
(7 所属学会等) 美術史学会、明治美術学会
(8 教育) 明治学院大学大学院非常勤講師、金沢美術工芸大学芸術学専攻非常勤講師、国際日本文化研究センター共同研究員

島田 潤 | SHIMADA Megumi （アソシエイトフェロー）

(2 報告)「活性炭を基材とする吸着剤を用いた遺物から発生する還元型硫黄ガス濃度の低減効果」（和泉田絢子、島田潤、渡辺祐基、奥島希子、木川りか、佐藤嘉則、柳田明進、脇谷草一郎)『保存科学』65　pp.31-40　26.3
(2 報告)「湿度制御温風処理後の建造物におけるシバンムシ類の経時的な生息調査」（島田潤、轟丈瑠、仁木真奈美、本間裕梨奈、原田正彦、藤井義久、佐藤嘉則)『保存科学』65　pp.139-146　26.3
(4 解説)「チャタテムシについて」『文化財の虫菌害』90　pp.32-34　公益財団法人 文化財虫菌害研究所　25.12
(5 学会発表)「新たな文化財害虫と考えられるヒメハキリバチによる建造物被害」(島田潤、轟丈瑠、山田紀代美、佐藤嘉則)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「ニュウハクシミの若齢期における生存率と食糞の関係」（江原愛菜、西澤智康、轟丈瑠、島田潤、渡辺祐基、木川りか、佐藤嘉則）　日本文化財科学会第42回大会　九州大学伊都キャンパス　25.7.5-7.6
(5 学会発表)「ニュウハクシミの接触走性の評価」(渡辺祐基、島田潤、佐藤嘉則、木川りか)　日本文化財科学会第42回大会　九州大学伊都キャンパス　25.7.5-7.6
(6 講演)「文化財虫菌害の実例や対応」（佐藤嘉則、島田潤）　文化財IPM社内講習会　株式会社修護　25.4.2

(6 講演)「ニュウハクシミの現状と対策について」 第 11 回保存環境調査・管理に関する講習会　文化財活用センター　26.3.9
(7 所属学会等) 日本昆虫学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会

杉山 恵助 | SUGIYAMA Keisuke （客員研究員）
(6 講義)「Wheat Starch Paste」 国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」 メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.13
(6 講義)「Japanese traditoinal restoration techinique」 国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」 メキシコ国立人類学歴史機構国立文化遺産保存修復調整機関　25.11.14-11.15
(7 所属学会等) Institute of Conservation、文化財保存修復学会
(8 教育) 東北芸術工科大学芸術学部文化財保存修復学科教授

城野 誠治 | SHIRONO Seiji （文化財情報資料部）
(3 論文)「9. 科学写真 9.1 文化財」『日本写真学会誌』88(3) pp.220-222　25.9
(6 講演)「文化財写真について」 文化財写真研修会　北海道立北方民族博物館　25.5.24
(6 講演)「文化財写真の可能性」(城野誠治、笹倉いる美) 映像と北方諸民族文化 2　25.10.11-10.12
(7 所属学会等) 日本写真家協会、日本写真学会、日本法科学技術学会

副島 まどか | SOEJIMA Madoka （アソシエイトフェロー）
(4 編集) (武瀟瀟、石渡美鈴、加藤雅人、副島まどか)『在外日本古美術品保存修復協力事業　女房三十六歌仙扇面貼交屏風　No.2020-1』 151p　26.3

田代 裕一朗 | TASHIRO Yuichiro （文化財情報資料部）
(1 共著) (片山まび、田代裕一朗)『白磁壺頌 : 朝鮮時代の白磁壺、その美を繙く』 合同会社　無盡藏　200p　25.6
(3 論文)「韓国近現代における陶磁器の蒐集とコレクションの形成」『美術研究』446　pp.37-55　東京文化財研究所　25.8
(4 解説)「근년의 새로운 연구 성과를 중심으로 신안선과 그 시대 (近年の新たな研究成果を中心に 新安船とその時代)」『国立光州博物館ニュースレター　アジア陶磁文化』26　p. 15　国立光州博物館　25.12
(4 解説)「근대기 한국미술 인식 연구를 둘러싼 제 문제 (近代期韓国美術認識研究をめぐる諸問題)」『IJS 日本レビュー』80　pp.1-5　ソウル大学校日本研究所　26.3
(4 翻訳)「1920 年代の朝鮮美術展覧会と風景画の勃興」(洪善杓)『美術研究』446　pp. 1-35　東京文化財研究所　25.8
(4 翻訳)「近代期における金剛山の視覚表象―外金剛・内金剛の位置づけとジェンダーコード」(金素延)『美術研究』448　pp. 43-56　東京文化財研究所　26.3
(4 記事)「著者が案内する、やきものブックガイド『白磁壺頌 朝鮮時代の白磁壺、その美を繙く』」(片山まび、田代裕一朗)『陶説』861　pp.56-58　日本陶磁協会　25.6
(4 記事)「「朝鮮白磁」の優品をめぐる韓国旅」『目の眼』582　pp.68-73　目の眼　25.7
(4 記事)「「物故者 (吉良文男、小野公久、坪井明日香、弓場紀知)」『日本美術年鑑』令和 5 年度版　pp.105-116-117、127-128、128　東京文化財研究所　26.1
(5 学会発表)「新安沈船の高麗青磁」 第 45 回日本貿易陶磁研究会研究集会「新安沈船とその時代－近年の新たな研究成果を中心に－」立教大学　25.9.13
(6 発表)「日本民藝館所蔵柳宗悦朝鮮関連資料の調査について」 シンポジウム「今も続く韓国工芸－国外所在文化遺産財団助成による調査成果発表」 駐日韓国大使館 韓国文化院　25.6.28
(6 発表)「韓国社会と文化財返還問題に対する認識の変化について」 令和 7 年度第 3 回総合研究会　東京文化財研究所　26.1.6
(6 発表)「「贋作」をめぐる技術と倫理―陶磁器を中心として」「東アジアの技術と倫理」キックオフ研究会　東京大学東洋文化研究所　26.2.7
(6 講演)「文化遺産に対する韓国のまなざし ―植民地期から解放後の陶磁器蒐集をめぐって―」 東京大学韓国学研究センター　25.6.14
(6 講演)「東アジアの工芸と文人 (韓国朝鮮)」 青花の会講座　新潮社　25.11.11
(6 講演)「韓国のやきもの、その美を探る」 月例講演会　東京国立博物館　25.11.25
(6 講演)「Japanese Residents of Colonial Korea and Their Relationship with Ceramics (植民地朝鮮の日本人と陶磁器)」 CJS Workshop & Roundtable Discussion – Japan and Colonialism: A Transregional Approach　SISJAC(セインズベリー日本藝術研究所)　25.12.4
(6 講演)「Japanese "Kottō(骨董)" Culture and Korean Ceramics (日本の骨董文化と韓国の陶磁器)」 SOAS (ロンドン大学東洋アフリカ学院)　25.12.5
(6 講義)「韓国のやきものを知る」 公開講座　聖心女子学院生涯学習センター　26.1.8-1.22
(7 所属学会等) 韓国・朝鮮文化研究会、韓国美術史学会、東洋陶磁学会
(8 教育) 愛知県立芸術大学美術学部非常勤講師、青山学院大学文学部非常勤講師

田中 淳 | TANAKA Atsushi （客員研究員）
(1 共著)「東西洋画対決」(三浦篤、森村泰昌、橋爪節也、田中淳)『キテレツ絵画の逆襲』 新潮社　pp.137-159　25.9
(3 論文)「萬鉄五郎にとっての斎藤与里、野島康三」『野島康三と斎藤与里―美を掴む手、美を興す眼展カタログ』 pp.15-23　埼玉県立近代美術館　25.10
(4 記事)「昭和ノ洋画―松本竣介の「昭和モダン」から」『美術の窓』504　pp.20-29　生活の友社　25.9
(4 記事)「「物故者」島田鮎子、福田徳樹」『日本美術年鑑』令和 5 年版　pp.105-106、116　東京文化財研究所　26.1
(7 所属学会等) 美術史学会、明治美術学会

田中 潤 | TANAKA Jun （客員研究員）
(8 教育) 学習院大学学芸員資格取得課程非常勤講師、お茶の水女子大学生活科学部非常勤講師、國學院大學大学院文学研究科兼任講師、國學院大學神道文化学部兼任講師、山形県立米沢女子短期大学国語国文学科非常勤講師

田良島 哲 | TARASHIMA Satoshi （客員研究員）
(1 公刊図書)「明治期博物館の図書収集と管理 –「列品」と「事務参考図書」の間」『近現代日本を生きるテクスト遺産』 勉誠社　pp.28-40　25.8
(2 報告)「文化財情報の発信における課題と展望―修理記録アーカイブの構築―」(江村知子、小山田智寛、田良島哲、山永尚美)『月刊文化財』748　pp.8-12　26.1
(3 論文)「正倉院宝物を社会に開く –拝観資格拡大と『正倉院の栞』–」『宮内庁宮内公文書館・文京区立森鷗外記念館特別展『鴎外、最後の4年間 – 帝室博物館総長兼図書頭・森林太郎 –』図録』 pp.71-74　文京区立森鷗外記念館　25.10
(4 解説)「デジタルミュージアムとデジタルアーカイブ」『学芸員』pp.3-5　学習院大学学芸員課程　25.10
(6 発表)「文化財 (美術工芸品) の修理記録および修理記録データベースの公開について」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲)　令和7年度第1回文化財情報資料部研究会　東京文化財研究所　25.4.17
(6 発表)「(ポスター発表)文化財 (美術工芸品) の修理記録データベースについて―「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」事業報告―」(山永尚美、小山田智寛、田良島哲、

江村知子） 一般社団法人 国宝修理装潢師連盟 第29回 定期研修会 京都府民総合交流プラザ 京都テルサ 25.10.3
(6 発表)「基準なき文化財修理記録のデータベース化を支えた Claris FileMaker の高い柔軟性」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲、江村知子） Claris カンファレンス 2025 虎ノ門ヒルズフォーラム 25.11.7
(6 発表)「修理記録データベースの拡充と利活用の課題」(田良島哲、山永尚美、小山田智寛） 2025年度美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.6
(7 所属学会等)アート・ドキュメンテーション学会、デジタルアーカイブ学会
(8 教育)学習院大学学芸員課程非常勤講師

千葉 毅 | CHIBA Tsuyoshi （保存科学研究センター）
(2 報告)「シンポジウム「紛争下の被災文化遺産と博物館の保護―スーダン共和国の事例から―」をめぐって」(関広尚世、千葉毅)『考古学研究』72(4) pp.1-5 考古学研究会 26.3
(2 報告)「Definition of Cultural Heritage and its Disaster Risk Management」『Proceedings of Tokyo International Workshop for Safeguarding Sudan's Cultural Heritage』 pp.146-175 東京文化財研究所 26.3
(3 論文)「オランダにおける国際研修「困難な状況下にある文化遺産管理のためのリーダーシップ研修」に参加して」『保存科学』65 pp.175-189 26.3
(4 編集)『令和7年度文化遺産保護国際貢献事業「トルコにおける文化遺産防災体制向上のための拠点交流事業」成果報告書』 128p 国立文化財機構文化財防災センター 26.3
(4 記事)「文化財防災センターにおける国際協力の取り組み―トルコ共和国文化観光省との交流事業について―」『文化財防災センターウェブコラム』 https://ch-drm.nich.go.jp/facility/2025/04/post-108.html 国立文化財機構文化財防災センター 25.4
(5 学会発表)「南九州市所在のアジア・太平洋戦争期コンクリート製トーチカの調査」(千葉毅、芳賀文絵、八巻聡、田口公則） 日本文化財科学会第42回大会 日本文化財科学会 九州大学伊都キャンパス 25.7.5
(5 学会発表)「ヒドロキシプロピルセルロースゲルシートを用いた土器圧痕レプリカ採取のための離型剤除去の試み」(秋山花子、千葉毅） 韓国文化遺産保存科学会 第62回秋季学術大会 国立中央科学館 25.11.28
(6 講義)「文化財の三次元記録」 文化遺産特殊研究A 東京学芸大学 25.6.19
(6 講義)「博物館における日常的に実践可能な文化財防災」 博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース） 東京文化財研究所 25.7.7
(6 講義)「Definition of Cultural Heritage and its Disaster Risk Management」 Tokyo International Workshop for Safeguarding Sudan's Cultural Heritage 東京文化財研究所 25.8.14
(7 所属学会等) ICOM、神奈川県考古学会、考古学研究会、縄文時代文化研究会、デジタルアーカイブ学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、三田史学会
(7 委員等) 公益財団法人航空科学博物館YS-11試作1号機保存プロジェクトワーキンググループワーキングメンバー、神奈川県考古学会役員

月村 紀乃 | TSUKIMURA Kino （文化財情報資料部）
(6 発表)「「銘文」を考える」 第59回オープンレクチャー 東京文化財研究所 25.11.13
(6 講演)「名刀「江雪左文字」がつなぐ縁―長津田、淵野辺、そして和歌山―」 横浜市長津田地区センター歴史講演会 横浜市長津田地区センター 25.9.6
(6 講義)「はじめての日本刀鑑賞」 日本工芸史概説Ⅱ 東京藝術大学 25.12.23
(7 所属学会等) 漆工史学会、美術史学会

轟 丈瑠 | TODOROKI Takeru （アソシエイトフェロー）
(3 論文)「三内丸山遺跡「子どもの墓」土遺構で発生したキノコの同定と真菌叢解析」(轟丈瑠、長尾理伶、西澤智康、佐藤嘉則、石崎武志)『保存科学』65 pp.1-12 26.3
(2 報告)「湿度制御温風処理後の建造物におけるシバンムシ類の経時的な生息調査」(島田潤、轟丈瑠、仁木真奈美、本間裕梨奈、原田正彦、藤井義久、佐藤嘉則)『保存科学』65 pp.139-146 26.3
(5 学会発表)「新たな文化財害虫と考えられるヒメハキリバチによる建造物被害」(島田潤、轟丈瑠、山田紀代美、佐藤嘉則） 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「ATP測定法を用いた収蔵環境の清浄度評価と維持管理基準の提案」(轟丈瑠、山田紀代美、佐藤嘉則） 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「ニュウハクシミの若齢期における生存率と食糞の関係」(江原愛菜、西澤智康、轟丈瑠、島田潤、渡辺祐基、木川りか、佐藤嘉則） 日本文化財科学会第42回大会 九州大学伊都キャンパス 25.7.5
(5 学会発表)「土遺構の保存に関する総合的研究―三内丸山遺跡の事例―」(石崎武志、佐藤嘉則、轟丈瑠、西澤智康） 第9回東アジア文化遺産保護学会国際学術シンポジウム 天府国際大酒店 25.10.30
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、文化財保存修復学会

友田 正彦 | TOMODA Masahiko （副所長）
(2 報告)「Chapter 1 Introduction」(TOMODA Masahiko, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.1-4 APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 2 Protection of the Terrace on the West Embankment of the East Baray」(KUROIWA Chihiro, TOMODA Masahiko, MAO Sokny, ICH Sreng, MOM Sophon, SOM Sopharath, KIM Sothin)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.5-15 APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 3 Partial Repair of the East and West Entrances of the Central Tower」(MAO Sokny, ICH Sreng, SIM Dany, PROM Sopheak, RO Sovandaroth, CHHAY Loeun, MOM Sophon, SOM Sopharath, KIM Sothin, TOMODA Masahiko, ASADA Natsumi, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.17-33 APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 4 Preliminary Survey for the Restoration of the Cruciform Terrace in front of the Central Complex」(TOMODA Masahiko, ASADA Natsumi, YAMADA Ayano, MAO Sokny, SIM Dany, SOEUN Danet, PHONE Tara, SOM Sopharath, KIM Sothin)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2025 ―』 pp.35-50 APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「Chapter 5 Statues Discovered in Ta Nei Temple」(KUROIWA Chihiro, NET Simon, CHHOUK Somala, SIM Dany, TOMODA Masahiko)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 pp.51-54 APSARA National Authority and

Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(2 報告)「集落」(友田正彦、黒岩千尋)『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査 概報』 pp.12-18 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「建築」(友田正彦、金井健、海野聡、向井純子、黒岩千尋)『ブータンの伝統的石造民家保存のための建築調査 2024年春調査 概報』 pp.19-64 東京文化財研究所 26.3
(2 報告)「東南アジアの古代王都と寺院」『平泉学研究年報』第6号 pp.1-21 世界遺産平泉保存活用推進実行委員会 26.3
(3 論文)「ブータンの伝統的民家における上階への動線について」(友田正彦、金井健、マルティネス アレハンドロ、福嶋啓人、海野聡、向井純子)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025 pp.449-450 日本建築学会 25.9
(3 論文)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価 その 3 顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子)『日本建築学会大会学術講演梗概集』2025 pp.619-620 日本建築学会 25.9
(4 編集)(TOMODA Masahiko, KIM Sothin, KUROIWA Chihiro)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』 116p APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties (TOBUNKEN) 26.3
(5 学会発表)「ブータンの伝統的民家における上階への動線について」(友田正彦、金井健、マルティネス アレハンドロ、福嶋啓人、海野聡、向井純子) 日本建築学会大会学術講演会 九州大学伊都キャンパス 25.9.10
(5 学会発表)「ブータンの伝統的石造民家の建築的特徴と文化財的価値の評価 その 3 顕著な建築的特徴をもつブムタン県の民家の実測調査」(金井健、友田正彦、淺田なつみ、黒岩千尋、福嶋啓人、海野聡、向井純子) 日本建築学会大会学術講演会 九州大学伊都キャンパス 25.9.12
(6 発表)「Interpreting authenticity in architectural heritage conservation in Southeast and South Asia」(TOMODA Masahiko) International Symposium "Anastylosis at Large" 東京大学工学部 25.11.2
(6 発表)「東南アジア・南アジア分科会の振り返りと課題について ー 2016-2025 ー」 文化遺産国際協力コンソーシアム第49回東南アジア・南アジア分科会 東京文化財研究所 26.1.14
(6 講演)「東南アジアの古代王都と寺院」 第6回平泉学フォーラム 水沢グランドホテル 26.2.1
(6 講義)「Conservation of Heritage Buildings in Japan」 3rd Training Course on Conservation of Heritage Buildings Department of Culture and Dzongkha Development, Bhutan 25.5.14
(6 司会)「紛争からの復興と文化遺産」 文化遺産国際協力コンソーシアム令和7年度シンポジウム 東京大学弥生講堂一条ホール 25.11.30
(6 パネリスト)「日中韓における文化遺産保護政策のいま ー近年の法改正をめぐる背景と展望ー」 文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会 東京文化財研究所 25.9.14
(7 所属学会等) ICOMOS、東南アジア考古学会、日本建築学会
(7 委員等) 文化遺産国際協力コンソーシアム事務局長

永崎 研宣 | NAGASAKI Kiyonori (客員研究員)
(7 所属学会等) Alliance of Digital Humanities Organizations、アート・ドキュメンテーション学会、情報処理学会、情報知識学会、情報メディア学会、日本印度学仏教学会、日本宗教学会、日本デジタル・ヒューマニティーズ学会 (JADH)
(8 教育) 慶應義塾大学文学部教授

仁木 真奈美 | NIKI Manami (アソシエイトフェロー)
(2 報告)「和紙の平衡含水率について ー市販の楮紙および美濃紙における測定結果ー」(近藤修平、島田正理、藤原裕子、藤井義久、佐藤嘉則、仁木真奈美)『保存科学』65 pp.41-48 26.3
(2 報告)「湿度制御温風処理後の建造物におけるシバンムシ類の経時的な生息調査」(島田潤、轟丈瑠、仁木真奈美、本間裕梨奈、原田正彦、藤井義久、佐藤嘉則)『保存科学』65 pp.139-146 26.3
(5 学会発表)「海水損紙資料に出現した微生物由来の赤色色素の再現とクリーニング方法の検討」(仁木真奈美、佐藤嘉則、貴田啓子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(7 所属学会等) 日本文化財科学会、文化財保存修復学会

西田 典由 | NISHIDA Noriyoshi (保存科学研究センター)
(2 報告)「「文化財の匠プロジェクト」現状報告〜保護・育成事業の成果 ③科学調査 最近の成果」(早川典子、倉島玲央、西田典由、一宮八重)『月刊文化財』748 pp.17-20 26.1
(5 学会発表)「Analysis of Green Coloring Materials in the Illustrated Natural History Books owned by Takamatsu Matsudaira family Using Hyperspectral Imaging」(Chih lien CHI, Junko AKIYAMA, Kai TERASHIMA, Noriyoshi NISHIDA, Tsuyoshi CHIBA, Masahide INUZUKA, Keiko Takagi) TECHNART 2025 ― International Conference on Analytical Techniques for Heritage Studies and Conservation Congress Centre of the Hotel Giò 25.5.8
(5 学会発表)「近世日本彩色資料に用いられた黄色色材の判別方法について」(大和あすか、一宮八重、西田典由) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「紙漉きに用いるネリの粘弾性評価ートロロアオイとノリウツギの違い ー」(西田典由、河西隆太、新井田萌重、貴田啓子、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「拡散反射型赤外分光分析によるトレーシングクロスの材質分析」(西田典由、久利希、森田健介、千葉毅、芳賀文絵、紀芝蓮、寺島海、犬塚将英) 文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5
(5 学会発表)「高松松平家所蔵博物図譜に用いられたコバルトガラス顔料(スマルト・花紺青)と青色の用法に関する一考察」(寺島海、秋山純子、紀芝蓮、西田典由、犬塚将英、髙木敬子) 文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5
(5 学会発表)「6世紀の常陸、久慈川・那珂川下流域の形象埴輪にみられる「紺」色:針葉樹のタールを用いた彩色」(谷口陽子、ジョイ・マズレック、西田典由、貴田啓子、高嶋美穂、寺島海、忽那敬三、中泉雄太、稲田健一) 文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.6
(5 学会発表)「熱分析を用いたセルロース系繊維複合樹脂に含まれるセルロースの簡易定量」(秀野晃大、薮谷智規、美藤望、西田 典由) 第35回日本エネルギー学会大会 東北大学 川内北キャンパス 25.8.7-8.8
(5 学会発表)「紙漉きに用いるネリに関する話 ―主にノリウツギについて―」 和紙文化研究会2025年9月例会 (株)小津和紙 25.9.20
(5 学会発表)「Newly discovered "Hitachi navy (conifer tar blue)" from terracotta decoration in Hitachi area of Japan, 6th century」(Mazurek Joy, Taniguchi Yoko, NISHIDA Noriyoshi, Kida Keiko, Takashima Miho, Terashima Kai, Kutsuna Keizo, Nakaizumi Yuta, Inada Kenichi) The International Chemical Congress of Pacific Basin Socienties 2025 Hawaii Convention Center 25.12.19
(6 発表)「紙漉きにまつわる近年の新しい取り組み」 美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.6
(6 発表)「和紙・ノリウツギに関する共同研究成果報告会」 ネリ研究会 東京文化財研究所 26.2.20
(6 講義)「文化財の科学調査」 博物館・美術館等保存担当学芸員研修

（上級コース） 東京文化財研究所 25.7.7
(6 講義)「空気汚染の文化財への影響」 博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース） 東京文化財研究所 25.7.7
(7 所属学会等) 都市有害生物管理学会、日本鉱業史研究会、日本文化財科学会、日本分析化学会、文化財保存修復学会、和紙文化研究会

芳賀 文絵 | HAGA Ayae （保存科学研究センター）

(1 論文)「空調等のない文化財保存空間における木材のみによる湿度制御の可能性」(及川規、森谷朱、嵯城花佳、芳賀文絵)『文化財保存修復学会誌』69 pp.52-61 26.3
(2 報告)「廃校を改修した文化財収蔵施設における保存環境の長期的傾向―石巻市被災資料等収蔵施設の温湿度調査―」(森谷朱、嵯城花佳、芳賀文絵、及川規、佐藤麻南)『東北歴史博物館研究紀要』27 pp.35-44 東北歴史博物館 26.3
(5 学会発表)「木材だけによる湿度制御の試み―空調機のない文化財施設での実施例―」(森谷朱、芳賀文絵、嵯城花佳、及川規) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「水害による被災紙資料の揮発成分と臭気対策について 水害により被害を受けた文化財からの揮発成分とその影響」(芳賀文絵、松井敏也、中尾真梨子、奥山誠義、天野真志) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学 伊都キャンパス 25.7.5
(5 学会発表)「南九州市所在のアジア・太平洋戦争期コンクリート製トーチカの調査」(千葉毅、芳賀文絵、八巻 聡、田口公則) 日本文化財科学会第42回大会 九州大学 伊都キャンパス 25.7.5
(5 学会発表)「拡散反射型赤外分光分析によるトレーシングクロスの材質分析」(西田典由、久利希、森田健介、千葉毅、芳賀文絵、紀芝蓮、寺島海、犬塚将英) 文化財科学会第42回大会 九州大学 25.7.5
(5 学会発表)「水害による被災紙資料の揮発成分と臭気対策について」2026年度室内環境学会 学術大会 北九州国際会議場 25.12.6
(7 所属学会等) 室内環境学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員等) 南相馬市大悲山石仏保存整備指導委員会
(8 教育) 東京藝術大学美術研究科文化財保存学専攻非常勤講師

早川 典子 | HAYAKAWA Noriko （保存科学研究センター）

(1 公刊図書)(ジョイス・H・タウンゼント（著) 早川典子、鳥海秀実、一宮八重（著))『文化財保存修復のための科学 材料・化学入門』朝倉書店 152p 26.2
(2 報告)「「文化財の匠プロジェクト」現状報告～保護・育成事業の成果③ 科学調査 最近の成果」(早川典子、西田典由、一宮八重、倉島玲央)『月刊文化財』748 pp. 17-20 26.1
(2 報告)「デジタルマイクロスコープを用いた画絹調査方法の紹介およびその精度の検討について」(早川典子、菊池理予、山田祐子)『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究成果報告書』 pp.10-19 独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館・東京文化財研究所 26.3
(3 論文)「文化財修復に使われる材料の有機化学」『化学と教育』73(8) pp. 320-323 日本化学会 25.8
(3 論文)「製糸技術の異なる画絹の再現検証―生糸の抱合を中心に―」(京都絵美、早川典子、山田祐子、秋本賀子、志村明)『文化財保存修復学会』69 pp.1-17 26.3
(5 学会発表)「展示中の掛軸形状の3D計測：展示期間が掛軸に物理的に与える影響の調査、異なる温湿度環境」(木川りか、田中麻美、渡辺祐基、和泉田絢子、岡岩太郎、早川典子、鷲頭桂、小泉惠英、島谷弘幸) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「バソフェナントロリン試験紙を用いた黒漆の判別」(倉島玲央、早川典子、鷺野谷一平、室瀬智弥) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.14
(5 学会発表)「保管状態の異なる小麦デンプンを原料とした糊の物性の差異について」(早川典子、永谷智恵、大和あすか、趙依寧、山田祐子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「有機溶媒高含有ゲルを利用した文化財クリーニング方法の検討」(秋山花子、一宮八重、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「江戸時代の黒染め染織品に使用された鉄媒染の同定」(佐藤萌、一宮八重、倉島玲央、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「溶菌酵素入り寒天ゲルを使用した日本画のしみ抜き」(小谷野匡子、大川美香、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(5 学会発表)「紙漉きに用いるネリの粘弾性評価ロロアオイとノリウツギの違い ―」(西田典由、河西隆太、新井田萌重、貴田啓子、早川典子) 文化財保存修復学会第47回大会 富山国際会議場 25.6.15
(6 発表)「北米、欧州の博物館等における展示、収蔵、保存のポリシーの聴き取り調査」〈科学研究費補助金 基盤(B)〉(研究代表者：島谷弘幸)「在外日本美術の保存修復技法の比較調査と国際的な保存活用に向けて」公開研究会 東京文化財研究所 25.7.24
(6 発表)「デジタルマイクロスコープを用いた画絹調査方法の紹介とその精度の検討について」(早川典子、菊池理予、山田祐子)「美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究」成果報告会 東京文化財研究所 25.7.29
(6 発表)「報告1 今年度の科学調査の成果」 美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会 東京文化財研究所 26.2.6
(6 講義)「修理技術者に必要な自然科学」 国宝修理装潢師連盟令和7年度新任者研修 京都国立博物館 25.4.22
(6 講義)「文化財修復に関する科学」 保存担当学芸員研修（上級コース） 東京文化財研究所 25.7.8
(6 講義)「修理技術者に必要な自然科学」 国宝修理装潢師連盟令和7年度上級・中級研修会 京都国立博物館 25.7.9
(6 講義)「繊維について 一化学分析と顕微鏡観察ー」 染織品保存にたずさわる人のためのサイエンスリテラシー研修2025 佐賀大学 25.7.20
(6 講義)「合成接着剤1、2」 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 25.9.19
(6 講義)「科学知識基礎1、2」 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 25.9.30
(6 講義)「伝統接着剤1（糊、フノリ）」 文化財修復技術者のための科学知識基礎研修 東京文化財研究所 25.10.1
(6 講義)「文化財資料に使用された粘着テープの処置について」 令和7年度近代歴史資料の保存・修理に関する研究協議会 文化庁 25.11.29
(6 講義)「文化財保存について一保存科学の立場から一」【文芸学部】芸術領域 美術史専修の「美術史演習 II _01」特別講義 共立女子大 25.12.10
(6 講義)「美術工芸品修理における接着/工房の安全管理」 美術工芸品保存修理講習会 オンライン 25.12.12
(6 司会)〈科学研究費補助金 基盤(B)〉(研究代表者：島谷弘幸)「在外日本美術の保存修復技法の比較調査と国際的な保存活用に向けて」公開研究会 東京文化財研究所 25.7.24
(7 所属学会等) IIC、高分子学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会、マテリアルライフ学会
(8 教育) 東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻連携教授

早川 泰弘 | HAYAKAWA Yasuhiro （特任研究員）

(2 報告)「向元瑚筆「桐牡丹鳳凰図」(鎌倉芳太郎撮影) の復元に向けた基礎調査結果について」(湊信幸、早川泰弘、荒井経、山口美波、須澤芽生、甘甜、木下悠、畑靖紀、伊禮拓郎、平川信幸、篠原

あかね、幸喜淳、友利優太）『沖縄県立博物館・美術館紀要』19 pp.61-80　沖縄県立博物館・美術館　26.3
（2 報告）「中尊寺　国宝金銅迦陵頻伽文華鬘　蛍光X線分析結果」『中尊寺仏教文化研究所論集』5　pp.69-104　中尊寺　26.3
（2 報告）「江戸期銀貨の色揚げに関する調査」『文化資源が秘めた歴史物語－先端分析技術で鮮やかに読み解く』 pp.40-43　東北大学金属材料研究所　25.9
（2 報告）「「初音蒔絵文台・硯箱」の材料調査」『大解剖　国宝「初音の調度」』 pp.16-17　徳川美術館　25.4
（4 解説）「蛍光X線分析から見る御後絵の特徴」『「御後絵と琉球絵師の系譜」展パネル解説』 沖縄県立博物館・美術館　25.4
（5 学会発表）「災害時における保存箱の温湿度緩和効果の検証」（由井和子、水谷悦子、秋山純子、早川泰弘） 日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.5-7.6
（6 講演）「孫億「鳳凰牡丹図」・殷元良「鶉図」の科学分析結果について」 令和7年度琉球王国文化遺産集積再興事業報告会　鎌倉芳太郎が撮影した絵画の復元調査報告　沖縄県立博物館・美術館　26.3.15
（6 講演）「日本に伝わる黄銅製のお宝あれこれ」「黄銅（鍮石・真鍮）の歴史と伝来の道「Brass Road」の研究」2025年度公開講演会　奈良大学　26.3.20
（7 所属学会等）日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員等）琉球王国文化遺産集積・再興事業監修者（絵画）、中城御殿跡地整備検討委員会委員、琉球国王肖像画修理検討会議委員、被災漆器修理WG委員、法隆寺金堂壁画保存活用委員会壁画ワーキンググループ材料調査班専門委員、石川県文化財保存修復工房運営委員会委員、公益財団法人文化財虫菌害研究所理事
（8 教育）金沢美術工芸大学非常勤講師

二神 葉子 | FUTAGAMI Yoko （文化財情報資料部）

（2 報告）「2021年度～2025年度のタイ所在漆工品に関する活動及び本報告書について」『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究（3）―日本製漆工品と漆工材料調査―』 pp.5-12　東京文化財研究所　26.3
（2 報告）「2024年に熟覧調査を行った博物館等について」『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究（3）―日本製漆工品と漆工材料調査―』 pp.27-36　東京文化財研究所　26.3
（2 報告）「タイ国立博物館中央収蔵庫所蔵日本製椀に関する調査報告」『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究（3）―日本製漆工品と漆工材料調査―』 pp.61-68　東京文化財研究所　26.3
（3 論文）「バンコク国立博物館所蔵儀式用うちわと三木栄との関係について」『タイ所在日本製漆工品に関する調査研究（3）―日本製漆工品と漆工材料調査 ―』 pp.73-78　東京文化財研究所　26.3
（3 論文）「三木栄とシラパコーン学校（タイ）に関する考察」『東南アジア考古学』45　pp.45-52　26.3
（3 論文）「無形文化遺産の保護に関する第20回政府間委員会会合の概要と今後の展望」『無形文化遺産研究報告』20　pp.1-32　26.3
（6 発表）「データベース構造から改めてWordPressを考える」（小山田智寛、石灰秀行、二神葉子） WordCamp Kansai 2025　グランフロント大阪　25.11.2
（6 講演）「世界遺産について」 令和7年度立山砂防世界遺産登録推進ユースプログラム　富山県防災危機管理センター　25.8.20
（6 講演）「Concept of Restoration Project of Wat Ratchapradit and Related Studies — Seminar: The story of “Preserving and Creating Art, the Heritage of Two Countries”」 Academic exhibitions and seminars “Rachapuraditto Bi no kansho” in the project to preserve and repair Japanese art pearl decoration in Thailand of the Royal Temple　Wat Rajapradit Sathitmahasimaram　25.9.10
（6 講演）「Studies on Materials Used for the Door Panels of Wat Ratchapradit — Seminar: The story of “From integration to creative inspiration for the future”」 Academic exhibitions and seminars “Rachapuraditto Bi no kansho” in the project to preserve and repair Japanese art pearl decoration in Thailand of the Royal Temple　Wat Rajapradit Sathitmahasimaram　25.9.10
（6 講演）「タイに渡った蒔絵工 ―鶴原善三郎と三木栄―」 第59回オープンレクチャー かたちを見る、かたちを読む　東京文化財研究所　25.11.14
（7 所属学会等）ICOM、ICOMOS、地理情報システム学会、東南アジア考古学会、日本第四紀学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（7 委員等）文化審議会世界文化遺産部会臨時委員
（8 教育）江戸川大学社会学部非常勤講師

米沢 玲 | MAIZAWA Rei （文化財情報資料部）

（4 解説）「金峯山寺蔵王蔵王権現立像」ほか4件『建築知識　仏像と寺院建築大全』68(2)　146p　エクスナレッジ　26.1
（6 発表）「「木造」を原型とする「鉄造」阿弥陀如来像の３Ｄデータによる形状の差異」（山田修、宮﨑甲、三枝一将、松本隆、米沢玲、藤曲隆哉、原浩史） 文化財保存修復学会 第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
（6 発表）「調査報告　長谷寺　銅造十一面観音立像」 令和7年度第10回文化財情報資料部研究会　東京文化財研究所　26.3.16
（6 講義）「矢代幸雄と美術研究所の設立―日本で最初の美術アーカイブ」 奈良大学特別講義　奈良大学　25.12.10
（7 所属学会等）ICOM、美学会、美術史学会、仏教芸術学会、三田芸術学会
（8 教育）清泉女子大学学芸員課程非常勤講師、島根県古代文化センター客員研究員

前川 佳文 | MAEKAWA Yoshifumi （文化遺産国際協力センター）

（4 記事）「令和7年度成果報告書」『Church of the Saint Michael the Arcangel, Keşlik Monastery, Cappadocia　Joint Research Report on the Conservation and Restoration of Wall Paintings, 2025』 p.87　東京文化財研究所　26.3
（5 学会発表）「文化財保存学に基づく鑓絵の保存修復」（前川佳文、ダニエラ・マリア・マーフィー、シモーナ・カレッチャ、ステファーニア・フランチェスキーニ） 文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.14
（6 発表）「Conservation and Restoration of Wall Paintings at the Church of Saint Michael the Archangel, Keşlik Monastery」（Yoshifumi MAEKAWA, Daniela Maria MURPHY） 2025 Araştırma Sonuçları Raporlama Oturumu　Nevşehir Conservation/Restoration Laboratory　25.7.12
（6 発表）「Ricerca e studio sulla conservazione e il restauro delle decorazioni in stucco e dei beni culturali in pietra」 Comitato di Valutazione del Piano di Ricerca 2025 del Parco Archeologico di Selinunte　Parco Archeologico di Selinunte　25.9.14
（6 発表）「Development of a Wall Painting Condition Assessment System Using Data Sheets」（Yoshifumi MAEKAWA, Monica Martelli CASTALDI, Daniela Maria MURPHY） Discussion Meeting on Wall Painting Conservation in the Istrian Peninsula　Historical & Maritime Museum of Istria　25.11.7
（6 講演）「文化遺産の保存と国際協働」 特別講演 「なぜ壁画を守るのか　描く技術から、未来へ継ぐ思想へ」 金沢大学　26.1.26
（6 講演）「フィレンツェの壁画―ルネサンスの色彩が蘇る―」 特別講演 「なぜ壁画を守るのか　描く技術から、未来へ継ぐ思想へ」 金沢大学　26.1.27
（7 所属学会等）Associazione Amici dell’Opificio、Associazione Bastioni、ICOMOS、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
（8 教育）東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻システム保存学研究室連携准教授

前原 恵美 | MAEHARA Megumi （無形文化遺産部）

(2 報告)「篳篥蘆舌の原材料・ヨシを育む上牧・鵜殿」『篳篥蘆舌の原材料・ヨシに関する報告書―淀川河川敷 上牧・鵜殿を中心に―』pp.1-8　東京文化財研究所無形文化遺産部　26.3
(2 報告)「ヨシ原保全にかかる各地の取り組み　琵琶湖の西の湖のヨシ原」『篳篥蘆舌の原材料・ヨシに関する報告書―淀川河川敷 上牧・鵜殿を中心に―』 pp.9-11　東京文化財研究所無形文化遺産部　26.3
(2 報告)「上牧・鵜殿の最新動向とこれから」『篳篥蘆舌の原材料・ヨシに関する報告書―淀川河川敷 上牧・鵜殿を中心に―』 pp.27-30　東京文化財研究所無形文化遺産部　26.3
(3 論文)「楽器を中心とした文化財保存技術の調査報告９」『無形文化遺産研究報告』20　pp.1-14　26.3
(4 解説)「新内節 明烏夢泡雪 浦里雪責、清元節 忍逢春雪解 三千歳、長唄 広重の絵に題して 隅田の四季」『「表現のあじわい一雪一」演目解説』 pp.6-12　国立劇場　26.1
(4 解説)『パンフレット『日本の芸能を支える技』Ⅸ九州系地唄駒・撥』pp.1-12　東京文化財研究所　26.3
(4 解説)『パンフレット『日本の芸能を支える技』Ｘ能管』 pp.1-8　東京文化財研究所　26.3
(4 記事)「無形文化財を支える文化財保存技術―「わざ」と「モノ」の層で支える―」『文化財保存修復情報誌　みずのを』3　pp.12-14　NPO法人文化財保存支援機構　26.3
(4 記事)「美術工芸品修理にかかる記録映像の拡充」(前原恵美、菊池理予、小田原直也)『月刊文化財』748　pp.13-16　26.1
(4 連載)「音の浮世絵第22回　帰り着くまで楽しみ尽くす 四季の内春「花見帰り隅田の渡し」」『宮城會々報』244　pp.1-2　宮城会　25.6
(4 連載)「音の浮世絵第23回　藍の静けさに凧の風切音を聴く 葛飾北斎「冨嶽三十六景 東都浅草本願寺」」『宮城會々報』245　pp.1-2　宮城会　26.1
(5 学会発表)「能管の原材料と製作技術に関する調査報告」(前原恵美、森田都紀、亀川徹、倉島玲央、小林慧人)　東洋音楽学会第76回大会　沖縄県立芸術大学　25.11.30
(6 発表)「趣旨説明／沖縄県における学校内外での伝統芸能普及の取り組み」 第19回 東京文化財研究所無形文化遺産部 公開学術講座「普及から考える伝統芸能の継承」 東京文化財研究所　25.11.7
(6 発表)「能管製作者・原材料・製作技術の歴史と現在　現状について／本研究で扱った能管について／吹き心地の傾向について」 公開研究会「能管の原材料と製作技術に関する調査研究報告」 東京文化財研究所　25.12.19
(6 発表)「男芸者が繋ぐ吉原と江戸の芸能」 総合研究会　東京文化財研究所　26.2.3
(6 発表)「今年度の記録映像の成果について」(菊池理予、小田原直也、前原恵美)　2025年度美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会　東京文化財研究所　26.2.6
(6 講演)「日本における伝統芸能の継承と保護」 中国若手行政官等長期育成支援事業2025年度来日プログラム　東京文化財研究所　25.8.27
(6 パネリスト)「シンポジウム「コロナ期の音楽活動を振り返る」」(小塩さとみ、神野知恵、前原恵美、井上登喜子、増野亜子)　日本音楽学会東日本支部第102回定例研究会　宮城教育大学　26.3.28
(7 所属学会等) International Council for Traditional Music and dance、楽劇学会、東洋音楽学会、日本音楽学会、文化財保存修復学会
(8 教育) 桐朋学園大学音楽学部非常勤講師

松浦 一之介 | MATSUURA Kazunosuke （アソシエイトフェロー）

(4 編集)『各国の文化財保護法令シリーズ：スペイン』30　328p　26.3
(4 編集)『世界遺産研究協議会：越境する「遺産」ー世界遺産とつながる人々の生活、信仰、環境―』 69p　26.3
(5 学会発表)「日本における史跡環境の面的保護に関する課題」 2025年度日本遺跡学会全国大会　阪南大学　25.12.6
(6 発表)「遺跡と景観―日本における史跡環境の面的保護にむけて―」令和7年度第1回総合研究会　東京文化財研究所　25.11.5
(6 講演)『世界遺産「アグリジェントの考古地区」とシチリア州考古公園システム』 令和7年度世界遺産研究協議会　東京文化財研究所　25.12.22
(6 講義)「文化財と景観」 修復計画論　東京藝術大学大学院　25.6.5
(6 パネリスト)『パネルディスカッション：越境する「遺産」』(金井健、鈴木地平、伊藤文彦、胡光、土屋みづほ、松浦一之介)　令和8年度世界遺産研究協議会　東京文化財研究所　25.12.22
(7 所属学会等) 龍田考古会、日本遺跡学会、日本景観学会

丸川 雄三 | MARUKAWA Yuzo （客員研究員）

(5 学会発表)「博物館資料との出会いを広げる展示場情報システムの開発」(宮前知佐子、丸川雄三、寺村裕史、日髙真吾、高野明彦)　アート・ドキュメンテーション学会第18回秋季研究集会　印刷博物館及びオンライン　25.11.30
(6 発表)「協働による仏教壁画デジタルライブラリの構築と学際的研究への活用」(末森薫、正垣雅子、丸川雄三、寺村淳一、菊谷竜太、石山俊)　仏教学とデジタル・ヒューマニティーズ国際シンポジウム「DX-AI 時代における人文学の意義と研究 基盤の構築」 東京国際フォーラム　25.12.21
(6 講演)「連想検索と民具のミカタ」 第678回みんぱくウィークエンド・サロン―研究者と話そう　国立民族学博物館　25.5.25
(7 所属学会等) アート・ドキュメンテーション学会

三上 豊 | MIKAMI Yutaka （客員研究員）

(1 公刊図書)『プサイの部屋 松澤宥アトリエ』 せりか書房　96p　25.5
(4 編集)『かみ派の美術―諏訪につどった前衛たち 1969-1974』 144p　水声社　26.2
(4 エッセイ)「今昔画廊巡り第24回ギャルリー・ワタリ」『ときの忘れものブログ』 https://www.tokinowasuremono.com/blog/50920/　25.4
(4 エッセイ)「今昔画廊巡り第25回ギャルリー・ところ」『ときの忘れものブログ』 https://www.tokinowasuremono.com/blog/50762/　25.5
(4 エッセイ)「今昔画廊巡り第26回２人称・画廊」『ときの忘れものブログ』 https://www.tokinowasuremono.com/blog/50763/　25.6
(4 エッセイ)「今昔画廊巡り第27回ギャラリーホワイトアート」『ときの忘れものブログ』 https://www.tokinowasuremono.com/blog/53082/　25.7
(4 エッセイ)「今昔画廊巡り第28回愛宕山画廊」『ときの忘れものブログ』 https://www.tokinowasuremono.com/blog/67725/　25.10
(4 エッセイ)「麻生三郎アトリエ再訪」『たいせつな風景』35　pp.5-8　神奈川県立近代美術館　25.12
(6 インタビュー)「塩見允枝子インタビュー　60年代日本での活動について」『塩見允枝子×フルクサス』 pp.4-13　ときの忘れもの　25.9
(7 委員等) 町田市立国際版画美術館運営協議会委員

水谷 悦子 | MIZUTANI Etsuko （保存科学研究センター）

(1 公刊図書)「被災文化財の保管場所の環境整備」『必携文化財防災の手引き』 丸善出版　pp.109-111　26.1
(3 論文)「岩窟内環境下の木造建造物の湿害リスク抑制を目的とした日常管理型パッシブ環境制御の実践」(水谷悦子、小椋大輔、藤井義久、藤原裕子)『保存科学』65　pp.13-30　26.3
(3 論文)「博物館・美術館等の施設・保存環境管理に関する全国調査―実施経緯と基本集計から見た動向」(水谷悦子、伊庭千恵美、秋山純子)『保存科学』65　pp.157-174　26.3
(4 編集)「博物館・美術館等の展示収蔵施設の温湿度管理に関する総合調査報告書【基本集計編】」88p.　26.3

(5 学会発表)「博物館・美術館等のアンケート調査による 施設管理と改修の動向分析」(水谷悦子、伊庭千恵美、秋山純子、由井和子) 第47回文化財保存修復学会　富山国際会議場　25.6.14-6.15
(5 学会発表)「アンケート調査から見えた全国の博物館・美術館等の温湿度管理の現状と課題」(秋山純子、伊庭千恵美、水谷悦子、由井和子)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.14-6.15
(5 学会発表)「夏季の美術館収蔵庫における温湿度環境と熱負荷の設定温度変更による影響」(田中琴巳、伊庭千恵美、水谷悦子、秋山純子)　日本建築学会近畿支部　大阪工業技術専門学校　25.6.28-6.29
(5 学会発表)「法隆寺金堂飛天壁画の模擬試験体作成と 温湿度変化に対する応答把握の試み」(石川和輝、小椋大輔、脇谷草一郎、水谷悦子、和田浩)　第42回日本文化財科学会大会　九州大学　25.7.5-7.6
(5 学会発表)「岩石上の漆喰層に描かれた壁画のための適切な保管環境の検討ー実環境における吸放湿過程での漆喰層に対するデジタル画像相関法を用いたひずみ測定ー」(岡深雪、脇谷草一郎、柳田明進、魚島純一、荘旺璋、水谷悦子、秋山純子、伊庭千恵美)　第42回日本文化財科学会大会　九州大学　25.7.5-7.6
(5 学会発表)「岩窟仏堂における湿害リスクに対する 日常管理による対策と効果検証」(水谷悦子、小椋大輔)　第42回日本文化財科学会大会　九州大学　25.7.5-7.6
(5 学会発表)「設定温度の変更が美術館収蔵庫の温湿度環境と熱負荷に与える影響の検討」(田中琴巳、伊庭千恵美、水谷悦子、秋山純子)　令和７年度日本空気調和・衛生工学会大会（高松）　香川大学　25.9.3-9.5
(5 学会発表)「Passive Environmental Control for Suppressing Condensation in a Rock Cave Temple」(MIZUTANI Etsuko, OGURA Daisuke)　Stone 2025　Sorbonne University　25.9.9-9.12
(5 学会発表)「美術館の温湿度環境とエネルギー消費の調査および改善方法の提案　その２ 設定温度の変更が夏季の収蔵庫の温湿度に与える影響」(伊庭千恵美、田中琴巳、水谷悦子、秋山純子)　2025年度建築学会大会(九州)　九州大学　25.9.10-9.12
(5 学会発表)「美術館の温湿度環境とエネルギー消費の調査および改善方法の提案 その３ 設定温度の変更が夏季の収蔵庫の熱負荷に与える影響」(田中 琴巳、伊庭千恵美、水谷悦子、秋山純子)　2025年度建築学会大会(九州)　九州大学　25.9.10-9.12
(6 講演)「図書資料をまもる環境づくり ― 地球温暖化とどう向き合うか」　第111回図書館大会愛媛大会　愛媛県男女共同参画センター　25.10.31
(7 所属学会等) ICOMOS、日本建築学会、日本文化財科学会、文化財保存修復学会
(7 委員等) 日本建築学会環境工学委員会湿気小委員会「文化財の保存と活用のための熱湿気環境解WG」幹事

薬師寺 君子 | YAKUSHIJI Kimiko （客員研究員）

(4 デジタルコンテンツ制作)『本法寺所蔵「法華経曼荼羅図」』　東京文化財研究所閲覧室公開　26.3
(4 デジタルコンテンツ制作)『根津美術館所蔵「酒呑童子絵巻」』　東京文化財研究所閲覧室公開　26.2
(4 デジタルコンテンツ制作)『ライプツィヒ・グラッシー民族博物館所蔵「酒呑童子絵巻」』　東京文化財研究所閲覧室公開　25.5
(4 ウェブコンテンツ制作)『和泉市久保惣記念美術館所蔵「山崎架橋図」』 https://www.tobunken.go.jp/yamazaki/　26.3
(6 講演)「「帝鑑図」とは何か」　第59回オープンレクチャー　東京文化財研究所　25.11.14
(7 所属学会等) アート・ドキュメンテーション学会、美術史学会

安永 拓世 | YASUNAGA Takuyo （客員研究員）

(3 論文)「呉春の初期画業―蕪村受容と《白梅図屏風》への変奏」『四条派の祖 呉春 逸翁美術館コレクション』pp.140-143　東京美術　25.4
(3 論文)「呉春の表現の源流を求めて―与謝蕪村からの学習・継承と「白梅図屏風」への道程―」『大和文華』147　pp.1-18　大和文華館　25.12
(3 論文)「与謝蕪村筆「牛若丸弁慶図自画賛」(逸翁美術館蔵) の解釈に関する一試論」『美學美術史論集』24　pp.183-213　成城大学大学院文学研究科　26.3
(3 論文)「江戸時代の画絹と特殊な基底材」『美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究 成果報告書』pp.36-47　東京国立博物館・東京文化財研究所　26.3
(6 発表)「江戸時代の画絹と特殊な基底材」美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究 成果報告会　東京文化財研究所　25.7.29
(7 所属学会等) 美術史学会、和歌山地方史研究会
(8 教育) 成城大学文芸学部准教授、慶應義塾大学文学部非常勤講師

山田 綾乃 | YAMADA Ayano （アソシエイトフェロー）

(2 報告)「4. Preliminary Survey for the Restoration of the Cruciform Terrace in front of the Central Complex」(TOMODA Masahiko, ASADA Natsumi, YAMADA Ayano, MAO Sokny, SIM Dany, SOEUN Danet, PHONE Tara, SOM Sopharath, KIM Sothin)『Technical Cooperation Project for the Conservation and Sustainable Development of Ta Nei Temple, Angkor ― Progress Report of 2024 ―』　pp.35-50　APSARA National Authority and Tokyo National Research Institute for Cultural Properties　26.3
(2 報告)「クフ王第2の船　屈曲部材、端部が半円に加工された板材（追加）―実測調査報告 その7―」(柏木裕之、山田綾乃)『昌平エジプト考古学会紀要』12　pp.3-20　26.3
(2 報告)「クフ王第2の船　凹形支柱―実測調査報告 その8―」(山田綾乃、柏木裕之)『昌平エジプト考古学会紀要』12　pp.21-38　26.3
(2 報告)「クフ王第2の船　端部を凹曲面に加工した角材―実測調査報告 その9―」(柏木裕之、山田綾乃)『昌平エジプト考古学会紀要』12　pp.39-53　26.3
(5 学会発表)「Ship elements and construction techniques of the second boat of Khufu from the perspective of archaeological and architectural analysis」(Ayano Yamada, Hiromasa Kurokochi, Eissa Zidan, Mamduha Taha, Sakuji Yoshimura)　Abusir and Saqqara in the Year 2025　Charles University　25.6.22-6.26
(5 学会発表)「バハレーンにおけるイスラーム墓碑の3次元計測調査（第3次）」(長尾琢磨、山田綾乃、安倍雅史)　第30回日本西アジア考古学会　東海大学　25.6.25
(5 学会発表)「クフ王帰属の2隻の木造船の共通点・相違点の整理」(山田綾乃、柏木裕之)　日本オリエント学会第67回大会　龍谷大学　25.10.12
(5 学会発表)「3D Measurements of Historical Islamic Tombstones in Bahrain (2023-2025)」(長尾琢磨、山田綾乃、安倍雅史)　Seminar for Arabian Studies　Zayed National Museum　25.12.12
(6 講義)「エジプトの発掘調査と保存修復の一例」　東京藝術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻：修復計画論　東京藝術大学　25.5.15
(6 講義)「芸術の考古学」第11・12回講義　京都芸術大学芸術学部芸術教養センター　京都芸術大学（オンライン）　25.07.21
(6 講義)「古代エジプトの船大工」　月いち！オリ博オンライン講座（オンライン）　25.11.19
(6 司会)「考古学と国際貢献―エジプト考古学と国際協力の軌跡―」　東京文化財研究所　25.5.10
(6 司会)「地域社会と文化遺産―南イラク（シュメール）の未来像を考える―」　東京文化財研究所　25.11.24
(7 所属学会等) 日本オリエント学会、日本西アジア考古学会
(8 教育) 早稲田大学文化構想学部非常勤講師

山永 尚美 | YAMANAGA Naomi （アソシエイトフェロー）
(2 報告)「文化財情報の発信における課題と展望―修理記録アーカイブの構築―」(江村知子、小山田智寛、田良島哲、山永尚美)『月刊文化財』748　pp.8-12　26.1
(3 論文)「日本における政府映画の管理に関する研究―日米の制度と実践の比較分析を通して―」『学習院大学博士論文』　224p　25.7
(4 記事)「物故者　宮井陸郎、飯村隆彦、鈴木志郎康」『日本美術年鑑』令和5年度版　pp.110-111、123-124、128-129　東京文化財研究所　26.1
(4 記事)「望月桂の残した記録―文字から紐解く」『望月桂 自由を扶くひと 展覧会ZINE』　p. 45　望月桂調査団　25.4
(6 発表)「文化財（美術工芸品）の修理記録および修理記録データベースの公開について」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲)　令和7年度第1回文化財情報資料部研究会　東京文化財研究所　25.4.17
(6 発表)「(ポスター発表)文化財（美術工芸品）の修理記録データベースについて―「美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業」事業報告―」(山永尚美、小山田智寛、田良島哲、江村知子)　一般社団法人 国宝修理装潢師連盟 第29回定期研修会　京都府民総合交流プラザ 京都テルサ　25.10.3
(6 発表)「基準なき文化財修理記録のデータベース化を支えた Claris FileMaker の高い柔軟性」(小山田智寛、山永尚美、田良島哲、江村知子)　Claris カンファレンス 2025　虎ノ門ヒルズフォーラム　25.11.7
(6 発表)「修理記録データベースの拡充と利活用の課題」(田良島哲、山永尚美、小山田智寛)　2025年度美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業報告会　東京文化財研究所　26.2.6
(6 発表)「「望月桂関係資料」の受入れ・編成・公開に関する中間報告」(谷口英理、山永尚美)　令和7年度第8回文化財情報資料部研究会「作家資料はどう生き続けるか―美術アーカイブズの「残す」技術と「活かす」実践」　東京文化財研究所　26.2.17
(7 所属学会等) The Society of American Archivists、The Association of Moving Image Archivists、記録管理学会、デジタルアーカイブ学会、日本アーカイブズ学会
(8 教育) 学習院大学大学院非常勤講師

山梨 絵美子 | YAMANASHI Emiko （客員研究員）
(7 委員等) 秋田公立美術大学運営委員会委員、秋田市千秋美術館運営委員会委員、江戸東京博物館資料運営委員会委員、迎賓館の改修に関する懇談会委員、東京都美術館運営委員会委員、千葉県文化財保護審議会委員、日光市美術作品等収集審査会委員、文化庁文化審議会美術品補償制度部会委員、文化庁文化審議会文化財分科会委員、静岡県立美術館専門委員、新潟県立近代美術館収集委員会委員、横須賀市美術館美術品選定評議委員、日本博物館協会会長、全国美術館会議理事

由井 和子 | YUI Kazuko （アソシエイトフェロー）
(5 学会発表)「アンケート調査から見えた全国の博物館・美術館等の 温湿度管理の現状と課題」(秋山純子、伊庭千恵美、 水谷悦子、由井和子)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「博物館・美術館等のアンケート調査による 施設管理と改修の動向分析」(水谷悦子、伊庭千恵美、秋山純子、由井和子)　文化財保存修復学会第47回大会　富山国際会議場　25.6.15
(5 学会発表)「乾性油を用いた塗膜の加熱による変化について」(由井和子、秋山純子、犬塚将英、小谷竜介、高妻洋成)　日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.6
(5 学会発表)「災害時における保存箱の温湿度緩和効果の検証」(由井和子、水谷悦子、秋山純子、早川泰弘)　日本文化財科学会第42回大会　九州大学　25.7.6
(7 所属学会等) 日本文化財科学会

吉田 暁子 | YOSHIDA Akiko （文化財情報資料部）
(4 解説)「黒田清輝　舞妓」『國華』1561　pp.25-30　國華社　25.11
(4 記事)「「物故者」池田修、久野和洋、篠田太郎、松井守男、毛利眞美」『日本美術年鑑』令和5年版　pp.110-120-121、126、119-120、103-104　東京文化財研究所　26.1
(5 学会発表)「田添幸枝《力の体現》―東京勧業博覧会に落選した裸体画」　2025年度明治美術学会総会・研究発表　早稲田大学文学学術院　25.12.13
(6 講演)「黒田清輝の青春をたどるグレー・パリツアー」　東京国立博物館「黒田清輝ゆかりの地を巡るフランスツアー」説明会　黒田記念館　25.11.6
(7 所属学会等) 明治美術学会

米山 大三郎 | YONEYAMA Daizaburo （アソシエイトフェロー）
(3 論文)『近代日光におけるツーリズムによる文化遺産の再構成　―印刷メディアと空間メディアに着目して―』　352p　東京理科大学博士学位論文　26.3
(4 編集)『Report on the 2024 Symposium: Restoration of Notre-Dame de Paris and Philosophy of Monuments Conservation』　77p　Japan Consortium for International Cooperation in Cultural Heritage　26.3
(4 編集)『令和7年度文化遺産国際協力コンソーシアムシンポジウム 紛争からの復興と文化遺産　報告書』　65p　文化遺産国際協力コンソ ーシアム　26.3
(7 所属学会等) DOCOMOMO Japan 、ICOMOS、日本観光研究学会、日本建築学会
(7 委員等) 日本イコモス文化観光国内学術委員会(NSC-CT)委員 、日本イコモス若手専門家常置委員会 (EP) 委員 、ICOMOS International Cultural Tourism Committee（ICTC）Associate Member

5. 研究交流

1. 職員の海外渡航 …… 155
2. 招聘研究員等 …… 159
3. 海外研究者等の来訪 …… 160
4. 主要来訪者、施設見学 …… 160

1．職員の海外渡航

氏 名	渡航先	期 間	目 的	経 費
秋山 純子 紀 芝蓮	イタリア	R7.5.4～5.12	2025年開催のTECHNART国際学会での発表と参加	科研費 ホ03
友田 正彦	ブータン	R7.5.13～5.24	ブータン、ネパールにおける民家保存活用に関する調査	科研費
淺田 なつみ	ブータン、ネパール	R7.5.13～6.1		科研費、コ02
後藤 亮子	中国	R7.5.22～6.29	科研調査研究	科研費
加藤 雅人 武 瀟瀟	ドイツ	R7.5.26～5.30	作品調査	コ04
黒岩 千尋	カンボジア、ベトナム	R7.6.1～7.5	アンコール・タネイ寺院遺跡保全整備、フランス植民地時代の遺跡保護の史料調査	コ02、助成金（村田学術振興・教育財団）
友田 正彦	カンボジア	R7.6.8～6.22	アンコール・タネイ寺院遺跡保全整備	コ02
二神 葉子 倉島 玲央 佐藤 嘉則 島田 潤	タイ	R7.6.8～6.12	ワット・ラーチャプラディット漆扉部材の保存に関する調査	シ05（繰越） ホ05（1） 受託（ワット・ラーチャプラディット）
山田 綾乃	チェコ	R7.6.21～6.29	学会発表 （Abusir and Saqqara in the Year 2025）	科研費
前川 佳文	トルコ	R7.6.21～7.15	壁画の保存修復に係る共同研究	コ03
橘川 英規 田代 裕一朗	韓国	R7.6.23～6.26	韓国における美術アーカイブの現況調査	シ01
金井 健	フランス	R7.7.3～7.12	第47回世界遺産委員会への出席	コ01
二神 葉子		R7.7.6～7.17		シ05
金子 雄太郎		R7.7.5～7.16		先方負担（文化庁）
小林 公治	タイ	R7.7.14～7.23	タイ国内作品調査	科研費
吉田 暁子	フランス	R7.8.12～8.17	東博賛助会会員ツアー下見	先方負担（文化財活用センター）
田代 裕一朗	韓国	R7.8.19～8.23	作品調査（新安海底遺物の実見ほか）	科研費
石村 智	ニュージーランド	R7.8.25～8.31	マオリ文化の調査	科研費
犬塚 将英	韓国	R7.8.28～8.30	国際シンポジウムにおける研究発表及び関連専門討議への参加	先方負担 （韓国伝統文化大学校）
小林 公治	フランス、ベルギー、ドイツ、ポーランド	R7.8.28～9.15	フランス、ベルギー、ドイツ、ポーランドにおける調査・協議	科研費
犬塚 将英	台湾	R7.9.2～9.4	国立故宮博物院100周年記念における研究発表及び関連専門討議への参加	先方負担 （国立故宮博物院）
山田 綾乃	エジプト	R7.9.5～10.1	クフ王第２の船遺跡部材実測調査ほか	科研費
水谷 悦子	フランス	R7.9.6～9.15	Stone2025出席	先方負担（京都大学）
玉川 みほの	タイ	R7.9.7～9.10	ワット・ラーチャプラディット漆扉部材復元に関する調査	先方負担（ワット・ラーチャプラディット）
二神 葉子	タイ	R7.9.7～9.13	タイ所在日本製漆工品に関する調査研究	シ05（繰越）
前川 佳文	イタリア	R7.9.8～9.26	スタッコ装飾に係る共同研究	コ03
石村 智	韓国	R7.9.16～9.19	国際会議出席	先方負担（大韓民国国家遺産庁・ICHCAP）
水谷 悦子	アメリカ	R7.9.23～9.28	保存環境管理に関する研究交流	先方負担（京都大学）
鎌田 紗弓	アメリカ	R7.10.10～10.16	国際学術会議 AAWM special Topics Symposium2025 参加・発表	ム01（1）

氏 名	渡航先	期 間	目 的	経 費
安倍 雅史 長尾 琢磨	クウェート	R7.10.10〜10.17	遺跡のUAV測量ワークショップ	受託(文化庁 拠点 バーレーン)
小野 真由美	イタリア	R7.10.11〜10.17	ローマにおける調査	科研費
吉田 暁子	イタリア	R7.10.11〜10.18	ローマ・フィレンツェにおける調査	シ02
前原 恵美	韓国	R7.10.11〜10.25	伝統芸能の普及・後継者育成事業調査	ム05
淺田 なつみ	ネパール、 バーレーン、 サウジアラビア	R7.10.11〜11.6	ネパール民家調査、国際会議参加、３次元計測ワークショップ	コ02、受託(文化庁 拠点 バーレーン)
加藤 雅人	アルメニア	R7.10.12〜10.19	国際集会参加	コ05、先方負担(マテナダラン)
五嶋 千雪	モロッコ	R7.10.12〜10.28	国際協力調査	受託(文化庁 コンソーシアム)
山永 尚美	英国、スペイン	R7.10.20〜10.31	行政映画とその関係資料の管理に関する研究	科研費
小林 公治	中国	R7.10.25〜11.1	展示調査、シンポジウム参加ほか	科研費
安倍 雅史	バーレーン、 サウジアラビア	R7.10.25〜11.6	3次元計測ワークショップおよび研究集会への出席	受託(文化庁 拠点 バーレーン)
武　瀟瀟	韓国	R7.10.28〜11.2	東アジア日本研究者協議会2025パネル司会及び作品調査	先方負担(渥美国際交流財団)、科研費
前川 佳文	クロアチア、 イタリア	R7.10.31〜11.14	イストリア半島(クロアチア)における壁画の調査	コ03
長尾 琢磨	サウジアラビア	R7.10.31〜11.6	３次元計測ワークショップ	受託(文化庁 拠点 バーレーン)
久保田 裕道	韓国	R7.11.6〜11.8	密陽市無形遺産国際会議	先方負担((社)文化遺産創意空間)
千葉　毅	カタール、アラブ首長国連邦	R7.11.8〜11.17	カタール国立博物館意見交換及びICOM2025参加	ム05、先方負担(文化財防災センター)
加藤 雅人 副島 まどか	メキシコ	R7.11.10〜11.20	国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」の開催	コ05
友田 正彦	カンボジア	R7.11.15〜11.29	アンコール・タネイ寺院遺跡の保全整備	コ02、副所長研究経費
齊藤 孝正	韓国	R7.11.16〜11.22	韓国・ソウル国立中央博物館ほか陶磁器調査	所長研究費(繰越)
黒岩 千尋	カンボジア	R7.11.24〜12.4	アンコール・タネイ寺院遺跡の保全整備	コ02
小野 真由美	台湾	R7.11.26〜11.28	研究協議	シ02
千葉　毅 秋山 花子	韓国	R7.11.27〜11.29	韓国文化遺産保存科学会での研究発表	ホ06
田代 裕一朗	英国、ドイツ、 フランス	R7.11.30〜12.11	セインズベリー日本藝術研究所との交流事業(講演、協議)、調査	シ01、科研費
吉田 暁子	英国	R7.12.1〜12.9	セインズベリー日本藝術研究所との交流事業(講演随行、協議)	シ01
淺田 なつみ	サウジアラビア	R7.12.7〜12.12	Digital Heritage Conferenceへの参加・発表	先方負担(ザイード国立博物館)、コ02
長尾 琢磨	アラブ首長国連邦、 サウジアラビア	R7.12.7〜12.15	Digital Heritage Conferenceへの参加・発表、Seminar for Arabian Studiesへの参加・発表	先方負担(ザイード国立博物館)、コ02
石村　智 二神 葉子	インド	R7.12.7〜12.15	ユネスコ政府間委員会への参加	ム05
武　瀟瀟	台湾	R7.12.8〜12.13	作品調査	科研費
久保田 裕道	インド	R7.12.9〜12.14	無形文化遺産保護政府間委員会	先方負担(文化庁)
安倍 雅史	アラブ首長国連邦	R7.12.10〜12.16	Seminar for Arabian Studiesへの参加・発表	先方負担(ザイード国立博物館)、科研費

氏　名	渡航先	期　間	目　　的	経　　費
芳賀 文絵 島田　潤 趙　依寧 水谷 悦子	中国	R7.12.10〜12.19 R7.12.13〜12.19	中国における壁画の調査及び交流会	受託(文化庁 高松塚)
犬塚 将英	韓国	R7.12.17〜12.19	韓国国立古宮博物館・国立文化遺産研究院における特別講演	受託(文化庁 高松塚)、先方負担(国立古宮博物館)
安倍 雅史	バーレーン	R8.1.7〜2.14	アアリ古墳群西発掘調査など	科研費、コ02
淺田 なつみ	カンボジア	R8.1.12〜1.24	アンコール・タネイ寺院遺跡の保全整備	コ01、助成金(KDDI)
石村　智	パラオ	R8.1.18〜1.23	パラオにおける水中文化遺産の調査	科研費
黒﨑 夏央	ベトナム	R8.1.19〜1.23	歴史研究に係る調査	助成金(鹿島財団)
今石 みぎわ	アメリカ	R8.1.19〜1.23	シンポジウム登壇、資料調査	先方負担(カリフォルニア大学)
黒岩 千尋	カンボジア	R8.1.19〜2.8	アンコール・タネイ寺院遺跡の保全整備、フランス植民地時代の遺跡保護の史料調査	コ02、科研費
柴田 みな 山田 綾乃	カンボジア	R8.1.19〜1.24 R8.1.21〜2.4	アンコール・タネイ寺院遺跡の保全整備	コ02
長尾 琢磨	バーレーン	R8.1.22〜2.14	アアリ古墳群西発掘調査、三次元計測	科研費、コ02
田代 裕一朗	韓国	R8.1.26〜1.30	戦前期朝鮮人美術留学生に関する資料調査(1次)	科研費
小林 公治	アイルランド、英国、エジプト、アラブ首長国連邦	R8.2.4〜2.24	アイルランド、英国、エジプト、アブダビにおける調査・協議	科研費
犬塚 将英 千葉　毅	トルコ	R8.2.10〜2.15	文化財防災シンポジウムへの出席及び被災地巡検、意見交換	先方負担(文化財防災センター)
武　瀟瀟	アメリカ	R8.2.17〜2.22	作品調査	助成金(メトロポリタン)、コ04
田代 裕一朗	韓国	R8.2.20〜2.26	朝鮮古代中世史に関連する遺跡・寺院の調査	科研費
松浦 一之介	イタリア	R8.2.21〜3.1	イタリア文化遺産保護視察に係る支援	先方負担(奈良文化財研究所)
黒﨑 夏央	中国	R8.2.24〜2.28	彫刻史研究に係る調査	助成金(鹿島財団)
前川 佳文	イタリア	R8.2.24〜3.13	塑像及び壁画に関する調査研究・打ち合わせ	コ03
田代 裕一朗	台湾	R8.3.5〜3.7	『美術研究』海外編集委員との研究協議、調査	シ07
久保田 裕道	ブータン	R8.3.9〜3.17	無形文化遺産調査	ム02
加藤 雅人	メキシコ	R8.3.10〜3.13	調査及び会議	コ04
境野 飛鳥	カナダ	R8.3.11〜3.16	国際会議にて科研費による研究発表	科研費
田代 裕一朗	韓国	R8.3.23〜3.27	戦前期朝鮮人美術留学生に関する史料調査(2次)	科研費

令和７年度における国内から国外への派遣申請については、下記のとおりである。

派遣期間	氏　名	所　属	用務地	経　費
派遣理由：ブータンにおける民家保存活用に関する調査				
R7.5.13～5.27	向井 純子	NPO法人 ArchiHeritage plus	ブータン	科研費
派遣理由：作品調査				
R7.5.25～5.30	元　喜載	東北芸術工科大学　文化財保存修復研究センター	ドイツ	コ04
派遣理由：ワット・ラーチャプラディット漆扉部材の保存に関する調査				
R7.6.8～6.12	藤井 義久	東京文化財研究所	タイ	シ05（繰越）
派遣理由：遺跡のUAV測量ワークショップ				
R7.10.10～10.17	渡部 展也	中部大学	クウェート	受託（文化庁 拠点 バーレーン）
派遣理由：ローマ・ミラノにおける調査				
R7.10.11～10.18	田中 知佐子	鶴見大学文学部文化財学科	イタリア	シ02、科研費
派遣理由：国際協力調査				
R7.10.13～10.28	深見 奈緒子 飯田　卓 Aqil Cheddadi	国士館大学イラク古代文化研究所 国立民族学博物館 慶應義塾大学総合政策学部	モロッコ	受託（文化庁 コンソーシアム）
派遣理由：３次元計測ワークショップ講師				
R7.10.25～11.6	中村 良介 野口　淳 藤原　龍 白石 淳二 高田 祐一	国立研究開発法人産業技術総合研究所 公立小松大学次世代考古学研究センター ㈱ホロラボ ㈱Niantic Spatial 奈良文化財研究所	バーレーン、サウジアラビア	受託（文化庁 拠点 バーレーン）
R7.10.31～11.6	Dudko Anastasiia	奈良文化財研究所	サウジアラビア	
派遣理由：国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」講師				
R7.11.10～11.18	杉山 恵助	東北芸術工科大学芸術学部	メキシコ	コ05
R7.11.10～11.20	四本 広樹	一般社団法人 国宝修理装潢師連盟／㈱修美		
派遣理由：アアリ古墳群西発掘調査				
R8.1.15～1.31	鈴木崇司	慶北大学校	バーレーン	科研費
R8.1.17～1.31	神野 健太	慶應義塾大学		
R8.2.10～2.14	河野 一隆	東京国立博物館		

令和７年度における国外から国外への派遣申請については、下記のとおりである。

派遣期間	氏　名	所　属	用務地	経　費
派遣理由：壁画の保存修復に係る共同研究				
R7.6.22～7.14 R7.6.30～7.14	Daniela Maria MURPHY Simona CARECCIA	フィレンツェ・バスティオーニ協会	トルコ	コ03
派遣理由：国際協力調査				
R7.10.13～10.24	Ahmed Oumouss Ahmed Skounti	国立考古学・文化遺産科学研究所（INSAP）	モロッコ	受託（文化庁 コンソーシアム）
派遣理由：中国における壁画の調査及び交流会				
R7.12.11～12.17	馬　明新	中国国家博物館	中国	受託（文化庁 キトラ）

2．招聘研究員等

令和７年度における海外からの招聘は下記のとおりである。

招聘期間	氏　名	国　籍	所　属	経　費
招聘理由：「バーレーンの歴史と文化」での講演				
R7.4.17〜4.23	Salman Almahari	バーレーン	バーレーン文化古物局	科研費
招聘理由：「考古学と国際貢献―エジプト考古学と国際協力の軌跡―」での講演・視察				
R7.5.6〜5.13	Miroslav Bárta	チェコ	カレル大学	コ02（繰越）
R7.5.9〜5.15	Hisham Elleithy	エジプト	エジプト観光考古省考古最高評議会考古保存記録部門	
招聘理由：研究協力協議・文化財情報資料部研究会での研究発表				
R7.5.17〜5.22	Tim Tianning Zhang	アメリカ	メトロポリタン美術館アジア美術部	シ02
招聘理由：文化庁・令和７年度文化遺産国際協力拠点交流事業 「スーダンの文化遺産専門家等の能力強化ワークショップ事業」				
R7.8.10〜8.18	Intisar Soghayroun	スーダン	アラブ連合教育文化科学機関（カイロ）・アラブ文献研究所	受託（文化庁 拠点 スーダン）
R7.8.11〜8.18	Ikhlas Alyas		スーダン国立博物館	
	Ezeldin Musa Babiker Abdalla		スーダン共和国ユネスコ代表部	
R7.8.11〜8.17	Julie Anderson	英国	大英博物館スーダン・ヌビア部門	
招聘理由：国際研修「紙の保存と修復」				
R7.8.22〜9.14	Diana SAARVA	アルゼンチン	パレ・ド・グラース	コ05
	Fatma ASLANOGLU	英国	大英図書館	
	Roger Shaw WILLIAMS JR	アメリカ	ブラウン大学図書館及びジョン・カーター・ブラウン図書館	
	Gabriela ROSAS	カナダ	オタワ大学 カナダ・フランス語圏研究センター	
	Paulina KRALKA	ポーランド	ムハンマド・ビン・ラシード図書館/ EXPM ワールドサービス	
R7.8.23〜9.14	Laura KHAINDRAVA	ロシア	プラハ国立ギャラリー	
	Adam MACKLIN	アイルランド	アイルランド国立公文書館	
R7.8.24〜9.13	Enrico BIASON	イタリア	国立文書・図書保存修復中央研究所	
	Afiqah MUSTAFA	マレーシア	マレーシア・イスラム芸術博物館	
R7.8.24〜9.14	Nurul Isabella ZACHRI	オーストラリア	メルボルン大学グリムウェード保存修復サービス	
招聘理由：近代組積造建造物の保存修復技法に関する調査				
R7.9.5	ソン・チャンヒョク リュ・スミン ハン・ドンワン クァク・リーラ	韓国	国立文化遺産研究院建築遺産課	先方負担（国立文化遺産研究院）
招聘理由：文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会登壇				
R7.9.10〜9.15	杜 暁帆	中国	復旦大学文物与博物館学系	受託（文化庁 コンソーシアム）
R7.9.13〜9.15	パク・ヒョンビン	韓国	国家遺産庁遺産政策局国外遺産協力課	
	ベク・ヒョンミン		国家遺産庁革新行政担当官室	先方負担
招聘理由：「地域社会と文化遺産」での講演・視察				
R7.11.21〜12.2	Amer Atiyah	イラク	ズィー・カール県考古・文化遺産局	コ02
	Widad Abushakhyrh		ナーシリーヤ博物館	
R7.11.21〜12.1	Imad Ibrahim Dawood		マザヤ私立大学	先方負担（メソポタミア考古学教育研究所）

招聘期間	氏　名	国　籍	所　属	経　費
招聘理由：文化遺産国際協力コンソーシアム研究会令和7年度シンポジウム登壇				
R7.11.23〜12.1	星野 俊也	スイス	国連システム合同監査団	受託（文化庁 コンソーシアム）
招聘理由：文化庁令和7年度緊急的文化遺産保護国際貢献事業（専門家交流）事業 「スーダンの被災博物館の保存・修復方針の策定に係る事業」				
R8.2.22〜3.1 R8.2.22〜3.2	Khalid Fathalrahman Shadia Abdrabo Abdelwahab Abdalla Abdelrahman Ali Mohamed Elnzeer Tirab Abaker Haroun	スーダン	イセスコ文明対話センター スーダン国立博物館 ユネスコ・ハルツーム文化部門 スーダン国立民族学博物館	受託（文化庁 緊急 スーダン）

3．海外研究者等の来訪

（1）来訪研究員

来訪期間	氏　名	国　籍	所　属	研究内容等
R7.4.1〜8.31	呉 景欣	アメリカ	Rutgers University-Camden	「南」を視覚化する：近代日本美術における台湾のイメージ
R7.7.14〜8.1	曺 善映	韓国	大韓民国国家遺産庁無形遺産局	日本の伝統的酒造りに関する研究
R7.9.22〜12.19	崔 淑慶	韓国	大韓民国国家遺産庁無形遺産局	国立劇場おきなわにおける無形文化遺産の保存伝承に関する研究

4．主要来訪者、施設見学

日　程	来訪者及び視察者等	内　容
R7.5.21	東京建築祭2025ガイドツアー 【東京文化財研究所】建築から読み解く、文化財保存の舞台裏　60名	施設見学
R7.5.30	ベトナム遺跡保存研究所　8名	表敬訪問
R7.6.10	中国・吉林省宣伝部代表団　9名	表敬訪問
R7.7.14	東京都立多摩科学技術高等学校 5名	施設見学
R7.7.25	ラオス国立博物館館長（国際交流基金「文化人短期招へい」プログラム）	表敬訪問
R7.8.25	国立台湾美術館館長　ほか3名	表敬訪問
R7.9.16	昭和女子大学　歴史文化学科 7名	施設見学
R7.9.18	韓国国立文化遺産研究院　修復技術課 5名	研究交流
R7.9.25	青山学院大学　文学部比較芸術学科 10名	施設見学
R7.9.29	アラブ首長国連邦・エミレーツ財団代表団	表敬訪問
R7.10.9	オランダ文化遺産庁　レムコ・フェルメーレン氏	研究交流
R7.10.16	共立女子大学　文芸学部 16名	施設見学
R7.11.28	シリア古物博物館総局（DGAM）総裁　ほか4名	表敬訪問
R7.12.17	横浜サイエンスフロンティア高等学校 23名	施設見学
R8.2.2	公益財団法人文化財建造物保存技術協会　13名	施設見学
R8.2.4	シンガポール国立図書館庁　7名	施設見学
R8.2.18	ベタニー・ヒューズ氏（外務省 ソーシャル・メディア発信者招へい事業）	施設見学

1．主な収蔵資料 …… 162
1．図書資料 …… 162
2．その他の資料 …… 162

2．研究所関係資料 …… 163
1．設立の経緯 …… 163
2．年代別重要事項 …… 163
3．歴代所長（昭和５年～令和 7年度） …… 166
4．名誉研究員 …… 167
5．2025（令和 7）年度予算等 …… 168

3．東京文化財研究所関係事業索引 …… 172

1．主な収蔵資料

1．図書資料

(1)　**美術関係図書**

日本・東洋・欧米の美術に関するものを中心に、各地方公共団体刊行の文化財関係調査報告書、展覧会の図録・目録類、売立目録など和文欧文あわせて190,140冊の図書に加え、和文5,504種、韓文54種、中文153種、欧文508種におよぶ美術関係雑誌182,128冊を所蔵している。

その他江戸期の写本版本をはじめ、明治大正期刊行の大型美術図録や美術雑誌、また明治から昭和初期に開催された各種博覧会展覧会資料など、多くの貴重書を所蔵している。

(2)　**無形文化遺産関係図書**

古典芸能・民俗芸能・寺事・伝統的な技術、その他我が国の無形文化遺産の研究に必要な図書22,191冊を所蔵している。そのなかには、演劇画報・歌舞伎新報・歌舞伎（第１次）・テアトロ（第１次）・新劇・上方・民俗芸能・日本民俗・芸能復興・郷土研究・旅と伝説など現在では入手しにくい雑誌、国立劇場ほかで行われる芸能公演の上演資料や声明本・謡本・囃子手付本・丸本などの台本・譜本など、多くの貴重書を含んでいる。令和７年度は912冊を登録し、現在進行中である。

(3)　**保存科学・修復技術関係図書**

伝統的生産及び工芸技術書、技術史またはそれらの科学的究明を試みたもの、修理工事報告書及び化学・物理学・生物学部門の保存科学の関連和洋書、あわせて33、028冊を所蔵している。

(4)　**日本国外の文化遺産関係図書**

国際資料室では、海外の文化遺産や文化財保存、文化財国際協力や文化財保護制度に関する国内外の図書資料を約15,000点所蔵する。また、文化財保護関連機関のパンフレットなど図書以外の文献資料の収集、さらに国内外の文化財保護関連法令資料の収集を実施している。

令和７年度における収集数（韓文・中文図書は、和漢書として計上）

区　分	美 術 関 係	無形文化遺産関係	保存修復関係	日本国外の文化遺産関係	計
和漢書	4,076冊	893冊	535冊	44冊	5,548冊
洋　書	159冊	19冊	15冊	16冊	209冊
合　計	4,235冊	912冊	550冊	60冊	5,757冊

2．その他の資料

(1)　美術関係資料：文化財情報資料部が管理している写真資料は、絵画・彫刻・工芸・建築等の台紙貼写真、売立目録カードなど総数約26万点である。写真原板は、モノクロ4×5フィルム約49,740点、カラー4×5フィルム約8,980点、半切ほかガラス乾板約22,600点をはじめとして、各種サイズのモノクロフィルム約3,450点、X線フィルム・赤外線フィルム約3,300点などを所蔵している。また、当研究所旧職員梅津次郎、秋山光和、田中一松、久野健、中村傳三郎、松島健各氏寄贈研究資料の公開に向けた整理のほか、鈴木敬氏旧蔵写真資料の整理を行っている。このほか、拓本類、作家伝記資料、落款印章資料、近現代作家・団体・画廊・作品資料、資料スクラップ等と図版カード、各種索引類などを管理している。

(2)　無形文化遺産関係資料：無形文化遺産部では、雅楽・能・歌舞伎・邦楽・寺院行事・民俗芸能その他の伝統芸能の技法を、録音・録画、写真撮影等の形で記録することを重要な業務としてきた。これまでに、現地での実況や所内の実演記録室等での演奏を記録したオープンリールテープ約2,300点、ビデオ約1,200点、スチル写真は関連する文書の記録写真等も含め約19万点、CDはオープンリールテープをデジタル化した物を中心に1,988点、DVD4,019点、BD1,022点を作成してきた。令和７年度は、DVD21点を登録した。また、市販された伝統芸能関係の資料の収集も進めている。ことに、1960（昭和35）年度文部省機関研究費によって購入した安原コレクションは、明治・大正・昭和３代にわたって発売された各種邦楽のSPレコードを網羅した約6,000枚の一大コレクションで、近代における邦楽の実態と変遷を知る上で貴重な資料である。レコードの収集枚数は現在約7,300枚に及んでいる。その他これまでに、市販のビデオ530点、CD2,105点、DVD1,756点、BD39点を収集してきた。うち令和７年度は、市販のCD19点、DVD27点を登録した。なおSPレコードコレクションの詳細は『音盤目録Ⅰ～Ⅴ』（東京国立文化財研究所刊1966～1996）で公表している。さらに無形文化遺産関連情報を掲載した「無形文化遺産総合データベース」をウェブサイトにて公開している。
（https://www.tobunken.go.jp/ich/mukei_database/）

(3)　保存科学・修復技術関係資料：保存科学研究センターでは、考古遺物や美術工芸品など、諸部門の文化財を撮影したX線フィルムを多数所蔵する。X線透過撮影は昭和20年代から力を注いで行っており、近年それらのデータをデジタル化し、整理する作業を進めている。

(4)　国際関係資料：文化遺産国際協力センターでは、日本の文化財保護に関する国際協力の分野で活躍した専門家の資料を受け入れている。関野克氏旧蔵資料には、国際機関での会議や、個別の文化遺産保存に関わる記録が含まれている。特に、UNESCOの条約や勧告に関わる資料には、草案や日本政府の意見書なども含まれ、その成立の経緯や日本政府の関与なども知ることができる。伊藤延男氏旧蔵資料は、戦後の文化財保護行政に関する諸資料のほか、関野克氏の後継者として関わった国際機関の会議等の資料が多く含まれており、関野克氏旧蔵資料と併せて戦後の文化財保護行政における国際関係の動向を知りうる幅広い資料群となっている。また、千原大五郎氏旧蔵資料には、ボロブドゥール修復事業関連の会議録、書簡類、修復案、図面、オランダ統治時代の研究書や、その他の東南アジア諸国の遺跡に関する文献や図面、写真も数多く含まれる。さらに、野口英雄氏が収集した、文化財の危機管理やユネスコ日本信託基金による保存修復事業などに関する資料を受け入れている。

2．研究所関係資料

1．設立の経緯

東京文化財研究所は、2001（平成13）年4月1日に東京国立文化財研究所が独立行政法人化され独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となり、さらに2007（平成19）年4月1日に独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、現在に至っている。その前身である東京国立文化財研究所は、1952（昭和27）年4月1日に発足し、その母体となったものは、1930（昭和5）年に創設された政府機関の帝国美術院附属美術研究所である。

この美術研究所は、1924（大正13）年7月、帝国美術院長子爵故黒田清輝の遺言により美術奨励事業のために寄附出捐した資金で遺言執行人が選択決定した事業である。すなわち遺言執行人代表伯爵樺山愛輔は、故子爵の遺志にしたがってこの資金で行うべき事業の選択を伯爵牧野伸顕に一任した。牧野伯爵は帝国美術院長福原鐐二郎及び東京美術学校長正木直彦とはかって諸方面の意見を徴し、またわが国美術研究の必要に照らして次の事業を行うこととした。

⑴　美術に関する基礎的調査研究機関として美術研究所を設けること。
⑵　黒田子爵の作品を陳列して同子爵の功績を記念すること。
⑶　前二項の目的を達するために適当な建物を造営すること。
⑷　事業成立の上は一切これを政府に寄附すること。

2．年代別重要事項

期　日	事　項
昭和元年12月25日	前記の事業を遂行するため委員会が組織され、東京美術学校長正木直彦が委員長に就任し、美術研究所事業については東京美術学校教授矢代幸雄、黒田子爵作品陳列については東京美術学校教授久米桂一郎・同岡田三郎助・同和田英作・同藤島武二及び大給近清、建物造営については東京美術学校教授岡田信一郎、会計事務については遺言執行人打田伝吉を各委員として事務を分掌進行させた。
昭和2年2月1日	美術研究所準備事業を開始した。
10月28日	東京市上野公園内に鉄筋コンクリート造、半地階2階建、延面積1,192㎡の建物1棟を起工した（本館）。
昭和3年9月	前記の建物が竣工したので、黒田記念館と名付け、美術研究所開設のため必要な備品・図書・写真等の研究資料を設備し、また館内に黒田子爵記念室を設け、黒田清輝の作品を陳列した。
昭和3年5月29日	遺言執行人代表者樺山愛輔は、建物・設備・研究資料等一切の外に金15万円をそえて帝国美術院長に寄附を願い出た。
昭和5年6月28日	勅令第125号により帝国美術院に附属美術研究所が置かれ、東京美術学校長正木直彦が同研究所の主事に補せられた。
10月17日	美術研究所開所式を挙行した。

期　日	事　項
昭和 7 年 1 月 1 日	美術研究所の研究成果発表機関誌として、定期刊行物『美術研究』を創刊した。
4 月18日	株式会社朝日新聞社より明治大正美術史編纂費として本年から向う５か年間毎年５千円、合計２万５千円を帝国美術院に寄附したいとの申出があった。
5 月26日	帝国美術院はこの申出を受理した。 明治大正美術史編纂委員会規程を設け、美術研究所は明治大正美術史の編纂に関する事務を行うことになった。
昭和 9 年10月18日	毎年10月18日を開所記念日と定めた。
昭和10年 1 月28日	鉄筋コンクリート造、２階建、延面積129㎡の書庫が竣工した。
昭和10年 4 月	『日本美術年鑑』の編纂事務を開始した。
6 月 1 日	勅令第148号により美術研究所官制が公布された。 研究資料閲覧規程を制定し、閲覧事務を開始した。
昭和12年 6 月24日	勅令第281号により美術研究所官制中改正の件が公布され、従来、帝国美術院に附置されていたのを文部大臣の直轄に改められた。
11月29日	美術研究所長職務規程、美術研究所事務分掌規程が制定された。
昭和13年 2 月12日	木造、平屋建、延面積97㎡の写真室１棟が竣工した。
昭和19年 8 月10日	黒田清輝の作品、並びに写真原版を東京都西多摩郡小宮村谷間家倉庫に疎開した。
昭和20年 5 月28日	美術研究所の図書・諸資料全部を山形県酒田市本町１丁目本間家倉庫３棟に疎開した。
7～8月	酒田市本間家倉庫に疎開した図書資料を爆撃の危険を避けるため、さらに酒田市外牧曽根村松沢世喜雄家倉庫・観音寺村村上家倉庫・大沢村後藤作之丞家倉庫にそれぞれ分散疎開した。
昭和21年 3 月29日	酒田市疎開中の図書・諸資料等の東京向け発送を終了した。
4 月 4 日	酒田市疎開中の図書・諸資料等が東京に到着し、引揚げを完了した。
4 月16日	東京都西多摩郡に疎開中の黒田清輝作品並びに写真原版の引揚げを完了した。
昭和22年 5 月 3 日	美術研究所官制が廃止され、国立博物館官制が制定された。美術研究所は同館の附属美術研究所となった。 国立博物館に保存修理課発足。同課内に保存技術研究室を置いた（保存科学部の前身）。昭和23年度より専任の職員を配置し、研究を開始した。研究室は国立博物館本館地下の修理室の一室（66㎡）に設けた。
昭和25年 8 月29日	文化財保護法の制定にともない、美術研究所は文化財保護委員会の附属機関となった。 文化財保護委員会事務局設置にともない、保存科学研究室は国立博物館保存修理課から文化財保護委員会事務局保存部建造物課に所属換えとなった。
昭和26年 1 月31日	美術研究所組織規程が定められ、第一研究部・第二研究部・資料部・庶務室が置かれた。
昭和27年 4 月 1 日	文化財保護法の一部が改正、東京文化財研究所組織規程が定められ、美術部・芸能部・保存科学部・庶務室の３部１室が置かれ、美術研究所組織規程が廃止された。 また文化財保護委員会事務局保存部建造物課保存科学研究室も廃止された。
7 月 1 日	芸能部研究室として東京藝術大学音楽学部邦楽科教室２室を同大学から借用し、研究を開始した。
昭和28年 4 月26日	保存科学部研究室として、東京国立博物館構内の倉庫132㎡を改造のうえ移転した。
昭和29年 7 月 1 日	東京文化財研究所組織規程の一部が改正され、東京国立文化財研究所となった。
昭和32年 3 月22日	東京国立博物館構内に木造、外部鉄網モルタル塗、平屋建、８㎡の保存科学部の薬品庫が竣工した。
11月30日	従来の２階建書庫の上にさらに１階を増築３階建とし、増築分延面積71㎡が竣工した。
昭和34年 4 月30日	東京国立文化財研究所研究受託規程が定められ、この年度から受託研究が開始された。
昭和36年 9 月16日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、従来の庶務室は庶務課となった。
昭和37年 3 月31日	東京国立博物館内に保存科学部庁舎（保存科学部実験室）として、鉄筋コンクリート造、２階建、延面積663㎡の建物１棟が竣工した。
7 月 1 日	東京国立文化財研究所組織規程の一部が改正され、新たに保存科学部に修理技術研究室が置かれた。
7 月20日	芸能部研究室は、保存科学部庁舎の竣工にともない、旧保存科学部庁舎に移転した。
昭和43年 6 月15日	文部省設置法の一部が改正され、本研究所は文化庁附属機関となった。
昭和44年 8 月23日	保存科学部庁舎に隣接して新営される別館庁舎（延1,950.41㎡）の起工式が行われた。
昭和45年 3 月25日	前記の別館が竣工したので、同年５月26日竣工式が行われた。芸能部は、別館３階に移転した。

期　日	事　項
昭和45年 5 月 8 日	保存科学部は別館の地階～２階に実験用機械類の移転据付を完了した。
6 月29日	保存科学部庁舎の１階の模様替工事に着手し、同年10月15日工事が完了した。
11月 2 日	所長及び庶務課は、本館から保存科学部庁舎の１階に移転した（本館は、美術部庁舎となる）。これにより研究所の所在地表示は「12番53号」から「13番27号」に変更された。
昭和46年 4 月 1 日	保存科学部庁舎及び別館の敷地2,658㎡を東京国立博物館から所管換えされた。
昭和48年 4 月12日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部が設けられ４部１課となり、修復技術部に第一修復技術研究室及び第二修復技術研究室が置かれ、保存科学部修理技術研究室は廃止された。
昭和52年 4 月18日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、情報資料部の新設により５部１課となり、情報資料部に文献資料研究室及び写真資料研究室が置かれ、美術部資料室は廃止された。
昭和53年 3 月20日	本館構内の写場等（木造、平屋建、延面積144㎡）を取りこわし、情報資料部研究棟として、鉄筋コンクリート造、地下１階、地上３階、延面積569. 95㎡の建物が竣工した。
4 月 5 日	文部省設置法施行規則の一部が改正され、新たに修復技術部に第三修復技術研究室が置かれた。
昭和59年 6 月28日	文部省組織令が改正され、本研究所は文化庁施設等機関となった。
平成 3 年10月 1 日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、新たにアジア文化財保存研究室が置かれ、５部１室１課となった。
平成 5 年 4 月 1 日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、アジア文化財保存研究室は、国際文化財保存修復協力室となった。
平成 7 年 4 月 1 日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力室が廃止され、新たに国際文化財保存修復協力センターが設置された。同センターには、企画室及び環境解析研究指導室が置かれ、１センター５部１課となった。 東京藝術大学と「東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻の教育研究に対する連携・協力に関する協定書」が交わされ、連携併任分野として独立専攻大学院文化財保存学専攻（システム保存学）が設置された。
平成 9 年10月 1 日	文部省設置法施行規則の一部が改正されて、国際文化財保存修復協力センターに保存計画研究指導室が置かれた。
平成12年 2 月 4 日	新営庁舎として、鉄筋コンクリート造、地上４階地下１階、延面積10,557. 99㎡（建築面積2,258. 48㎡）が竣工した。
2 月21日	新営庁舎の竣工にともない、別館（庶務課・芸能部・保存科学部・修復技術部・国際文化財保存修復協力センター）部分の移転が開始された。
3 月 6 日	新営庁舎の竣工にともない、本館（美術部・情報資料部）の移転が開始された。
3 月22日	建設省関東地方建設局営繕部より、新営庁舎の外構工事、植栽等の引き渡しを受け、新営庁舎関係の工事が完了した。
5 月11日	新営庁舎の竣工を記念し、開所記念式典を挙行した。 この式典の挙行に際し、毎年５月11日を開所記念日と定めた。
平成13年 3 月29日	黒田記念館改修工事が竣工し、展示スペースが黒田記念室及び展示室の２室になった。
4 月 1 日	東京国立文化財研究所は、奈良国立文化財研究所と統合され、独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所となった。 この独立行政法人化にともない、東京文化財研究所は、管理部、協力調整官・情報調整室、美術部、芸能部、保存科学部、修復技術部、国際文化財保存修復協力センターの１センター５部１協力調整官・情報調整室となった。
平成15年 9 月19日	黒田記念館にエレベーターを設置し、門扉、外構の改修工事を行った。
平成18年 4 月 1 日	文化財研究所組織規程の一部が改正されて、協力調整官・情報調整室は企画情報部に、芸能部は無形文化遺産部に、国際文化財保存修復協力センターは文化遺産国際協力センターとなった。
平成19年 4 月 1 日	独立行政法人文化財研究所東京文化財研究所は、独立行政法人文化財研究所と独立行政法人国立博物館との統合により、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所となり、黒田記念館は、東京国立博物館に移管された。 この統合にともない、東京文化財研究所は、美術部を企画情報部に、保存科学部と修復技術部は保存修復科学センターに統合し、３部２センターとなった。
平成22年 4 月 1 日	国立文化財機構組織規程等の一部が改正されて、管理部は研究支援推進部となった。
平成28年 4 月 1 日	国立文化財機構組織規程等の一部が改正されて、企画情報部は文化財情報資料部に、保存修復科学センターは保存科学研究センターとなった。

3．歴代所長 （昭和５年～令和７年度）

正木 直彦	主事	昭和 5. 6.28～昭和 6.11.24
矢代 幸雄	主事	昭和 6.11.25～昭和10. 5.31
和田 英作	所長事務取扱	昭和10. 6. 1～昭和11. 6.21
矢代 幸雄	所長	昭和11. 6.22～昭和17. 6.28
田中 豊蔵	所長事務取扱	昭和17. 6.29～昭和22. 8.15
田中 豊蔵	所長	昭和22. 8.16～昭和23. 5.10
福山 敏男	所長代理	昭和23. 5.11～昭和24. 8.30
松本 栄一	所長	昭和24. 8.31～昭和27. 3.31
矢代 幸雄	所長事務代理	昭和27. 4. 1～昭和28.10.31
田中 一松	所長	昭和28.11. 1～昭和40. 3.31
関野　克	所長	昭和40. 4. 1～昭和53. 3.31
伊藤 延男	所長	昭和53. 4. 1～昭和62. 3.31
濱田　隆	所長	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31
西川 杏太郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31
渡邊 明義	所長	平成 8. 4. 1～平成13. 3.31
（独立行政法人文化財研究所　東京文化財研究所に移行）		
渡邊 明義	所長	平成13. 4. 1～平成16. 3.31
鈴木 規夫	所長	平成16. 4. 1～平成19. 3.31
（独立行政法人国立文化財機構　東京文化財研究所に移行）		
鈴木 規夫	所長	平成19. 4. 1～平成22. 3.31
亀井 伸雄	所長	平成22. 4. 1～平成30. 7.17
山梨 絵美子	所長事務代理	平成30. 7.18～平成30.12.31
齊藤 孝正	所長	平成31. 1. 1～現在

4．名誉研究員

氏　名	退職時官職名	在所期間	名誉研究員発令年月日
江上　綏	情報資料部主任研究官	昭和38. 5.18～昭和59. 3.31	昭和59.10.18
猪川 和子	情報資料部文献資料研究室長	昭和22. 6.27～昭和60. 3.31	昭和60.10.18
三隅 治雄	芸能部長	昭和27.10. 1～昭和63. 3.31	昭和63.10.18
濱田　隆	所長	昭和62. 4. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
関口 正之	美術部長	昭和42. 2. 1～平成 3. 3.31	平成 3.10.18
馬淵 久夫	保存科学部長	昭和50.10. 1～平成 4. 3.31	平成 4.10.18
新井 英夫	保存科学部長	昭和45. 9. 1～平成 5. 3.31	平成 5. 4. 1
西川 杏太郎	所長	平成 3. 4. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
三輪 英夫	美術部第二研究室長	昭和53. 8. 1～平成 8. 3.31	平成 8. 4. 1
蒲生 郷昭	芸能部長	昭和56. 4. 1～平成10. 3.31	平成10. 4. 1
中里 壽克	修復技術部第一修復技術研究室長	昭和39. 4. 1～平成10. 3.31	平成10. 4. 1
宮本 長二郎	国際文化財保存修復協力センター長	平成 6. 4. 1～平成11. 3.31	平成11. 4. 1
羽田　昶	芸能部音楽舞踊研究室長	昭和51. 4. 1～平成12. 3.31	平成12. 4. 1
中村 茂子	芸能部民俗芸能研究室長	昭和39. 7. 1～平成13. 3.31	平成13. 4. 1
増田 勝彦	修復技術部長	昭和48. 8. 1～平成13. 3.31	平成13. 4. 1
米倉 迪夫	情報資料部長	昭和50. 9. 1～平成13. 3.31	平成13. 4. 1
星野　紘	芸能部長	平成10. 4. 1～平成14. 3.31	平成14. 4. 1
平尾 良光	保存科学部化学研究室長	昭和62. 4. 1～平成15. 3.31	平成15. 4. 1
井手 誠之輔	協力調整官－情報調整室長	昭和62. 7. 1～平成16. 3.29	平成16. 3.30
斎藤 英俊	国際文化財保存修復協力センター長	平成11. 4. 1～平成16. 3.30	平成16. 3.31
西浦 忠輝	保存科学部長	昭和50. 7. 1～平成16. 3.31	平成16. 4. 1
鈴木 廣之	美術部日本東洋美術研究室長	昭和54. 9. 1～平成17.11.30	平成17.12. 1
青木 繁夫	文化遺産国際協力センター長	昭和49. 7. 1～平成19. 3.31	平成19. 3.31
三浦 定俊	副所長	昭和48. 8. 1～平成20. 3.31	平成20. 4. 1
鎌倉 惠子	無形文化遺産部無形文化財研究室長	昭和63. 4. 1～平成20. 3.31	平成20. 4. 1
鈴木 規夫	所長	平成16. 4. 1～平成22. 3.31	平成22. 4. 1
中野 照男	副所長	平成 4. 4. 1～平成23. 3.31	平成23. 4. 1
清水 真一	文化遺産国際協力センター長	平成19. 4. 1～平成23. 3.31	平成23. 4. 1
石﨑 武志	副所長	平成 8.12. 1～平成26. 9.30	平成26.10. 1
田中　淳	副所長	平成 6.11. 1～平成28. 3.31	平成28. 4. 1
川野邊 渉	文化遺産国際協力センター長	昭和63.10. 1～平成28. 3.31	平成28. 4. 1
岡田　健	保存科学研究センター長	平成 4. 4. 1～平成29. 3.31	平成29. 4. 1
津田 徹英	文化財情報資料部長	平成11. 1. 1～平成30. 3.31	平成30. 4. 1
飯島　満	無形文化遺産部長	平成16. 4.16～平成31. 3.31	平成31. 4. 1
中山 俊介	文化遺産国際協力センター長	平成18. 2. 1～平成31. 3.31	平成31. 4. 1
佐野 千絵	保存科学研究センター長	平成 1. 4. 1～令和 2. 3.31	令和 2. 4. 1
山梨 絵美子	副所長	昭和59. 4. 1～令和 3. 3.31	令和 3. 4. 1
高桑 いづみ	無形文化遺産部無形文化財研究室長	平成 4. 4. 1～令和 3. 3.31	令和 3. 4. 1
早川 泰弘	副所長	平成 8. 4. 1～令和 5. 3.31	令和 5. 4. 1

5．2025(令和7)年度予算等

(1) 予 算

(単位：千円)

事　　項	予 算 額
一般管理費	86,317
基礎研究事業費	60,312
応用研究事業費	143,518
国際遺産保護事業費	81,092
情報公開事業費	125,283
研修協力事業費	4,611
文化財防災事業費	1,248
合　　計	502,381

予算とプロジェクトとの対応

文化財情報資料部

略番	分 類 項 目	プロジェクト名	事 業 区 分
シ01	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究	基礎研究事業費
シ02	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	日本東洋美術史の資料学的研究	基礎研究事業費
シ03	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	近・現代美術に関する調査研究と資料集成	基礎研究事業費
シ04	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開	基礎研究事業費
シ05	④情報収集・成果公開に関する事業	文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究	情報公開事業費
シ06	④情報収集・成果公開に関する事業	専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充	情報公開事業費
シ07	⑤刊行物に関する事業	令和5年版『日本美術年鑑』刊行事業･出版事業『美術研究』	情報公開事業費
シ08	④情報収集・成果公開に関する事業	令和7年度オープンレクチャー(調査・研究成果の公開)	情報公開事業費

無形文化遺産部

略番	分 類 項 目	プロジェクト名	事 業 区 分
ム01	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形文化財の保存・継承に関する調査研究	基礎研究事業費
ム02	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究	基礎研究事業費
ム03	④情報収集・成果公開に関する事業	無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化	情報公開事業費
ム04	⑤刊行物に関する事業	無形文化遺産部出版関係事業	情報公開事業費
ム05	①有形・無形の文化財に関する調査研究事業	無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集	基礎研究事業費

保存科学研究センター

略番	分 類 項 目	プロジェクト名	事 業 区 分
ホ01	②保存修復に関する調査研究事業	文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策	応用研究事業費
ホ02	②保存修復に関する調査研究事業	文化財の保存環境にかかる調査研究	応用研究事業費
ホ03	②保存修復に関する調査研究事業	文化財の材質・構造・状態調査に関する研究	応用研究事業費
ホ04	②保存修復に関する調査研究事業	屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究	応用研究事業費
ホ05	②保存修復に関する調査研究事業	(1) 伝統材料・技法に関する複合的調査研究	応用研究事業費
ホ05	②保存修復に関する調査研究事業	(2) 文化財修復のための技術と材料に関する調査研究	応用研究事業費
ホ06	②保存修復に関する調査研究事業	多様な文化財の修復技術に関する調査研究	応用研究事業費
ホ07	⑤刊行物に関する事業	『保存科学』第64号の出版	情報公開事業費
ホ08	⑥指導助言・研修等に関する事業	博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）	研修協力事業費

文化遺産国際協力センター

略番	分　類　項　目	プロジェクト名	事　業　区　分
コ01	③国際協力・交流等に関する事業	文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信	国際遺産保護事業費
コ02	③国際協力・交流等に関する事業	アジア諸国等文化遺産保存修復協力	国際遺産保護事業費
コ03	③国際協力・交流等に関する事業	文化遺産の保存修復技術に係る国際的研究	国際遺産保護事業費
コ04	②保存修復に関する調査研究事業	在外日本古美術品保存修復協力事業	応用研究事業費
コ05	③国際協力・交流等に関する事業	国際研修	国際遺産保護事業費

（2）　科学研究費助成事業交付一覧

（単位：千円）

研究種目	研　究　課　題	研究代表者	交付額
基盤研究（A）			
	アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から	小林 公治	-[*1]
	ディルムン文明形成に関する考古学的研究	安倍 雅史	9,750[*1]
研究成果公開促進費（データベース）			
	沖縄久高島イザイホー映像記録データベース	石村　智	1,500
基盤研究（B）			
	能管の「製作技術」と「原材料の安定的な確保」に関する研究	前原 恵美	3,120
	ブータンにおける伝統的石造民家の建築的特徴の解明と文化遺産保護手法への応用	友田 正彦	6,110
	日本戦後芸術のアーカイブ構築と学術的方法論の研究：三つのケーススタディをもとに	橘川 英規	5,850
	染織文化財における繊維・染料の科学的同定方法の確立と保存修復情報拠点の構築	早川 典子	10,270
	博物館等の文化財収蔵施設における総合的かつ簡易な放散試験方法の開発	古田嶋 智子	8,840
	行政官と文化財保護の関係史を拓く：建築担当技官が擁する諸資料の集合とアーカイブ化	金井　健	4,420
基盤研究（C）			
	占領期の文化財保護に関する研究―GHQ の博物館概念と博物施策の展開―	境野 飛鳥	650
	染織技術史に関する研究ー原材料の国産化に焦点をあててー	菊池 理予	650
	古典的膠及び墨に関する文化財修復材料及び書画制作材料としての材料学的体系化	宇髙 健太郎	780
	磨崖仏で過去に行われた保存対策の効果に関する定量的研究	朽津 信明	650
	一般室を使用した文化財収蔵施設運用法に関する研究	芳賀 文絵	1,430
	行政映画とその関連資料の整理と管理の支援	山永 尚美	1,430
	鎌倉時代仏教彫刻・絵画の彩色に関する基礎的調査研究	米沢　玲	780
	織豊時代における公武の知的交流についての研究―本草学から絵事へ	小野 真由美	1,560
	樹木を素材とする編組品に関する民俗学的基礎研究ー広葉樹ヘギ材の籠を中心に	今石 みぎわ	1,820
	染織品等を対象とした赤外線画像の有効性に関する研究	秋山 純子	910
	漆芸品に与えるクリーニング溶液の影響に関する研究	倉島 玲央	780
	中小規模の博物館で実践可能な文化財防災―地震・水害対策を中心として―	千葉　毅	1,560
	メタゲノム解析を用いた浮遊菌測定による博物館のゾーニングに関する研究	間渕　創	1,170
	クフ王第２の船の実物資料を用いた造船から埋納過程の復元研究	山田 綾乃	1,430
	近代における美術作品の受容と評価―旧長尾美術館を一例として	月村 紀乃	1,430
	書画の融合と再構築：日中比較研究に基づく東アジア芸術表現の新たな可能性	後藤 亮子	1,690
	空気質の試験方法の対応関係の調査	由井 和子	2,470
	文化財の「保護区域」理念生成史：フランス領インドシナを中心とした比較分析	黒岩 千尋	910
	文化財保存における将来世代への責任の動機付け―世代間倫理からの検討	大川 柚佳	390
若手研究			
	洪水常襲地における水害経験の地域史と災害文化形成プロセスの解明	後藤 知美	1,040
	瀟湘八景の受容研究 絵画・建築・庭園	武　瀟瀟	-[*2]
	日本における土地利用計画に準拠した史跡環境の評価および保護に向けた研究	松浦 一之介	1,560
	囃子の身体性：日本伝統芸能における音楽と舞踊の相互作用	鎌田 紗弓	3,380
特別研究員奨励費			
	江戸期吉原遊廓をめぐる図像研究：音楽学及び表象論的視座から捉える文芸挿絵と浮世絵	青木　慧	780

[*1] 令和６年度繰越あり
[*2] 令和６年度からの期間延長

（3） 受託調査研究等一覧

（単位：円）

研究課題	依頼元	研究代表者	受入額
文化遺産国際協力コンソーシアム事業	文化庁	友田 正彦	39,187,831
デジタル技術を用いたバーレーンおよび湾岸諸国における文化遺産の記録・活用に関する拠点交流事業	文化庁	安倍 雅史	9,073,222
スーダンの文化遺産専門家等の能力強化ワークショップ事業	文化庁	石村　智	4,789,992
スーダンの被災博物館の保存・修復方針の策定に係る事業	文化庁	石村　智	5,126,420
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務	文化庁	犬塚 将英	44,344,144
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務	文化庁	犬塚 将英	19,228,749
ワット・ラーチャプラディット拝殿漆扉の現地保存に関する調査（継続）	タイ　ワット・ラーチャプラディット・サティットマハシマラム	二神 葉子	2,082,000
墨田区 No.105 遺跡から出土した近代布製品染料・繊維分析（継続）	国際文化財株式会社	犬塚 将英	108,157

（4） 補助事業一覧

（単位：円）

研究課題	依頼元	研究代表者	受入額
美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業	文化庁	犬塚 将英	29,967,372

（5） 共同研究等一覧

（単位：円）

研究課題	共同研究者	研究代表者	受入額
ゲッティ・リサーチ・ポータルへの前田青邨のコレクション、日本及びヨーロッパ・北米で出版された貴重書、展覧会カタログの提供・公開について（継続）	The J. Paul Getty Trust	橘川 英規	15,330,488

（6） 助成金一覧

（単位：円）

研究課題	助成元	研究代表者	受入額
バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復（継続）	公益財団法人 住友財団	前川 佳文	3,500,000
歴史的建造物のデジタル３次元計測に関する研究（継続）	公益財団法人 KDDI 財団	淺田 なつみ	2,998,000
楽と舞：雅楽実践の身体コミュニケーション（継続）	公益財団法人 三島海雲記念財団	鎌田 紗弓	4,630,000
フランス領カンボジア・ベトナムにおける遺跡保存のための「保護区域」概念の生成と展開（継続）	公益財団法人 村田学術振興・教育財団	黒岩 千尋	1,180,000
中世漢画における故事仙人図の受容研究―旧大仙院書院の間障壁画を中心に	メトロポリタン東洋美術研究センター	武　瀟瀟	720,118
薬師寺金堂薬師三尊像の制作背景に関する考察	公益財団法人 鹿島美術財団	黒﨑 夏央	679,495
旧長尾美術館コレクションに関する基礎的研究	公益財団法人 鹿島美術財団	月村 紀乃	115,450
公開シンポジウム「技・材料・環境保全―能管からみる伝統楽器の課題―（仮）」	公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団	前原 恵美	600,000
蓬莱園に関する基礎的研究	公益財団法人 文化財保護・芸術研究助成財団	松浦 一之介	337,000
1930年代前半における韓国絵画コレクション研究―東京文化財研究所所蔵資料をもとに―	国外所在文化遺産財団（大韓民国）	田代 裕一朗	803,000

（7） 寄付金一覧

（単位：円）

研究課題	助成元	研究代表者	受入額
東京文化財研究所文化財調査研究基金	株式会社フレックスインターナショナル	研究支援推進部	200,000
東京文化財研究所における研究事業の助成	株式会社東京美術倶楽部	文化財情報資料部	1,000,000
東京文化財研究所における研究成果の公表（出版事業）	東京美術商協同組合	文化財情報資料部	1,000,000

年度内主要行事一覧

期　　日	事　　業　　名
7年 4 月20日	「バーレーンの歴史と文化」
7年 5 月10日	シンポジウム「考古学と国際貢献―エジプト考古学と国際協力の軌跡―」
7年 5 月23日	東京文化財研究所における実演記録事業（落語）―林家正雀師の正本芝居噺―
7年 7 月 7 ～11日	令和７年度 博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）
7年 7 月24日	〈科学研究費補助金　基盤（B）〉（研究代表者：島谷弘幸） 「在外日本美術の保存修復技法の比較調査と国際的な保存活用に向けて」公開研究会
7年 7 月29日	「美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究」成果報告会
7年 8 月13～16日	スーダンの文化遺産専門家等の能力強化ワークショップ
7年 8 月16日	文化庁 文化遺産国際協力拠点交流事業2025 関連一般シンポジウム 紛争下の被災文化遺産と博物館の保護―スーダン共和国の事例から―
7年 8 月25～ 9 月12日	国際研修「紙の保存と修復」2025
7年 9 月14日	文化遺産国際協力コンソーシアム第36回研究会 「日中韓における文化遺産政策のいま―近年の法改正をめぐる背景と展望―」
7年 9 月30～10月 2 日	令和７年度　文化財修復技術者のための科学知識基礎研修
7年10月10～17日	研修ワークショップ「遺跡のUAV測量」（クウェート国立博物館ほか）
7年10月20日	第10回保存環境調査・管理に関する講習会（文化財活用センター会議室）
7年10月28～30日	バーレーン王国における文化遺産の３Dデジタル・ドキュメンテーションとその活用に関するワークショップ 「建造物の３次元計測」
7年11月 1 日	講演会「イギリスと日本における額縁の歴史と保存」
7年11月 1 日	文化財保存修復に関する講演会―額縁の歴史・技法と保存修復について―
7年11月 2 ～ 4 日	サウジアラビアにおける文化遺産の３Dデジタル・ドキュメンテーションとその活用に関するワークショップ ならびに「XRミートアップ in リヤド」
7年11月 7 日	第19回公開学術講座「普及から考える伝統芸能の継承」
7年11月 8 日	西アジア考古学第７回パイオニアセミナー「ペルシア湾岸地域の遺跡を掘る」
7年11月12～26日	国際研修「ラテンアメリカにおける紙の保存と修復」（CNCPC-INAH）
7年11月13～14日	第59回オープンレクチャー　かたちを見る、かたちを読む
7年11月15～16日	海外調査のための３次元計測実習
7年11月24日	シンポジウム　考古学と国際貢献「地域社会と文化遺産―南イラク（シュメール）の未来像を考える―」
7年11月30日	文化遺産国際協力コンソーシアム令和７年度シンポジウム 「紛争からの復興と文化遺産」（東京大学弥生講堂一条ホール）
7年11月30日	シンポジウム　考古学と国際貢献「地域社会と文化遺産―京都・奈良の事例をふまえて―」（京都芸術大学）
7年12月 5 日	第20回 無形民俗文化財研究協議会「民俗文化財をネットワークで守り、活かす」
7年12月22日	令和７年度世界遺産研究協議会　越境する「遺産」―世界遺産とつながる人々の生活、信仰、環境―
8年 1 月17日	文化遺産国際協力コンソーシアム第37回研究会「文化遺産保護の国際動向」
8年 2 月 6 日	美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業　報告会
8年 2 月28日	NCAR シンポジウム006「ミュージアムと気候変動―サステナブルな未来に向けて」（国立新美術館）
8年 3 月 9 日	第11回保存環境調査・管理に関する講習会 ―ニュウハクシミの現状と対策について―（文化財活用センター会議室）
8年 3 月 7 ～10日	世界遺産都市と気候変動対策に関するアジア太平洋地域会議（立命館大学朱雀キャンパス）
8年 3 月21～22日	第33回西アジア発掘調査報告会

3. 東京文化財研究所関係事業索引

凡　例
(1) この索引は、令和7年度に東京文化財研究所が実施したすべての事業を、財源の種類を問わず網羅している。
(2) 事業は五十音順に配列し、各事業名称の末尾に次の略号を付すとともに、掲載頁を示した。

運営費交付金によるプロジェクト……【交付】
科学研究費助成事業……【科研】
受託調査研究……【受託】
補助事業……【補助】
共同研究……【共同】
助成金……【助成】

あ　アジア諸国等文化遺産保存修復協力 ……【交付】 42
アジア螺鈿文化交流史の構築―物質文化史の視点から……【科研】 75
一般室を利用した文化財収蔵施設運用法に関する研究 ……【科研】 88
江戸期吉原遊廓をめぐる図像研究：音楽学及び表象論的視座から捉える文芸挿絵と浮世絵……【科研】107
沖縄久高島イザイホー映像記録データベース……【科研】 77
屋外文化財の保存修復計画に関する調査研究……【交付】 36

か　楽と舞：雅楽実践の身体コミュニケーション ……【助成】120
鎌倉時代仏教彫刻・絵画の彩色に関する基礎的調査研究 ……【科研】 90
旧長尾美術館コレクションに関する基礎的研究―作品の付属資料等に見る伝来情報を中心に―……【助成】124
行政映画とその関連資料の整理と管理の支援 ……【科研】 89
行政官と文化財保護の関係史を拓く：建築担当技官が擁する諸資料の集合とアーカイブ化……【科研】 83
近・現代美術に関する調査研究と資料集成 ……【交付】 28
近代における美術作品の受容と評価―旧長尾美術館を一例として ……【科研】 98
空気質の試験方法の対応関係の調査……【科研】100
クフ王第２の船の実物資料を用いた造船から埋納過程の復元研究 ……【科研】 97
ゲッティ・リサーチ・ポータルへのデジタル資料の提供・公開……【共同】117
公開シンポジウム「技・材料・環境保全―能管からみる伝統楽器の課題―」(仮)……【助成】125
洪水常襲地における水害経験の地域史と災害文化形成プロセスの解明 ……【科研】103
国際研修……【交付】 45
国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策に関する調査等業務 ……【受託】112
古典的膠及び墨に関する文化財修復材料及び書画制作材料としての材料学的体系化……【科研】 86

さ　在外日本古美術品保存修復協力事業 ……【交付】 44
漆芸品に与えるクリーニング溶液の影響に関する研究 ……【科研】 94
樹木を素材とする編組品に関する民俗学的基礎研究―広葉樹ヘギ材の籠を中心に……【科研】 92
瀟湘八景の受容研究　絵画・建築・庭園……【科研】104
書画の融合と再構築：日中比較研究に基づく東アジア芸術表現の新たな可能性……【科研】 99
織豊時代における公武の知的交流についての研究―本草学から絵事へ ……【科研】 91
スーダンの被災博物館の保存・修復方針の策定に係る事業 ……【受託】111
スーダンの文化遺産専門家等の能力強化ワークショップ事業 ……【受託】110
墨田区No.105遺跡から出土した近代布製品染料・繊維分析 ……【受託】115
1930年代前半における韓国絵画コレクション研究－東京文化財研究所所蔵資料をもとに－ ……【助成】127
染織技術史に関する研究―原材料の国産化に焦点をあてて― ……【科研】 85
染織品等を対象とした赤外線画像の有効性に関する研究 ……【科研】 93
染織文化財における繊維・染料の科学的同定方法の確立と保存修復情報拠点の構築 ……【科研】 81
専門的アーカイブと総合的レファレンスの拡充……【交付】 48
占領期の文化財保護に関する研究―GHQの博物館概念と博物施策の展開― ……【科研】 84

た　高松塚古墳・キトラ古墳の恒久的保存に関する調査研究……【交付】 40
多様な文化財の修復技術に関する調査研究 ……【交付】 39
中小規模の博物館で実践可能な文化財防災―地震・水害対策を中心として― ……【科研】 95
中世漢画における故事仙人図の受容研究－旧大仙院書院の間障壁画を中心に ……【助成】122
ディルムン文明形成に関する考古学的研究……【科研】 76

デジタル技術を用いたバーレーンおよび湾岸諸国における文化遺産の記録・活用に関する拠点交流事業……【受託】109
伝統材料・技法に関する複合的調査研究……【交付】37
東京藝術大学との間での連携大学院教育の推進……【交付】69
『東京文化財研究所概要』、『TOBUNKEN NEWS』……【交付】60
特別史跡キトラ古墳保存対策等調査業務……【受託】113

な　日本戦後芸術のアーカイブ構築と学術的方法論の研究：三つのケーススタディをもとに……【科研】80
日本東洋美術史の資料学的研究……【交付】27
日本における土地利用計画に準拠した史跡環境の評価および保護に向けた研究……【科研】105
能管の「製作技術」と「原材料の安定的な確保」に関する研究……【科研】78

は　バガン遺跡群（ミャンマー）寺院祠堂壁画の保存修復……【助成】118
博物館・美術館等保存担当学芸員研修（上級コース）……【交付】65
博物館等の文化財収蔵施設における総合的かつ簡易な放散試験方法の開発……【科研】82
囃子の身体性：日本伝統芸能における音楽と舞踊の相互作用……【科研】106
美術館・博物館等の環境調査と援助・助言……【交付】68
美術工芸品修理のための用具・原材料と生産技術の保護・育成等促進事業……【補助】116
美術作品の様式表現・制作技術・素材に関する複合的研究と公開……【交付】29
ブータンにおける伝統的石造民家の建築的特徴の解明と文化遺産保護手法への応用……【科研】79
フランス領カンボジア・ベトナムにおける遺跡保存のための「保護区域」概念の生成と展開……【助成】121
プロジェクトの一環として刊行された刊行物……【交付】61
プロジェクトの一部として実施した研究集会・講座等……【交付】51
文化遺産国際協力コンソーシアム事業……【受託】108
文化遺産保護に関する国際情報の収集・研究・発信……【交付】41
文化財修復のための技術と材料に関する調査研究……【交付】38
文化財情報の分析・活用と公開に関する調査研究……【交付】46
文化財生物劣化の分子生物学的手法による機構解明と環境調和型対策……【交付】33
文化財に関する調査研究成果および研究情報の共有に関する総合的研究……【交付】26
文化財の材質・構造・状態調査に関する研究……【交付】35
文化財の材質・構造に関する調査・助言……【交付】68
文化財の収集・保管に関する指導助言……【交付】65
文化財の修復及び整備に関する調査・助言……【交付】67
文化財の虫菌害に関する調査・助言……【交付】67
文化財の「保護区域」理念生成史：フランス領インドシナを中心とした比較分析……【科研】101
文化財の保存環境にかかる調査研究……【交付】34
文化財防災センター事業……【その他】70
文化財保存における将来世代への責任の動機付け―世代間倫理からの検討……【科研】102
蓬莱園に関する基礎的研究……【助成】126
『保存科学』第65号の出版……【交付】60
保存修復技術の国際的応用に関する研究……【交付】43

ま　磨崖仏で過去に行われた保存対策の効果に関する定量的研究……【科研】87
無形文化遺産に関わる音声・画像・映像資料のデジタル化……【交付】50
無形文化遺産に関する助言……【交付】66
無形文化遺産部出版関係事業……【交付】59
無形文化遺産保護に関する研究交流・情報収集……【交付】32
無形文化財の保存・継承に関する調査研究……【交付】30
無形民俗文化財の保存・活用に関する調査研究……【交付】31
メタゲノム解析を用いた浮遊菌測定による博物館のゾーニングに関する研究……【科研】96

や　薬師寺金堂薬師三尊像の制作背景に関する考察……【助成】123

ら　令和5年版『日本美術年鑑』刊行事業・出版事業『美術研究』（調査・研究成果の公開）……【交付】59
令和7年度オープンレクチャー（調査・研究成果の公開）……【交付】49
歴史的建造物のデジタル3次元計測に関する研究……【助成】119

わ　ワット・ラーチャプラディット拝殿漆扉の現地保存に関する調査……【受託】114

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所年報 2025

発行日：2026年6月30日

発行所：独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

〒110-8713
東京都台東区上野公園13-43

TEL　03-3823-2241（番号案内）
FAX　03-3828-2434
https://www.tobunken.go.jp/
info_tobunken@nich.go.jp

編　集：文化財情報資料部
制　作：CURIO EDITORS STUDIO（柴田 卓）
印　刷：よしみ工産株式会社

Independent Administrative Institution National Institutes for Cultural Heritage
Tokyo National Research Institute for Cultural Properties

ANNUAL REPORT 2025

Issued on 30 June, 2026
Published by Tokyo National Research Institute for Cultural Properties
13-43, Uenokoen, Taito-ku, Tokyo 110-8713, JAPAN

Edited by Department of Art Research, Archives and Information Systems
Designed and DTP by Curio Editors Studio（SHIBATA Takashi）
Printed by Yoshimi Kohsan Corporation

ⓒTokyo National Research Institute for Cultural Properties, 2026